檀國大學校

石宙善紀念博物館

開館二十五周年紀念

弟二十四回 학술세미나

弟二十五回 특 별 전

- 국제학술세미나 -

일 시 : 2006년 5월 2일(화) 14:00 ~ 18:10

장 소 : 서울역사박물관 1층 대강당

주 최 : 단국대학교 석주선기념박물관

- 석주선박사 10주기 추모 출토복식 특별전 -

"다시태어난 우리옷 환생"

일 시 : 2006년 4월 26일 ~ 5월 28일

장 소 : 서울역사박물관 기획전시실

주 최 : 단국대학교 석주선기념박물관, 서울역사박물관

환 영 사

우리 석주선기념박물관에서는 오늘 제24회 학술세미나를 열게 되었습니다. 여러 가지 일에 바쁘실 텐데도 불구 하시고 이렇듯 귀하신 여러분이 왕림해 주셔서 무어라 감사의 말씀을 드려야 좋을지 모르겠습니다. 특히 외국의 여러 석학께서 참가하시어 이 자리를 더욱 빛내주신데 대하여 각별한 감사의 말씀을 드립니다.

오늘의 학술회의는 깊은 의의가 있습니다. 금년이 난사 석주선 박사님의 10주기이고 단국대학교 석주선기념민속박물관으로 발족한지 25주년이 되는 해입니다. 25년 전인 1981년 5월 2일에 난사 선생님께서 석주선기념민속박물관의 관장으로서 개관의 문을 열어 힘찬 도약의 첫걸음을 내디디셨습니다. 그 다음해부터 학술세미나를 개최하여 그동안 많은 학자님께서 참가하시어 귀한 옥고와 발표로 학술회의가 풍성해졌으며 오늘의 24회 학술세미나가 있도록 격려해 주셨습니다.

난사 선생님은 가셨어도 그동안 선생님을 따르던 제자분들께서 중심이 되어 역시 많은 제자를 길러내어 오늘의 굳건한 복식학계의 수립을 보게된 것입니다. 아울러 선생님께서 남기신 공덕은 영원할 것이며 이 학술세미나도 더욱더 성대해 질 것입니다.

오늘의 학술발표는 일본에서 요꼬야마 도시오(横山俊夫 : 교토대학 국제담당 부총장) 교수님의 귀한 축사 말씀과 사와다무쯔요(澤田むつ代 : 도쿄박물관 보존수복과 연구관) 선생님의 「정창원(正倉院)의 유물 보존처리」에 대한 연구발표가 있으십니다. 그리고 중국에서 오신 빠오밍신(包銘新 : 상하이의 동화대학 복장 · 예술디자인대학 교수) 교수님의 「청대직물(清代織物)」논문과 짜오핑춘(趙評春 : 하얼빈의 헤이롱지앙 문물고고연구소 연구관) 선생님의 「금대복식(金代服飾」논문이 발표됩니다.

본 박물관에서는 박성실 교수님의「조선시대 임란전 복식」과 고부자 교수님의「조선시대 임란후 복식」 논문 발표가 있으실 것입니다. 여러 가지 분주하신 일정에서도 옥고를 작성하시고 또한 발표까지 맡아주시니 저희 주체자로서는 고맙기 짝이 없습니다. 경청해 주시는 여러분께 깊은 감사의 말씀을 드리고자 하는 것은 주중의 바쁘신 일정이 잡혀 있으실텐데도 이렇듯 많이 왕림하여 자리를 빛내주셨기 때문입니다.

만장하신 여러분, 오늘의 학술세미나가 원만히 이루어지고 앞으로도 매년 개최하는 이 행사가 더욱 성대해 지도록 많은 조언과 지도편달을 손 모아 기원합니다.

2006년 5월 2일

단국대학교 석주선기념박물관장　정 영 호

目　次

◎ 축사 : 요꼬야마 도시오 교토대 부총장님

◎ 환영사 : 정영호 단국대학교 석주선기념박물관장님

◎ 제24회 학술세미나

· 논제1. 법륭사보물관의 염직품과 수리에 대하여
연사 : 사와다무쯔요 (도쿄박물관 보존수복과) 7

· 논제2. 金代 齊國王 墓 服飾 出土 技術과 관련問題
연사 : 짜오핑춘 (헤이롱지앙 문물고고연구소) 39

· 논제3. 淸代 初期의 絹織物
연사 : 빠오밍신 (중국 동화대학) 67

· 논제4. 출토복식을 통해보는 임진왜란 이전 남녀복식의 조형적 특징
연사 : 박성실 (단국대학교) 99

· 논제5. 단국대학교 석주선기념박물관 소장 임진왜란 이후 출토복 개설
연사 : 고부자 (단국대학교) 133

◎ 개관기념 행사내역 169

◎ 박물관 이용안내

法隆寺宝物館の染織品と修理について

澤田　むつ代*

1、はじめに

東京国立博物館の構内には、奈良の法隆寺から明治11年(1878)に皇室へ献納された作品、いわゆる法隆寺献納宝物（以下、献納宝物）を展示・保管している法隆寺宝物館がある。献納宝物は、絵画、書跡をはじめ、彫刻、伎楽面、仏具、調度品、楽器、文房具、染織品等々さまざまな分野が集まる一大コレクションとして知られている。

献納宝物は、奈良の正倉院宝物とともに、日本における古代美術の双璧をなすものであるが、とりわけ、彫刻の金銅仏や伎楽面、仏具の灌頂幡、染織品の幡などには、正倉院より遡る飛鳥時代(538～709)から奈良時代(710～793)前半の名品が多く伝えられている点に特色がある。今回はこれらのなかの染織品(法隆寺裂)を取り上げ、これまでに行われた修理について述べることにする。

その前に、献納宝物の法隆寺裂について、どのようなものがあるか、それらの種類と用途などをみていくことにする。

* 独立行政法人東京国立博物館 東京国立博物館 文化財部 上席研究員

2、法隆寺裂の種類と用途

法隆寺裂は伝世品としては世界最古級で、残欠となったものが多いが、当初の姿をとどめている作品も含まれており、宝物としての価値は極めて高い。寺に伝えられたということから、仏教関係の品々が多く含まれている。なかでも仏事の荘厳具の一つである幡の存在が重要である。

幡は仏堂の内外で飾られたり、延命や死者への追善供養などに用いられた旗で、人体をかたどったごとく、頭にあたる幡頭、胴に相当する幡身、足となる幡足からできている（図１）。形状であるが、幡頭部は１本の帯紐に、もう１本の帯紐を山形に組み合わせて三角状にし、懸緒・舌・幡頭手としている。幡身部は各坪を縦長の長方形とし、それを囲む縁を１条とするもの（１条縁）と、２条をめぐらすもの（２条縁）がある。１条縁では、各坪を区切る坪堺と縁が交わるところの縁の外側に、幡身手を付ける場合が多い。一方２条縁では、各坪の坪堺と２条の縁が交差するところに、金銅丸形金具を装着するものがみられる。幡身の坪は大型の灌頂幡が６坪で、他は４坪につくる場合が大部分である。幡足は長い帯状の裂の両側を三つ折り縫い（織物の端にあたる織耳の場合は、縫わずにそのままにしている）とし、下方も同じ仕様となる。

仕立ての特徴であるが、儀式などに使用された幡は、幡身第１坪目に華やかな錦、経絣の広東裂などを用い、以下の坪には綾や平絹を１枚裂で仕立てる場合が多い。縁は錦や平絹、幡足はさまざまな文様の綾や平絹を使っている。なお、２条縁の幡では縁と幡足に種々の文様からなる綾や、一部平絹が用いられている。

一方、人々が奉納したと推測される幡であるが、１条縁では黄地平絹が大部分で、２条縁はさまざまな色の平絹や綾などが使われており、なかには裂を途中で縫い合わせてつないでいる幡もみられ、裂の貴重さを物語っているようで興味深い。

これら幡のなかで、最大長を誇る灌頂幡の広東綾大幡は、『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』に「秘錦灌頂壱具／右。養老六年歳次壬戌十二月四日。納賜平城宮御宇　天皇者。」とあるものに比定され、現存長はおよそ 12m（幡足部は不完全）を測るが、おそらく当初は15mをはるかに超える非常に長大な幡であったと推測される。この幡は幡頭部の各先端に、朱・黄緑・縹・紺などの鮮やかな色の糸総を飾った金銅透彫Ｖ形金具を装着し、幡身の縁には金銅丸形金具を表裏に取り付けるなど豪華な仕様が一際目立っている。天皇施入にふさわしい大幡といえる。

一方、４坪からなる幡も数多く遺っており、なかでも献納宝物を代表する経絣の広東裂や、蜀江錦と呼ばれる赤地の錦を用いて仕立てられた幡(両者とも１条縁幡)、様々な綾裂を用いた２条縁の広東綾幡などが伝えられている（これらの幡の修理については、後述の「３．献納宝物の修理」の項で詳述する)。

広東平絹幡は１条縁で、幡身の第１坪目に広東裂をあて、坪堺に赤地や紺地の平絹を用いる他はすべて黄地平絹で仕立てられている。広東裂は、正倉院裂にはほとんどみられない法隆寺独特の裂で、使用時期が限られていることなどから舶載品の可能性が高い。

また、２種類の蜀江錦を使った華やかな蜀江錦綾幡は２旒伝えられており、両者とも１条縁の幡で、ほぼ同様な仕様である。幡頭部は平地浮文錦で織られた赤地山菱文錦、幡身部は第１坪目が蜀江錦の一つである赤地双鳳獅子唐草連珠円文錦、２坪目以下は双竜連珠円文綾を使い、幡身の縁は赤地格子蓮華文錦(蜀江錦の一つ)である。幡足は山形文綾が用いられているが、現在はほとんど遺っていない。

広東綾幡は２条縁で、幡身第１坪目に広東裂を、他は様々な色と文様の綾や平絹で仕立てられている。一部欠失する部分もみられるが、幡頭・幡身・幡足を備えたほぼ完全な形をした幡で貴重である。

これらの幡の他にも、干支とともに命過や誓願を目的とした用途や、施入者などを墨書した重要な幡もみられる。

ところで、これら法隆寺の幡の制作年代であるが、坪裂に記された墨書銘（１点のみ年号で記されているが、他は干支表記となる）や使用裂の特徴などから、７世紀後半から８世紀前半頃のいわゆる法隆寺再建期にかかわる時期に制作されたものと推定できる。

つぎに、制作当初の形を遺しているものとして褥がある。褥は「花机褥」や「経台褥」の墨書銘が示すごとく、献物机などの上敷きとして使われる一方、「太子御褥」、「孝謙天皇御褥」と書かれた箱書銘から、坐具として使われたものもあったことがわかる。褥の形状であるが、長方形につくるものが多いなかで、正方形や円形の珍しい形をした褥も遺っている。敷物の褥と坐具としての褥の違いは、仕立てとも関係してくるが、褥の芯にする素材に変化が認められることである。すなわち敷物の褥は、藺草の筵を麻布で包んで芯とするが、坐具としての褥は厚みを増すため、さらに絹綿や氈（獣毛製の敷物）を加えている。これらの芯に、表は錦や綾をあて、裏には絞り染めの纐纈平絹を用いる場合が多い。

褥の仕立ては、長方形の場合、織物の織幅（当時の錦や綾の多くは56㎝前後）をそのまま利用している。織耳にあたる両端を裏側へ少し折り返し、裏側では裏裂の両端をわずか折り返して縫い合わせている。織物の幅を有効に活用した合理的で無駄のない仕立てといえる。また、褥もなかには内側の裂（鏡と呼んでいる）の周りに、縁をめぐらした縁付きの褥もみられる。

しかし何といっても、もっとも量的に多いものは、残欠になってしまった染織品である。これらは色とりどりのさまざまな文様を表した錦をはじめ、綴織、広東裂、綾や平絹、羅等々の織物、染物では描絵や摺絵、上代の三纐と呼ばれる纐纈・臈纐・夾纐、さらに刺繍や組紐など、多種多様な技法が散見され、あたかも裂の見本帳をみているようである。

3、献納宝物の修理

法隆寺裂は、1300年近く、なかにはそれ以上の長い年月を「伝世品」という特異な形で伝えられた世界的にみても非常に希有な染織品である。この貴重な染織品の多くは、経年の劣化により破損・欠損などがみられ、一部には繊維の組織が崩れて粉状になりかけているものさえある。このため、制作当初の初な状態を保っているものは極めて少ないといわざるをえない。これは染織品、いわゆる絹特有の極めて脆弱な素材が使われていたことにも由来する。ましてや日常使われていたことも、これを助長することにもなった。こうしたデリケートな染織品を、後世まで伝えてゆくためには、適正な環境で保存するのはもちろんのこと、損傷が軽微なうちに、作品に即した修理を行う必要がある。応急的な修理で、少しでも劣化の進行を遅らせることができる状況であれば、積極的に処置を施せばよいのであるが、現状はなかなかそのような状況とはいえない。

ところで献納宝物の修理であるが、これまで形状や目的によってさまざまな方法が採用されている。すなわち、博物館のように保存はもとより、絶えず公開して展示に活用する場合は、保存に主眼がおかれている正倉院裂の修理とは自ずと異なるところである。博物館では、展示をするごとに作品を何度も移動しなければならないこともあり、これに耐えられる修理が必要になる。比較的損傷が軽微で小さな1枚の裂であれば、これまではガラスに挟まれて保管されていた。この利点は、表と

裏の組織が異なる染織品の場合(錦や刺繍など)、表裏をみることができる点にある。しかし、ガラスの強度上の関係から、ある程度厚みのあるガラスを使用しなければならない。そのようにした場合、傷んだ裂をたえずガラスの重量で圧迫し続けることになり、裂に多大なダメージをあたえることになる。見た目はしっかりした裂であっても、目に見えない劣化が進んでいるものである。再修理でこうした裂のガラスを外してみると、一見しっかりしている裂でも、これまでの重圧から解放されたこともあり、裂が膨らんだようにみえ、触るとなかには崩れんばかりに脆くなっているものもみられた。また、これまでのガラスは、ミュージアムガラスではなく、一般的なガラスであったため、ガラス自体が若干青味を帯びており、染織品本来の鮮やかな色調が損なわれてしまう。とりわけ、発色が良好な鮮やかな赤色は、どうしてもくすんでみえる。さらに、挟まれている裂は、織物の経糸と緯糸(よこいと)の糸目が十分揃えられていないものが大部分であった。また、アクリル挟みにされた残欠は、内部で裂が移動して展示が不可能になってしまったものもみられた。

一方、幡や褥などのように、何枚もの裂が重なり、複雑に組み合わされて仕立てられている比較的大型の作品は、展示をするために、旧修理（１回目の修理）では絹の台裂へ縫い糸で綴じつける方法が採用されていた。この場合、裂が所定の場所から遊離している部分や破損箇所、損傷著しいところは、その部分が移動しないように、細かく縫って固定されていた。これが新しい裂であれば、縫われた針孔の跡はもとへ戻ろうとする力が働いて針孔がふさがってくることもあるが、ただでさえ裂の生が無くなり劣化している部分は、当然のことながら針孔は小さな孔として遺ってしまう。やがてこの孔の周りの組織が崩れ、孔は次第に拡大し、さらに劣化した部分の裂が無くなって縫い糸だけが遺る結果となった。また、縫い糸で押さえられた部分も、損傷程度により劣化が進むと、一部は崩れて粉状になり、ますます裂の劣化を助長することになる。さらにその粉が白い台裂へ散り、展示効果を著しく損ねてしまう。このように縫い糸で細かく縫って綴じ付けた場合、再修理を実施しようとしても、損傷著しい部分は、縫い糸を抜き取ると織りの組織が崩れ、もとの織物の状態に戻らなくなってしまう恐れがある。こうなると、改めての修理は難しい。

そこで幡については、後述するごとく再修理を行っている。再修理では、いかに現状を維持するかということに主眼をおいた。いろいろな修理方法が考えられたが、最終的に裏打ちして現状をとどめる方法を採用した。まず各部分ごと慎重に解体し、

いったん仕立てる前の状態に戻した。そのうえで、各々の裂ごとに和紙で裏打ちを施して裂を補強、再度当初の形に組み立てて復元する方法を採用した。裏打ちにより、破損箇所や遊離している裂も、なんとか現状をとどめることができた。この修理の利点は、後日有効な修理方法が開発された場合、簡単にもとの状態へ戻すことができるところにある。

それでは宝物館で行われている解体修理について、幡を中心に詳しくみてゆくことにする。あわせて、これまでガラス挟みやアクリル挟みにされていた残欠、さらに台紙へ貼られて保存されている作品についてもそれぞれ説明したい。

4、幡の修理

1）幡の現状

解体修理を行った幡には、広東平絹幡をはじめ蜀江錦綾幡、広東綾幡などがある。これらの幡は、前述のごとくそれぞれ絹の台裂へ縫い糸で綴じつけられていた。まず始めに広東綾幡を、つぎに広東平絹幡について述べる。

広東綾幡は前述のごとく、一部に欠損があるものの幡頭・幡身・幡足部すべてを備えたほぼ完全な形の幡である。現状は幡頭・幡身部は一体になっている（図２）が、幡足部は幡身部から外され、しかも各条が並列して並べられている（図３）。そのうえ、前回の台裂へ綴じ付ける修理では、２条の幡足は損傷が著しく綴じ付けることができず別に保管されていた（図４）。そこで再修理では、これら別に保管されていた幡足２条を元の位置へ戻し、並列された幡足を当初の幡の形に復元することにした。

幡の形状であるが、幡頭部は、現状では緯糸がほとんど無くなって経糸のみの総状となっているが、全体に赤色の糸が主体となることから、赤地の経錦であったと推測される。なお、懸緒上方の先端には金銅透彫（すかしぼり）V形金具で留めた糸総を付けるが、現状ではこの部分のみで、舌と幡頭手は途中から欠失しているため、先端の金具は無くなっている。懸緒の途中には結び玉がそのままの状態で遺っており、幡を懸ける際の方法を推測するうえで重要である。

幡身は４坪で、縁と坪堺はそれぞれ２条、縁と坪堺が交わるところの縁には金銅丸金具を表裏に装着している(裏の金具については、幡が台裂に綴じ付けられている

ため、現状からでは確認できない)。縁と坪堺は様々な色と文様の綾が使われている。幡身は第１坪目が赤地広東裂(大部分欠失)、第２坪目以下、第４坪目までは綾裂を用いている。第３坪目と第４坪目は半分以上遺るが、第２坪目はほとんど失われている。縁も内側は比較的よく遺っているが、外側は第２坪目がほぼ完全に遺っているものの、他は多くを欠失する。

幡足は７条(現状は５条)で、前述のごとく並列して置かれているが、もとは他の法隆寺幡のごとく、各条を少しずつずらせながら重ねて幡身の下方へ挿入して縫われていたものである。このうち隣接する２条の幡足が完全に遺っており、右側の綾幡足とその左側の平絹幡足は、左側の方が４cmほど短い。他の幡足は途中から欠失しているが、おそらく当初は、順次長さを変えて階段状にしていたものと推測される。なお、別置されていた２条の幡足であるが、前述のごとく損傷が著しく、紫地縅(しじら)幡足は広げることも困難で、一部は粉状になりかけていた。

2) 幡の解体修理

幡を解体するにあたって、まず、幡本体を絹の台裂から外すわけであるが、幡身・幡足とも特に損傷が顕著な部分は、細かく綴じつけられている(図５)ので、表面で糸を切って綴じ糸を抜くことは、かえって裂自身を傷つけることになる。このため幡頭・幡身部と幡足部を台裂ごと切り離して作業の円滑化を図った。そのうえで、それぞれを一旦パネルに挟んで裏に返し、裏側の綴じ糸の縫い目(図６)を一針ずつ切ることにした。すべてを切り終えた後、再び表に返した。こうしてから、幡頭部と幡身部、さらに一枚裂になっている幡足部分を、裂を押さえながら慎重に糸一本ずつをピンセットで抜く作業を繰り返していった。幡頭部であるが、綴じ糸を外して台裂から取り除いた結果、表面からの観察ではわからなかったが、粉状になった繊維が台裂に帯状の形のまま遺っていた(図７)。このため、裂の劣化が予想以上に進んでいたことが再認識された。すべての綴じ糸を抜きとってから、幡身の縁に飾られていた金銅丸金具を外した。その際に、金具を綴じ合わせた当初の糸が抜け落ちないようにするため、メチルセルロース(MC)の水溶液を用いて細く裁断した和紙を貼りつけた後、表裏綴じ合わせた糸を切った。

つぎに、幡身部は各部分ごとに縫製のときの縫い糸を切りながら(表面に現れている縫い糸は、あらかじめ前述の金具のときと同様、MC の水溶液を塗布し、縫い糸を

表面に遺すようにした)、解体することにした(図８)。

最初に両側の縁を外した。二条の縁は、基本的には各々の坪ごと内縁と外縁を縫い合わせた後、各坪の縁どうしを付き合わせ、まつるように細かく縫い合わせている。このため、この部分の縫い糸を切ることは、当時の縫製手法を遺せなくなることと、裂を傷めることにもなるので、縫い糸はそのまま遺した。それは第三坪目と第四坪目の両側の縁である。つぎに下端と坪堺を外し、先ほどの縫い合わされた両側の縁以外は、各々の裂ごとに解体した(図９)。

第一坪目の内縁を解体中に、左側の内縁のなかからこの部分の芯にしたと思われる白地平絹がわずかではあるが発見された(図 10)。しかし、芯裂は第一坪目の縁のみで、他の坪の縁内にあっては確認できなかった。したがって、この幡の芯裂は、第一坪目の縁にのみ入れられていたことがわかった。また、外縁の紫地綾(文様不明)であるが、内縁との縫い合わせ部分(表からはほとんど確認できない)にのみごくわずか遺っていた。とりわけ紫地綾を用いているところ(第一坪目と第四坪目の外縁、第二坪目内縁、第一坪目と第二坪目の坪堺の下、第二坪目と第三坪目の坪堺の上、上端の上、下端の下)は、いずれの部分とも表に現れている箇所はほとんど遺っていない。たとえ遺っていても損傷著しく、少し触っただけでも織物の組織が粉状に崩れ、劣化の程度が高いことを物語っている。坪堺であるが、前述のごとく紫地綾は損傷著しいが、第二坪目と第三坪目の下、第三坪目と第四坪目の上の縹地綾も表に現れている部分はほとんど欠失していた。しかし解体した結果、縁に覆われていた部分は比較的良好に遺存していた(図 11)。

幡足部も綴じ糸を外し、それぞれの条ごとに順次台裂から取り外した。

各部分ごとに解体した裂は、皺がよっていたり亀裂が生じていたので、それぞれ和紙の上に広げ、霧吹きでわずかな湿りを与え、さらに水を含ませた筆で丁寧に糸目を揃えながら文様をあわせ、裂の皺や曲がりを直して形を整えた(図９・11)。なお、別置されていた広げることも困難な紫地繻であるが、少しずつ湿りを与え、慎重に糸目を揃えながら何とか延べ広げることができた(図 12)。それによりほぼ幡足の幅を出すことが可能になった。

こうして糸目を揃えた裂を、酸性染料を用いてごく淡い淡茶色に染めた薄和紙で裏打ちした(図 13)。その際、裂の欠失部分は、その形にあわせた薄和紙をあてて補強し、厚みを均等にした。絵画や書跡の作品で、欠失部分や虫損を絹や和紙で繕う(補絹、補紙と呼ぶ)ときの仕様と同じようなものである。

一番問題になったところは幡頭部であった。この部分は織物としての組織をとどめておらず、経糸のみが総状を呈し、そのうえ糸総を飾った金銅Ｖ形金具も一体になっているため、裏打ちすることができない。このため、幡頭部の形にあわせて和紙を重ねて台紙をつくり、この上に幡頭部をのせ、幡頭に近い色に染めたごく薄い美濃紙で包んで形状を保った(図 16)。その際、懸緒の途中にある結び玉部分は、比較的しっかりしていること、他の部分より厚みがあり、段差を生じること、また本来の色がみえなくなってしまうこともあり、包む和紙は結び箇所を避けることにした。このようにすることで、染めた和紙で包まれてもとの色がみえにくくなる弊害をいくらかでも回避した。和紙で包むことによって、糸総がばらけることもなくなった。

各部分ごとに裏打ちした裂を、仕立てたときのように糊で組み立ててもとの形に復元した。復元に際し、欠失している部分は和紙で形をつくり当初の幡の形に近づけるようにした(図 14、15)。各幡足であるが、別置されていた紫地繖を除く六条は、上方が色焼けしていない部分(この部分は当初、下端のなかに挿入されていた)が明瞭に確認できたので、その部分を揃えた。さらに、各条の重なりは、色焼けしているところを参考にしながら並べ、わかりにくいところは、間隔のバランスをとりながら重なりを決めた。なお、別置されていた紫地繖は、上方が欠失していたため、隣接する黄地綾の下方と違和感を生じないように配した。

最後に、金銅丸金具を表側のみ所定の位置に置いた。裏側の金具(第一坪目右、第二坪目と第三坪目の右と左)であるが、もとの位置へ戻すと、この部分が厚みで波打ちを生じるため、和紙の袋に収め、両端に置いた(図 17・18)。

復元した幡は、台紙の上にのせ、さらに、展示と運搬を兼ねた桐製のパネル台を製作して、台紙ごと置いた。展示に際しては、パネル台とともに行うので、作品を直接持つことがなくなり、安全に展示と保管ができるようになった。

修理後の法量は、全長 325.0 cm、幅(幡身)22.5 cm、完存している幡足のうち赤地綾は 146.5 cm、青地平絹は 141.8 cmである。なお、幡足の各条の幅は、11.0～12.2 cmを測る。

一方、広東平絹幡(図 19)も前述した広東綾幡同様、台裂に綴じ付けられており、損傷が多い部分は細かく綴じ付けられていた(図 20)。広東平絹幡は、幡足の下方を失っているが、幡頭、幡身、幡足のすべてを備えた数少ない幡である。幡頭部は黄地平絹で、帯紐を組み合わせて山形状につくり、幡身部は４坪、第１坪目に経絣

の赤地広東裂をあてているが、第２坪目以下と１条の縁、さらに５条の幡足ともすべて黄地平絹を用いている。ただ坪堺は赤地と紺地の平絹である。随所に破損・欠損がみられ、とりわけ幡身部の坪堺に使われた赤地平絹をはじめ、幡身手、幡足部の損傷が著しく、一部は粉状になり、小残欠が遊離しているところもあった。

この幡の修理方法は、前述した広東綾幡と同様な方法で行なった。まず綴じ糸を外したところ、裂がふくらんだようになり、織物の組織が崩れ、劣化が進んでいることが確認された(図21)。台裂から外して幡を解体し、仕立て前の状態に戻し、各裂の皺や糸目を揃え(図 22、23)、ごく淡い淡茶色に染めた和紙で裏打ちしたのち、元の状態に戻して形を復元した(図24)。そのうえで、展示と運搬を兼ねた桐製のパネル台を製作して、台紙ごと置いた。

5、ガラス挟みなどの再修理

ガラスやアクリル挟みにされていた残欠であるが、アクリル挟みは前述のように内部で裂が移動してしまったものもあった。また、ガラス挟みのなかには、裂の接したガラス面にくもりが生じてきたので、このままにしておくと裂がガラス面に付着して剥がれなくなる危険性が考えられた。また、長期間ガラスによる重圧をかけ続けることは、なかに挟まれている裂にかなりの負担がかかるので、ガラスを取り外すことにした。

１枚のしっかりした裂であれば、そのまま台紙の上に置くことができるのであるが、残欠のほとんどは数片に分かれており、裂としての生がなくなりかけているものが多い。そのうえ１回目の修理では、裂の糸目が揃っていなかったため、亀裂が生じているものや文様が歪んでいるものが多々みられた。こうした状態で、やや厚い茶色に染めた和紙で裏打ちされている裂もあった。

したがって再修理では、幡の修理と同じように、各裂の糸目を丁寧に揃えながら文様を整え(裏打ちされていた残欠は裏打ち紙を剥がした)、ごく淡い淡茶色に染めた薄和紙で裏打ちした。さらに欠失部分は、その形に合わせた薄和紙で補紙を施し、厚みを均等にすることはこれまでと同様である。裏打ちすると裂の裏面がみえなくなるが、このようにしなければ、数片に分かれている残欠は、形をとどめることができないので、現状では裏打ちせざるをえない状況になってきている。しかし、裏

側をみる必要があると思われる残欠(特に両面刺繍である繍仏裂など)については、どの部分にもつながらない小片を別置して、参考資料として保存している。

それぞれ裏打ちした裂は、中性紙ボードのマット(厚紙)に留め、その上に本体より一回り大きく切り抜いた中性紙ボードを重ねた仕様とし、さらに、保存を兼ねて中性紙の覆いをつけた展示用マットを作製した。こうすることにより、裂の表面が擦れることもなく、展示効果も高まった。さらに取り扱いも容易で、安全な保管と展示ができるようになった。

つぎに、台紙へ貼られていた残欠であるが、これらは未整理品と呼ばれている。この未整理品のなかには、法隆寺幡の年代を知るうえで重要な在銘幡をはじめ、幡足を解体したところ、なかから調(ちょう)の墨書銘が発見されるなど(表面からでは全くみえなかったが、解体してはじめて確認できた)、貴重な発見が相次いだ。これら未整理品のうち、幡のなかには同じ幡でありながら別の台紙へ貼られていたもの、別物の裂を巧妙に継ぎ足して幡の形を復元したもの、また幡足などは、別の条でありながら似た色の幡足をつないで1条にしてしまったもの等々、さまざまな状態のものが認められた。このため、こうした状況を判断しながら、慎重に見極めて修理を行わなければならない。したがって法隆寺裂を熟知していなければ判断を誤ってしまう危険性が多分にあった。修理は作品の事前調査はもちろんのこと、作品に関連する状況判断も重要な要素といえる。

未整理品であるが、現状は粗悪な鳥(とり)の子(こ)紙に非常に濃い糊で貼られており、紙にはシミや汚れが多く認められた。一部には台紙より剥がれて遊離している残欠もみられ、危険な状態であった。剥がれた残欠は、裂に糊が十分すぎるほどしみ込んでおり、パリパリに硬化した状態となり、折れかけているものもみられた。未整理品は前述のごとく、間違って復元されたものや同一裂の有無を十分調査した後、鳥の子紙から剥がし、糊抜きを行いながら糸目を揃えて文様を整えた。その後の裏打ちと欠損部の補紙、台紙の作製は、これまでの幡などと同様である。

まとめ

以上、法隆寺献納宝物の染織品の修理について述べた。1回目の修理では、大型の幡などは展示のために、絹の台裂へ綴じつける方法が採用されたが、その後、裂自体の劣化などが進行し、再修理を行うことになった。再修理では幡を解体し、そ

れぞれの裂を補強するために、各々の裂ごとに裏打ちを施した。そのうえで、もとの幡の形に戻して形状を復元した。復元した幡を台紙にのせ、展示と運搬を兼ねた桐製のパネル台へ置いた。このようにすることで作品に直接触れることはなくなり、安全な保管と展示が可能になった。

また、比較的小さな残欠はガラスに挟む仕様であったが、分離した残欠の移動を防ぐため、和紙で裏打ちしたのち、これを中性紙ボードの展示用マットに固定した。この仕様も作品の保護には有効で、展示効果も以前より高まったといえる。何よりもガラスによる重圧とガラス面への付着が無くなったことに大きな意味がある。さらに台紙貼りの作品も、濃い糊が抜け、裂本来の柔らかな風合いがよみがえったようにみえ、展示に活用されている。

このように、それぞれの時期で異なった修理方法が採用されてきたが、いずれも当時においては最適と考えられて行われたものである。修理は完璧な方法というものはなかなかみつからないが、どの分野でもいえることは、やり直しができる修理方法を採用すべきである。現在行われている法隆寺献納宝物の解体修理や裏打ち修理は、後世に有効な修理方法が開発された場合、再修理が可能である。こうした時間と労力を費やした地道な作業があって、はじめて損傷著しい作品が朽ちることなく後世へ引き継がれてゆくのである。

参考文献

・法隆寺献納宝物の幡と褥については

１．東京国立博物館編『法隆寺献納宝物 染織Ⅰ—幡・褥—』便利堂、1986

２．澤田むつ代『上代裂集成—古墳出土の繊維製品から法隆寺・正倉院裂まで』中央公論　美術出版、2001

・法隆寺献納宝物の染織品全般と修理については

３．澤田むつ代『上代裂集成—古墳出土の繊維製品から法隆寺・正倉院裂まで』中央公論　美術出版、2001

・法隆寺献納宝物の本格的な修理は、1981年より毎年継続して行われており、修理が完了した翌年に詳細な修理報告と修理で得られた新知見などを、筆者が東京国立博物館の研究誌『MUSEUM』に23回発表しているので、参考にして頂きたい。以下、掲載号のみを列挙する。

374号、382号、396号、408号、429号、435号、442号、446号、460号、472号、483号、496号、512号、522号、534号、546号、552号、558号、564号、574号、582号、588号、597号。

법륭사보물관의 염직품과 수리에 대하여

澤田 むつ代*

1. 머리말

동경국립박물관의 구내에는 나라(奈良)의 법륭사(法隆寺)에서 1878년(明治 11)에 황실로 헌납된 작품 이른바, 법륭사 헌납보물(이하 헌납보물)을 전시 · 보관하고 있는 법륭사보물관(法隆寺寶物館)이 있다. 헌납보물은 회화, 서적을 시작으로 조각(彫刻), 기락면(伎楽面), 불구(佛具), 조도품(調度品), 악기, 문방구, 염직물등 여러 가지 분야가 모인 큰 콜렉션으로 알려져 있다.

헌납보물은 나라(奈良)의 정창원(正倉院) 보물과 더불어 일본에 있어서 고대미술의 쌍벽을 이루는 것이지만, 특히 조각의 금동불이나 기락면(伎楽面), 불구의 관정번(灌頂幡), 염직물의 번(幡) 등은 정창원보다 시대가 올라가는 아스카시대(583~709)에서 나라시대(710~793) 전반에 해당하는 명품이 많이 전해지고 있는 점이 특징이다. 이번에는 이들 중에서 염직물(법륭사 직물)에 관하여 이제까지 행해온 수리에 대해서 기술하고자 한다.

그전에 헌납보물의 법륭사 직물에 대해서, 어떤 것들이 있으며, 그들의 종류와 용도 등을 살펴 보고자한다.

2. 법륭사 직물의 종류와 용도

법륭사 직물은 전세품으로서 세계 최고급으로, 잔편으로 남아있는 것도 많지만, 당시의 모습을 간직하고 있는 작품을 포함하고 있어, 보물로서의 가치는 매우 높다. 사찰에 전해

* 독립행정법인동경국립박물관 동경국립박물관 문화재부 상석연구원
※ 번역 : 박지선(용인대학교 예술대학원 문화재보존학과 교수)

져 왔다는 점에서 불교 관계의 물품 등이 많이 포함되어 있는데, 그 중에서도 불교 행사의 장엄구(莊嚴具)의 하나인 번(幡)의 존재가 중요하다

번(幡)은 불당의 내외에 장식하거나, 장수(長壽, 延命)나 사자(死者)에의 추선공양(追善供養) 등에 사용된 기(旗)로서, 인체를 형상화 한 것으로 머리에 해당하는 번두(幡頭), 몸통에 해당하는 번신(幡身), 발에 해당하는 번족(幡足)으로 만들어져 있다[그림1]. 형태를 설명하면 번두부는 한 개의 끈[帶紐]에 또 한 개의 끈을 산형(山形)으로 조합한 삼각형으로서 현서(懸緖; 거는 끈), 혀[舌], 번두수(幡頭手)로 되어있다. 번신부(幡身部)는 각 평(坪)을 세로길이의 장방형(長方形)으로 하고, 그것을 에워싼 연(緣: 가장자리, 가선부분)을 1조(条)로 하는 것과 2조를 둘러싼 것(2条緣)이 있다. 1조연(1条緣)에는 각 평을 구별하는 평계(坪堺)와 연이 교차하는 곳의 연의 외측(外側)에 번신수(幡身手)를 붙인 경우가 많다. 한편 2조연(2条緣)에는 각 평의 평계와 2조의 연이 교차하는 곳에 금동환형금구(金銅丸形金具)를 장식하였다. 번신의 평은 대형의 관정번이 6평이고, 그 이외에는 4평으로 만드는 경우가 대부분이다. 번족은 긴 띠형의 직물의 양 끝을 세 번 접어 바느질하고(직물의 끝에 해당하는 식서부분의 경우에는 바느질 하지 않고 그대로 둔다), 하단에도 똑같은 방법으로 한다.

바느질의 특징이 있는데, 의식(儀式)등에 사용되는 번은 번신 제1평에는 화려한 금(錦), 이카트(Ikat, 經絣)의 광동(廣東)직물 등을 사용하고, 이하의 평에는 능(綾)이나 평견(平絹)을 1장 직물로 마무리하는 경우가 많다. 연(緣)은 금(錦)이나 평견(平絹), 번족은 여러 가지 문양의 능과 평견을 사용하였다. 또 2조연의 번에서는 연과 번족에 다양한 문양의 능이나 일부 평견이 사용되어졌다.

한편, 사람들이 봉납(奉納)했다고 추정되는 번이 있는데, 1조연에서는 황지평견(黃地平絹)이 대부분이고, 2조연은 여러 가지 색상의 평견이나 능 등이 사용되었다. 이 중에 직물을 도중에 꼬매어 이어 연결한 번도 보여서, 직물의 귀중함을 말해주는 듯해 흥미롭다.

이들 번 중에서 최대 길이를 자랑하는 관정번인 광동능대번(廣東綾大幡)은 『법륭사가람연기병유기자재장(法隆寺伽藍緣起幷流記資財帳)』에 「秘錦灌頂壱具/右. 養老六年歲次壬戌十二月四日. 納賜坪城宮御宇 天皇者」라 하는 것에 비정(比定: 다른 유사한 것과 비교하여 그 성질을 추정)되어, 현재 길이는 약 12m(번족부는 불완전)이나, 아마도 당시에는 15m를 훨씬 넘는 매우 장대한 번이었을 것으로 추정된다. 이 번은 번두부의 각 선단(先端)에, 주(朱), 황록(黃綠), 표(縹), 감(紺)색 등의 선명한 색의 술을 장식한 금동투조V형금구(金銅透彫V形金具)를 장착하고, 번신의 연에는 금동(金銅) 환형(丸形) 금구를 앞 · 뒤에 붙인 것 등 호화로운 사양이 상당히 눈에 띈다. 천황(天皇) 시입(施入)에 걸맞는 대번(大幡)이라고 할 수 있다.

한편, 4평이 되는 번도 다수 남아있고, 그 중에서도 헌납보물을 대표하는 이카트의 광동직물이나, 촉강금(蜀江錦)이라고 불리 우는 붉은색 바탕[赤地]의 금을 사용하여 만든 번(두 개 모두 1조연 번), 다양한 능(綾)직물을 사용한 2조연의 광동능번 등이 전해지고 있다(이들 번의 수리에 대해서는 후술할 「3. 헌납보물의 수리」의 항목에서 상세하게 기술한다).

광동평견(廣東平絹) 번(幡)은 1조연으로, 번신의 제1평에 광동 직물을 대고, 평계(坪堺)에 붉은 바탕이나 감색(紺色)바탕의 평견을 사용하는 이외에는 모두 노란 바탕 평견으로 만들어져 있다. 광동직물은 정창원 직물에는 거의 보이지 않는 법륭사 특유의 직물로서, 사용시기가 한정되어 있는 점으로 볼 때, 박재품(舶載品: 배로 들어온 수입품)의 가능성이 높다.

또, 두 종류의 촉강금(蜀江錦)을 사용한 화려한 촉강금능번(蜀江錦綾幡)은 두 개 전하여 오는데, 둘다, 1조연의 번으로 거의 동일한 양식이다. 번두부는 평지부문금(平地浮文錦)으로 짠 적지산릉문금(赤地山菱文錦), 번신부는 제1평이 촉강금의 하나인 적지쌍봉사자당초연주원문금(赤地双鳳獅子唐草連珠円文錦), 2평이하는 쌍룡연주원문능(双龍連珠円文綾)을 사용하고, 번신의 연(緣)은 적지격자연화문금(赤地格子蓮華文錦, 蜀江錦의 하나)이다. 번족은 산형문릉(山形文陵)이 사용되어있는데, 현재에는 거의 남아있지 않다.

광동능(廣東綾) 번은 2조연으로 번신 제 1평에 광동직물을, 그 외에는 다양한 색상과 문양이 능과 평견으로 만들어져 있다. 일부 결실된 부분도 보이지만, 번두, 번신, 번족을 갖추고 있는 거의 완전한 형태를 한 번(幡)으로 중요하다.

이들 번 이외에도 간지(干支)와 함께 명과(命過)나 서원(誓願: 보살이 수행의 목적을 이루기 위해 다짐함)을 목적으로 한 용도나 시입자(施入者) 등을 묵서한 중요한 번도 보인다.

그리고 이들 법륭사 번의 제작연대는 평(坪) 직물에 기록된 묵서명(한 점만이 연호가 기록되어 있지만, 그 이외에는 간지표기가 있다)이나 사용직물의 특징 등으로부터 7세기 후반에서 8세기 전후반 경, 즉 법륭사 재건기(再建期)에 관계된 시기에 제작된 것으로 제작된 것으로 추정할 수 있다.

다음으로 제작당시의 형태를 남기고 있는 것으로 요[褥]가 있다. 요[褥]는 「화궤욕(花机褥)」이나 「경태욕(経台褥)」의 묵서명이 나타나고, 헌물궤(獻物机) 등의 덮개로서 사용되는 한편 「태자어욕(太子御褥)」, 「효겸천황어욕(孝謙天皇御褥)」이라고 쓰인 상자 명(銘)으로부터 좌구(坐具)로서 사용된 것도 있었다는 것을 알 수 있다. 요[褥]의 형태는 장방형(長方形)으로 만든 것이 많고, 정방형(正方形)이나 원형(円形)의 드문 형태를 한 褥도 남아있다. 깔개[敷物]인 요[褥]와 좌구로서의 요[褥]의 차이는 만든 방법에도 관계가 있지만, 요[褥]의 심(芯)으로 하는 소재의 변화가 보이고 있다. 즉 까는 물건의 요[褥]는 갈대[藺草]의 자리(筵)를 마포(麻布)로 싸서 심으로 하고 있는데 좌구로서의 요[褥]는 두께를 증가시키기 위

해서, 다시 비단솜[絹綿]과 전(氈; 獸毛製의 敷物)을 더하고 있다. 이들 심에 겉에는 금(錦)과 능(綾)을 대고 안에는 교힐(纐纈; 홀치기 염) 평견(平絹)을 사용한 경우가 많다.

요[褥]를 만드는 방법으로는 장방형의 경우 직물의 온폭(織幅; 당시의 금이나 능의 대부분은 56cm 전후)을 그대로 이용하고 있다. 식서에 해당하는 양쪽 가장자리[両端]를 안쪽으로 조금 접어 넣었고, 안쪽에서는 안쪽 직물의 양끝을 조금 접어 꺽어서 바느질해 맞추었다. 직물의 폭을 유효하게 활용한 합리적이고 낭비 없는 제작방법이라 할 수 있다. 또 요[褥]도 안쪽에는 내측의 직물(鏡이라고 부른다)의 주변에 연(緣)을 감싸돌린 연(緣)이 붙어 있는 요[褥]도 보인다.

그러나 무엇보다도 양적으로 매우 많은 것은 잔편으로 남아있는 염직물이다. 이것들은 색별로 여러 가지 문양을 나타낸 금(錦)을 비롯하여, 철직(綴織), 광동직물(廣東裂), 능(綾)이나 평견(平絹), 라(羅) 등등의 직물, 염물(染物)에서는 묘회(描絵)나 섭회(摺絵), 상대(上代)의 삼힐(三纐)이라 불리우는 교힐(纐纈), 갈힐(臈纐), 협힐(夾纐), 또 자수와 엮음직물[組紐] 등 다종 다양한 기법이 두루 보여서, 마치 직물의 견본첩[見本帳]을 보고 있는 듯하다.

3. 헌납보물의 수리

법륭사의 직물은 1300년 가까이, 그 중에는 그 이상의 긴 세월을 「전세품」이라는 특이한 형태로 전해진 세계적으로 보아도 매우 희귀한 염직품이다. 이 귀중한 염직물의 대부분은 경년(経年)의 열화에 의한, 파손 · 결손 등이 보이고, 일부에는 섬유의 조직이 부서져서 분말상으로 되려는 것들까지도 있다. 이 때문에 제작 당시의 처음 상태를 유지하고 있는 것은 매우 적다고 말할 수밖에 없다. 이것은 염직물, 즉 견(絹) 특유의 매우 위약한 소재가 사용되어진 것으로도 유래된다. 하물며 일상으로 사용되었던 것도 이것을 조장하기도 했다. 이러한 섬세한 염직물을 후세까지 전해가기 위해서는 적정한 환경에 보존하는 것은 물론이고, 손상이 경미할 때 작품에 적절한 수리를 행하는 것이 필요하다. 응급한 수리로 조금이라도 열화의 진행을 늦추게 하는 것이 가능한 상황이라면, 적극적으로 처치를 하여야 하는 것이 좋으나, 현재 상황은 좀처럼 그와 같은 상황이라고는 말할 수 없다.

그런데, 헌납보물의 수리에서는, 지금까지 현상이나 목적에 따른 다양한 방법이 채용되었다. 즉 박물관과 같이 보존은 물론, 끊이지 않고 공개하여 전시에 활용하는 경우에는 보존에 주안점을 두고 있는 정창원 직물의 수리와는 자연히 다른 점이 있다. 박물관에서는 전시를 할 때 작품을 몇 번이라도 이동하지 않으면 안되는 경우도 있어서, 이것에 견딜 수

있는 수리가 필요하게 된다. 비교적 손상이 경미한 작은 한 장의 직물이라면, 지금까지는 유리에 끼워 보관하였다. 이것의 이점은 겉과 안의 조직이 다른 염직물의 경우(금(錦)이나 자수 등), 겉안을 볼 수 있다는 점이 있다. 그러나, 유리의 강도상의 관계 때문에 , 어느정도 두께가 있는 유리를 사용하지 않으면 안된다. 그와 같은 경우에 손상된 직물을 바치고 있는 유리의 중량으로 계속해서 압박이 되어, 직물에 많은 손상을 주게 된다. 보기에 튼튼한 직물이라도, 눈에 보이지 않는 열화가 진행되고 있는 것이다. 재수리로 이러한 직물의 유리를 제거하여 보면, 일견 튼튼해보이는 직물이라도 지금까지의 중압으로부터 해방되기 때문에 직물이 부풀어 오른듯이 보이고, 만지면 안에서는 부서질 정도로 위험해져있는 것도 있다. 또 지금까지의 유리는 박물관유리(museum glass)가 아니라, 일반적인 유리였기 때문에, 유리 자체가 약간의 푸른 빛을 띠고 있어, 염직물 본래의 생생한 색조를 손상시키게 된다. 특히 발색이 양호한 선명한 붉은 색은 어떻게해도 어두워보인다. 더욱이 끼워져 있는 직물은 직물의 경사와 위사의 올이 충분히 나란히 있지 않는 것도 대부분이다. 또한 아크릴에 끼워져 있는 잔편은 내부에서 직물이 이동하여 전시가 불가능해진 것도 보인다.

한편 번이나 요[褥] 등과 같이 몇 장의 직물이 겹쳐지거나, 복잡하게 조합시켜 만들어 낸 비교적 대형의 작품은 전시를 하기 위해서, 구수리(舊修理: 1회째의 수리)에서는 비단의 받침 직물[台裂]에 재봉실로 꿰매는 방법이 채용되었다. 이 경우, 직물이 소정의 장소로부터 분리된 부분이나 파손장소, 손상이 두드러진 곳은 그 부분이 이동하지 않도록 곱게 바느질하여 고정시켰다. 이것이 새로운 직물이라면 바느질한 바늘구멍의 흔적도 원래대로 돌아올 힘이 있어 바느질 구멍이 메워지는 경우도 있지만, 원래 직물로서의 힘이 없어져버린 열화한 부분은 당연히 바늘구멍이 작은 구멍이 남아버린다. 결국 이 구멍의 주변조직이 부서지고, 구멍은 점점 확대되고, 더욱이 열화한 부분의 직물이 없어져 버려, 바느질 실만이 남는 결과가 되었다. 또한 실로 눌리어진 부분도 손상정도에 따라 열화가 진행되면, 일부는 부서져 가루가 되어버리고, 점점 직물의 열화를 조장하는 것이 된다. 더욱이 그 가루가 하얀 받침대 직물에 흩어져서 전시효과를 현저하게 손상시켜 버린다. 이와 같이 재봉실로 촘촘하게 바느질하여 꿰매 붙이는 경우는 재수리를 실시하고자 하여도 손상이 현저한 부분은 실을 빼어보면 직물의 조직이 부서지고, 원래의 직물 상태에 돌아갈 수 없는 위험이 있다. 이렇게 되면 수리는 매우 어렵다.

또한 번에 관해서는 뒤에서 말하겠지만, 재수리를 행한다. 재수리에서는 어떤 방법으로 현상을 유지 하는가에 주안점을 둔다. 여러 가지 수리방법을 생각해보지만, 최종적으로는 배접하여 현상을 유지시키는 방법을 채용하였다. 우선 각 부분별로 신중히 해체하여 일단 만들기 전의 상태로 되돌린다. 그 위에 각각의 직물에 닥지로 배접을 하여 비단을 보강, 다시 한 번 당시의 형태로 꾸며 복원하는 방법을 채용하였다. 배접에 의한 파손한 곳이나 분

리된 직물도 어떻게든 현상을 유지하는 것이 가능하다. 이 수리의 이점은 후일 유효한 수리방법이 개발되었을 경우, 간단하게 이전의 상태로 돌리는 것이 가능한 점이다.

그러면 보물관에서 행하여진 해체수리에 대하여, 번을 중심으로 상세하게 보도록 하자. 동시에 지금까지 유리나 아크릴에 끼워져 있던 잔편, 또한 밑받침 종이에 붙여져 보존되고 있는 작품에 대해서도 설명하고자 한다.

4. 번(幡)의 수리

1) 번의 현재 상태

해체수리를 행한 번에는 광동평견번(廣東平絹幡)을 필두로, 촉강능번(蜀江錦綾幡), 광동능번(廣東綾幡) 등이 있다. 이들 번은 앞에서 말한바와 같이 각각 비단의 받침 직물에 실로 꿰매어 붙였다. 우선 처음으로 광동능번을 다음에 광동평견번에 대하여 기술하고자 한다.

광동능번은 앞에서 말한바와 같이, 일부에 결손은 있지만, 번두·번신·번족부 모두를 갖춘 거의 완전한 형태의 번이다. 현재 상태는 번두·번신부는 일체로 되어 있지만[그림2], 번족부는 번신부로부터 떨어져서, 더욱이 각 조가 병렬하여 나란히 되어있다[그림3]. 그 위에 전회(前回)의 받침직물에 바느질해 하여 붙인 수리에서는 두 조의 번족은 손상이 심하여 바느질해 붙이는 것이 불가능하여 별도로 보관하고 있다[그림4]. 그래서 재수리에서는 이들 따로 보관되어있는 번족 두 조를 원래의 위치로 되돌리고, 병렬되어있는 번족을 당시의 번의 형태로 복원하였다.

번의 형태에 있어서는, 번두부는 현재 상태에서는 위사가 거의 없어져서 경사만이 전체가 되어 있는데, 전체에 적색의 실이 주체가 되어 있기 때문에, 붉은 바탕[赤地]의 경금(経錦)이었다고 추측된다. 또한 현서(懸緒) 상방의 선단에는 금동투조V형금구로 고정시킨 술을 붙였지만, 현재 상태에서는 이 부분 뿐으로, 혀와 번두수는 도중에 결실되었기 때문에 선단의 금구는 없어져버렸다. 현서의 도중에는 묶는 구슬[結び玉]이 그대로인 상태로 남아 있어, 번을 걸었을 때의 방법을 추측하는 점에서 중요하다.

번신은 4평으로 연(緣)과 평계(坪堺)는 각각 2조, 연과 평계가 교차하는 곳의 연에는 금동구금구(金銅丸金具)를 겉과 안에 장착하고 있다(안의 금구에 관해서는 번이 받침직물에 꿰매어 붙여져 있기 때문에 현재 상태로는 확인이 불가능하다). 연과 평계는 다양한 색과 문양의 능(綾)이 사용되었다. 번신은 제1평이 적지광동직물(赤地廣東裂; 대부분결실), 제2평이하, 제 4평까지는 능직물을 사용하였다. 제3평과 제4평은 반 이상 남아있지만, 제2평

은 거의 결실되었다. 연도 내측(內側)은 비교적 잘 남아있지만, 외측(外側)은 제2평이 대체로 완전하게 남아있지만, 그 외에는 대부분 결실되었다.

번족은 7조(현재는 5조)로, 앞에서 말한바와 같이 병렬되어 남아있는데, 원래는 다른 법륭사 번처럼 각 조를 조금씩 겹쳐가면서, 번신의 하단에 삼입하여 꿰맨 것이다. 이 중 이웃하는 2조의 번족이 완전히 남아있고, 우측의 능(綾) 번족과, 그 좌측의 평견(平絹) 번족은 좌측의 것이 4cm정도 짧다. 다른 번족은 도중에 결실되었지만, 아마도 당시에는 차례로 길이를 바꾸어 계단상이었던 것으로 추측된다. 또 별도로 두었던 2조의 번족은 앞에서 말한바와 같이 손상이 심하고, 자색바탕[紫地] 축(縮) 번족은 펼치는 것도 곤란하였으며, 일부는 분말상태로 되어있었다.

2) 번(幡)의 해체(解體) 수리(修理)

번을 해체하는 데 있어서 우선, 번의 본체를 견(絹)의 받침직물로부터 분리하는 것으로, 번신 · 번족 모두 특히 손상이 현저한 부분은 섬세하게 바느질했기 때문에[그림5], 표면에서 실을 잘라 바느질한 실을 빼는 것은 오히려 직물자체를 손상시키는 것이었다. 이 때문에 번두 · 번신부와 번족부를 받침직물채로 잘라서 분리하여 작업의 원활화를 꾀하였다. 그 위에 각각을 일단 판넬에 끼워 안쪽으로 뒤집어 안측의 꿰맨 실의 바느질 땀[그림6]을 하나씩 잘랐다. 모두 자른 다음에 다시 앞으로 뒤집었다. 이렇게 하여 번두부와 번신부, 또한 장 직물로 되어 있는 번족부분을, 직물을 눌러가며 신중하게 실 한 땀 한 땀을 핀셋으로 빼는 작업을 반복하였다. 번두부는 꿰맨 실을 빼내어 받침직물로부터 제거한 결과, 표면으로부터의 관찰에서는 알 수 없었지만, 가루로 되어버린 섬유가 받침직물에 띠형태인채로 남아있었다[그림7]. 이 때문에 직물의 열화가 예상 이상으로 진전해있다는 사실을 재확인하였다. 모든 바느질실을 제거한 다음 번신의 연에 장식되어 있었던 금동환금구를 분리하였다. 그 때에 금구를 꿰매어 붙인 당시의 실이 떨어지지 않게 하기 위하여 메틸셀룰로우즈(MC)의 수용액을 사용하여 가늘게 재단한 닥지를 붙인 후, 겉과 안을 꿰매어 붙인 실을 잘랐다.

다음으로 번신부는 각 부분별로 봉제시의 꿰맨 실을 잘라가면서(표면에 나타난 바느질한 실은, 앞에서 말한바와 같이 금구의 경우와 똑같이 메틸셀룰로우즈(MC)의 수용액을 도포하여 꿰맨 실을 표면에 남도록 하였다)해체하였다[그림8].

최초의 양측의 연을 분리하였다. 2조의 연은 기본적으로 각각의 평별로 내연과 외연을 꿰매어 붙인 후, 각 평의 연끼리 붙여, 감치듯이 촘촘하게 꿰매어 붙였다. 이 때문에 이 부분의 꿰맨 실을 자르는 것은 당시의 봉제수법을 남기지 않는다는 것과, 직물을 손상시키는 일이기도하기 때문에 바느질한 실은 그대로 두었다. 그것은 제3평과 제4평의 양측의 연이

다. 다음에 하단과 평계를 분리하고, 앞에서 말한 꿰매어 붙인 양측의 연 이외에는 각각의 직물별로 해체하였다[그림9].

제1평의 내연을 해체하는 중에 좌측의 내연으로부터 이 부분의 심(芯)이였다고 생각되는 백지평견(白地平絹)이 아주 조금 있는 것이 발견되었다[그림10]. 그러나 심 직물은 제1평의 연 부분으로 다른 평의 연내에서는 확인되지 않았다. 따라서 이 번의 심 직물은 제1평의 연에만 넣었다는 것을 알 수 있었다. 또한 외연의 자지능(紫地綾; 문양불명)은 내연과의 바느질해 붙인 부분(겉에서는 거의 확인되지 않는다)에만 매우 조금 남아있다. 특히 자지능을 사용한 곳(제1평과 제4평의 외연, 제2평 내연, 제1평과 제2평의 평계의 아랫부분, 제2평과 제3평의 평계의 윗부분, 상단의 윗부분, 하단의 아랫부분)은 어떤 부분도 표면에 보이는 곳에는 거의 남아있지 않다. 예를 들어 남아있다 하더라도 손상이 심하여 조금 손을 대기만하여도 직물의 조직이 가루로 부서져서 열화의 정도가 심한 것을 말할 수 있다. 평계는 앞에서 말한 바와 같이, 자지능(紫地綾)은 손상이 심하지만, 제2평과 제3평의 아랫부분, 제3평과 제4평의 위 표지능(縹地綾)도 겉에 보이는 부분은 거의 결실되어있다. 그러나 해체한 결과 연에 싸여져 있는 부분은 비교적 양호하게 남아있었다[그림11].

번족부도 바느질한 실을 빼내어서, 각각의 조별로 차례대로 받침직물에서 제거하였다.

각 부분별로 해체된 직물은 주름이 가있다던지, 균열이 생겼기 때문에 각각 닥지의 위에 펴서 분무하여 습기를 주고, 또 수분을 포함한 붓으로 정성들여 올방향을 정리해가며 문양을 맞추어 직물의 주름 혹은 구부러진 것을 바르게 형태를 정리하였다[그림9 · 11]. 또 별도로 두었다 펴는 것조차 곤란한 자지축(紫地縐)은 조금씩 습기를 주어 신중하게 올방향을 정돈해가면서 어떻게든 펴는 것이 가능하였다[그림12]. 이로써 거의 번족의 폭을 산출하는 것이 가능하였다.

이렇게 올방향을 정리한 직물을 산성 염료를 사용하여 엷은 담갈색(淡茶色)으로 염색한 얇은 닥지로 배접하였다[그림13]. 이때에 직물의 결손부분은 그 형태에 맞추어 얇은 닥지를 대어 보강하여 두께를 균등하게 하였다. 회화나 서적의 작품에서 결손부분이나 충해부분[虫損] 비단 혹은 닥지로 짜깁기 하는(補絹, 補紙라고 부름) 때의 사양과 같은 것이다.

가장 문제가 되었던 것은 번두부이다. 이 부분은 직물로서의 조직이 형태가 없이, 경사만이 전체 상태를 이루고 있고, 더욱이 술을 장식한 금동V형 금구도 일체가 되어 있기 때문에 배접하는 것이 불가능하였다. 이 때문에 번두부의 형태에 맞추어 닥지를 겹쳐 받침종이를 만들어 이 위에 번두부를 올려 번두에 가까운 색으로 염색한 매우 얇은 닥지[美濃紙]로 싸서 형태를 보존하였다[그림16]. 그 때 현서에 있는 묶는 구슬 부분은 비교적 튼튼하고, 다른 부분에 비해 두께가 있고, 단차가 생기고, 또한 본래의 색이 볼 수 없게 되었기 때문에 싸는 닥지는 묶는 부분은 피하였다. 이와 같이 하여 염색한 닥지로 싸도 그 색이 보기

어렵기 되는 폐해를 어느 정도는 피하였다. 닥지로 싸는 것에 의하여 술이 흐트러지는 것도 피할 수 있었다.

각 부분 별로 배접한 비단을 만들 때와 같이 풀로 마무리하여 본래의 형태를 복원하였다. 복원할 때에는 결실된 부분은 닥지로 형태를 만들어 당시의 번의 형태에 가깝도록 하였다[그림14 · 15]. 각 번족은 따로 두었던 자지축(紫地縐)을 제외한 6조는 상방(上方)이 색이 바래지 않은 부분(이 부분은 당시 하단에 삽입되어 있었다)이 명료하게 확인되었기 때문에 그 부분을 나란히 두었다. 더욱이 각 조의 겹침은 색이 바랜 곳을 참고로 해가며 나열하였고, 알기 어려운 곳은 간격의 밸런스를 맞추어가면서 겹침을 결정하였다. 또 따로 두었던 자지축(紫地縐)은 상방이 결실되었기 때문에 인접하는 황지능(黃地綾)의 하단과 위화감이 없도록 배치하였다.

최후로 금동환금구를 겉측의 소정의 위치에 두었다. 안측의 금구(제1평 오른쪽, 제2평과 제3평의 오른쪽과 왼쪽)는 본래의 위치에 되돌리면, 이 부분이 두꺼워서 주름이 생기기 때문에, 닥지로 주머니를 만들어 양단에 두었다[그림17 · 18].

복원한 번은 받침종이의 위에 놓아 그 위에 전시와 운반을 겸한 오동재의 판넬 대를 제작하여 받침종이[台紙]채로 두었다. 전시 때에는 판넬대와 함께 움직이므로 작품을 직접 잡는 일이 없고, 안전하게 전시와 보관을 할 수 있게 되었다.

수리후의 법량(法量)은 전체길이 325.0㎝, 폭(幡身)22.5㎝, 완존하고 있는 번족 부분의 적지능(赤地綾)은 146.5㎝, 청지평견(靑地平絹)은 141.8㎝이다. 또 번족의 각 평의 폭은 11.0~12.2㎝이다.

한편, 광동평견번도[그림19] 전술하였던 광동능번과 같이 받침직물에 꿰매어 붙여져 있었고 손상이 심한 부분은 촘촘하게 바느질되어있었다[그림20]. 광동평견번은 번족의 하방(下方)을 잃어버렸지만, 번두 · 번신 · 번족 모두를 갖춘 수가 많지 않은 번이다. 번두부는 황지평견(黃地平絹)으로 띠[帶紐]를 조합한 산의 형상으로 만들었고 번신부는 4평으로 제1평은 이카트[絣絣]의 적지광동직물[赤地廣東裂]을 대고 있지만, 제2평 이하와 1조의 연, 또 5조의 번족 은 모두 전부 황지평견(黃地平絹)을 사용하고 있다. 단, 평계는 적지(赤地)와 감지(紺地)의 평견(平絹)이다. 몇 군데에 파손 · 결손이 보이고, 특히 번신부의 평계에 사용된 적지평견(赤地平絹)을 필두로, 번신수, 번족부의 손상이 심하고, 일부는 가루상태로 되어 작은 편이 분리되어있는 것도 있었다.

이 번의 수리 방법은 앞에서 말한 광동능번(廣東綾幡)과 같은 방법으로 행하였다. 우선 꿰맨 실을 제거했을 때 직물이 부풀어 오르는 듯하였고, 직물의 조직이 부서지고, 열화가 진행된 곳이 확인되었다[그림21]. 받침직물로부터 분리하여 번을 해체하고 만들기 전의 상

태로 되돌리고 각 직물의 주름과 올 방향을 정돈하고[그림22 · 23] 매우 엷은 다갈색으로 염색된 닥지로 배접하여 원래의 상태로 되돌려 형태를 복원하였다[그림24]. 그 위에 전시와 운반을 겸한 오동제의 판넬 받침을 제작하여 받침종이[台紙]채로 두었다.

5. 유리에 끼운 것 등의 재수리

유리와 아크릴에 끼운 잔편은 아크릴에 끼운 것을 앞에서 말한 바와 같이 내부에서 직물이 이동해버린 것도 있었다. 또 유리에 끼운 것 중에는 직물에 접촉한 유리면이 뿌옇게 변하여 이대로 두면 직물이 유리면에 부착되어 떨어지지 않는 위험성이 추측되었다. 또 장기간 유리로 인한 중압이 계속된다면 안에 끼워져 있는 직물에 많은 부담이 감으로, 유리를 제거하기로 하였다.

한 장의 튼튼한 직물이라면, 그대로 받침종이[台紙] 위에 두는 것이 가능하지만, 잔편의 대부분은 조각으로 나누어져 있고, 직물로서의 힘이 없어져버린 것이 많았다. 그 위에 첫 번째 수리에서는 직물의 올이 정돈되어 있지 않았기 때문에, 균열이 생긴다든지 문양이 왜곡되어진 것이 많이 보였다. 이러한 상태에서 조금 짙은 갈색으로 염색한 닥지로 배접되어 있는 직물도 있었다.

따라서 재수리에서는 번의 수리와 같이 각 직물의 올방향을 정성스럽게 맞추어가며 문양을 정리하고(배접되어 있는 잔편은 배접지를 제거하였다), 매우 옅은 다갈색으로 염색된 얇은 닥지로 배접하였다. 더욱이 결실부분은 그 형태에 맞춘 얇은 닥지로 짜깁기[補紙]를 실시하여 두께를 균등하게 한것은 이제까지의 방법과 같이 하였다. 배접을 하면 직물의 뒷면이 보이지 않지만, 이렇게 하지 않으면 몇조각으로 나누어져 있는 잔편의 형태를 고정하는 것이 불가능하였기 때문에 배접을 하지 않을 수 밖에 없는 상황이었다. 그러나 뒷면을 볼 필요가 있다고 생각되는 잔편(특히 양면자수가 되어있는 수불(繡佛) 직물 등)에 관해서는 어떤부분과도 연결되어있지 않은 작은 편을 별도로 두어 참고자료로서 보존하였다.

각각 배접된 직물은 중성지보드의 매트[厚紙]에 두고, 그 위에 본체보다 조금 크게 형태를 맞추어 자른 중성지보드를 겹치는 사양으로 하였는데, 더욱이 보존을 겸한 중성지의 덮개를 붙인 전시용 매트를 제작했다. 이렇게 하여 직물의 표면이 접촉되는 것이 없이 전시효과를 높였다. 더욱이 취급도 간편하여 안전한 보관과 전시가 가능하도록 되었다.

다음으로 받침종이[台紙]에 붙여져 있던 잔편이 있는데, 이것들은 미정리품이라고 불리워져 왔다. 이 미정리품 중에는 법륭사 번의 연대를 아는데에 중요한 재명번(在銘幡)을 필두로 번족을 해체할 때 안으로부터 조(調)의 묵서명이 발견되었던 것 등(표면에서는 전혀

보이지 않지만 해체하여 처음으로 확인되었다) 중요한 발견이 줄을 이었다. 이들 정리품 중, 번 중에는 똑같은 번인데도 다른 받침종이에 붙여있는것, 다른 직물을 교묘하게 이어 다리로서의 번의 형태를 복원한 것, 또 번족 등은 다른 조이면서 비슷한 색의 번족을 이어서 한 개로 한 것 등 여러가지 상태의 것이 확인되었다. 이 때문에 이러한 상태를 판단하면서 신중하게 수리를 행하지 않으면 안되었다. 따라서 법륭사 직물을 숙지하지 않으면, 오판을 해버릴 위험성이 다분히 있었다. 수리는 작품의 사전조사는 물론, 작품에 관련되는 상황판단도 중요한 요소라고 할 수 있다.

미정리품은 현재 상태는 조악한 토리노코지[鳥の子紙; 종이의 한종류]에 매우 진한풀로 붙여있었고, 종이에는 얼룩이나 오염이 많이 있었다. 일부에는 받침종이로부터 분리된 잔편도 보여 위험한 상태였다. 분리된 잔편은 직물에 풀이 많이 밸 정도로 칠해져 있어, 딱딱하게 경화되어 있었고, 꺽여져 있는 것도 보였다. 미정리품을 앞에서 말한 바와 같이, 잘못 복원된 것이나 같은 직물의 유무(有無)를 충분히 조사한 후 종이(토리노코지)로부터 분리하여 풀빼기를 행한 후 올방향을 정리하여 문양을 맞추었다. 그 후의 배접과 결손부의 짜깁기[補紙], 받침종이의 제작은 지금까지의 번등과 같은 사양이다.

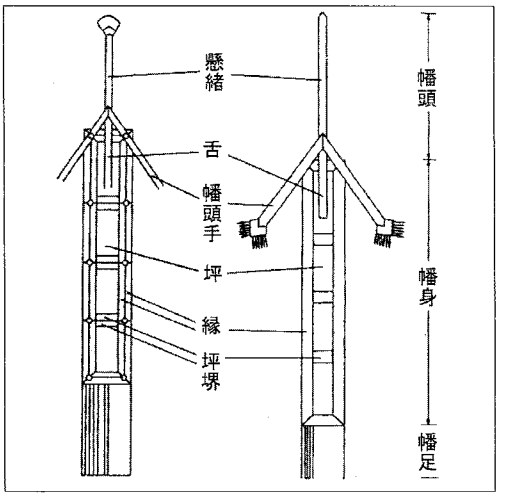
6. 결론

이상 법륭사 헌납보물의 염직물의 수리에 관하여 기술하였다. 이전 수리에서는 대형의 번등은 전시를 위하여, 견(絹)의 받침직물에 꿰매어 붙이는 방법이 채용되었지만, 그 후에 직물자체의 열화 등이 진행되어, 재수리를 행하게 되었다. 재수리에서는 번을 해체하고 각각의 직물을 보강하기 위하여, 각각의 직물별로 배접을 실시하였다. 그 위에 본래의 번의 형태로 되돌려 형상을 복원하였다. 복원된 번을 받침종이에 위에 놓고, 전시와 운반을 겸한 오동재의 판넬대에 두었다. 이와 같이 함으로써 작품에 직접 접촉하는 일이 없고, 안전한 보관과 전시가 가능하게 되었다.

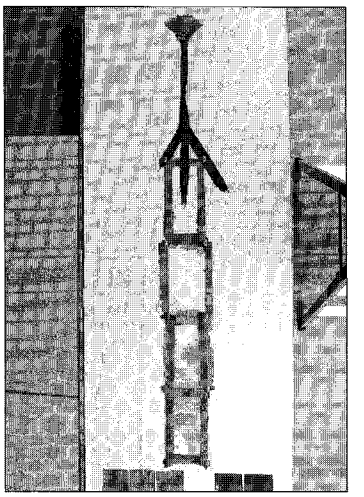
또한 비교적 작은 잔편은 유리에 끼운 사양이었지만, 분리된 잔편의 이동을 막기위하여 닥지로 배접하고 이것을 중성지 보드의 전시용 매트에 고정하였다. 이 사양도 작품의 보호에는 유효하고 전시효과도 이전보다 높아졌다고 말할 수 있다. 무엇보다도 유리로 인한 중압과 유리면에 접촉이 없어지는 것에 커다란 의미가 있다. 더욱이 받침종이에 붙인 작품도 진한 풀은 제거되고 직물본래의 부드러운 느낌이 되돌아왔다고 보여, 전시에 활용하고 있다.

이와 같이 각각의 시기에 다른 수리 방법이 채용되고 있지만, 그 어떤 것도 당시에 있어

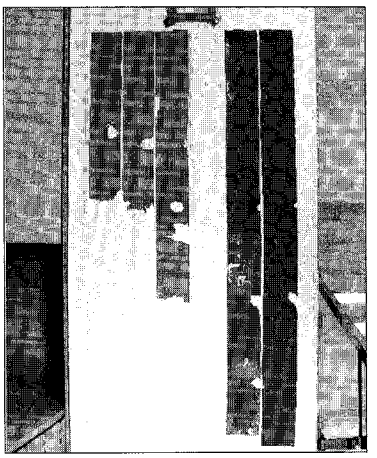
서는 최적이라고 생각하여 행하여진 것이다. 수리는 완벽한 방법이라고 할 수있는 것은 좀처럼 발견할 수 없지만, 그 어떤 분야에서도 말할 수 있는 것은 가역적인 수리방법을 채용해야한다는 것이다. 현재 행하고 있는 법륭사 헌납보물의 해체수리와 배접방법은 후세에 유효한 수리방법이 개발되었을 때 재수리가 가능하다. 이런 시간과 노력을 쏟은 꾸준한 작업으로 처음으로 손상이 심한 작품이 나쁘게 되는 것 없이 후세에 계속 전해져 가는 것이다.



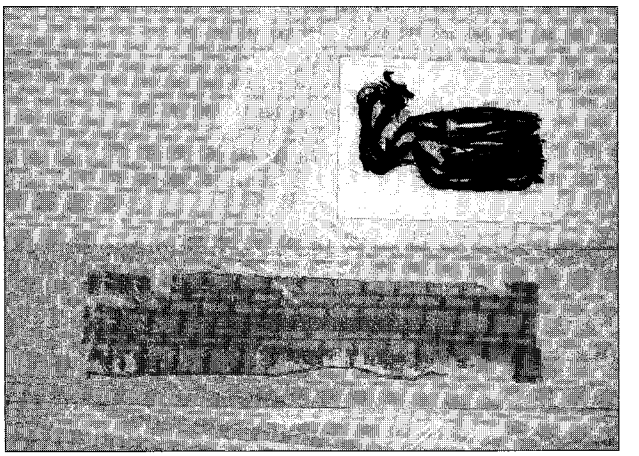
[사진 1] 번 각부의 명칭
幡各部の名称



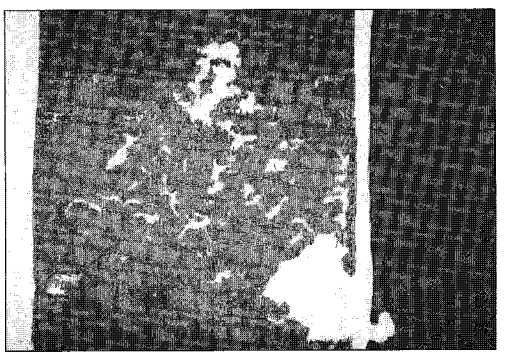
[사진 2] 번두 · 번신부(수리 전)
幡頭 · 幡身部(修理前)



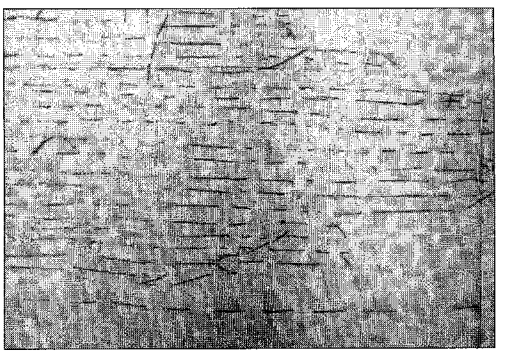
[사진 3] 번족부(수리 전)
幡足部(修理前)



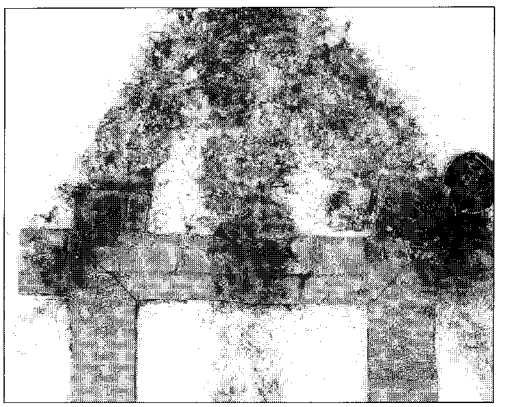
[사진 4] 별도로 둔 번족(수리 전)
別置幡足(修理前)



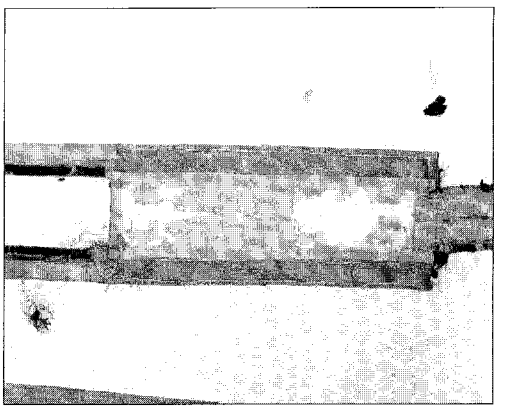
[사진 5] 번족부의 바느질한 상태(수리 전)
幡足部の綴じ付け状況(修理前)



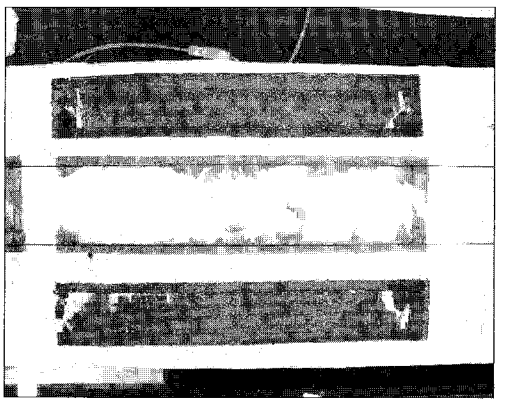
[사진 6] 안측의 바느질한 실의 바늘땀(수리 전)
裏側の綴じ糸の縫い目(修理前)



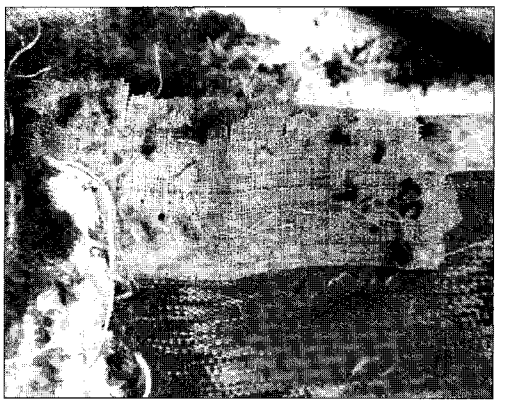
[사진 7] 열화로 가루 상태로 된 번두부
劣化で粉状になった幡頭部



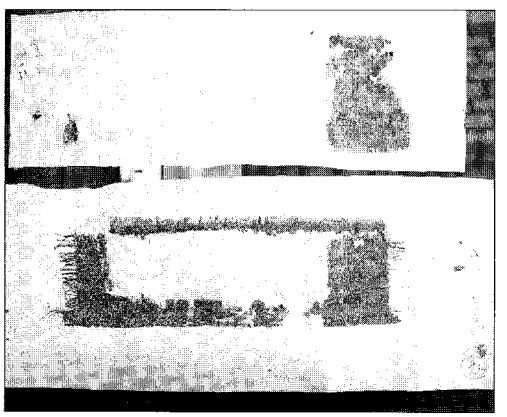
[사진 8] 연(緣)의 해체
縁の解体



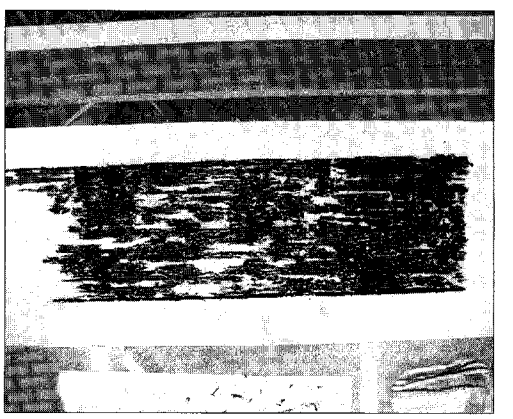
[사진 9] 연(緣)의 해체
縁の解体



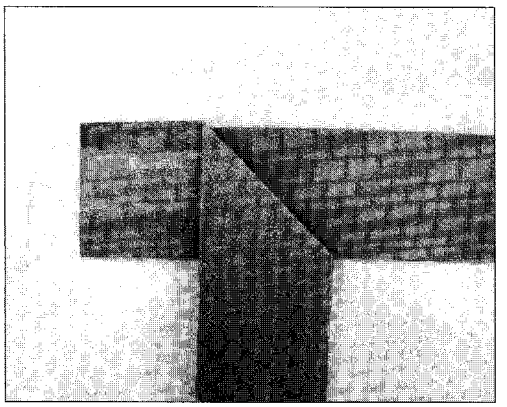
[사진 10] 심(芯) 직물의 남아있는 상태
芯裂の遺存状況



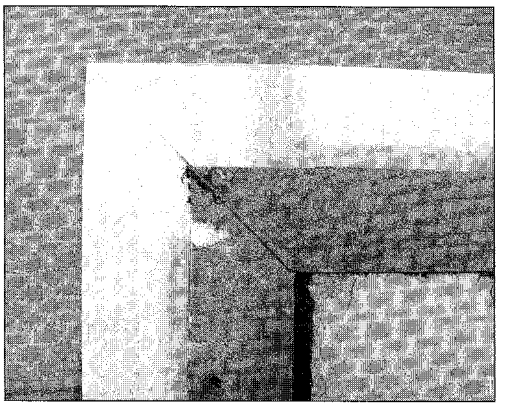
[사진 11] 올 정리(평계)
糸目揃え(平堺)



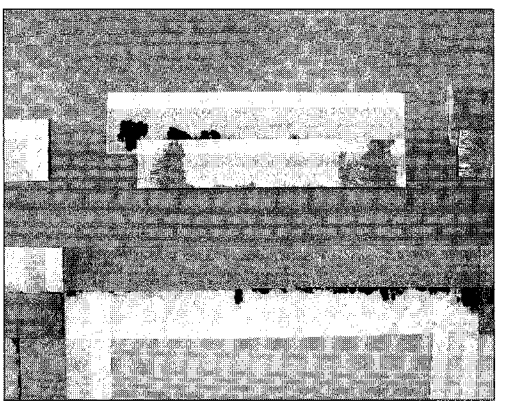
[사진 12] 올 정리
糸目揃え



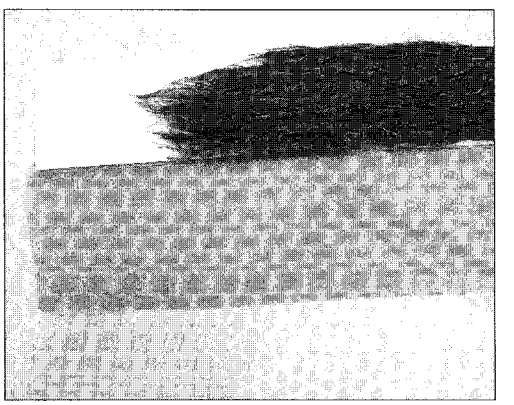
[사진 13] 배접 후 꾸미기
裏打ち後の組み立て



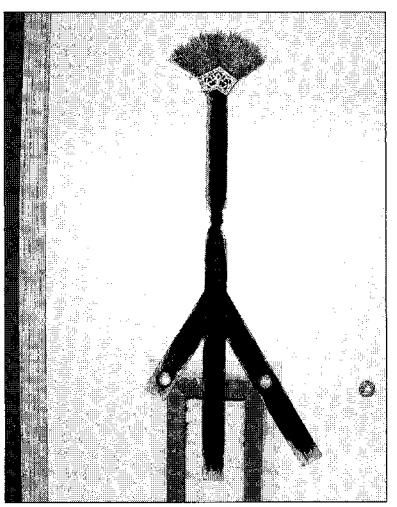
[사진 14] 꾸미기
組み立て



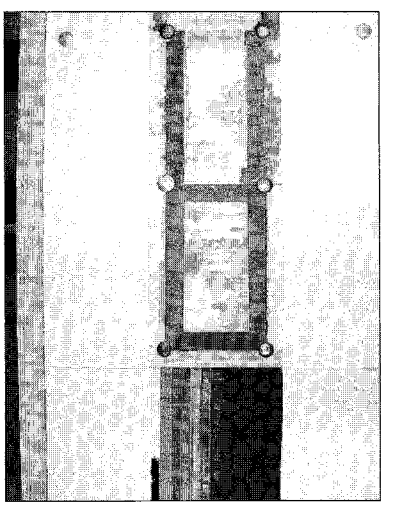
[사진 15] 꾸미기
組み立て



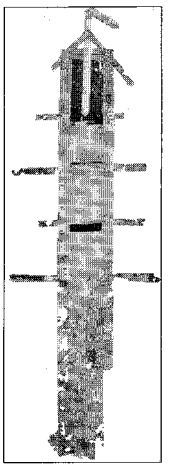
[사진 16] 번두부를 싼 염색한 종이
幡頭部を包んだ染め紙



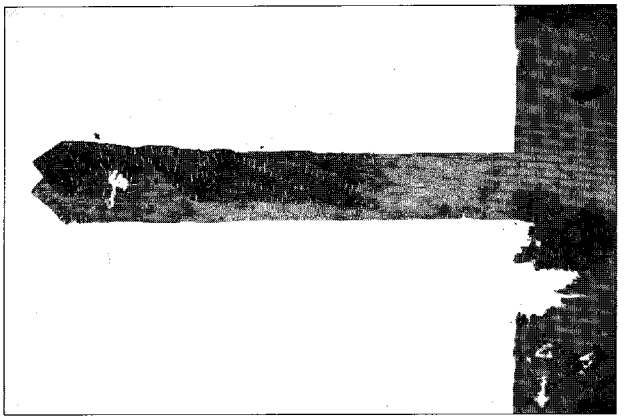
[사진 17] 번두부(수리 후)
幡頭部(修理後)



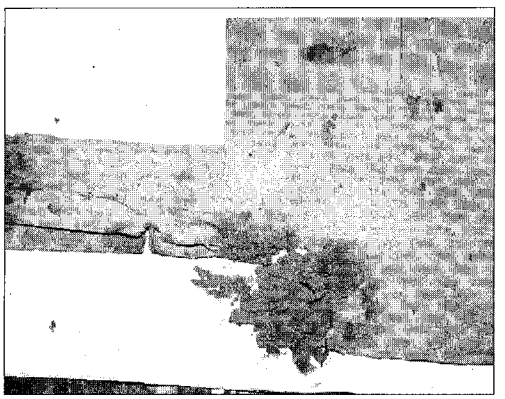
[사진 18] 번신 · 번족 부분(수리 후)
幡身 · 幡足部分(修理後)



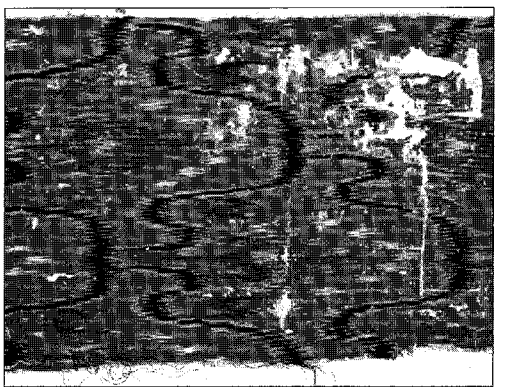
[사진 19] 광동평견번(수리전)
広東平絹幡(修理前)



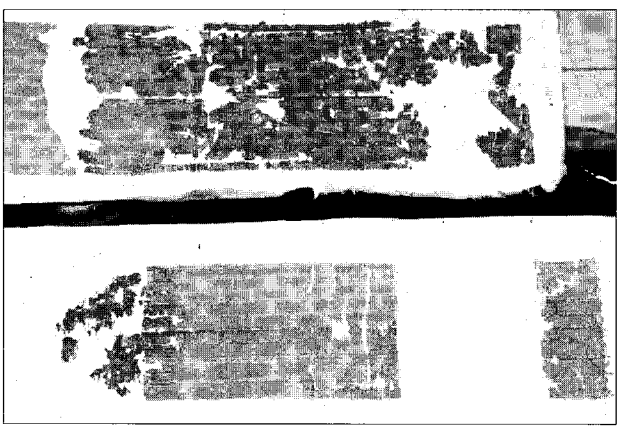
[사진 20] 광동평견번의 구수리(舊修理) 바느질 상태
旧修理の綴じ付け状況廣東平絹幡



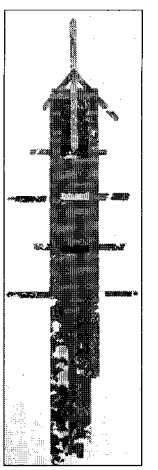
[사진 21] 바느질 실 제거
綴じ糸を外す



[사진 22] 올 정리하기
糸目を揃える



[사진 23] 주름 펴기와 올 정리
皺延ばしと糸目揃え



[사진 24] 수리 후
修理後

참고문헌

· 법륭사(法隆寺) 헌납보물(献納宝物)의 번(幡)과 욕(褥)에 대해서는

1. 東京国立博物館編『法隆寺献納宝物 染織Ⅰ-幡・褥-』便利堂. 1986
2. 澤田むつ代『上代裂集成-古墳出土の纖維製品から法隆寺・正倉院裂まで』中央公論 美術出版. 2001

· 법륭사 헌납보물의 염직품전반과 수리에 대해서는

3. 澤田むつ代『上代裂集成-古墳出土の纖維製品から法隆寺・正倉院裂まで』中央公論 美術出版. 2001

· 법륭사헌납보물의 본격적인 수리는 1981년부터 매년 계속 행하여지고 있고, 수리가 완료되면 이듬해에 상세한 수리보고서와 수리에서 얻어진 새로운 자료 등을 필자가 동경국립박물관의 연구지『MUSEUM』에 23회 발표하였으므로 참고하기 바라며, 이하 게재호를 열거한다.

374호, 382호, 396호, 408호, 429호, 435호, 442호, 446호, 460호, 472호, 483호, 496호, 512호, 522호, 534호, 546호, 552호, 558호, 564호, 574호, 582호, 588호, 597호.

金代齐国王墓服饰出土技术与相关认识问题

赵评春*

一、金代齐国王墓

1988年，考古发掘出土的黑龙江省阿城金代齐国墓，是中国考古学领域非常重要的一处墓葬，已被列入中国重大考古发现典籍之中。[1]金代齐国王墓棺内所葬男女身着完整、穿戴有序的衣裳冠履带，直接添补了金代服饰研究的空白，诸多金代服饰更为世所罕见。

金代齐国王墓葬位于黑龙江省阿城市巨源乡城子村西端，东经 126° 51′ 30″，北纬 45° 52′ 30″，海拔高度约 130 米。其地处松花江南岸、阿什河与蜚克图河下游间。该村坐落在西南至东北走向的岗地上，岗长约 1 公里，相对高度约 12 米。该墓距村东一座小型金代土城遗址约 330 米，南距金上京故城约 40 公里 。

该墓为竖穴土坑石椁木棺葬，略呈东西向。石椁为长方体，长280、宽190、高150厘米。石椁四壁各由一块雕凿完整的矩形花岗岩板构成，四立角以半榫卯结构相合；底、盖分别为三块花岗岩板横铺构成。石板厚度20～30厘米。石板间缝隙均填抹白膏泥。石椁四壁外立角用残布纹灰瓦和滴水并填充白膏泥交错叠压堆

---

* 系中国黑龙江省文物考古研究所研究员、黑龙江省文物鉴定委员会委员。

1) 參見中華人民其和國重大考古發現編輯委員會編：《中華人民共和國重大考古發現》，文物出版社,1999年9月版。

砌。石椁板外壁面凿工粗糙，表面凸凹不平；椁内壁面工整：底、盖板裹面凿斜线纹，两侧壁凿两组上下交错排列的菱形纹；头、足两壁各凿饰一组菱形纹。

在石椁南侧相邻并列一小石椁，其一端同墓主石椁足向东端略齐。小石椁通长178、宽117、高122厘米、六面各为一块厚24～30厘米的花岗岩板。在小石椁中仅发现少量碎骨、残木，应为附葬椁。

石椁内为一长方体朱漆木棺，长221、宽126、高90厘米。椁、棺之间的间距约4～7厘米。木棺上残存罩绛地交龙金锦棺衾。棺盖正中钉“太尉开府仪同三司事齐国王”铭文银棺桄。棺下由西向东依次等距离放置四根垫木。

朱漆木棺内葬男女二人，位置男左女右，仰身直肢、头西脚东，人体软组织已腐烂无存。男尸内脏部分已炭化，残块尚在，骨骼完整。面部表皮风化，初开棺时面皮遗附在头骨脸部，眉、须、发等俱在，甚至胡须与眉毛仍然支立在表皮上。女尸仅存完整骨骼。

二、金代齐国王墓服饰揭取过程

在墓棺盖板掀开之初，考古学者对于棺内情况尚无法清楚认识，但是，面对墓主二人身着举世罕见的金代金锦服饰，一个初步的认识基本形成— —即采取有备无患的稳妥措施——整体取棺。

先行逐步清除墓坑内填土，用绳索吊开石椁盖板，再将石椁四壁板分别移开。一具完整无损的银饰朱棺得以摆在墓坑之内。当时，棺木板没有明显腐朽痕迹，木质结构较好。在现场将木棺四角、棺底及四壁棺板用木方夹固，选用抗拉强度较好的棕绳缠绕加固，然后，用起重机将木棺整体吊装平稳置放在汽车上，将木棺运回安全设施较好的工作室内。

当把木棺运回室内后，一个最棘手的难题就是如何将逐层套穿在两具尸骨上衣裳靴袜冠等脱下来。很明显，墓主属金代贵族，生活年代距今已八百余年，而这批丝织品服饰伴随墓主在如此潮湿的棺中已是体烂衣空，丝织材料的抗折系数已是微乎其微。起取服饰工作，不同于通常的田野考古发掘。它即要有大量的工作

经验，同时，在工作过程中又要不断地摸索新的工作方法，积累新的经验。鉴于出土丝织品的墓葬数量十分有限，故此，现场实施的任何一条成败经验都应该是珍贵的，也具有一定的参考价值。当然，这一行涉及的学者甚少，主要是田野考古工作者。

1988年5月24日 上午，开始了系统的服饰起取工作。考古学者顺利地将棺外银饰件、棺盖及四壁棺板依次取下，以便下一步起取服饰时，位居现场各个侧面的工作者，可以各自在其周围不同的角度上插手工作。在未经扰动之前，先用X光照像设备将棺内人体骨骼、穿着服饰及其随葬物品所在位置全部用X光片予以拍照记录。整个工作及各层其服饰状态亦全部用照像、摄像及文字作以全面系统记录。

墓内同时入葬的男女二人，男墓主右臂侧压在女墓主左臂之上。出土之初，男墓主面部尚有朽干的表皮呈黑褐色，残存在头骨脸部。女墓主头罩黄绢覆面，覆面下还具有一定的弹性。同时，二者的胸部衣服下，皆有一定的弹性。当时，一般认为墓主人体还存在软组织部分，尤其女墓主黄绢覆面下的弹性更透出许多神秘的想象。

尽管是男墓主半臂侧压在女墓主半臂之上，按照常规考古工作程序，应该先揭取上层服饰，再逐步依次向下层揭取。但是，也许是受着女墓主神秘覆面的诱惑，或者由于现场的田野考古工作者，更急于看到女墓主的“庐山真面目”，有一个几乎是微妙的现象，现场揭取服饰工作中，恰恰是有悖于常规由上而下的逐层揭取，而是掀开男墓主的右臂之后，先行揭取侧臂压在男墓主之下得的女性所着服饰。

首先，必须解开外服紫地云鹤金锦绵袍腰间所系结的黄褐地牡丹卷草印金暗花罗缀珠大带。经过数小时的努力，我们在现场一点一点地将带结松动，退开带结，终于谨小甚微地把女墓主外系金锦腰带解除下来。

万事开头难，经过这一番摸索尝试，令人感到丝织品的质地、韧性尚好，这真是人类文明的一大幸事。自从棺盖板被乡民掀开而窥其内情，连日来尘土、空气与光等综合作用，已经致使墓主两人所着外袍均已蒙尘褪色，光泽黯然。但在考古学者们轻轻地掀开墓主外着紫地云鹤金锦绵袍前襟时，里襟那鲜艳色泽光彩再

现于世。令人遗憾的是，当代的科学技术尚难以将这类转瞬即逝的色彩留住人间……，就在不知不觉中，艳丽的色彩与其说是褪色，莫不如说是一个色彩的挥发过程，留下的只是一个比较守恒的、近似酱色的颜色。衣裳上的织金也随着人为的每次掀动而有所脱落。在最后清理棺底板上的积土时，其中竟不乏闪闪发光的金线残片。

丝织服饰的剥离起取工作，首要的目标是避免因手法不利而造成人为对织物的损坏。防止工作过程接触污染，减少光对各色织物的褪色作用。

每层服饰起取时，先用塑料衬膜加入到衣裳之下，用以减少磨擦，加强辅助拉力。墓主衣裳两侧分别加入托板，再展开外层左衽绵袍前襟，用托板接应向两侧掀开的服饰，以减少丝织品机械折叠次数。外袍前襟掀开后，露出女墓主内着绿地忍冬云纹夔龙金锦绵袍，以及腰间所系的黄褐菱纹暗花罗腰带。此带绕系于前腹部，腰带两端下垂至前下摆。解开内袍腰带后，再掀开内袍前襟，露出上着素縠团衫。此衫为左衽，即右襟斜压在左襟之上。轻轻掀起内外前襟，里面露出下着褐绿地全枝梅金锦绵襜裙。襜裙后腰开衩，左右各钉缀一条系带，由后面绕到前腹部系结。将裙带轻轻解开后，由于裙筒属于整体缝合，裙内里层的各件服饰已经不能开解。为此，必须将襜裙由身体上退下来。

襜裙下为女墓主双脚所穿的绿罗萱草绣鞋。在墓地出土之初，现场可以看到棺内女墓主双脚上所穿的绣鞋，鞋尖为挺立状态。可以认为在当时双脚的骨骼仍然挺立在鞋袜内。只是在墓葬现场，由于当地一位官员的人为触动，以致于鞋尖折倒。退下襜裙之前，需要将绣鞋先行脱下，然后，再将襜裙整体托起，并将衬板加入到襜裙之下，由此将襜裙由身下移出。

依次由外向里逐层解开内袍或团衫的前襟，解开吊敦系带，退下吊敦等。再解开棕褐菱纹暗花罗萱草团花绣绵大口裤等高腰裤，以及棕罗云龙贴补绣抱肚、素绢裩的系带，由外向里逐层退下。最后，逐渐露出人体骨骼。骨骼下面为原穿的内衣里面。

女尸只剩一具骨骼，内脏、皮肤与毛发等均已朽烂无存，原以为面部“丰腴”，也只不过是黄绢覆面下所夹垫的丝绵而已。现场提取骨骼之后，女墓主所穿着的所有衣袍，已经由里向外、由上而下逐层地展放在棺底。

将内层服饰两袖由外层两袖内里退出，然后，棺木周边各个角度的工作者，将里层衣衫轻轻抬起，衣衫下加入衬板，连同衣衫一起移出。基于由外向里逐层解开衣袍带襟的时候，已经在每层服饰之下加入了塑料衬膜，所以，在揭取每层已经展开的衣衫过程中，塑料衬膜起到了很见效的辅助拉力作用。

依次如法进行，由上向下将每件服饰提取。为了进一步遏制白色霉斑的扩散，再适量喷洒防止霉变的药水，进行逐层地起取。

女墓主服饰揭取完成之后，又以类似的方法将齐国王服饰依次揭取。

当男墓主身着服饰被揭开后，可见男墓主内服褐地翻鸿金锦绵袍里面，前胸腹部衬垫一件原未经穿用的褐地朵梅鸾章金锦绵蔽膝。胸部的所谓“弹性”，不过是衬垫的丝绵服饰的作用。原来男尸只是面部附有部分表皮，内脏残存有部分炭化物，惟其毛、发与骨骼俱在，所有人体软组织已经不复存在。

三、颜色的记录与认定

目前，从考古工作程序来看，丝织品属色名称问题是一个既容易疏忽又不易把握的问题。当各色服饰出土时，全体工作人员皆忙于迫在眉睫的现场工作，而对于那类比较模糊、不易直接确定色彩名称的服饰，只能是尽可能详细地做好各类记录。与此同时，金时期遗留至今的色彩，却在光与空气等因素的综合作用下迅速发生变化。事后，当各相关学科的专家学者们定其着色名称时，抛开丝帛的原色不论，仅与出土初期所见的颜色相比已经发生了明显变化，就是当时现场出土照片，已同再度整理摆拍服饰的资料图片，二者色地亦不尽相同。甚至在一定程度上，必须依靠现场工作者的记忆调整图版颜色，以其达到尽可能接近出土时所见到的原色效果。即或如此，出土时期的原色也毕竟是经过了相当长的历史时期，程度不同的织物褪色现象，也是必然存在的。加之古今不同，即或今人各自对于颜色认定的概念又不尽相同，所以，仅仅依靠现场或以后各自所见的颜色来认定出土服饰颜色，应该说，这是不可靠的认识。

大凡在中国历代舆服制度中，上至天子下及百官服饰着色皆有严格规定。服饰颜色直接关乎主人的社会地位。有鉴于此，古代服饰属色名称，应以出土初期色地为本，综合其所属时代的典章制度而尽可能恢复其原名色地。否则，先后不一，见仁见智，容易人为地造成概念上的混乱。如对金代服制中的紫袍因经久褪色而名为“酱色地”就未必采贴。又如本墓主原内服素白绢单衣，由于尸体腐烂浸透，出土时其色近似朽黄色，如同今人所着真丝素白汗衫，年久积汗渍而变黄之状，但这类服色却被称之为“驼色”，而另一些明显的着色金锦服饰，却被笼统地称为“深驼色”绢或绸，从而混淆了两者本色上所存在的差别。所以，对出土染色丝品，仅据因时空推移而发生变化后所见色地进行定名，是有碍于全面深入研究的。

关于出土文物的原染色与褪色问题，是当今科学技术也没有解决的问题。事实上，织物褪色是无法还原的。现场的经验是首先安排在着色文物最初出现时，即用优秀的摄影方法，辅以彩色标板将颜色准确照相，再者，将现场观察的直接映象、不同颜色之间的差别全部详加记录。这是日后系统研究服饰颜色的可信资料。

四、古代服饰器物命名原则

目前，现阶段中国学术界对于古代器物的命名，还不是完全划一的。也就是说，对于一件相同的器物，在不同的著作中，名称也不尽相同。

金代齐国王墓中出土的各类服饰，完全填补了金代服饰的历史空白。同时，这也是一批独一无二的金代服饰。这在历代服饰研究中，此前还没有可以比照的同类参照物。所以，如此众多的服饰种类，一般意义上的考古学常识，也无法相对准确地予以命名。

《金代服饰——金齐国王墓出土服饰研究》一书，比较系统的疏理考证了所有出土服饰的名称。在命名过程中，首先根据考证，尽可能地取得原物在宋金时期的历史名称。

女墓主头戴“花珠冠”，色地、花纹、织物种类与工艺等为“皂罗菊花盘绦”，但是，由于《金史·輿服志》皇后冠服条中即有“花珠冠，用盛子”[2]，这与女墓主头戴的冠服形制相合，考证中则免去名称通例中的色地、花纹、工艺与织物组织等定语而直接命名。通常的认识命名，以确定服饰形制种类名称为主，在其种类名称之前，依次加以服饰“色地”、“纹样”、“织物种类”、“形态工艺”，进而形成一个相对完善的名称。譬如，“紫地（色地）云鹤（纹样）金锦（织物种类）绵（形态工艺）袍（种类名称）”。

当然，这只能是一个一般的原则，不可能适合所有的出土服饰。

如果宋金时期的名称已经难得其详，则根据其物的形制，取其前代或后代相同类型服饰的历史名称。

朱棺出土时，棺外覆盖有绛地交龙金锦棺饰。此件棺饰在宋金时期的名称，尚无文献直接可考。所谓“绛地交龙金锦棺褥”，[3]按此先秦至汉唐时期覆棺之物即棺衣通称“褚”。《礼记·檀弓》曰：“褚幕丹质”；汉注“以丹布为褚，葬覆棺”；疏“褚，谓覆棺之物”，“以丹质之布而为之也”。[4]所谓“褚”者，郭璞注“言衣赤也”，“褚，音赭”，[5]可见直接考察过出土织物的有关专家所谓“棺衣”，历史上被称之为“褚”，亦因其色赤而以色名之为褚。惟至宋时期，字书专以“褥”称“棺覆”，[6]故此棺覆丝织物定名为“棺褥”。

再者，“朱地鸳鸯金锦棺衬”这一名称，在已知的宋代文献中尚无可考。根据《说文》：“衬，棺中缣里也”，“缣，并丝缯也”，即棺内壁用丝帛帷里者称衬。《礼记·丧服大记》：“君里棺用朱，‘绿’用杂金鐕，大夫里棺用玄，‘绿’用牛骨鐕；士不‘绿’。”案经文所谓“朱绿”，其词意不通。段注绿“作衬”。[7]今考郑注：“鐕，所以琢，著里”，并为琢（椓）切音，“又作

2)《金史·輿服志》卷四十三，中華書局，1975年版。
3) 趙評春：《金代服飾——金齊國王墓出土服飾研究》，文物出版社，1998年版。
4)《禮記正義·檀弓》卷七，中華書局十三經本，1980年版。
5)《方言箋疏》卷三，上海古籍出版社，1984年。
6) 參見《集韻·灰韻》卷二，中國書店，1983年；《钜宋廣韻·灰韻》，上海古籍出版社，1983年。
7)《說文解字注·衣部》，上海古籍出版社，1981年版。

琢，著，直略反”。[8]可证经文此句中之“绿”，当为“琢”之误，否则，汉代史家专为“琢”字作注则语无出处。清代段氏点校其“绿”为“衶弔”与汉注“琢用杂金鐕”之意多所偏误。即“君里棺，用朱衶弔”，“琢”即钉著朱衶用杂金鐕。下文为“大夫里棺，用玄，琢用牛骨 鐕。士不琢”。本墓棺内所用朱地鸳鸯金锦棺衶弔帷衬棺里，合乎中原诸侯王国丧服制度。

按此，有关“棺衶弔”的命名，就是依据汉唐文献命名的原则。

还有，墓内出土的“素绢兜跟”，是一件十分典型的难于考证的服饰。原着于男墓主黄地小杂花金锦袜吊敦下套带之外层足跟部。素绢表里，因尸液浸染现呈褐黄色。前角两端向上钉缀系带一副，穿时兜于脚后跟部，系带由踝骨两侧向前左右交叉于脚腕前，再向下交叉绕穿足心，反而向上系活结于脚背。表绢较厚实，里绢较细薄。按此件服饰名称，在已知的汉唐至宋金文献皆无可考，惟有在其后代历史文献中寻找命名依据。《碎金·服饰篇》“袜类”中列有“兜跟”[9]，舍此之外，再无任何已知其穿着形制的记述。根据“兜跟”的类属，必然是袜类中之兜跟，当属穿于足跟之服饰。所以，出土时墓主所穿内外两袜之间、兜套足跟者即是古代所称之“兜跟”。

在这批金代服饰出土五年之后，1993年夏季，中国国家文物局组织的文物鉴定专家组到黑龙江省进行文物鉴定定级工作。当时，在诸多的金锦、织绣以及各类用金服饰之中，这件“素绢兜跟”已经显得十分朴素，或者说不易入眼了。在定级会上，专家们提出这件被我称之为“兜跟”的服饰，可以定为国家二级文物。为此，我强调指出，这件兜跟虽然只是素绢制作。但是，我们已经根据准确的出土位置，结合元代文献《碎金》（故宫1937年影印版），考证出了此为“兜跟”。一方面这是全国唯一出土的一件丝织“兜跟”文物，另一方面，也解决了文献中，“兜跟”为何物的实物形制。为此，与会专家一致同意定“素绢兜跟”为国家一级文物。

如果一件文物名称在历代文献中皆无可考，则根据惯例将其以考古学概念命名。

---

8)《禮記正義·喪服大記》卷四十五, 中華書局十三經本, 1980年版。
9)《碎金·服飾篇》卷十六, 故宫影印本, 1937年。

五、金齐国王墓出土服饰种类

男女二人所着之衣裳冠履带，其主体皆为丝织品。衣着服饰种类有幞头、冠、袍、带、短衣、蔽膝、抱肚、裙、吊敦、袜、靴、鞋等。

丝织种类有金锦、彩纹地金锦、绢、暗花罗、绫、纱等。

织造装饰工艺有织金、织纹、暗花、针绣、盘绦、印金、敷彩、剪接、编绦、钉缀等，十分丰富。各类佩饰和用具的材质有珍珠、玉、金、银、象牙、角料、玳瑁、玛瑙、松石、藤、木、皮革和铁。另外还出土了白色或褐色的香粉、沉香木、蒲絮等。

宋代丝织产量与工艺的成熟在历史上都是空前的。所有出土的宋金丝织品，都与衣裳服用相关。男女服饰用料精美，做工考究，其款式尚保留女真服饰特点。出土时，外袍前襟以内各式服饰色泽鲜艳，纹样清晰，尤其金锦或印金花纹，金光闪耀，光彩夺目。其实，金代齐国王墓出土的服饰实物，目前，也是唯一一批十分完整有序的金代服饰。

六、墓主齐国王身份与同葬女子关系性质

根据墓葬地理位置与金上京城及其周边金代城址的地理位置，还有墓内出土银铭文“太尉开府仪同三司事齐国王”，以及木房卷墨书“太尉仪同三司事齐国王”，以及针绣文字“内省”等文物，已经考定此为金代齐国王完颜晏之墓,[10]对于这一点认识，目前在学术界还没有异议。尤其作为金代齐国王墓的时代特征，是没有任何分歧的学术观点。

自此墓葬出土以来，诸多涉及到此墓内容的研究文章或通俗读物以及博物馆陈列等，研究者大多想当然地称之为“金齐国王夫妇合葬墓”。其实，到目前为止，没有任何资料可以证明二者属于“封王”与“命妇”的关系。研究显示，墓内合

10) 趙評春：《金代服飾— —金齊國王墓出土服飾研究》，文物出版社，1998年版。

葬男女二人，并非简单的“夫妇”关系，也就是说，齐国王身侧同葬之女尸，生前未必是其“一品命妇”。

经中国哈尔滨医科大学专家对于墓内男女二人尸骨的医学鉴定，结合体质人类学家、中国社会科学院考古研究所研究员潘其风先生对于男女骨骼的鉴定，齐国王死亡年龄约为60岁；同葬女尸死亡年龄约为40岁，[11]正负误差为一年。

通过观察棺椁封闭状态，以及棺内各种迹象，完全可以确定棺内男女属于一次葬，即同时入殓下葬。女尸右袍袖被男尸左臂袍袖叠压，表明女尸相对位于男尸之下，属于女尸先行下入棺内。然后，再将齐国王遗体入殓。开棺初期，女士双脚骨骼在其鞋袜内尚呈自然挺立状态，一经人为扰动之后，鞋尖方得塌落；男尸脸面表皮与须眉俱在，尤其须眉依然翘起，可见二者下葬后，即未再经任何移动。再者，墓内男女各自身着服饰的生前服用磨损程度，以及埋葬后的腐蚀程度，二者基本相同。甚至二者共同使用的葬具——枕、褥上面遗留尸液浸入所形成的人体轮廓印痕依然清晰可辨，表明二者尸体是在棺内同时腐烂的。上述情况表明，棺内男女二人属于同一时期死亡，并同一时间内先后入殓下葬。

根据棺内墓主男女各自占据的左右位置，以及男女头下分置的垫巾，可知从制度上讲，棺内预留有陪葬女子的位置。但是，常识告诉人们，古今不会有人可以预测相差20岁的年龄差距，会在同一时间内死亡。其实，古今也没有任何相差20年的二人，同一时间内自然死亡的个案记录。所以，这就意味着金时期还保留有野蛮的人殉习俗。

这类人殉习俗在辽金时期，并非孤立现象。史称：辽太祖驾崩，太后操权，迫杀太祖亲信，对于大凡欲加害者其公开的理由，即为太祖所亲信，则当舍身以殉太祖，因此，数名重臣为太后迫杀于太祖灵柩之前。惟有一臣临危之时，在太祖柩前辨曰：“太祖最亲者，莫过于太后，故请太后先殉”。为此，太后被迫自断手臂以殉太祖，其后，诸臣幸免于难。《辽史》传记，又“太祖崩，后称制，摄军国事。及葬，欲以身殉，亲戚百官力谏，因断右腕纳于柩。”[12]按此上述史料

11）黑龍江省文物考古研究所：《黑龍江阿城巨源金代齊國王墓發掘簡報》,《文物》1989年第10期。

12)《遼史・後妃傳》卷七十一, 中華書局1974年版。

所记，辽太后欲以身相殉太祖之事，缘由虽然不尽相同，但是，由此可以认识到，在辽时期占统治地位的皇室贵族的意识形态里面，还有着十分强烈的以人殉葬的思想意识，起码这个以人相殉的习俗意识，还可以制约辽太后这类已经“摄军国事”的皇权铁腕人物，竟然自断手臂以殉太祖，这可以想见，在当时人殉之俗，还是比较普遍存在的。历史上的女真族与契丹族二者地域相近，习俗也存在着诸多相似之处。

根据宋代史家记载，“阿骨打建号，曰皇帝寨。至亶，改曰会宁府，称上京。……死者埋之无棺郭。贵者生焚所宠奴婢，所乘鞍马以殉之。”[13] 从目前已知的考古材料来看，金时期上京地区有火葬习俗，遗骨入殓于石函之中。但是，齐国王墓内棺椁齐备，应该是在宋文化的直接影响下，金代已经出现了土葬。由于齐国王本身已经是棺椁入葬，所以，殉葬者也就是一同入葬了。

根据在齐国王墓内男女二者未经任何移动状态下，所拍摄的X光片观察，女性腹部沿曲形肠管走向内，依次排列有多粒灰白色颗粒矿物质。当时，由于受客观原因约束，这些人体内的物质，概由哈尔滨医科大学相关专家负责鉴定，但是，一直没有公开形成这方面的物质鉴定意见。所以，如此历时八百年之久，肠道内至今仍然未腐烂物质，具体是什么物质已经难以考察。据现场所见，棺内女性身体所有软组织已经全部腐烂，没有任何遗留物质。一般推测认为，这些颗粒状物质，应该是临终前服入胃肠内的。因为，生前胃肠内的有机物质，或者是被消化、排泄，或死后随尸体软组织一同腐烂，终究不会单独留在腹腔内。所以，胃肠内没有腐烂的颗粒物质，应该是一种矿物质。如此多粒的矿物质遗留在死者的肠道内，必然是其临终前服入的。或者，这就是生时被殉葬服入的药物，导致其死亡的真正原因。

如果女尸是药物中毒身亡，其覆面所戴的黄绢面帛，除去通常的葬俗意义之外，还应该具有遮蔽中毒身亡，导致的死者面目狰狞可怖的凶相作用。再者，如果女性属于中毒昏迷，面帛夹带双层绵絮，也可以致使其窒息身亡。

13）參見《三朝北盟會編》卷三, 上海古籍出版社1987年版。

有鉴于此，齐国王墓内的女者身份，由于二者年龄相差 20 岁，不应该属于其原配正室的一品命妇。而应该是女真族，在贵族死后改为棺椁葬之时，对于原“生焚所宠奴婢”习俗的沿续。在墓主齐国王土葬之际，仍然将其生前所宠“奴婢”，一同入殉土葬。所以，棺内的女性生前应该是服属于齐国王的宠幸“奴婢”，或者是处于妾的地位。

结语

金代齐国王墓出土已经18年，至今，还没有其他墓葬出土服饰可以作为金代丝织服饰的补充。18年前，我能够有幸参加这次考古发掘，18年后，我又可以有幸出席这次国际古代服饰学术会议。在此，首先我要感谢檀国大学对我出席会议的邀请，同时，感谢朴圣实教授对我的学术研究的关注、崔圭顺博士的鼎力帮助。谢谢。

作者赵评春

系中国黑龙江省文物考古研究所研究员、黑龙江省文物鉴定委员会委员。
地址：中国哈尔滨市宣德街44号
邮编：150008
Historical Relic and Archaeological Research
Institute of Heilongjiang Province
Zhao Pingchun
Research Fellow
Add:No.44 Xuande Street.Harbin,China
Postcode:150008
E-mail:zhaopingchun@sina.com
Zhaopingchun@hotmail.com

金代 齊國王 墓 服飾 出土 技術과 관련 問題

趙評春*

1. 金代 齊國王 墓

1988年에 黑龍江省 阿城에서 발굴된 金代의 齊國王 墓는 中國의 考古學 영역에서 매우 중요한 자리를 점하는 것으로 이미 '中國重大考古發現' 의 典籍에 포함되었다.[1] 金代 齊國王 墓 棺內에 매장된 남녀는 시신과 그 옷차림이 완전하게 남아 있었고, 머리부터 발끝까지 순서가 정제되어 있어서 金代 服飾 연구의 공백을 메워 줄 수 있는 중요하고도 직접적인 자료가 되고 있다. 더욱이 이렇게 많은 金代 服飾의 출토는 유래가 없는 일이었다.

金代 齊國王 墓는 黑龍江省 阿城市 巨源鄕 城子村의 서쪽 끝, 東經 126°51′30″, 北緯 45°52′30″에 위치해 있고, 海拔 高度 약 130m 이다. 이 지점은 松花江의 南岸과 阿什河 및 蜚克圖河 下游 사이에 위치해 있다. 이 村은 西南에서 東北 방향으로 나 있는 작은 언덕에 위치해 있는데 이 언덕의 길이는 약1km이고, 相對 高度 약 12m이다. 이 墓는 村의 동쪽에 있는 한 작은 金代 土城 遺址와 약330m 거리이고, 남쪽에 있는 金의 上京 故城과는 약 40km 거리이다.

이 墓는 豎穴式 土坑石槨木棺形이고, 東西 방향으로 자리 잡고 있다. 石槨은 직사각형 형태로 길이 280㎝, 너비 190㎝, 높이 150㎝이다. 石槨의 네 벽은 각기 완전한 곱자 모양의 화강암 판으로 구성되어 있었고, 네 귀퉁이는 凹凸方式을 이용하여 서로 결합시켰다. 바닥과 덮개에는 각각 세 조각의 화강암 판이 가로놓여 있었다. 石板의 두께는 20~30㎝이고, 石板 사이의 틈에는 모두 접착제가 발라져 있었다. 石槨 네 벽의 귀퉁이는 무늬가 있는 기와 조각과 암막새[滴水]를 교차 시켜 접착제로 발랐다. 石槨板 外壁面의 새김질은 아주 거

---

* 中國 黑龍江省 文物考古研究所 研究員, 黑龍江省 文物鑒定委員會 委員
※ 번역 : 崔圭順(上海, 東華大學 服裝學院 博士과정)

1) 참조: 中華人民共和國 重大考古發現 編輯委員會 編, 『中華人民共和國重大考古發現』, 文物出版社, 1999. 9

칠어 표면의 凸凹이 가지런하지 않았으나, 槨 內壁面의 처리는 정교하였다. 각 부분마다 무늬가 새겨져 있는데 바닥과 덮개의 안쪽 면에는 사선 무늬, 양측 벽에는 上下 두 줄로 맞물린 형태의 마름모형 무늬, 머리와 발끝 부분에는 한 줄의 마름모형 무늬가 있었다.

이 石槨 남쪽에는 작은 석곽 하나가 있었는데, 그 한 쪽이 동쪽을 향해있는 墓主의 石槨의 발부분과 나란히 놓여 있었다. 작은 석곽은 길이 178㎝, 너비 117㎝, 높이 122㎝이고, 육면이 모두 두께 24~30㎝의 화강암 판으로 되어 있었다. 작은 석곽에서는 단지 소량의 뼈와 나무 조각만이 발굴되었으므로 附葬槨으로 여겨지고 있다.

石槨 안에는 직사각형 형태의 朱漆한 木棺이 있었는데 길이 221㎝, 너비126㎝, 높이 90㎝이다. 槨과 棺의 사이는 약 4~7㎝의 공간이 있었다. 木棺 위에는 絳色 바닥에 交龍을 織金한 棺 덮개[絳地交龍織金棺襩]의 잔편이 덮여 있었고, 棺 뚜껑의 중앙에는 "太尉開府儀同三司事齊國王"이라는 銘文이 있는 銀 장식이 박혀 있었다. 棺 아래에는 서쪽에서 동쪽 방향으로, 같은 간격으로 네 개의 나무토막이 놓여 있었다.

朱漆 木棺 안에는 남녀 두 사람이 매장되어 있었는데 男은 왼쪽, 女는 오른쪽이었다. 몸은 반듯하게 놓여 있었고, 사지는 곧았으며, 머리는 서쪽, 발은 동쪽으로 향해 있었다. 또 인체의 부드러운 조직은 이미 모두 부패하여 없었다. 男屍의 內臟은 이미 炭化되었으나, 骨骼은 완전하였다. 얼굴 피부는 風化되어 처음 棺을 열 때 그 남은 피부가 두개골의 얼굴 부분에 붙어있는 상태였다. 그 밖에 눈썹이나 수염과 모발 등은 모두 있었고, 심지어 수염과 눈썹은 아직도 피부에 붙어 세워져 원래의 모양을 유지하고 있었다. 女屍는 단지 완전한 骨骼만 보존되어 있었다.

2. 金代 齊國王 墓 服飾 수습 과정

처음 棺 뚜껑을 열었을 때 고고학자들은 관내의 상황에 대해 분명하게 알 방법이 없었다. 단 두 墓主가 세상에서 보기 드문 金代의 金錦 服飾을 입고 있는 것을 대하고서는 유비무환의 안전하고 타당한 방법인 棺 전체를 들어내는 방법을 채택해야 한다는 인식을 하게 되었다.

먼저 조금씩 墓 내의 흙을 제거한 후 石槨 뚜껑에 노끈을 걸어 연 후 다시 석곽의 네 벽에 있는 판을 따로따로 해체하자, 전혀 손상이 없는 완전한 형태의 銀으로 장식된 朱棺이 墓坑내에 놓여 있었다. 棺의 木板은 부패한 흔적이 분명히 나타나지 않고 나무의 상태와 조직도 비교적 양호하였다. 현장에서 木棺의 네 귀퉁이와 바닥 및 네 벽의 棺板을 나무토막으로 지탱하고, 비교적 강도가 높은 종려나무로 짠 노끈으로 감아 고정시킨 후, 起重機로

木棺 전체를 들어 올려 차 안에 평평하게 실어 비교적 안전 설비가 좋은 연구실로 옮겨 운반하였다.

木棺을 실내로 옮긴 직후에 가장 처리하기 곤란했던 문제는 두 시신에 여러 겹으로 차곡차곡 입혀진 옷과 양말, 신발 등을 어떻게 벗길 것인가 하는 것이었다. 墓主는 金代의 귀족에 속하는 인물로 지금으로부터 거의 800여 년 전에 생활했던 인물이었고, 이 복식들은 墓主와 함께 이렇듯 습한 棺 안에 오랫동안 매장되어 있었기 때문에 이미 형체가 헐고 망가졌을 것은 당연한 일이었다. 견직물의 抗折係數(접힘에 견디는 능력)는 이미 매우 보잘 것 없어 접으면 바로 꺾어졌다. 服飾을 수습하는 일은 일반적인 야외에서의 고고학적 발굴과 달라 상당한 경험을 필요로 함과 동시에 일의 진행과정에서 또 끊임없이 새로운 방법을 찾아 그 경험들을 축적해야만 한다. 견직물이 출토된 墓의 수량이 매우 제한적인 것을 감안한다면 현장에서 임무를 수행함에 있어 경험한 어떠한 성공과 실패도 모두 진귀한 것이며 참고할 만한 가치가 있다고 할 수 있겠다. 물론, (현재) 이쪽으로 관련되는 일을 하는 학자는 아주 적은 상황이고, 주로 야외에서 활동하는 고고학자들이 주를 이루고 있는 현실이다.

1988年 5月 24日 오전부터 체계적으로 복식을 수습하는 일을 시작하였다. 고고학자들이 순조롭게 棺 밖의 銀 장식과 棺 뚜껑 및 네 벽의 판을 차례대로 거두어내고, 다음에 이어질 복식 수습에 편리하도록 현장의 각 측면에 연구자들이 위치하여 각자의 서로 다른 각도에서 일에 참여할 수 있도록 하였다. 관내의 시신과 물건이 움직여지기 전에 먼저 X레이로 人骨과 복식 및 隨葬品등의 위치를 찍어 기록하였고, 전체 일 처리 과정 및 각 층의 복식 상태를 카메라와 동영상 및 文字 등 가능한 모든 방법을 동원하여 전면적이고도 체계적으로 기록하였다.

墓內의 男女는 男墓主의 오른쪽 어깨 측면이 女墓主의 왼쪽 어깨를 누르고 있는 상황이었다. 出土 초기에 男墓主 두개골의 얼굴 부위에는 부패하고 남아 마른 피부 잔편이 黑褐色을 띤 채 아직 붙어 있었다. 女墓主의 머리는 黃色의 絹으로 덮어 씌워져 있었는데[覆面], 그 覆面 아래는 아직도 여전히 약간의 탄력이 있었다. 또 두 시신의 가슴 부위에도 모두 약간의 탄력이 있었다. 당시에는 墓主의 인체에 아직 피부조직이 존재한다고 여겼고, 특히 女墓主의 黃絹 覆面 아래에서 느껴지는 탄력은 더욱 신비한 상상을 불러일으키게 하였다.

일반적인 고고학적 발굴의 진행 순서에 의하면 당연히 위에 있는 이의 옷을 먼저 수습한 후 다시 차례로 아래층의 옷을 수습하는 것이 상식이다. 그러나 아마도 女墓主의 신비로운 覆面의 유혹을 받았거나 혹은 현장에 있던 고고학자들이 女墓主의 '廬山의 眞面目'을 보는데 더욱 조급했음 인지는 몰라도 아주 미묘한 현상이 발생하였다. 즉 상부에서 하부로 내려가는 상식에 위반되게 男墓主의 한쪽 어깨가 女墓主를 위에서 누르고 있음에도 불구

하고 男墓主의 오른쪽 어깨를 들어 올린 후 女墓主가 입고 있는 복식부터 먼저 수습하게 되었던 것이다.

복식을 수습함에 있어 먼저 가장 겉에 입은 紫色 雲鶴金錦 솜 袍[紫地雲鶴金錦綿袍]의 허리에 매어져 있는 珠가 달린 黃褐色 牡丹卷草印金暗花羅 大帶를 풀어야만 하였다. 여러 시간의 노력 끝에 우리는 현장에서 조금씩 帶의 매듭을 느슨하게 풀어낼 수 있었고, 결국 女墓主를 겉에서 묶고 있는 金錦腰帶를 아주 조심스럽게 벗겨낼 수 있었다.

모든 일에 있어 처음 시작이 더 어렵듯이 이 한 번의 시도가 지나간 후 견직물의 속성과 그 질김이 어느 정도인지를 알게 되었고, 이는 실로 인류문명의 크나큰 행운임을 느끼게 되었다. 棺의 뚜껑이 마을사람에 의해 젖혀져 그 내부 상황이 노출된 후 연일 먼지와 공기, 광선 등의 복합적인 작용으로 이미 두 墓主가 겉에 입고 있는 袍는 모두 먼지를 덮어쓰고 퇴색 되었으며 광택도 희미해져 있었다. 그러나 고고학자들이 조심스럽게 墓主가 겉에 입고 있는 紫地雲鶴金錦綿袍의 겉깃을 풀어헤치자, 안깃에서 산뜻하면서도 선명하게 광택을 발하는 색채가 세상에 다시 재현되었다. 단 이렇게 선명하고 아름다운 색채는 순식간이었으며 이후 비교적 오랫동안 변하지 않을 것 같은 醬色에 가까운 색상으로만 남게 되었다. 유감인 것은 당시의 과학기술로는 아직 이렇게 순식간에 사라져 버리는 色彩를 남겨둘 방법이 없었다는 것이다. 衣裳에 있던 織金도 사람들이 매 번 들어올렸다 내렸다를 하는 동안 떨어져 나가기도 하여, 마지막으로 棺의 바닥 판 위에 쌓인 흙을 정리할 때 그 속에서 아직도 번쩍이며 빛을 발하는 많은 金 殘片을 볼 수 있었다.

복식을 수습하는 일에서 먼저 주의할 것은 기교가 서툴기 때문에 인위적으로 직물에 파괴를 가져오는 이차 손실을 막아야하고, 일처리 과정에서 오염에 접촉되지 않도록 해야 하며(재오염 방지), 빛과의 접촉을 줄여서 직물의 퇴색을 줄여야 한다는 것이다.

각 층의 服飾을 수습함에 있어 먼저 비닐을 옷 아래에 대어 마찰을 줄임과 동시에 張力을 증가시켰다. 墓主의 옷 양 쪽에 각각 따로 板을 댄 후 다시 겉에 입은 左衽綿袍의 겉자락을 열어 그 판의 반대편에 다시 별도의 판을 댐으로써(깃의 양 면에 각각 판을 댐) 견직물이 겹쳐서 접히는 횟수를 줄였다. 겉에 입은 袍의 앞깃을 열자 女墓主가 안에 입은 綠色 바탕의 忍冬雲紋夔龍金錦 솜 袍[綠地忍冬雲紋夔龍金錦綿袍]와 허리에 맨 黃褐色의 菱紋暗花羅 腰帶가 드러났다. 이 帶는 腹部 앞에서 묶여 있었고, 腰帶의 양 끝은 (袍의) 앞자락 끝에 닿아 있었다. 이 안에 입은 袍의 腰帶를 풀어낸 후 다시 袍의 앞깃을 열자 素色의 縠으로 된 團衫[素縠團衫]이 나타났다. 이 衫은 左衽으로 오른 쪽 자락이 비스듬하게 왼쪽 자락 위에 놓여 있었다. 조심스럽게 겉자락과 안자락을 들어 올리자 안에 입은 褐綠 바탕의 全枝梅金錦으로 된 솜치마가[褐綠地全枝梅金錦綿襜裙] 나타났다. 襜裙의 뒤허리는 터져 있었고, (터진 부위의) 좌우에 각각 끈 하나씩이 꿰매져 뒤로부터 앞 쪽으로 감아 배 앞에서

묶여 있었다. 치마의 허리띠를 푼 다음 치마 전체가 통으로 꿰매진 형태였기 때문에 아래로 빼내야만 하였다.

襜裙 안에는 女墓主의 양 발에 신겨졌던 綠羅로 만들어 원추리를 繡 놓은 신[綠羅萱草繡鞋]이 놓여 있었다. 출토되었을 초기에는 현장에서 女墓主의 양 발에 신겨진 鞋의 코가 뾰족하게 세워진 상태였음을 확인할 수 있었다. 따라서 당시 양 발의 뼈가 여전히 버선과 신 안에서 세워진 상태였을 것임을 짐작할 수 있다. 그러나 출토 현장에서 한 사람이 뾰족한 鞋의 코를 건드리면서 부러져 치마 앞으로 떨어진 것이었다. 따라서 이 鞋를 먼저 제거한 후, 치마 전체를 들어냄과 동시에 그 밑에 판을 댐으로써 치마를 벗겨 낼 수 있었다.

순서에 따라 겉에서부터 안쪽으로 하나씩 內袍와 團衫의 앞깃을 열고, 吊敦의 띠를 풀어 벗겨내었다. 계속해서 棕褐色 菱紋 暗花羅에 萱草團花를 수놓은 綿大口褲 등의 허리선이 높은[高腰] 바지를 벗겨내었고, 다시 棕色 羅에 雲龍을 붙여 수놓은 抱肚[棕羅雲龍貼補繡抱肚]와 素色 絹으로 된 褌[素絹褌]의 끈을 풀어 역시 겉에서부터 하나씩 벗겨 내었다. 이렇게 하여 결국 人體의 骨骼이 드러나게 되었고, 骨骼 아래에는 원래 입었던 內衣의 안쪽이 드러나게 되었다.

女墓主의 시신은 단지 骨骼만 남아 있었고 內臟 및 피부와 모발 등은 이미 모두 부패하여 없었으며, 원래 "풍만하다"고 여겨졌던 얼굴 부위도 단지 黃絹 覆面 아래에 댄 솜일 뿐이었다. 骨骼을 수습하니 女墓主가 입었던 모든 옷이 안에서 겉으로, 또 위에서 아래로 차례대로 棺 바닥에 펼쳐지게 되었다.

안에 입은 옷의 소매를 겉에 입은 옷의 소매로부터 빼낸 후 관 주위에 섰던 이들이 각기 다른 각도에서 옷을 가볍게 들고 그 아래에 판을 대어 옷과 함께 들어내었다. 겉에서 안으로 각 층의 옷끈을 풀어낼 때 이미 옷 아래에 비닐을 대어 놓은 상태였기 때문에 펼쳐놓은 각 층의 옷을 수습하는 과정에서 이 비닐이 효과적인 張力 작용을 하였다.

순서에 따라 위에서 아래로 옷을 수습해 내었는데, 백색 곰팡이 얼룩의 확산을 억제하기 위하여 적당량의 곰팡이를 방지하는 약을 뿌리면서 작업을 진행하였다.

女墓主의 복식을 수습한 후 비슷한 방법으로 齊國王의 복식을 순서대로 수습하였다.

男墓主가 입고 있는 복식을 수습하자 男墓主가 안에 입은 褐色 翻鴻金錦 綿袍 안의 앞 胸腹部에, 사용된 적이 없는 褐色 朵梅鸞章金錦 綿蔽膝이 대어져 있는 것을 볼 수 있었다. 가슴의 소위 '탄력'은 단지 여기에 사용된 솜 때문에 나타난 현상일 뿐이었다. 男墓主 시신은 얼굴 부위에만 부분적으로 피부가 붙어 있을 뿐이었고, 내장은 부분적인 탄화물만이 잔존해 있었으며, 오직 그 털과 머리카락, 骨骼만이 모두 존재하였고 인체의 모든 부드러운 조직은 남아있지 않았다.

3. 색상의 기록과 확정

현재 고고학계의 상황에서 보면 견직물의 색상을 확정 짓는 문제는 소홀하게 대하기 쉬우면서 또 파악하기가 쉽지 않은 문제이다. 위에서 말한 각종 복식이 출토될 때 수습에 참여했던 사람들은 모두 눈앞에 닥친 현장의 긴박한 일 때문에 바빠 그렇게 비교적 모호하고 직접적으로 色名을 확정하기 어려운 복식에 대해서는 단지 최대한으로 상세하게 기록만 할 수 있을 뿐이었다. 이와 동시에 金代부터 지금까지 남아있던 그 색채들은 광선과 공기 등의 요소가 종합적으로 작용하면서 신속하게 변화를 일으켰다. 후에 각 관련 학과의 전문가와 학자들이 그 色名을 정할 때 견직물의 원래 색상은 물론이고 출토 초기에 나타났던 색과도 현저한 차이가 있어, 출토 현장에서 찍은 사진과 정리한 후 다시 찍은 사진의 색채도 똑같지 않았다. 심지어는 현장에 참여했던 이들의 기억에 의존해 그림의 색을 어느 정도 조정해야만 출토 때 보았던 색에 가까운 효과를 얻을 수 있었다. 설사 이렇다 할지라도 출토 때의 색상도 상당히 긴 시기를 지나온 만큼 직물의 퇴색 정도가 다른 현상도 분명히 존재하였을 것이다. 이렇게 古今이 다른데다 또 현대인 각자도 색상에 대한 개념이 다르므로 현장에서나 혹은 그 후에 각자가 본 색상을 기준으로 출토복식의 색을 결정한다는 것은 당연히 과학적이지 못한 생각이다.

대체로 中國 歷代의 輿服制度는 위로 天子로부터 아래로 百官 服飾에 이르기까지 그 색상이 엄격하게 규정되어 있었다. 따라서 복식의 색상은 직접적으로 그 주인의 사회적 지위와 관련되는 것이었다. 이 점을 고려하여 고대 복식의 色名은 당연히 출토 초기의 色을 기본으로 한 위에 해당 시대의 典章制度를 종합하여, 되도록 그 원래의 색명을 회복해야 한다고 본다. 그렇지 않으면 앞뒤가 맞지 않게 되고 또 사람에 따라 보는 각도가 다르기 때문에 개념상의 혼란을 가져오기가 쉽다. 예를 들어 金代 服制 중의 紫袍에 대해 오랜 기간 동안 퇴색되었으므로 인해 "醬色地"라 부르는 것은 취할 필요가 없는 것이다. 또 예를 들어 本 墓主가 원래 안에 입고 있던 素白의 絹 單衣는 시체가 썩은 물이 여기에 스며들어 出土 때 그 색은 거의 옅은 黃色으로 되어 요즘 사람들이 입는 실크로 된 素白色 셔츠가 오랜 세월 땀에 젖어 누렇게 변한 것 같았다. 그럼에도 불구하고 이러한 색상은 "낙타색[駝色]"으로 불려지고, 반면 명확하게 색이 있는 金錦 服飾은 차별 없이 "深駝色" 絹 혹은 綢라 불리고 있어 兩者의 본래 색상에 존재했던 차이를 함부로 제거하였다. 따라서 출토 견직물의 색상에 대해서 단지 시간과 공간의 변화에 따라 발생한 변화만 고려하여 나타난 색의 명칭을 정하는 것은 전면적으로 심도 있는 연구를 진행하는데 장애로 작용한다.

出土 文物의 원래의 색과 퇴색 문제는 현재의 과학기술로도 해결할 수 없는 문제이다. 사실상 한 번 퇴색된 직물은 다시 원래의 상태를 회복할 방법이 없다. 現場 경험으로 보아

색을 지닌 유물이 출토될 초기에는 우수한 촬영 방법을 사용하여 그 색상을 정확하게 촬영하고, 또 현장을 관찰할 때의 상황이나 색상 사이의 차이 등에 대해 모두 상세히 기록해야 한다. 이것은 후에 복식의 색상을 체계적으로 연구하는데 있어 믿을 수 있는 자료가 된다.

4. 古代 服飾의 命名 原則

현재 古代 器物의 命名 문제가 中國 학술계에서 완전히 일률적으로 적용되고 있는 것은 아니다. 즉 어떤 동일한 器物이라 할지라도 서로 다른 著作 중에서 그 명칭이 같게 사용되는 것만은 아니다.

金代 齊國王 墓에서 출토된 각종 복식은 완전히 金代 服飾의 空白을 메우는 역할을 하였다. 동시에 이들 복식은 유일한 金代의 服飾으로, 이는 역대의 복식 연구 중에서 아직 이것과 대조할 수 있는 참고 자료가 없다는 것도 의미한다. 따라서 이렇게 많은 수의 복식에 대해 일반적인 고고학 상의 상식만으로는 정확한 命名 작업을 진행할 방법이 없었다.

『金代服飾--金齊國王 墓出土服飾研究』는 모든 출토된 복식에 대해 비교적 체계적으로 그 명칭을 정리하고 고증해 낸 著作이었다. 命名 과정에서는 먼저 철저한 고증을 바탕으로 되도록 宋·金時期의 역사적 명칭을 찾아내려 노력하였다.

女墓主의 머리에 쓴 '花珠冠'은 원래 색상과 무늬, 직물의 종류, 공예 등에 의해 "皂羅菊花盤綠"라 하였다. 그러나 『金史』輿服志의 皇后冠服條에 "花珠冠, 用盛子"[2]라는 내용이 女墓主가 쓴 冠과 형태에 있어 부합하였으므로 고증 과정에서 원래의 명칭을 없애고 이 명칭을 직접 사용하게 되었다. 보통 복식의 命名은 그 형태의 종류 위주로 정하게 되는데 그 종류의 명칭 전에 "바탕색[色地]", "紋樣", "織物 種類", "工藝 形態"의 내용을 순서대로 더하게 된다. 예를 들면 "紫地(色地)雲鶴(紋樣)金錦(織物 種類)綿(工藝 形態)袍(種類 名稱)"와 같은 경우이다.

물론 이것은 단지 일반적인 원칙일 뿐으로 모든 출토복식에 이를 적용할 수는 없다.

만약 宋·金時期의 명칭을 이미 상세히 알 수 없는 상황이라면 그 복식의 형태에 근거하여 그 앞뒤 시대의 비슷한 복식의 역사적 명칭을 취하게 된다.

朱棺이 출토될 때 棺의 겉에 絳色 交龍金錦의 덮개가 덮여 있었는데 이에 해당하는 적절한 명칭을 宋·金 시기의 문헌을 통해서는 직접 파악할 수가 없었다. 고찰한 바에 의하면 先秦부터 漢·唐 시기의 棺 덮개 즉 棺衣는 보통 "褚"라 하였다. 『禮記』檀弓의 '褚幕丹質'에 대해 漢(鄭玄) 注는 "以丹布爲褚, 葬覆棺", (唐 孔穎達의) 疏는 "褚, 謂覆棺之物", "以丹

2) 『金史』卷43 輿服志, 中華書局, 1975.

質之布而爲之也"라 하였다.[3] '褚'를 郭璞은 "言衣赤也", "褚, 音赭[4]"라 하였다. 따라서 출토 직물을 직접 고찰한 전문가들이 말하는 '棺衣'는 사실 역사적으로 "褚"라 칭해졌음을 알 수 있고, 또 그 색이 赤이어서 이 色名 때문에 "褚"라 한 것임을 알 수 있다. 단 宋代의 字書에서는 "襩"이 "관 덮개[棺覆]"[5]를 의미하였고, 이 때문에 본 棺을 덮은 견직물을 "棺襩"이라 하여 결국 "絳地交龍金錦棺襩"[6]이라 命名하게 되었다.

"朱地鴛鴦金錦棺衳" 라는 명칭 역시 宋代의 문헌에서는 고찰할 바가 없었다. 단 『說文』에 "衳, 棺中縑裏也", "縑, 並絲繒也"라 하였으므로 棺의 內壁에 견직물로 휘장을 친 것을 衳 라 함을 파악할 수 있었다. 또 『禮記』喪服大記에는 "君裏棺用朱, '綠' 用雜金鐕, 大夫裏棺用玄, '綠' 用牛骨鐕, 士不 '綠' "이라 하였는데, 여기의 "朱綠"이 같은 뜻으로만 해석되지는 않는다. 즉 淸代의 段玉裁는 綠을 "作衳"[7]라 注하였고, 漢의 鄭玄은 "鐕, 所以琢, 著裏", "又作琢, 著, 直略反"[8]이라 하였다. 鄭玄의 해석에 의하면 經文 중의 "綠"은 "琢"의 誤記임을 알 수 있고, 그렇지 않다면 漢代 史家들이 단독으로 "琢"字를 注한 것은 근거가 없는 것이 된다. 한편 段氏가 이 "綠"을 "衳"라 한 것은 漢(鄭玄)이 注한 "琢用雜金鐕"의 뜻과 偏差가 있는 것이다. 따라서 鄭玄의 해석대로 위 『禮記』의 내용은 "君裏棺, 用朱衳"이고, "琢"는 朱衳 를 박는데 쓰는 雜金鐕인 것이다. 따라서 그 아래의 문장은 "大夫裏棺, 用玄, 琢用牛骨鐕. 士不琢"이 된다. 本墓의 棺內에 사용된 朱地鴛鴦金錦棺衳 는 棺 안을 두르고 있었기 때문에 中原 諸侯王國의 喪服 制度에 잘 부합하는 것이었다.

이렇게 "棺衳"와 관련한 命名은 바로 漢唐 문헌에 의거하는 것을 원칙으로 한 것이었다.

그 밖에 墓에서 출토된 "素絹兜跟(발꿈치 씌우개)"은 고증하기 매우 어려운 복식의 전형적인 예였다. 원래 男墓主의 黃地 小雜花金錦 袱吊敦 아래에 달린 끈의 겉으로 하여 발뒤꿈치에 씌워져 있었다. 素色 絹으로 겉과 안을 하였는데 시체가 부패하면서 나온 液이 들어가 褐黃色으로 변색돼 있었다. 앞 쪽 모서리의 양 끝 위쪽으로 끈 한 쌍이 달려 있었다. 입을 때 발뒤꿈치에 씌우고, 그 좌우의 끈은 양 옆의 복사뼈를 지나 발목 앞에서 교차하며, 다시 아래 방향으로 교차하여 발을 감싼 후 또 다시 위로 올라와 발등에서 맺는 것이었다. 겉감은 두꺼운 편이었고, 안감은 얇은 편이었다. 이 복식의 명칭은 漢·唐에서 宋·金에 이르는 문헌에서는 그 근거를 찾을 수 없었고, 단지 後代의 문헌에서 찾을 수 있었다. 즉 『碎金』服飾篇의 '버선류[襪類]' 에 "兜跟"[9]이 있었는데 이것 외에는 그 어디에서도 관련 근

3) 『禮記正義』卷7 檀弓, 中華書局十三經本, 1980.
4) 『方言箋疏』卷3, 上海古籍出版社, 1984.
5) 『集韻』卷2 灰韻, 中國書店, 1983 ; 『錯宋廣韻』灰韻, 上海古籍出版社, 1983.
6) 趙評春, 『金代服飾--金齊國王 墓出土服飾研究』, 文物出版社, 1998.
7) 『說文解字注』衣部, 上海古籍出版社, 1981.
8) 『禮記正義』卷45 喪服大記, 中華書局十三經本, 1980.
9) 『碎金』卷16 服飾篇, 故宮影印本, 1937.

거를 찾을 수 없었다. 이 책에서 "兜跟"이 襪類에 속하였던 것을 감안한다면, 이는 당연히 발꿈치에 입히는 복식이었을 것이다. 따라서 출토시 墓主가 신고 있던 두 개의 버선[襪] 사이의 발꿈치에 씌워져[兜套足跟] 있던 그것이 바로 고대에 "兜跟"이라 불리던 것이었음을 파악할 수 있었다.

이 金代 服飾이 출토된 5년 후인 1993年 여름에 中國 國家文物局이 조직한 文物 鑒定 전문가 단이 黑龍江省에 와서 문물을 감정하고 등급을 정하는 일을 하였다. 당시에 수많은 金錦과 자수 및 각종 金을 재료로 한 服飾들 사이에서 이 '素絹兜跟'은 너무 소박하여 어떤 이는 쉽게 눈에 띄지 조차 않는다고 하였다. 때문에 등급 결정 회의에서 전문가들은 필자가 "兜跟"이라 명명한 이 복식을 國家 2級 文物로 정할 수 있다는 의견을 제기하였다. 여기서 필자는 이 兜跟이 비록 단지 素絹으로 제작한 것일지라도 우리가 정확한 출토 위치에 근거하여 元代의 文獻인 『碎金』(故宮1937年影印版)과 대조하여 '兜跟' 임을 고증해 냈다는 것과, 또 이 유물은 전국에서 유일하게 출토된 '兜跟' 文物임과 동시에 이 유물로 인해 文獻에 나오는 '兜跟'이 어떤 형태인지의 문제가 해결됐다는 것을 다시 한 번 강조하였다. 이렇게 하여 전문가들은 결국 이 '素絹兜跟'을 國家 1級 文物로 정하는데 만장일치로 동의하게 되었다.

만약 어느 文物의 명칭을 역대의 어느 문헌에서도 찾을 수 없다면, 관례에 따라 고고학적 개념대로 명명한다.

5. 金 齊國王 墓 出土 服飾 種類

男女 2인이 입은 복식은 대부분 견직물로 되어 있었다. 복식 종류는 襆頭 冠 袍 帶 短衣 蔽膝 抱肚 裙 吊敦 襪 靴 鞋 등이 있었고, 견직물 종류는 金錦 彩紋地金錦 絹 暗花羅 綾 紗 등이 있었다. 직조와 장식에 사용된 공예는 織金, 織紋, 暗花, 刺繡, 盤絲, 印金, 채색하기[敷彩], 잘라 붙이기[剪接], 땋기[編絲], 박기[釘綴] 등으로 매우 풍부하였다. 각 佩飾과 用具의 재질로는 珍珠 玉 金 銀 象牙 犀[角] 玳瑁 瑪瑙 松石 藤 木 皮革 鐵 등이 있었다. 그 밖에 白色 혹은 褐色의 香粉과 沉香木, 부들솜[蒲絮] 등도 있었다.

宋代 견직물의 생산량과 그 공예의 성숙은 그 전의 역사에서는 없던 일이었다. 출토된 宋·金 견직물은 모두 복식과 관련되는 것이었다. 남녀 복식의 재료는 매우 섬세하고 아름다웠으며 가공 역시 매우 정교하였고, 그 복식의 형태는 女眞 복식의 특징을 여전히 간직하고 있었다. 出土 時, 外袍의 앞자락 안쪽으로 각종 복식의 빛깔과 광택이 선명하였고, 무늬도 분명하였으며 특히 金錦이나 印金으로 된 무늬는 금빛이 여전히 반짝이며 빛을 발하

여 그 광채로 눈이 부셨다. 사실 金代 齊國王 墓에서 출토된 복식 유물은 매우 완전하게 순서가 정연한 유일한 金代 服飾이다.

6. 墓主 齊國王의 身份과 함께 매장된 여인의 관계

현재 墓의 지리적 위치와 金 上京城 및 그 주변의 金代城址, 그리고 墓에서 출토된 "太尉開府儀同三司事齊國王"의 銀銘文 및 "太尉儀同三司事齊國王" 木房卷 墨書, "內省"이라 쓴 자수 文字 등의 유물로 보아 이 墓를 '金代 齊國王 完顔晏의 墓'라고[10] 정하는 것에 대해서는 학술계에서 異見이 없다. 특히 金代 齊國王 墓의 시대적 특징에 대해 서로 엇갈리는 학술적 관점은 전혀 없는 상황이다.

이 墓가 출토된 이래 이 墓와 관련된 수많은 연구논문, 통속적 읽을거리, 박물관 전시 등에서 연구자들이 대부분 당연히 이를 "金 齊國王 夫婦 合葬墓"라 칭하였다. 그러나 사실 현재까지 이 두 묘주가 '封王'과 '命婦'의 관계에 속한다는 것(부부 관계임)을 증명할 어떤 자료도 없다. 연구를 통해 밝혀진 바로는 墓內에 합장된 男女는 그렇게 간단한 '夫婦'의 관계가 아니었다. 즉 齊國王 옆에 함께 매장된 여인이 生前에 반드시 '一品命婦'의 인물이었던 것은 아닌 것이다.

中國 하얼삔 의과대학의 전문가가 墓內 남녀 2인의 유골에 대해 실시한 의학적 감정과 체질 인류학자이자 中國 사회과학원 고고연구소 연구원인 판치펑(潘其風) 선생의 남녀 골격에 대한 감정을 결합해 보면 齊國王의 사망 연령은 약 60세 이고, 함께 매장된 여인의 사망 연령은 약 40세 이며[11] 그 오차는 1년이다.

棺槨의 밀봉 상태 및 棺內의 각종 흔적을 관찰한 바로는 棺內의 남녀가 동시에 함께 입관돼서 매장되었음을 완전히 확정할 수 있다. 女屍의 袍의 오른쪽 소매가 男屍의 왼쪽 어깨에 눌려 접혀졌다는 것은 女屍가 齊國王의 아래에 놓여 있었다는 것을 의미하고 이는 女屍가 먼저 입관되고 난 후 齊國王이 입관되었다는 것을 의미하는 것이다. 처음 관을 열었을 때 女屍의 양 발의 뼈가 신발 속에서 여전히 자연스럽게 서있는 상태였던 것이 사람이 건드리자 바로 내려앉았고, 齊國王의 얼굴 피부와 수염 및 눈썹이 여전히 있었고 특히 수염과 눈썹이 여전히 곤두서 있었던 것은 두 시신이 매장된 후 어떤 이동도 없었음을 나타내 주는 것이라 하겠다. 또 墓內의 남녀가 각자 입고 있는 복식의 生前에 파괴된 정도 및 매장 후의 腐蝕 정도도 兩者가 기본적으로 같았다. 심지어 兩者가 공동으로 사용한 葬具인

10) 趙評春, 『金代服飾--金齊國王 墓出土服飾研究』, 文物出版社, 1998.
11) 黑龍江省文物考古研究所, 「黑龍江阿城巨源金代齊國王 墓發掘簡報」, 『文物』1989, 第10期.

베개와 이불 위에 남겨진, 시체의 액체가 침투하여 형성한 사람의 윤곽 흔적은 여전히 분명히 변별해 낼 수 있어 이는 兩者가 棺內에서 동시에 부패되었음을 보여주는 것이라 하겠다. 이러한 상황들은 棺內의 남녀가 같은 시간대에 사망하여 같은 시간에 차례대로 입관 및 매장 되었음을 나타내 주는 것이다.

棺內의 남녀 墓主가 각자 점거한 좌우의 위치나 머리 아래에 각각 댄 깔개 등으로 보아 제도상으로 棺內에 陪葬되는 여인의 위치를 미리 마련했음을 알 수 있다. 그러나 상식적으로 옛날이나 지금이나 어떤 이도 나이차가 20세에 가까운 사람들이 같은 시간에 사망할 것을 예측할 수는 없는 것이다. 사실 古今을 통해서 20년의 나이차가 나는 두 사람이 같은 시간에 자연 사망한 기록은 어디에서도 찾아볼 수 없다. 따라서 이것은 金代에 여전히 사람을 殉葬하는 야만적인 習俗이 남아있었음을 의미하는 것이라 하겠다.

遼·金 시기에 이렇게 사람을 殉葬한 習俗은 이 묘에서만 볼 수 있는 것은 아니다. 역사 기록에 의하면 遼 太祖가 죽자 太后가 권력을 장악하고 太祖의 측근들을 살해하였는데 가해하고자 하는 자에게 공개적으로 밝힌 이유는 대체로 太祖의 측근 된 자로서 당연히 목숨을 바쳐 太祖를 따라 순장되어야 한다는 것이었고, 이 때문에 여러 명의 重臣이 太后에 의해 太祖의 靈柩 앞에서 살해되었다. 그러나 한 신하가 위기에 직면했을 때 太祖의 관 앞에서 "太祖의 측근으로 太后보다 더한 사람이 없으니 太后가 먼저 따르시기 바란다 (太祖最親者, 莫過於太后, 故請太后先殉)"하였고, 이에 太后는 강압에 의해 손목을 끊어 太祖를 따르게 되었으며 그제서야 諸臣들은 화를 면할 수 있었다. 『遼史』傳에는 또 "太祖崩, 后稱制, 攝軍國事. 及葬, 欲以身殉, 親戚百官力諫, 因斷右腕納於柩"[12]이라 하였는데 여기에는 遼 太后가 스스로 太祖를 따르고자 하였다는 내용으로 되어 있어, 비록 그 계기에 대한 내용이 史料에 따라 서로 다르게 기재되기는 하였으나 이를 통해 遼代의 통치 계급인 황실 귀족의 의식 속에 여전히 사람을 殉葬하는 것에 대한 사상이 매우 강렬하게 있었음을 알 수 있다. 이러한 습속은 최소한 이렇게 이미 "攝軍國事"의 皇權을 잡고 휘두르던 인물도 제약하여 마침내 손목을 끊어 太祖를 따르도록 하였으니, 이를 통해 사람 殉葬에 대한 습속이 여전히 비교적 보편적으로 존재했음을 알 수 있는 것이다. 歷史上의 女眞族과 契丹族은 지역적으로도 가깝고 습속도 여러 면에서 비슷하다.

宋代의 史家가 기록한 바에 의하면 "阿骨打建號 曰皇帝寨. 至亶 改曰會寧府 稱上京.……死者埋之無棺槨. 貴者生焚所寵奴婢 所乘鞍馬以殉之"[13]라 하였다. 현재 발굴된 고고학적 자료를 통해 보면 金代 上京 지역에 火葬의 습속이 있었고 유골은 돌함[石函]에 넣어졌음을 알 수 있다. 단 齊國王 墓는 棺槨이 모두 갖추어져 있어서 宋 문화의 직접적 영향 아래에서 金代에 이미 土葬이 출현한 것이라 할 수 있겠다. 齊國王 본인이 棺槨에 입관되

12) 『遼史』卷71 後妃傳, 中華書局, 1974.
13) 『三朝北盟會編』卷3, 上海古籍出版社, 1987.

었으므로 殉葬者 역시 함께 입관 된 것이었다.

齊國王 墓의 남녀가 어떤 이동도 겪지 않은 상황임을 근거로 하여 촬영된 X레이를 관찰한 결과 女性의 腹部에 곡선형의 창자를 따라 순서대로 여러 알의 灰白色 낱알 형태의 礦物質이 배열되어 있었다. 당시에 이 인체 내의 물질들에 대해 하얼삔 의과대학의 전문가 책임 하에 감정을 진행했으나 객관적 제약으로 인해 줄곧 이에 대한 감정 의견을 전달받지 못한 상황이다. 따라서 이렇게 800여년을 지나면서 내장 안에 여전히 부패하지 않고 남아 있는 물질이 구체적으로 무엇인지에 대해 이제는 이미 고찰이 어렵게 되었다. 현장에서 본 바에 의하면 棺內의 女性 신체는 모든 부드러운 조직이 이미 모두 부패되어 남아있는 물질이 전혀 없었다. 일반적으로 이러한 낱알 형태의 물질은 당연히 임종 전에 먹어서 위장 내에 들어갔다고 생각한다. 생전에 위장 내에 있었던 有機物質은 소화되거나 배설되고, 사후에는 시체의 부드러운 조직과 함께 부패되기 때문에 결국에는 단독으로 복강 내에 남아 있을 수가 없다. 따라서 위장 내에 부패되지 않고 남아 있는 알갱이 형태의 물질은 당연히 일종의 礦物質일 것이다. 이렇게 여러 알의 광물질이 死者의 내장 내에 남아 있는 것은 당연히 임종 전에 복용한 것일 것이다. 혹은 이것이 바로 생전에 殉葬되면서 복용된 약물로, 사망에 이르게 한 직접적 요인일 수도 있다.

만약 女墓主가 약물 중독으로 사망한 것이라면 그 얼굴에 씌워진 黃絹覆面은 당연히 통상적인 葬俗의 의미 외에, 중독에 의한 사망으로 인해 흉악하고 무시무시해진 死者의 凶相을 덮어 가리고자 하는 작용도 겸하였을 것이다. 더군다나 만약 그 女性이 중독으로 인해 혼미 상태였다면 두 겹으로 솜을 끼워 넣은 覆面으로 인해 질식하여 사망했을 수도 있다.

이러한 점을 고려하면 齊國王 墓內의 女墓主는 兩者의 연령차가 20세에 이르기 때문에 원래의 正室인 一品命婦에 속하지는 않았을 것이다. 여진족이 棺槨葬으로 葬俗을 바꾼 이후에도 원래의 귀족 死後에 生焚所寵奴婢의 습속은 여전히 남아, 墓主인 齊國王을 土葬할 때도 생전에 총애하던 奴婢를 함께 殉葬했던 것이다. 따라서 棺內의 女墓主는 당연히 생전에 齊國王에 속해 총애 받던 奴婢였거나 혹은 妾의 지위에 있던 인물이었다 하겠다.

7. 結語

金代 齊國王 墓가 출토된 지 이미 18년이나 지났으나 지금까지도 金代 服飾을 보충할 자료로 기타 出土 服飾이 나오지 않고 있는 실정이다. 18년 전 필자가 이 발굴에 참여할 수 있었던 것도 행운이었고, 다시 18년 후 이번에 개최된 國際 古代 服飾 學術會議에 참석할 수 있는 것도 행운이라 생각한다. 이 자리를 빌어 먼저 필자를 회의에 참석하도록 요청해 주신 檀國大學校에 감사드리고, 동시에 필자의 학술적 연구에 대한 朴聖實 教授의 관심과 崔圭順 博士의 도움에 감사를 표하는 바이다. 감사합니다.

참고문헌

中華人民共和國 重大考古發現 編輯委員會 編, 『中華人民共和國重大考古發現』, 文物出版社, 1999. 9.

『金史』卷43 輿服志, 中華書局, 1975.

『禮記正義』卷7 檀弓, 中華書局十三經本, 1980.

『方言箋疏』卷3, 上海古籍出版社, 1984.

『集韻』卷2 灰韻, 中國書店, 1983 ; 『錞宋廣韻』灰韻, 上海古籍出版社, 1983.

趙評春, 『金代服飾--金齊國王 墓出土服飾研究』, 文物出版社, 1998.

『說文解字注』衣部, 上海古籍出版社, 1981.

『禮記正義』卷45 喪服大記, 中華書局十三經本, 1980.

『碎金』卷16 服飾篇, 故宮影印本, 1937.

趙評春, 『金代服飾--金齊國王 墓出土服飾研究』, 文物出版社, 1998.

黑龍江省文物考古研究所, 『黑龍江阿城巨源金代齊國王 墓發掘簡報』, 『文物』1989, 第10期.

『遼史』卷71 後妃傳, 中華書局, 1974.

『三朝北盟會編』卷3, 上海古籍出版社, 1987.

趙評春

中國 黑龍江省 文物考古研究所 研究員, 黑龍江省 文物鑒定委員會 委員.

주소 : 中國 哈爾濱市 宣德街44號

우편번호 : 150008

Historical Relic and Archaeological Research

Institute of Heilongjiang Province

Zhao Pingchun

Research Fellow

Add : No.44 Xuande Street,Harbin, China

Postcode : 150008

E-mail : zhaopingchun@sina .com

Zhaopingchun@hotmail.com

清初的丝织物

包铭新* • 许辉**

一、明代丝织物的概况

综观中国丝绸发展史，明代无论是在官营织局的数量、丝织物的品种质量，还是生产规模，都较前朝占有优势。

除去北京和南京的“内局”和“外局”外。（北京和南京均设有“内局”和“外局”。“内局”专门织造御用袍服缎匹、宫内应用锦缎，“外局”专门织造朝廷定时应用锦缎的），地方织染局就有：浙江杭州府、绍兴府、严州府、金华府、温州府、宁波府、湖州府、嘉兴府，南直隶镇江府、苏州府、松江府、徽州府、宁国府、广德州，福建福州府、泉州府，江西、四川、河南布政司，山东济南府[1]，以及明初山西太原府，共为二十三处。可谓丝绸生产遍及全国各地，并逐渐形成了专业化的产区。

明代有些地区已能织造较前朝技术更高的品种。明代有关丝织品种的文献记载也相当丰富，同时明神宗定陵等重要的考古挖掘出土了大量珍贵的实物资料。传世品中数以万计的明大藏经封面可作代表。综合各种材料我们可以了解到明代丝绸工艺精湛、品种齐全、产品种类繁多。其中妆花和绒类产品是明代丝织技术的重要进步，缂丝和刺绣工艺也在继承传统的基础上进一步发展[2]。清代的丝织物正是以此为基础发展起来的。

二、清初丝织生产的恢复

明末清初改朝换代的长期大规模战争，给社会生产力带来严重的破坏，全国各地的社会经济呈现一片萧条荒凉的景象。清初丝绸业在战争中损失惨重，遭到巨大破坏。

* 上海，东华大学 服装学院 教授（博导），200051
** 上海，东华大学 服装学院 硕士研究生，200051

总的来说，清初是清代丝绸业重整旗鼓的时期。据《清史稿》里记载：江南三织造是清代在顺治二年 (164 年) 占领江南以后，在明代织造局的基础上建立起来的。江宁织造局率先于顺治二年恢复重建；苏州织造局由工部右侍郎陈有明在顺治三年底开始重建，到次年大体完成；杭州织造局较苏州织局早一个多月同由陈有明经手恢复[3]。逐渐增添设备，恢复生产，为后来丝织业的繁荣奠定了基础。据《大清会典》所载，从清初至乾隆十年（1745 年）前后三织造的织机和匠役数目的变化情况列表如下[4]：

表一、清初至乾隆十年（1745 年）前后三织造的织机和匠役数目的变化表

	顺治年间			雍正年间			乾隆十年	
	缎机	部机	合计	缎机	部机	合计	织机	机匠
江宁	335	230	545	365	192	557	600	178
苏州	420	380	800	378	332	710	663	1932
杭州	385	385	770	379	371	750	600	1800
合计	1140	995	2135	1122	895	2017	1863	5512

清政府意识到丝绸销售是一大财政收入，认为“公私仰给，唯蚕丝是赖，故蚕务最重”，康熙还在“桑赋序”中提到：“朕迅省浙西，桑林遍野，天下丝缕之供，皆在东南，其蚕桑之盛，惟此一区”。康熙朝起，由于天下安定，朝廷采用了鼓励措施，丝绸生产获得较快发展。清代丝绸业在地域上进一步向环太湖地区和珠江三角洲集中，特别是江南地区在规模和水平上成为全国丝绸业的中心。

清代有四处官营织局，即北京的内织染局和江宁织造局、苏州织造局、杭州织造局[5]，负责了清宫廷除进贡外全部的服用和赏赉用的绫、罗、绸、锦、缎、纱、绒、妆花、缂丝、刺绣的生产任务。

从顺治 10 年（1653 年）至雍正 13 年（1735 年）期间江南三织造的缎匹产量变化情况列表如下（单位：匹）[6]：

表二、顺治 10 年（1653 年）至雍正 13 年（1735 年）期间江南三织造的缎匹产量变化表

	年代	上用	官用	部派
苏州	顺治 10 年	503		3096
	顺治 15 年			2600
	雍正元年	981	1600	1611
杭州	顺治 10 年	502	2229	
	顺治 15 年	1206	3973	2600
	雍正 13 年	400	6550	2655
江宁	顺治 10 年	1000		
	顺治 15 年			2600
	雍正 13 年	2265	1610	1157

由以上两表数据可以看出，在顺治至雍正这段时期内的丝织业伴随着国内战乱起起伏伏，并非程不断增长趋势，但这一时期对江南三织造的恢复以及地位的确立起到了巩固作用。

三、清初丝织物品种分析

清代关于丝织物品种的记载很多，大部分记载于丝织物专业著作（专门描述桑蚕、丝织业的书籍。如卫杰的《蚕桑萃编》）、各地方志中的物产篇、笔记、杂记和商品清单中。并且有大量实物存世。根据文献和实物，参照现代丝织物分类标准，清初丝织物的品种大致可以归纳为锦、缎、绸、绫、罗、纱、绢、绒和缂丝等大类。其中缎和锦类织物是当时的主流品种。

1、缎

从织造技术和外观特征区别，清初的缎类织物可以归纳为：暗花缎（包括素缎）、织金缎、花缎、妆花缎四大类。

据史料记载，顺治十四、五年间，苏州又进解了户部于十四年派织的应用预备缎7800匹中的蟒缎、大小闪缎、补缎、大缎、帽缎、衣素、蓝素、蟒纱等2600匹[7]。并《苏州织造局志》记载："八庹素广段一疋，……闪锦段一疋，闪段一疋、六庹杨段一疋，六庹彭段一疋"。由此可见当时缎类的品种相当丰富。

实物中大量存世的有：妆花缎、二色缎、织金缎和暗花缎（见表三）。

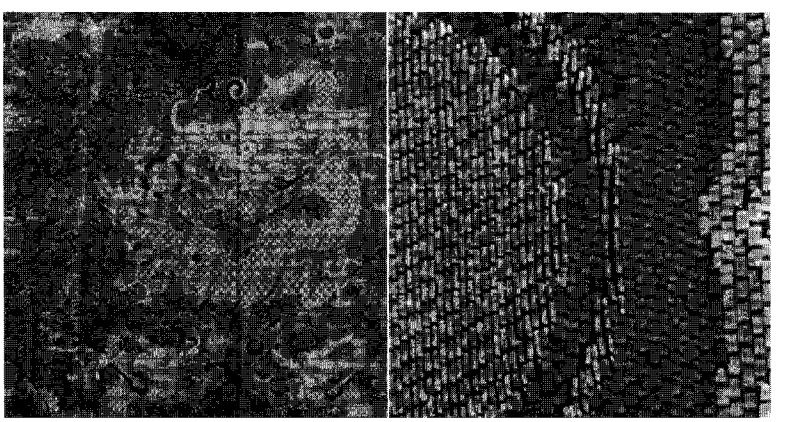


图1、普蓝织金云蟒海水纹妆花缎局部及细部组织图，清初

2、锦

《大清会典事例》中记载：“康熙元年定，江宁织造局设官诰机三十五张，遇应用之时，由部预期行文该织造如式置办。诰命用五色及三色纻丝，文曰奉天诰命；敕命用纯白线，文曰奉天诰命。均织升降龙，文兼清汉字。一品玉轴鹤锦、二品犀轴璃锦、三四品贴金轴详莲锦、五六品角轴牡丹锦、七品以下角轴小团花锦” [9]。可见锦类织物在当时具有重要的地位作用。

清代宫廷织物用料中的锦有苏州织局织造的宋锦（或称宋式锦）、江宁织局织造的云锦和四川的蜀锦。其中，宋锦又分为重锦、细锦和匣锦；云锦又分为库缎、织金、织锦和妆花。现存实物可见表三。

3、纱和罗

纱是平纹方孔的织物，虽组织同于绢，但丝线更细，且经纬往往排列较稀疏[10]。罗则因经丝的互相缠绕绞结，表面呈椒孔[11]。

明末清初上海松江人叶梦珠在他的笔记《阅世编》中谈及官民的夏季便服面料：“夏布初用满龙、团龙纱，禁后用宫纱、官纱，既而用素幅秋绢纱，今用广绢、绒纱、葛纱、巧纱、漏地纱，大概俱尚整矗，虽便服无异于公服也。”《康熙桐乡县志》中记载：“罗有三梭、五梭、花罗、素罗；纱有花纱，脚踏纱，绉纱等[12]”。《苏州织造局志》记载中：“九庹六则广纱一疋、九庹实地一云纱一疋、九庹漏地一云纱一疋，八庹素绢纱一疋”。

元明时期，纱的地位开始下降，但工艺不断完善，出现直经纱、妆花纱、二色纱、织金纱等品种[13]。清代宫廷所用高级纱罗，基本上保持明代江南织造局所有的生产品种，并有创新[14]。

4、绒

起绒织物按地不同可分为两类：缎地起绒花，以漳缎为代表。提花型暗花绒既单色的漳缎[8]。绒地上起绒花，以漳绒为代表，漳绒又可被称为天鹅绒。现存实物有万字百蝠漳缎、黄地莲蝠纹漳绒垫料等（见表三）。据《苏州织造局志》中记载：“四则凤穿牡丹圆金心抹绒一疋、六则两色圆金云团龙心抹绒一疋……”这里的抹绒应可归入绒类织物。

5、绸、绢和缂丝等

濮院在康熙年间的产品中，绸有花纺绸，花色很多，行销全国；绢有花绢，官绢，箩筐绢，素绢，帐绢，画绢；散丝所织的绫有花绫，素绫，锦绫[15]。《苏州织造局志》记载："十庹两则宫绸暗团袍一疋、春绸一疋、宁绸一疋"。现存实物可见表三。

表三、现存清初丝织物实物表

类别	品种	名称	年代	收藏地点
缎	妆花缎	寸蟒纹妆花缎	雍正	北京故宫博物院
	二色缎	如意云纹二色缎	康熙	北京故宫博物院
	织金缎	绿色地五彩万字喜相逢织金缎	雍正	北京故宫博物院
	暗花缎	浅驼色行云团龙纹暗花缎	清初	首都博物馆
锦	宋式锦	蕃莲纹重锦	康熙	北京故宫博物院
		蝴蝶采花纹匣锦	清初	北京故宫博物院
		蔓草纹加金细锦	雍正	私人
		双龙盘绦纹二色锦	清初	北京故宫博物院
		沉香色地龟背如意瑞花纹锦	康熙	北京故宫博物院
		四合如意蔓草纹锦	雍正	清华大学美术学院
		蓝地团龙八宝纹天华锦	康熙	清宫旧藏
	云锦	红柿蒂"福"字方补纹织金锦	清初	首都博物馆
		深蓝地盘绦朵花纹织金锦	康熙	清宫旧藏
纱	妆花纱	蓝地彩云金蟒纹妆花纱	康熙	清宫旧藏
		浅驼色云鹤纹纱	清初	首都博物馆
	芝麻纱	天青地团龙凤纹暗花纱朝袍	康熙	清宫旧藏
	实地纱	沉香地松鼠葡萄纹暗花纱门帘	康熙	清宫旧藏
绸	织金绸	绿地祥云八宝纹织金绸	康熙	清宫旧藏
缂丝	缂丝	红地缂丝百子图帐料	清初	北京艺术博物馆
	缂丝	缂丝明黄地八宝云龙纹吉服袍料	顺治	清宫旧藏
绮	绮	万字朵花纹绮	康熙	私人
绒	漳缎	万字百蝠漳缎	雍正	北京故宫博物院
	漳绒	黄地莲蝠纹漳绒垫料	康熙	清宫旧藏
绫	绫	暗八仙团鹤纹绫	清初	首都博物馆
	暗花绫	白色缠枝牡丹纹暗花绫	康熙	清宫旧藏

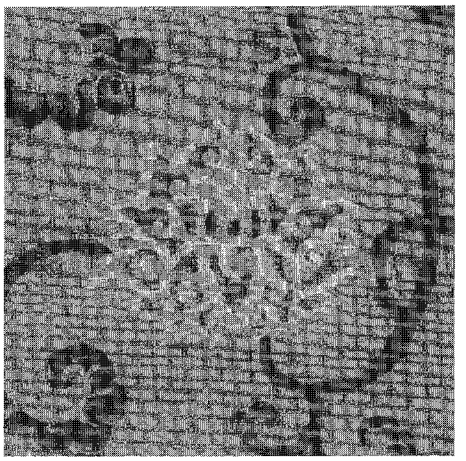


图 2、黄地莲蝠纹漳绒，康熙

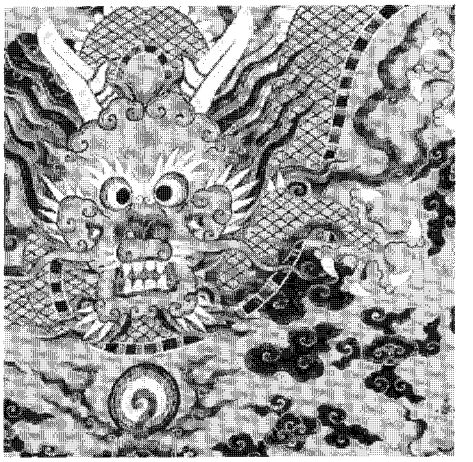


图 3、明黄地八宝云龙纹缂丝，顺治

图 4、蓝地彩云金蟒妆花纱，康熙

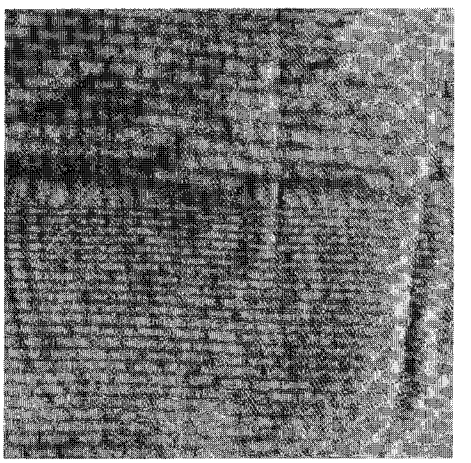


图 5、暗八仙团鹤纹绫，清初

四、缎的改进及其重要性

1、缎组织与缎效果

缎类织物是应用缎纹组织、外观光亮平滑的丝织物[16]。缎纹组织是相邻两根经纱或纬纱上的单独组织点均匀分布但不相连续的织物组织。可分为经面缎纹和纬面缎纹两种。

缎类织物实际上是由于其浮线较长，经纬交织点少且均匀分布于织物中，所以表面莹澈光亮，平滑柔软。缎纹的表面由经、纬线浮长构成，由此，经、纬线浮长是决定缎面

效果的主要因素之一，浮长越长缎纹的表面则越显光滑。缎类织物对织物紧度也有很高的要求（由经、纬线密度与支数共同决定），只有足够大的紧度才能使单独纬组织点被其两侧的经线浮长所遮盖[17]。并且，经缎的经线越细，缎组织的表面则越显细腻。纬缎亦是如此。

2、五枚缎和六、七枚变则缎

缎组织结构在不同的历史时期略有不同。其中缎纹组织中最简单的五枚缎纹产生也最早，是由五枚斜纹或四枚破斜纹变化而成[18]。清代之前多为五枚缎组织。

六枚、七枚变则缎亦称六丝和七丝。六丝采用六枚变则缎纹组织，七丝采用七枚缎纹组织。据日本《和汉三才图会》，“六丝缎产生于广东、南京和福建，似八丝而用丝少，光泽亦差，但胜于“滑绫子”，“七丝缎”产于广东，是一种杂色提花的缎纹织物[19]。六枚缎是为了改善缎纹效应而加大浮长所作尝试的小心翼翼的第一步。这种尝试的继续就产生了七枚、八枚甚至更大枚数的缎纹组织[20]。

由大量实物可以看出，五丝以及变则缎大量的运用于缎地的提花织物，缎纹效果不如八丝缎，需借助提花纹对地部瑕疵的遮掩，使其达到理想的织物效果。特别是满地花型的品种（没有大面积的地部）。

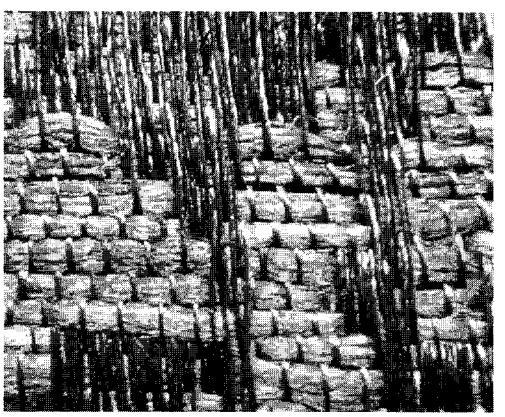


图 6、八枚缎组织局部

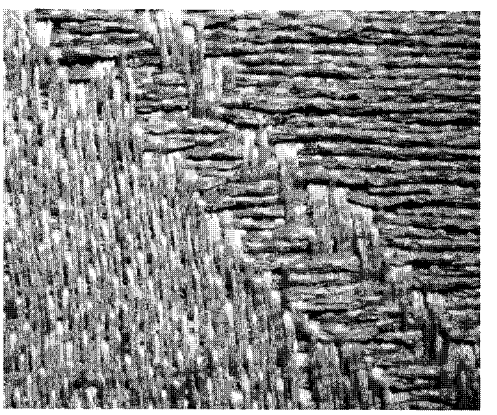


图 7、五枚缎组织局部

3、八枚缎与清地图案

清初缎织物在明代的基础上有很大的发展。在组织结构上，由明代以五枚缎、六枚缎为主，发展成清初的以八枚缎、七枚缎为主。同时经丝的捻度减少，细度变细，密度提高；采取经细而密、纬粗而稀的配置方法。为了保证缎面光洁，在织机装造上采用反面

织法的装置，织造时缎子正面朝下，反面朝上。

清初广东人屈大均有竹枝词云：“洋船争出是官商，十字门开向二洋，五丝八丝广缎好，铜钱堆满十三行”[21]，其中的五丝和八丝就是对五枚缎和八枚缎的称呼。屈大均生于明末崇祯二年（1629 年），死于康熙三十五年（1696 年）。《广东新语》是其晚年所作，因此他诗中提到的八丝缎至迟在康熙早期已经出现。成书于康熙年间的《苏州织造局志》中也记载了关于八丝的素缎及暗花缎的名称：如八庹八丝素一匹、九庹八丝暗蟒袍一匹、九庹八丝暗蟒挂一匹、九庹八丝两云段一匹等等，也证实了八枚缎在康熙时的存在。但是八丝缎之中也有一些区别。《诸物源流》称：八丝缎长四丈，宽二尺四寸，系广货，另有一种花轴缎，也叫八丝缎，长三丈，宽一尺六寸。说明八丝缎的主产地是在广州，但其它地区也有生产。与五枚缎相比，八枚缎的经密更大，经浮更长，光泽更佳。因此，当时对八丝缎的评价是“质密而匀，其色鲜华，光辉滑泽”[22]。

八枚缎的出现使得缎纹组织表面呈现出较为理想的缎纹效果，织物更加光滑有光泽，不必像锦缎之类的织物出现满地花纹来遮蔽缎地效果的不足。 清代传世实物涌现出大量缎纹效果极佳的素缎以及清地图案的缎组织织物(包括缎地刺绣和有大面积缎地的妆花件料)。

4、缎

漳缎是采用提花机织制，以经面缎纹和杆织法经起绒组织互为花地的提花绒类丝织物。绒根固定采用 W 形法，并辅以粗细纬排列以使绒毛挺立。

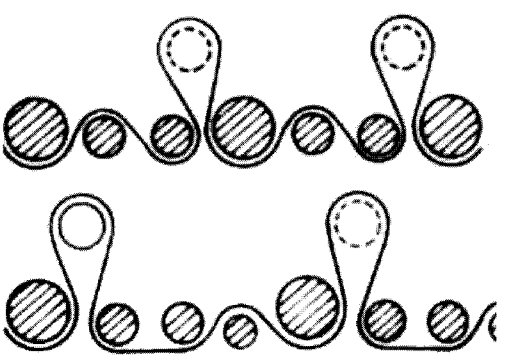


图 8、漳缎绒根固接示意图

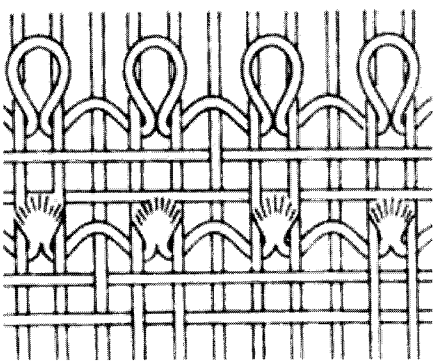


图 9、雕花绒组织图

漳缎与漳绒统称为起绒织物，古人亦称之为大绒。清人叶梦珠称：“大绒前朝最贵，细而精者谓之姑绒。”这里的前朝指明代，随有大绒生产，但为数不多。一般认为漳缎创自明代，盛行却在清代。据明末宋应星《天工开物》记载，漳缎技术由日本传入，因此称为“倭缎”，又因当时福建漳州仿制技术最佳，便以“漳缎”得名。明代漳缎多为暗花，清代南京织造建立“倭缎堂”使漳缎的生产中心转移到南京一带，彩色提花漳缎的生产逐渐提高。据清代《织造档》和《进贡档》记载，南京织造的漳缎，花纹颜色已多达6、7种，用途广泛，远非福建进贡的暗花漳缎所能及。

由此，虽说漳缎明既有之，但其应在清代初期才稳定下来，并且大量生产，花色品种也有较大的进步，生产发展趋于成熟，应用更为广泛。

五、绞经组织的简化及四个典型品种

1、链式罗等古代复杂织物的消失

纱类丝织物是指全部或部分采用有经纱扭绞形成均匀分布孔眼的纱组织丝织物[23]。汉、唐之前，一般把绞经织物称为罗，而将轻薄、空眼稀疏的平纹织物称为纱，即所谓“椒孔曰罗、方孔曰纱”。直到了明清时期，人们才倾向于将绞经织物统称为纱罗。

中国古代暗花罗所采用的组织特别复杂多变，可以分成有固定绞组和无固定绞组两种类型[24]。其中有固定绞组的暗花罗中的典型组织有二：二经绞暗花罗（常以横罗——如三梭罗、五梭罗、七梭罗等——组织与平纹等简单组织互为花地）和三经绞暗花罗。无固定绞组罗织物因链状外观也被人称之为链式罗。

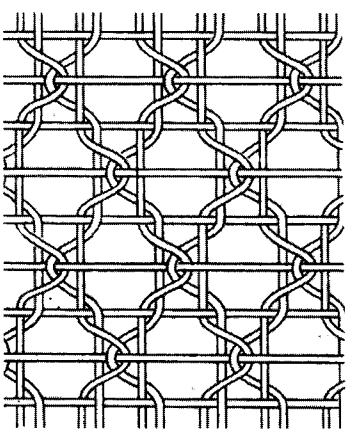


图10、链式罗结构图

暗花罗的生产相对复杂，需用装有绞综的多综多蹑机或束综花楼机织造[25]，织造相对困难。链式罗等古代复杂织物在汉、唐时期拥有重要的地位，直至宋代也相对流行，但至明末清初时由于其织造耗时费工，逐渐被织造相对简单、表现纹样效果相同的横罗及类似品种所替代。实物存世也越来越少。美国一家博物馆中藏有的一件清代龙袍的接袖上见过不提花的四绞经罗，但织造技术已十分低劣。

2、 四个典型品种

清代初期，纱的织造工艺不断完善，江宁所产的直经纱、芝麻纱、状花纱、实地纱开始流行起来，以其轻薄纤丽闻名于世，柔软透气性好，成为皇室及百官的夏服面料。

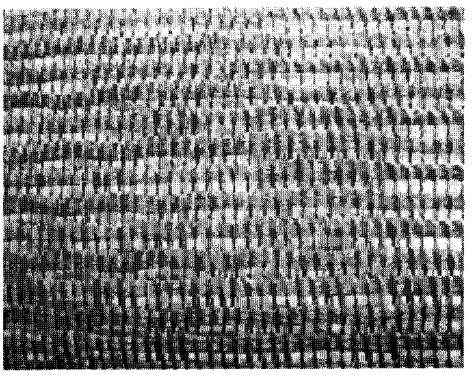


图 11、亮地纱局部

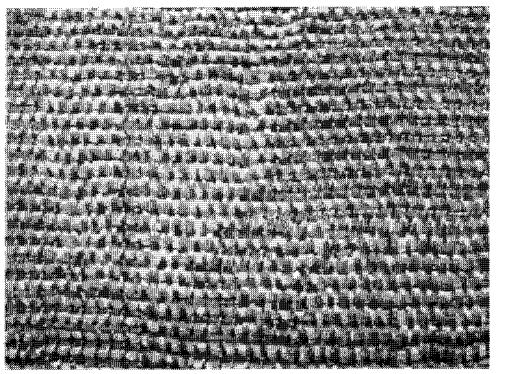


图 12、实地纱局部

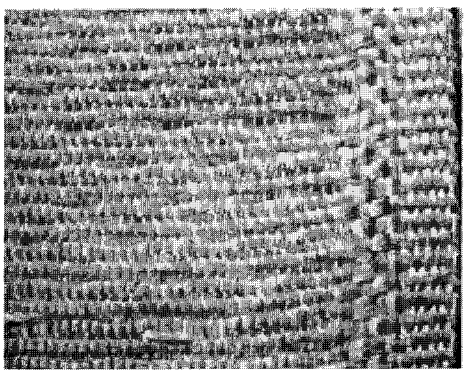


图 13、芝麻纱局部

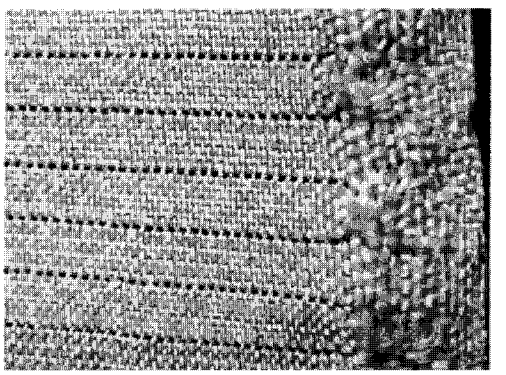


图 14、横罗局部

①亮地纱

亮地纱以“一绞一”纱组织为地平纹为花。外观有地亮花暗的效果。宋称亮地纱，明清时期亦称之为直地纱。亮地纱经细纬粗，纬纱无捻或微捻，经线加 S 捻。

②实地纱

实地纱以平纹为地，一绞一组织为花。通过采用一定的纱线捻度和经纬密度等措施，其平纹地部可呈现粟纹。宋代文献上有“粟地纱”应是地部呈现粟纹的实地纱。较为多见的实地纱实物是以绞孔勾出图案轮廓而具白描风格，轮廓内花纹一般为平纹，但亦有见以纬斜显花的。轮廓内填以平纹的实地纱较为厚实，宜作春服，故称“春纱”。

③芝麻纱

芝麻纱以显芝麻形小花纹的实地纱为地，平纹为花。芝麻纱地纹又有大芝麻、小芝麻之分。大芝麻地纹由六个绞组或八个绞组组成；小芝麻地纹由四个绞组组成。

④ 横罗（七梭，五梭）

横罗是罗织物中的一种，是一绞一的绞经结构，每织入 3 梭、5 梭、7 梭或 13 梭平纹后经丝扭绞一次，在织物的表面形成平纹与绞孔相间的横条，称 3 丝（梭）罗、5 丝（梭）罗、7 丝（梭）罗和 13 丝（梭）罗。传统品种的杭罗大多为横罗。

六、宋式锦

清代初期，统治阶级崇尚秀雅的装饰风格。康熙年间，有人从江苏泰兴李氏处购得宋裱《淳化阁帖》对幅，揭取其上装裱宋锦 22 种，转售予苏州机房摹取花样，并采用苏州当时织锦工艺进行生产，取名为“宋锦”（又名宋式锦）宋锦之名遂沿用至今。

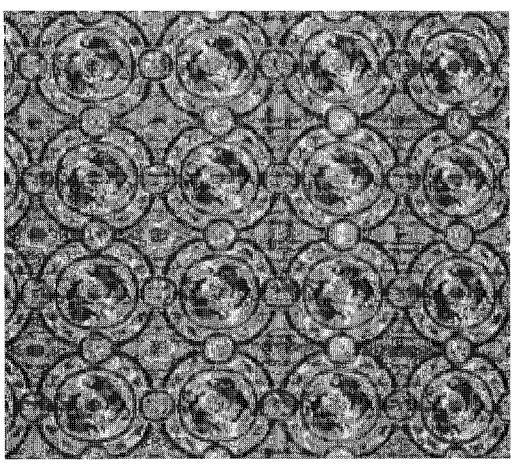


图 15、粉红地双狮球路纹宋式锦，康熙

宋式锦是一种质地极薄组织细密的织物，以苏州所产最为精美，各类八达晕锦、天华锦、龟背锦为其代表。

宋式锦的纹样多为在几何框架中加入花纹图案，形式感极强，故多为装饰用锦。宋式锦可根据工艺精粗、选料优劣、织物厚薄等条件分为：重锦、细锦和匣锦三类。重锦是其中最珍贵的品种，多用于铺垫和陈设材料。细锦多去比重锦更细的丝线。匣锦专供装裱书画、糊制襄匣之用。

随着织造工艺不断进步，宋式锦的品质不断的精细。清代早期宋式锦多以三枚经斜纹地组织，随后多见五枚、六枚、八枚缎地组织。

综上所述，清初是清代丝绸业重整旗鼓的时期，为以后丝织业的繁荣奠定了基础。清初丝织物的品种大致可以分为锦、缎、绸、绫、罗、纱、绢、绒和缂丝等大类。清初八枚缎的出现使得缎纹组织表面呈现出较为理想的缎纹效果，织物更加光滑有光泽，出现大量的缎纹效果极佳的素缎以及清地图案的缎组织织物。 漳缎织造技术在清代初期得

以稳定和发展，并且大量生产，花色品种也有较大的进步，应用广泛。链式罗等古代复杂织物在明末清初时由于其织造耗时费工，逐渐被织造相对简单、表现纹样效果相同的横罗、亮地纱、实地纱和芝麻纱等品种所替代。宋式锦在清初总结了宋代以来装饰用锦的工艺和纹样，形式感进一步增强，多为装饰用锦，织造工艺不断进步，品质不断地精细化。

参考文献

[1]正德，明会典，卷161，工部十五；万历，明会典，卷201，工部二十一
[2]赵丰：中国丝绸通史，苏州大学出版社，2005年11月，第一版
[3]范金民：清代前期江南织造缎匹产量考，历史档案，1988年，第4期
[4]严勇：清代的官营丝织业，故宫博物院院刊，2003年，6期
[5]雍正，大清会典，卷二0一，“工部”、“织造”
[6]表中数据出自：范金民：清代前期江南织造缎匹产量考，历史档案，1988年，4期
[7]顺治十六年四月二十四日，浙江巡抚佟国器揭贴
[8]包铭新：中国古代暗花丝织物，华东纺织工学院学报，1985年，第1期
[9]嘉庆，大清会典事例，卷七0九
[10]尚刚，鹘绫绚烂，凤锦纷葩——隋唐五代的高档丝织品种，北京大学出版社，2004年
[11]陈维稷主编：中国纺织科学技术史（古代部分），北京：科学出版社，1984年；赵丰：唐代丝绸与丝绸之路，西安：三秦出版社，1992年
[12]康熙桐乡县志，卷二
[13]宗凤英主编：故宫博物院藏文物珍品大系——明清织绣，上海科学技术出版社，2005年，第一版
[14]黄能馥、陈娟娟：中华历代服饰艺术，北京：中国旅游出版社，1999年
[15]康熙桐乡县志，卷二
[16]、[17]、[18]包铭新：关于缎的早期历史的探讨，中国纺织大学学报，1986年，第一期
[19]木宫泰彦：日中文化交流史，1980年版，胡锡年译，商务印书馆
[20]包铭新：关于缎的早期历史的探讨，中国纺织大学学报，1986年，第一期
[21]屈大均：广东新语，卷15，货语，中华书局，1985年
[22]赵丰：中国丝绸通史，苏州大学出版社，2005年11月第一版
[23]包铭新：纱类丝织物的起源与发展，丝绸，1987年，第11期
[24]、[25]包铭新：中国古代暗花丝织物，华东纺织工学院学报，1985年，第1期

[作者简介]

包铭新 ：上海，东华大学 服装学院 教授（博导），200051
许 辉 ：上海，东华大学 服装学院 硕士研究生，200051

清代 初期의 絹織物

包銘新* · 許輝**

1. 明代 絹織物의 概況

中國 견직물 發展史의 종합적인 시각에서 보면 明代는 官營 織造局의 수량이나 견직물의 품종과 품질, 생산규모 등을 막론하고 모두 이전의 다른 왕조에 비해 보다 탁월한 위치를 점하고 있었다.

北京과 南京의 "內局"과 "外局"을 제외하고[1] 지방 織染局[2]으로는 明初에 건립된 山西 太原府를 시작으로 후에 江西 四川 河南의 布政司와 浙江의 杭州府 紹興府 嚴州府 金華府 溫州府 寧波府 湖州府 嘉興府, 南直의 隸鎭江府 蘇州府 松江府 徽州府 甯國府 廣德州, 福建의 福州府 泉州府, 山東 濟南府[3] 등 23곳이 추가로 건립되었다. 이로써 견직물 생산이 전국 각지에 골고루 퍼졌고, 점점 전문화된 생산 지역을 형성했다고 할 수 있겠다.

이러한 織染局을 기반으로 明代에 일부 지역에서는 이미 이전보다 기술이 훨씬 더 높은 견직물 품종을 織造할 수 있었다. 즉 明代는 견직물의 품종에 관한 문헌 기재가 상당히 풍부한 편이고 神宗 · 萬歷 · 皇帝의 陵인 定陵 등에서도 대량의 진귀한 유물들이 발굴된 바 있다. 이 밖에 傳世되어 오고 있는 헤아릴 수 없이 많은 明 大藏經의 겉면[封面] 역시 대표적 유물이라 할 수 있다. 이들 각종 자료를 종합해 보면 明代 견직물 공예 기술의 정밀함과

---

* 上海 東華大學 服裝學院 教授(博士生指導教授)
** 上海 東華大學 服裝學院 碩士生
※ 번역 : 崔圭順(上海, 東華大學 服裝學院 博士과정)
1) 北京과 南京에 모두 "內局"과 "外局"이 설치되는데, "內局"은 황제가 쓰는 袍의 재료나 宮內에서 사용되는 錦緞("錦緞"은 특정한 직물을 지칭하는 것이 아니라 색이 여러 가지인 견직물을 통칭함)을, "外局"은 朝廷에서 필요로 하는 錦緞을 전문적으로 짜던 곳이었다.
2) 明代에는 織造와 染色 등의 직무를 수행하던 정부 기구를 "織染局"이라 하였고, 清代에는 주로 "織造局"이라 하였다.
3) 正德, 明會典, 卷161, 工部15 ; 萬曆, 明會典, 卷201, 工部21

품종의 완비, 종류의 다양함 등을 엿볼 수 있다. 그 중 妝花와 絨 등의 제품은 明代 견직물 생산 기술의 중요한 진보라 할 수 있고, 커써[緙絲]와 刺繡 工藝 역시 이전의 전통에 기초하여 더욱 발전하였다.[4] 淸代의 견직물은 바로 이 기초 위에 발전한 것이었다.

2. 淸初의 絹織物 生産 회복

明末淸初의 왕조 교체기를 맞아 일어난 장기간의 대규모 전쟁은 사회 생산력의 대규모 파괴를 동반하였고, 전국 각지의 사회경제에 스산한 바람을 몰고 왔으며, 이러한 상황 아래에서 淸初 絹織業의 발전은 한계를 지닐 수밖에 없었다.

종합적으로 말한다면 淸代 初期는 淸代 絹織業의 재기를 꾀하는 시기였다고 할 수 있겠다. 『淸史稿』에 의하면 淸은 順治二年〔1645〕에 江南(揚子江 이남)을 점령한 이후 明代 織染局의 기초 위에 江寧·杭州·蘇州에 三織造局을 重建하였다. 그 중 江寧織造局(淸代의 江寧織造局은 明代의 南京織染局을 말함)은 順治二年에 처음으로 중건한 것이고, 蘇州織造局은 工部右侍郎 陳有明의 지휘 하에 順治三年(1646) 末에 중건을 시작하여 다음해에 대개의 완성을 본 것이었으며, 杭州織造局은 蘇州織造局보다 한 달 여 앞서 역시 陳有明에 의해 중건된 것이었다.[5] 이렇게 점진적으로 설비가 증가하고 생산이 회복되면서 훗날 絹織業의 번영에 기초를 제공할 수 있었다. 『大淸會典』의 기록을 기초로 淸初부터 乾隆10年(1745)을 즈음 한 시점까지 三織造局의 織機와 工匠의 수를 정리하면 〈表1〉과 같다.[6]

〈表1〉 淸初~약 乾隆10年(1745)의 三織造局의 織機와 工匠 數 변화

	順治年間(1644~1661)			雍正年間(1722~1735)			乾隆十年(1745)	
	緞機	部機	合計	緞機	部機	合計	織機	機匠
江寧	335	230	545	365	192	557	600	178
蘇州	420	380	800	378	332	710	663	1932
杭州	385	385	770	379	371	750	600	1800
合計	1140	995	2135	1122	895	2017	1863	5512

(〈表〉 중의 "部機"는 전문적으로 "部派"를 짜는 임무를 수행하던 織機이고, "部派"는 上用과 官用을 제외한 조정의 六部에서 직무 수행 시 필요로 하여 직조하도록 요구하는 직물을 말함〈表2참조〉.)

4) 趙豐 : 中國絲綢通史, 蘇州大學出版社, 2005年11月, 第1版
5) 範金民 : 淸代前期江南織造緞匹産量考, 曆史檔案, 1988年, 第4期
6) 嚴勇 : 淸代的官營絲織業, 故宮博物院院刊, 2003年, 6期

清 政府가 견직물 판매가 큰 재정수입이 된다는 것을 인식하여 "조정이나 개인의 수입을 막론하고 모두 견직업에 의존하므로 양잠업이 가장 중요하다 (公私仰給 唯蠶絲是賴 故蠶務最重)"고 하였다. 康熙 皇帝도 "桑賦序"에서 (康熙帝가 浙江의 湖州에서 쓴『桑賦』의 序文) 江南 지역의 양잠업이 매우 번성하여 전국의 견직물을 제공하는 것은 대부분 東南의 이 일대 ("朕迅省浙西 桑林遍野 天下絲縷之供 皆在東南 其蠶桑之盛 惟此一區")라고 한 바 있으며, 康熙帝 때부터 국가가 안정되기 시작하자 清 정부는 양잠업에 대한 장려정책을 취하였다. 이로써 견직물 생산은 보다 빠른 발전을 이루게 되었다. 清代 絹織業은 지역적으로는 江南의 太湖 주변 지역과 廣東 珠江 三角洲 지역 중심으로 집중되어 더욱 발전하였고 특히 江南 지역은 규모면에서나 기술 수준면에서 중국 絹織業의 중심이 되었다(즉 明代에는 정부에 의해 北京과 南京에 설립된 "內局"과 "外局"이 견직물의 주 생산지였다면 清代는 南京·杭州·蘇州를 중심으로 하는 江南 지역이 중심지가 됨).

清代에는 北京의 內織染局과 江寧·杭州·蘇州織造局 등 네 곳의 官營 織造局이 있어[7] 進貢品으로 충당되는 것 외에 궁정 안의 모든 복식과 하사품으로 사용되는 紗 羅 綾 緞 綢 錦 絨 妝花 緙絲 刺繡 등에 쓰이는 재료의 생산을 책임지고 있었다.

이해를 돕기 위해 順治10年(1653)부터 雍正13年(1735) 사이의 江南 三織造局의 緞 생산량 변화 상황을 정리하면 〈表2〉와 같다.[8]

이상의 〈表1·2〉를 통해 順治에서 雍正까지의 기간 동안의 絹織業이 戰亂의 기복에 수반하여 결코 그 과정이 순조롭게 또 끊이지 않고 성장 추세에 있었던 것은 아니었으나, 이 시기 江南의 三織造局이 회복되고 그 지위 또한 공고하게 확립되었음을 알 수 있다.

〈表2〉順治10年(1653)~雍正13年(1735)의 江南 三織造局 緞 생산량 變化

織造局	年代	上用	官用	部派
蘇州	順治10年	503		3096
	順治15年			2600
	雍正元年	981	1600	1611
杭州	順治10年	502	2229	
	順治15年	1206	3973	2600
	雍正13年	400	6550	2655
江寧	順治10年	1000		
	順治15年			2600
	雍正13年	2265	1610	1157

(單位：匹)

7) 雍正, 大清會典, 卷201, "工部", "織造"
8) 表中數據出自：範金民：清代前期江南織造緞匹産量考, 曆史檔案, 1988年, 4期

3. 淸代 初期 絹織物 品種 分析

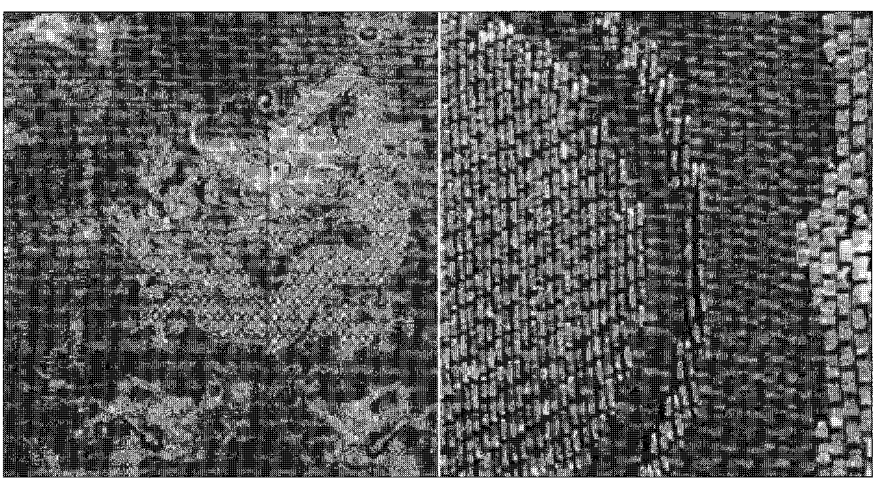
淸代 견직물의 품종에 관한 기록은 매우 풍부한데 대부분 전문적으로 絹織業을 기술한 저작물(예를 들어 衛傑의 『蠶桑萃編』)과 각 地方誌 중의 物産篇, 개인의 저술인 筆記·雜記 및 상품 명세서 등에 기록되어 있고, 이 외에 유물도 대량 존재하고 있다. 이들 문헌과 현존하는 유물, 그리고 현대 견직물의 분류 표준을 참조하여 淸初 견직물의 품종을 분류해 보면 대략 紗 羅 綾 緞 綢 絹 絨 錦과 縐絲 등으로 분류할 수 있다. 그 중 緞과 錦이 당시의 대표적인 품종이었다.

1) 緞

淸初의 緞織物은 직조기술과 외관의 특징을 기준으로 暗花緞(素緞 포함), 織金緞, 花緞, 妝花緞의 네 가지로 크게 나눌 수 있다.

문헌 기록을 통해서도 당시 緞의 품종이 상당히 풍부했음을 알 수 있는데 즉 順治 年間의 기록에 의하면 14년에 戶部가 사용에 대비하여 요청한 緞 7800匹 중의 蟒緞 大小閃緞 補緞 大緞 帽緞과, 衣素 藍素 蟒紗 등의 2600匹을 14~15年 사이에 蘇州에서 취소했다는 내용이 있다.[9] 또 『蘇州織造局志』에는 "八庹素廣段一疋,……閃錦段一疋, 閃段一疋, 六庹楊段一疋, 六庹彭段一疋" 등이 기재되어 있다.

이 밖에 유물로는 妝花緞 二色緞 織金緞 및 暗花緞 등이 대량으로 남아 있다〈表3 참조〉.



〈圖1〉 普藍織金雲蟒海水紋妝花緞 局部 및 細部組織圖: 淸初

9) 順治16年 4月 24日, 浙江巡撫佟國器揭貼

2) 錦

『大清會典事例』에 의하면 "康熙 元年에 江寧 織造局에 誥機(皇帝의 誥命에 쓰이는 직물을 전문적으로 짜는 직기) 35대를 설치하여 만약에 대비하도록 정하였는데, 각 부서에서 예상되는 필요에 따라 公文을 내어 제정된 양식에 따라 직조하도록 하였다. 誥命은 다섯 가지나 세 가지의 紵絲를 쓰는데 '奉天誥命' 이라는 글을 넣었고, 詰命은 純白의 실을 쓰는데 '奉天誥命' 이라는 글을 넣었다. 모두 升龍과 降龍 무늬를 넣어 짜는데 여기에 滿州語와 漢字를 겸하여 넣었다. 1品 玉軸鶴錦, 2品 犀軸璃錦, 3·4品 貼金軸詳蓮錦, 5·6品 角軸牡丹錦, 7品 以下 角軸小團花錦이다"[10]라 하였다. 이는 錦이 당시 얼마나 중요한 지위를 점하고 있었는지를 알 수 있게 하는 자료라 하겠다.

淸代 궁정에서 사용한 錦으로는 蘇州織造局에서 직조한 宋錦(宋式錦이라고도 함), 江寧織造局에서 직조한 雲錦, 四川의 蜀錦 등이 있었다. 그 중 宋錦은 또 重錦·細錦·匣錦으로 나눌 수 있고, 雲錦은 또 庫緞 織金 織錦과 妝花 직물("雲錦"은 단지 통칭일 뿐이고 그 안에 緞, 紗 등의 조직도 포함됨) 등으로 나눌 수 있다. 현재 남아있는 유물은 〈表3〉과 같다.

3) 紗와 羅

중국에서 전통적으로 말하는 紗는 평조직의 성글게 짜여진[方孔] 織物을 말하는 것으로, 비록 조직은 絹과 같으나 실이 훨씬 가늘고 또 經絲와 緯絲가 성기게 조직 된다[11](絞經織物로서의 紗는 後述). 羅는 經絲가 서로 꼬여서 조직되어 표면에 성긴구멍[椒孔]이 나타나는 것을 말한다.[12]

明末淸初의 上海 松江人인 葉夢珠는 자신의 筆記인 『閱世編』에서 여름 便服 재료에 관해 "여름용 옷감으로 처음에는 滿龍 團龍紗를 썼는데 禁令이 있은 후 宮紗와 官紗를 사용하였고, 그 뒤에는 素幅秋絹紗를 사용하였다. 지금은 廣絹 絨紗 葛紗 巧紗 漏地紗를 쓰는데 대개 직조가 가지런할 것과 (드러나는) 구멍이 고를 것을 요구하여, 비록 便服이라 할지라도 公服과 다를 바 없(이 고급이)었다 (夏布初用滿龍團龍紗 禁後用宮紗官紗 旣而用素幅秋絹紗 今用廣絹絨紗葛紗巧紗漏地紗 大概俱尙整矗 雖便服無異於公服也)"라 하였다. 또

---

10) "康熙元年定 江寧織造局設官誥機三十五張 遇應用之時 由部預期行文該織造如式置辦. 誥命用五色及三色紵絲 文曰奉天誥命 ; 敕命用純白線 文曰奉天誥命. 均織升降龍 文兼淸漢字. 一品玉軸鶴錦 二品犀軸璃錦 三四品貼金軸詳蓮錦 五六品角軸牡丹錦 七品以下角軸小團花錦" 嘉慶, 大淸會典事例, 卷709

11) 尙剛: 鶺綾絢爛, 鳳錦紛葩--隋唐五代的高檔絲織品種, 北京大學出版社, 2004年

12) 陳維稷主編 : 中國紡織科學技術史(古代部分), 北京 : 科學出版社, 1984年 ; 趙豐 : 唐代絲綢與絲綢之

『康熙桐鄉縣誌』에는 "羅有三梭 五梭 花羅 素羅, 紗有花紗 脚踏紗 縐紗等"[13]이라 하였다. 『蘇州織造局志』에서는 "九扃六則廣紗一疋, 九扃實地一雲紗一疋, 九扃漏地一雲紗一疋, 八扃素絹紗一疋"이라 하였다.

사실 元明時期부터 紗의 지위는 하락하기 시작하였는데 그럼에도 불구하고 기술은 지속적으로 발전하여 直經紗 妝花紗 二色紗 織金紗 등의 품종이 출현하였다.[14] 한편 淸代 宮廷에서 사용한 고급 紗 羅는 기본적으로 明代 織染局의 생산 품종을 유지한 가운데 새로이 창작된 것도 있었다.[15]

4) 絨

起絨織物(絨毛를 일으켜 짠 직물)은 그 바닥에 따라 緞 바닥에 絨으로 무늬를 넣은 것[緞地起絨花]과, 絨 바닥에 絨으로 무늬를 넣은 것[絨地起絨花]의 두 종류로 나눌 수 있다. 前者에 해당하는 것으로 漳緞이 대표적인데 提花型暗花絨이 바로 單色의 漳緞이고,[16] 후자에 해당하는 것으로 漳絨이 대표적인데 이는 또 天鵝絨이라 부르기도 한다. 현존하는 유물로는 萬字百蝠漳緞과 黃地蓮蝠紋漳絨 깔개 등이 있다(〈表3〉참조). 한편 『蘇州織造局志』에는 "四則鳳穿牡丹圓金心抹絨一疋 六則兩色圓金雲團龍心抹絨一疋……"의 기록이 나타나는데 여기의 "抹絨" 역시 起絨織物에 포함시키는 것이 마땅한 것으로 보인다.

5) 綢, 絹 및 緙絲 等

이들 직물에 관해서는 康熙 연간의 廣東 濮院 지역에서의 생산 내역을 통해 그 일면을 파악할 수 있다. 당시 생산품 중 綢는 花紡綢가 있었는데 무늬와 색상이 화려하였고 중국 전역을 대상으로 판매되었으며, 絹은 花絹 官絹 羅筐絹 素絹 帳絹 畫絹이 있었고, 散絲(꼬임이 없거나 아주 적은 실)로 짠 綾은 花綾 素綾 錦綾 등이 있었다.[17] 이 밖에 『蘇州織造局志』에는 "十扃兩則宮綢暗團袍一疋, 春綢一疋, 寧綢一疋"등의 綢 명칭이 나타나고 있다.

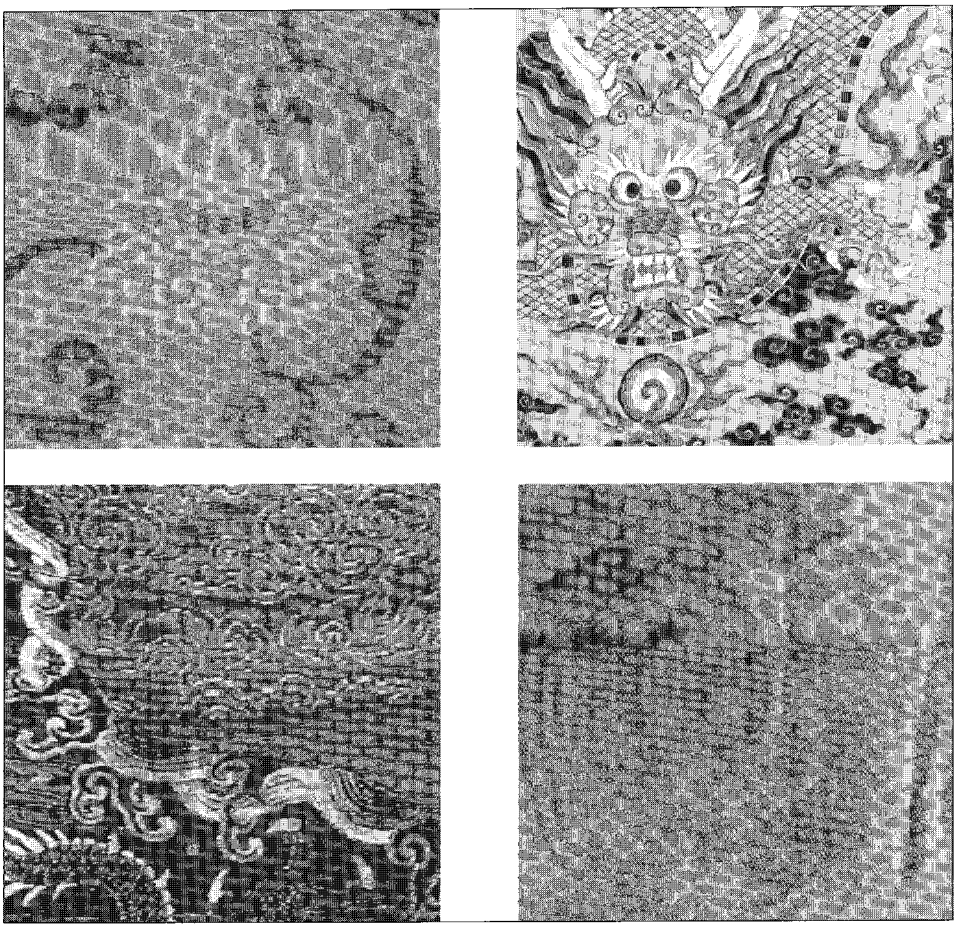
이상에서 살펴본 직물과 관련하여 현존하는 유물은 〈表3〉을 통해 파악할 수 있다.

---

13) 康熙桐鄉縣志, 卷二
14) 宗鳳英主編 : 故宮博物院藏文物珍品大系 --明淸織繡, 上海科學技術出版社, 2005年, 第一版
15) 黃能馥 · 陳娟娟 : 中華曆代服飾藝術, 北京 : 中國旅遊出版社, 1999年
16) 包銘新 : 中國古代暗花絲織物, 華東紡織工學院學報, 1985年, 第1期
17) 康熙桐鄉縣志, 卷二

〈表3〉 現存 淸初 絹織物 遺物

종류	품종	명칭	연대	소장처
緞	妝花緞	寸蟒紋妝花緞	雍正	北京故宮博物院
	二色緞	如意雲紋二色緞	康熙	北京故宮博物院
	織金緞	綠色地五彩萬字喜相逢織金緞	雍正	北京故宮博物院
	暗花緞	淺駝色行雲團龍紋暗花緞	淸代 初期	首都博物館
錦	宋式錦	蕃蓮紋重錦	康熙	北京故宮博物院
		蝴蝶采花紋匣錦	淸代 初期	北京故宮博物院
		蔓草紋加金細錦	雍正	私人
		雙龍盤條紋二色錦	淸代 初期	北京故宮博物院
		仜香色地龜背如意瑞花紋錦	康熙	北京故宮博物院
		四合如意蔓草紋錦	雍正	淸華大學美術學院
		藍地團龍八寶紋天華錦	康熙	淸宮舊藏
	雲錦	紅柿蒂“福”字方補紋織金錦	淸代 初期	首都博物館
		深藍地盤條朶花紋織金錦	康熙	淸宮舊藏
紗	妝花紗	藍地彩雲金蟒紋妝花紗	康熙	淸宮舊藏
		淺駝色雲鶴紋紗	淸代 初期	首都博物館
	芝麻紗	天靑地團龍鳳紋暗花紗朝袍	康熙	淸宮舊藏
	實地紗	仜香地松鼠葡萄紋暗花紗門簾	康熙	淸宮舊藏
綢	織金綢	綠地祥雲八寶紋織金綢	康熙	淸宮舊藏
緙絲	緙絲	紅地緙絲百子圖帳料	淸代 初期	北京藝術博物館
	緙絲	緙絲明黃地八寶雲龍紋吉服袍料	順治	淸宮舊藏
綺	綺	萬字朶花紋綺	康熙	私人
絨	潭緞	萬字百蝠潭緞	雍正	北京故宮博物院
	潭絨	黃地蓮蝠紋潭絨墊料	康熙	淸宮舊藏
綾	綾	暗八仙團鶴紋綾	淸代 初期	首都博物館
	暗花綾	白色纏枝牡丹紋暗花綾	康熙	淸宮舊藏



〈圖2〉 黃地蓮蝠紋緙絨: 康熙(上)
〈圖4〉 黃地蓮蝠紋緙絨: 康熙(下)
〈圖3〉明黃地八寶雲龍紋緙絲: 順治(上)
〈圖5〉明黃地八寶雲龍紋緙絲: 順治(下)

4. 緞의 改良과 그 重要性

1) 緞의 組織과 效果

緞織物은 緞組織을 응용하여 짠 견직물을 의미하는 것으로, 겉에서 보았을 때 광택이 있고 매끄러운 느낌이 난다.[18] 緞組織은 이웃하는 두 개의 經絲나 緯絲끼리의 배치 간격이 균일하여 經·緯絲가 만나는 조직점의 간격이 고르게 규칙적으로 분포하나 서로 연속되지는 않는 직물조직을 말하며, 經絲가 드러나 무늬를 표현하는 緞[經面緞紋(經緞)]과 緯絲가 드러나 무늬를 표현하는 緞[緯面緞紋(緯緞)]의 두 가지로 나눌 수 있다.

18) 包銘新 : 關於緞的早期曆史的探討, 中國紡織大學學報, 1986年, 第一期

緞織物은 그 線이 비교적 길게 떠서[浮] 조직되기 때문에 經絲와 緯絲가 교차되어 짜이는 지점이 적고, 또 고르게 織物 사이에 분포되어 있어 표면이 깨끗하고 광택이 있으며 부드럽다. 緞의 표면은 經·緯絲가 길게 떠서 조직되기 때문에 經·緯絲의 길이가 緞 표면의 효과를 결정하는 주요 요소 중의 하나가 되어 뜨는 길이가 길면 길수록 緞의 표면은 더욱 광택이 난다. 緞織物은 또 그 밀도가 높을 것을 요구하는데 밀도가 높아 충분히 죄어져야 經 緯絲가 만난 조직점이 그 양 옆의 실로 인해 덮여 가려지게 된다.[19] 또 실올이 가늘면 가늘수록 經緞과 緯緞의 表面이 더욱 보드랍고 매끄럽다.

2) 五枚緞과 六·七枚變則緞

緞의 組織은 時期에 따라 약간씩 다른 특징이 나타난다.

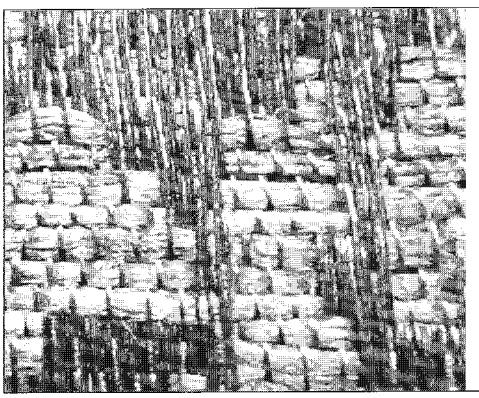
緞組織 중에서 가장 간단한 五枚緞이 가장 이른 시기에 나타나는데 그 조직은 五枚斜紋 또는 四枚破斜紋(불규칙적인 四枚斜紋)의 變化 조직으로 이루어져 있었고,[20] 淸 전에는 이 五枚緞 組織이 대부분이었다.

六枚와 七枚變則緞은 또 六絲와 七絲로 불려지기도 하고, 六絲는 六枚變則緞의 組織, 七絲는 七枚緞의 組織을 채용했다. 日本의 『和漢三才圖會』에 의하면 "六絲緞"은 廣東·南京·福建 등에서 직조하기 시작한 것으로 八絲와 비슷하나 사용하는 실이 적고, 광택 역시 이에 못 미치지만 "滑綾子(枚數가 비교적 낮은 斜紋 조직 緞)" 보다는 좋은 것이라 하였다. "七絲緞"은 廣東에서 생산되는 것인데 일종의 雜色 무늬가 있는 緞織物이라 하였다.[21] 이 중 六枚緞은 緞의 효과를 개선하기 위해 조심스럽게 실을 더욱 더 길게 뜨게 하고자 시도한 첫걸음이었으며, 끊임없는 이러한 시도로 후에 결국 七枚·八枚 심지어는 더 큰 枚數의 緞組織이 탄생하게 되었다.[22]

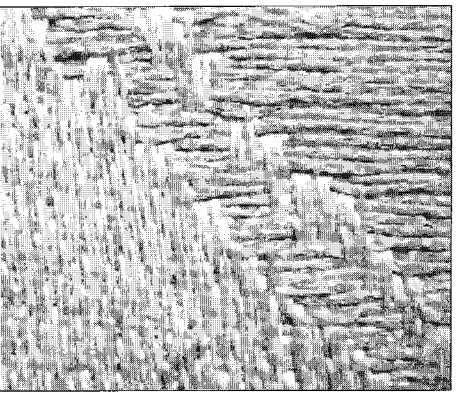
유물을 보면 五絲(五枚緞) 및 變則緞이 대량으로 緞의 바닥 무늬[提花]에 사용된 것을 볼 수 있는데 그 效果가 八絲緞에 못 미침을 알 수 있다. 이 때문에 무늬의 힘을 빌려 바닥의 결점을 덮어야만 이상적인 효과를 달성할 수 있었는데 특히 온통 무늬로 덮인[滿地花型] 품종이 더욱 그러하였다(이러한 직물은 바닥이 크게 드러나지 않는다).

---

19) 包銘新：關於緞的早期曆史的探討, 中國紡織大學學報, 1986年, 第一期
20) 包銘新：關於緞的早期曆史的探討, 中國紡織大學學報, 1986年, 第一期
21) 木宮泰彦：日中文化交流史, 1980年版, 胡錫年譯, 商務印書館
22) 包銘新：關於緞的早期曆史的探討, 中國紡織大學學報, 1986年, 第一期



〈圖6〉 八枚緞組織 局部



〈圖7〉 五枚緞組織 局部

3) 八枚緞과 淸地圖案

淸初의 緞織物은 明代의 기초 위에 큰 발전을 이루었다. 組織은 明代에 五枚와 六枚緞이 주를 이루던 것이, 淸初에는 七枚와 八枚緞이 주를 이루었다. 동시에 경사의 꼬임이 적어지고 훨씬 가늘어졌으며 밀도도 높아진 데 비해서 위사는 굵어지고 성글어졌다. 또 緞 표면의 광택을 보증하기 위해 직기를 장치할 때 안쪽[裏]이 나타나도록 하는 장치를 설치하여 직조 할 때 緞의 정면이 아래로 향하고, 안쪽이 위로 향하도록 하였다.

淸初의 廣東人 屈大均이 "竹枝詞"에서 "洋船爭出是官商 十字門開向二洋 五絲八絲廣緞好 銅錢堆滿十三行"[23]이라 하였는데 이 중의 五絲와 八絲가 바로 五枚緞과 八枚緞이다. 屈大均은 明末 崇禎二年(1629)에 태어나 康熙 35年(1696)에 사망한 인물이고 『廣東新語』는 그가 晩年에 지은 것이므로 이 詩에서 八絲緞이 언급되었다는 것은 이 조직이 늦어도 康熙 초기에는 이미 출현했음을 의미하는 것이다. 또 康熙 年間에 쓰여진 『蘇州織造局志』에도 八鹿八絲素一匹 九鹿八絲暗蟒袍一匹 九鹿八絲暗蟒掛一匹 九鹿八絲兩雲段一匹 등의 八絲로 된 素緞 및 暗花緞에 관한 명칭이 기재되어 있어 역시 八枚緞이 康熙 때 이미 존재했음을 확인시켜 준다. 한편 『諸物源流』에서는 "八絲緞長四丈 寬二尺四寸 系廣貨 另有一種花軸緞 也叫八絲緞 長三丈 寬一尺六寸"이라 하였는데 이는 八絲緞의 주요 생산지가 廣州임과 함께 기타 지역에서도 생산됨을 말해 주는 것이고, 또 분명하게 언급하지는 않았으나 八絲緞 내에서도 또 약간의 차이가 있음을 말해주는 것이라 할 수 있다. 五枚緞과 비교했을 때 八枚緞은 經絲 밀도가 더욱 높고, 실이 뜨는 길이도 더욱 길어서 광택도 더욱 아름답다. 이 때문에 당시 八絲緞에 대해 "바닥이 촘촘하고 고르며 그 色은 선명하면서 화려하고, 광택이 반들반들하다 (質密而勻, 其色鮮華, 光輝滑澤)"라는 평가가 있었다.[24]

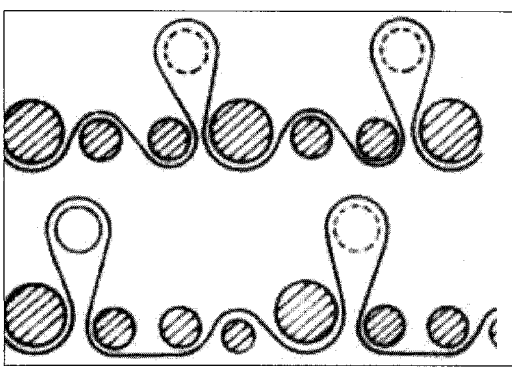
---

23) 屈大均 : 廣東新語, 卷15, 貨語, 中華書局, 1985年

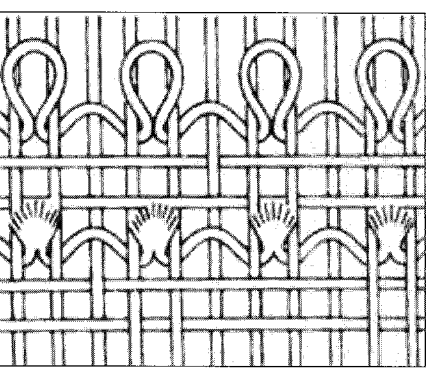
八枚緞의 출현은 緞組織의 표면에 비교적 이상적인 효과를 가져와 더욱 광택 있고 반들반들해져서 더 이상 錦緞類의 직물처럼 滿地花紋으로 바닥을 덮어 緞 조직의 부족한 효과를 가릴 필요가 없어졌다. 淸代의 傳世 유물들을 보면 緞組織의 효과가 매우 아름다운 素緞 및 淸地圖案의 緞組織 織物이 갑자기 대량으로 나타난다(緞 바닥에 刺繡를 놓은 직물과, 緞 바닥이 크게 드러나는 妝花 직물 등 포함).

4) 緞

漳緞은 자카드 직기[提花機]를 사용하여 직조하는 것으로, 經面緞紋과 杆織法(필요 부분에 철사를 직입하는 방법〈圖8 참조〉. 絨毛 上部의 점선으로 된 圓이 직입한 철사를 표현한 것임.)으로 經絲 방향의 絨毛를 일으킨 組織이 혼합되어 서로 무늬와 바닥을 이룬 견직물의 일종이다. 絨根을 고정하는 데는 W法을 채용하는데, 굵기가 서로 다른(한 쪽은 굵고 한 쪽은 가는) 위사를 배열하여 絨毛가 원하는 방향 쪽으로 기울어져 서도록 한다(즉 〈圖8〉에서 보듯 경사인 絨毛가 서는 부분의 양 쪽에 배치된 위사를 한 올은 가늘게 한 올은 굵게 함으로써 絨毛는 자연스럽게 위사가 가는 쪽으로 기울어짐).



〈圖8〉 漳緞絨根 固定 示意圖



〈圖9〉 雕花絨 組織圖

이 漳緞은 漳絨과 함께 起絨織物로 통칭되는데, 고대인들은 또 간단하게 "大絨"이라 하기도 하였다. 淸人인 葉夢珠는 "大絨은 前朝[明]에서 가장 귀한 것이었는데 가늘면서도 정교한 것을 '姑絨'이라 하였다(大絨前朝最貴 細而精者謂之姑絨)"고 한 바 있다. 여기서 말하는 것처럼 明代에 비록 大絨이 생산되기는 하였으나 그 수량은 많지 않았고, 일반적으로 漳緞은 明代에 창조되어 淸代에 이르러 유행했다고 여겨지고 있다. 明末의 宋應星이 쓴 『天工開物』에 의하면 漳緞 기술은 日本에서 들어온 것으로 이 때문에 "倭緞"이라고도 하

24) 趙豐 : 中國絲綢通史, 蘇州大學出版社, 2005年11月第一版

였고, 또 당시 福建 漳州에서 모방해 제작하는 기술이 가장 좋았기 때문에 "漳緞"이라는 명칭을 얻었다고 한다. 明代의 漳緞은 暗花가 주를 이루었는데, 清代에 康寧(南京)織造局에 "倭緞堂"을 건립한 것을 계기로 漳緞의 생산 중심이 南京 일대로 옮겨오게 되면서 점점 무늬가 화려한 漳緞의 생산이 증가하였다. 이는 清代의 『織造檔』과 『進貢檔』의 기록을 통해 확실히 파악할 수 있다. 이에 의하면 南京에서 織造한 漳緞은 그 무늬의 색상이 많게는 6·7種이나 되었고, 그 용도도 광범위해서 福建에서 進貢하는 暗花漳緞이 미칠 수 있는 바가 아니었다.

이와 같이 漳緞이 비록 明代에 이미 존재하였다고는 하나 清初에 이르러서야 안정되기 시작하였고, 생산도 확대되었다. 무늬와 조직 등에 있어서도 비교적 큰 진전이 있어 생산이 성숙기에 접어들었고, 응용 역시 더욱 광범위해졌다.

5. 絞經組織의 간단화 및 네 가지 전형적인 品種

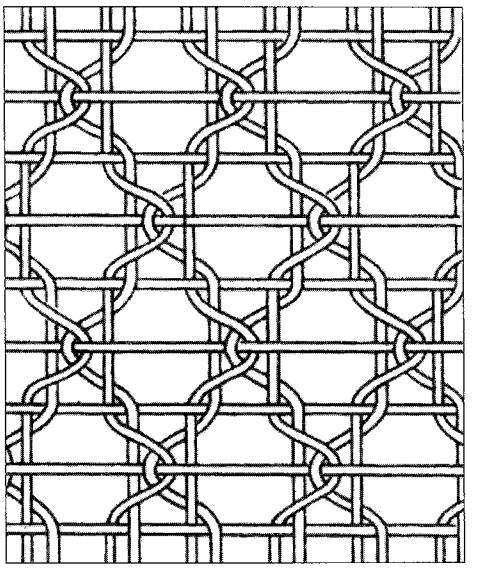
1) 鏈式羅 등 복잡한 古代織物의 소멸

紗織物은 전부 혹은 부분적으로 경사가 꼬여서 고르게 구멍이 분포되는 紗組織의 견직물을 말한다.[25] 漢·唐 사이에는 보통 이러한 絞經織物을 羅라 칭하고, 가벼우면서 얇고 구멍이 성긴 平組織 織物을 紗라 하였는데 즉 소위 "椒孔曰羅 方孔曰紗"가 그것이다. 明清 시기에 이르러서는 絞經織物이 紗羅로 통칭하기 시작하였다.

中國 고대의 暗花羅가 채용한 組織은 특히 복잡하고 다채로운데 그 조직 방법에 따라 有固定絞組와 無固定絞組의 두 종류로 나눌 수 있다.[26] 有固定絞組暗花羅의 전형적인 조직으로는 二經絞暗花羅(三梭羅 五梭羅 七梭羅 등의 横羅 조직과 平組織 등 간단한 조직이 서로 무늬를 이룬 직물)와 三經絞暗花羅의 두 종류가 있고, 無固定絞組羅 직물은 쇄사술[鏈] 형태의 모양이 나타남으로 인해 鏈式羅라 불리기도 하였다.

暗花羅는 絞綜이 장치된 多綜多躡機나 束綜花樓機를 써서 직조해야 했기 때문에[27] 직조가 상대적으로 복잡하고 어려웠다. 鏈式羅 등 고대의 복잡했던 직물은 漢·唐 時期에 중요한 위치를 점하고 있었고 宋代에도 꽤 유행했었으나, 明末清初에 이르러서는 그 직조에 시간과 노력이 너무 들여지는 관계로 점점 상대적으로 직조가 간단하면서 무늬의 효과가 비슷한 横羅 및 이와 유사한 품종으로 교체되어 갔다. 남아있는 유물 역시 점점 귀해 지는데

25) 包銘新：紗類絲織物的起源與發展, 絲綢, 1987年, 第11期
26) 包銘新：中國古代暗花絲織物, 華東紡織工學院學報, 1985年, 第1期
27) 中國古代暗花絲織物, 華東紡織工學院學報, 1985年, 第1期



〈圖10〉 鏈式羅 조직도

美國의 한 박물관에 소장된 淸代 龍袍의 소매에 무늬가 없는 四絞經羅가 꿰매져 있는 것을 본 적 있으나 그 직조기술은 이미 매우 조악한 것이었다.

2) 네 가지 전형적인 品種

淸初에 紗의 직조 공예는 지속적으로 발달하여 江寧에서 생산한 直經紗 芝麻紗 狀花紗 實地紗가 유행하기 시작하여 그 얇고 가벼움 때문에 명성을 떨치게 되었고, 부드러움과 투명성도 좋아 皇室 및 百官의 여름철 옷감으로도 이용되었다.

① 亮地紗

亮地紗는 "경사 두 올이 한 조로 꼬인 [一絞一]" 紗 조직이 바닥을 이루고 평조직이 무늬를 이루는 직물로, 겉에서 볼 때 바닥이 밝고 무늬가 어두운 효과가 난다. 이 직물은 宋代에 "亮地紗"라 하였고, 明淸 시기에는 "直地紗"라고도 하였다. 亮地紗는 경사가 가늘고 위사가 굵은데 위사는 꼬임이 없거나 있어도 약간 꼬일 뿐이고, 경사는 S꼬임이다.

② 實地紗

實地紗는 평조직이 바닥을 이루고 '一絞一' 의 紗 조직이 무늬를 이루는데, 실에 가한 일정한 정도의 꼬임과 경 · 위사의 밀도 변화를 통해 그 평조직의 바닥에 좁쌀 같은 무늬[粟紋]를 표현한다. 宋代의 문헌 중에 粟地紗가 있는데 이는 바닥에 粟紋이 나타나는 實地紗

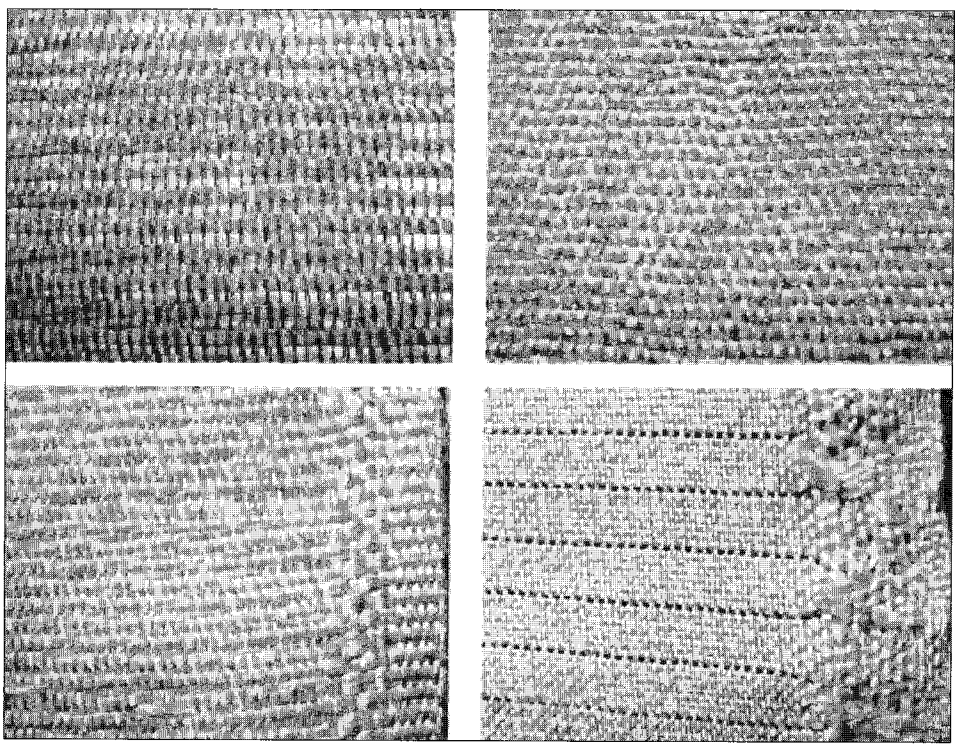
로 봄이 마땅하다고 본다. 흔히 볼 수 있는 實地紗 유물은 꼬임을 통해 나타나는 구멍[絞孔]으로 圖案의 윤곽선만을 묘사하고 윤곽선 안의 무늬는 보통 평조직으로 하는데, 위사가 많이 드러나게 하여 사선 모양의 조직이 나타나도록 짠 것도 있었다. 윤곽선을 평조직으로 채운 實地紗는 비교적 두꺼워서 봄철 옷으로 적당했고, 이 때문에 "春紗"라 부르기도 하였다.

③ 芝麻紗

芝麻紗는 實地紗로 된 바닥 위에 다시 평조직으로 무늬를 짠 것으로, 참깨[芝麻] 모양의 작은 무늬가 나타나기 때문에 "芝麻紗"라 하였다. 芝麻紗의 바닥 무늬는 또 大芝麻와 小芝麻의 구별이 있다. 大芝麻 바닥은 6개나 8개의 꼬임이 한 단위가 되어 한 개의 참깨 모양을 만들고, 小芝麻는 4개의 꼬임이 한 단위가 된다.

④ 橫羅(七梭, 五梭)

橫羅는 羅織物의 일종으로 '一絞一'의 絞經 조직이며, 每 3梭 5梭 7梭 혹은 13梭(우리말의 3足, 5足 등에 상당함-역자 주)의 平紋을 織入한 후 경사를 한 번 꼬아 직물의 표면에 한



〈圖11〉 亮地紗 局部(上)
〈圖12〉 實地紗 局部(上)
〈圖13〉 芝麻紗 局部(下)
〈圖14〉 橫羅 局部(下)

줄의 가로선이 나타나도록 하는 것으로, "3絲(梭)羅 · 5絲(梭)羅 · 7絲(梭)羅 · 13絲(梭)羅" 등으로 부른다. 淸代에 "杭羅"로 불려진 것은 대부분 橫羅 조직이었다.

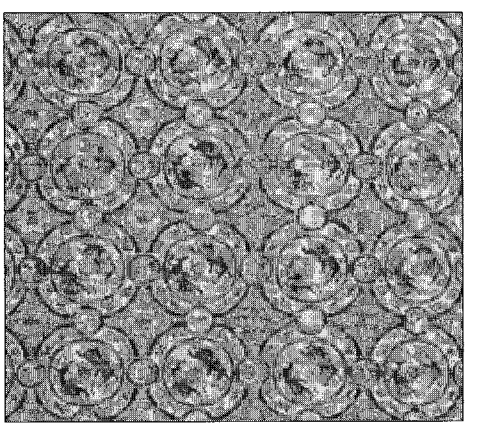
6. 宋式錦

淸初의 통치계급은 모든 장식에 있어 우아한 기풍을 숭상하였다. 康熙 연간에 어떤 사람이 江蘇 泰興의 李氏로부터 宋代에 表具된 『淳化閣帖』 두 幅을 구입하여 거기에 표구한 宋錦 22種을 떼어내 다시 蘇州의 옷감 짜는 곳에 팔아 그 무늬를 견본으로 蘇州의 당시 織錦工藝 기술과 결합하여 직물을 생산하도록 하였다. 이 때문에 이 직물을 "宋錦"(宋式錦이라고도 함)이라 칭하게 되었고, 그 명칭은 끊이지 않고 오늘날까지 사용되고 있다.

宋式錦은 바닥이 매우 얇고 조직이 세밀한 직물로 蘇州에서 생산되는 것 중 가장 아름다운 것이며, 그 대표적인 것으로 八達暈錦 · 天華錦 · 龜背錦 등이 있다.

宋式錦의 무늬는 대부분 幾何紋의 테두리 안에 여러 무늬가 있는 것으로 형식성이 강하기 때문에 장식용으로 많이 쓰인다. 宋式錦은 기술의 섬세도와 사용 재료의 優劣이나 직물의 두께 등에 따라 重錦 · 細錦 · 匣錦의 세 가지로 나눌 수 있다. 重錦은 그 중에서 가장 진귀한 품종으로 주로 깔개와 진열품의 재료로 사용되었다. 細錦은 重錦보다 훨씬 가늘고 얇은 것으로 重錦에 비해 색채와 무늬가 간단하고 조직이 성기다. 匣錦은 주로 그림의 표구나 작은 상자의 표면에 붙이는 데에 쓰였다.

후에 직조공예의 끊임없는 발전에 따라 宋式錦의 품질도 계속 정교해 져서 淸代 早期의 宋式錦이 주로 三枚經斜紋으로 바닥이 조직된 데 비해, 후에는 주로 五枚 · 六枚 · 八枚緞바닥으로 조직되었다.



〈圖15〉 粉紅地雙獅球路紋宋式錦 : 康熙

종합해서 말하자면 清初는 清代 絹織業이 재기를 꾀했던 시기이고, 이후 絹織業의 번영에 기초를 다지는 시기였다. 清初 견직물의 품종은 대략 紗 羅 綾 緞 綢 絹 錦 絨 縐絲 등으로 분류할 수 있다. 清初에 있은 八枚緞의 출현은 緞組織의 표면에 비교적 이상적인 효과를 가져와 직물이 더욱 매끄럽고 광택이 있게 되었으며, 이로써 대량의 緞組織 효과가 두드러지는 매우 아름다운 素緞 및 清地圖案의 緞組織 직물이 출현하게 되었다. 漳緞의 직조기술은 清初에 안정적인 발전을 이루었고, 동시에 대량 생산이 가능해졌다. 무늬와 조직에 있어서도 비교적 큰 발전이 있었으며, 그 사용도 광범위해 졌다. 鏈式羅 등의 고대 복잡직물은 明末清初에 그 직조에 시간과 노력이 많이 투자됨으로 인해, 점점 상대적으로 직조가 간단하고 무늬의 효과도 비슷한 橫羅 亮地紗 實地紗 芝麻紗 등의 품종으로 대체되어 갔다. 宋式錦은 宋代 이래 계속돼 온 장식용 錦의 공예와 무늬를 清初에 결산한 것이라 하겠는데 형식성이 보다 강해졌고, 주로 裝飾用으로 사용되었으며 직조 공예도 끊임없이 발전되어 품질도 계속 정교해졌다.

(본고의 번역은 원문의 직역을 기본으로 하되 필요에 따라 필자와의 토론 내용을 기초로 약간의 보충을 가했음을 밝힌다. - 역자)

참고문헌

正德，明會典，卷161，工部15；萬曆，明會典，卷201，工部21

趙豐：中國絲綢通史，蘇州大學出版社，2005年11月，第1版

範金民：清代前期江南織造緞匹産量考，曆史檔案，1988年，第4期

嚴勇：清代的官營絲織業，故宮博物院院刊，2003年，6期

雍正，大清會典，卷201，"工部"，"織造"

表中數據出自：範金民：清代前期江南織造緞匹産量考，曆史檔案，1988年，4期

順治16年 4月 24日，浙江巡撫佟國器揭貼

"康熙元年定，江寧織造局設官誥機三十五張，遇應用之時，由部預期行文該織造如式置辦.

誥命用五色及三色紵絲，文曰奉天誥命；敕命用純白線，文曰奉天誥命. 均織升降龍，文兼清漢字.

一品玉軸鶴錦，二品犀軸璃錦，三四品貼金軸詳蓮錦，五六品角軸牡丹錦，七品以下角軸小團花錦"--嘉慶，大清會典事例，卷709

尙刚：鶺綾絢爛，鳳錦紛葩--隋唐五代的高檔絲織品種，北京大學出版社，2004年

陳維稷主編：中國紡織科學技術史(古代部分)，北京：科學出版社，1984年；趙豐：唐代絲綢與絲綢之路，西安：三秦出版社，1992年

康熙桐鄉縣志，卷 2

宗鳳英主編：故宮博物院藏文物珍品大系--明清織繡，上海科學技術出版社，2005年，第 1版

黃能馥 陳娟娟：中華曆代服飾藝術，北京：中國旅遊出版社，1999年

包銘新：中國古代暗花絲織物，華東紡織工學院學報，1985年，第 1期

康熙桐鄉縣志，卷 2

包銘新：關於緞的早期曆史的探討，中國紡織大學學報，1986年，第 1期

木宮泰彦：日中文化交流史，1980年，胡錫年譯，商務印書館

包銘新：關於緞的早期曆史的探討，中國紡織大學學報，1986年，第 1期

屈大均：廣東新語，卷15，貨語，中華書局，1985年

趙豐：中國絲綢通史，蘇州大學出版社，2005年11月第 1版

包銘新：紗類絲織物的起源與發展，絲綢，1987年，第11期

包銘新：中國古代暗花絲織物，華東紡織工學院學報，1985年，第1期

中國古代暗花絲織物，華東紡織工學院學報，1985年，第1期

包銘新

上海, 東華大學(前中國紡織大學) 服裝學院 박사지도교수

주 소 : 中國 上海市 延安西路 1882號 東華大學 服裝學院(우: 200051)

전 화 : 86-21-62373714

팩 스 : 86-21-62379188

E-mail : baomingxin@hotmail.com

출토복식을 통해보는
임진왜란 이전 남녀복식의 조형적 특징

박성실*

목 차

Ⅰ. 머리말
Ⅱ. 남성복식
Ⅲ. 여성복식
Ⅳ. 맺음말

Ⅰ. 머리말

壬辰倭亂은 宣祖 25년(1592)부터 32년(1599)까지 7년간에 걸쳐 발생되었던 倭軍과의 전쟁을 말하며 1차 침입이 壬辰年(1592)이었으므로 임진왜란이라 하고 2차 침입은 丁酉年(1597)으로 丁酉再亂이라 하나 통상적으로 이 兩亂을 두고 임진왜란이라 한다. 임진왜란의 여파는 조선 뿐만 아니라 일본과 명나라에도 큰 타격을 주었으나 싸움터가 된 朝鮮의 피해는 막대하여 朝鮮社會 전반에 영향을 미쳤으며 오백년의 역사를 전 · 후기로 兩分시킬 정도의 심각한 상처를 남겼다. 복식문화 변천에도 직접적인 영향을 미쳐 복식의 종류, 소재, 부분적인 형태변화에 이르기까지 매우 구체적인 변화가 나타났다. 이와 같은 사실은 문헌기록보다는 당시의 출토복식 실물자료에서 실증적으로 관찰된다. 전래되는 임진왜란 이전 유물은 월정사 소장 世祖御衣로 전해지는 '한삼' (보물 제793호)과 세조대 회장저고리(중요민속자료 제219호)가 있을 뿐이다. 필자와 출토복식과의 인연은 1968년 경기도 광주에서 출토된 定宗의 駙馬 朴賓의 5대 孫婦인 안동김씨(1560년대 추정) 출토복식이다. 은사인 孫敬子교수님(한국복식학회 고문)과 이를 취재한 한국일보 故 金海雲기자와 동행한 것이 첫 번째의 발굴현장 답사였다. 당시 함께 발굴된 양호한 상태의 여성미라가 최초로

* 단국대학교 대학원 전통의상학과 교수

공개되어 세인의 관심을 받은바 있다. 현재 이 유물은 국립민속박물관에 소장되어 있다. 1970년도 후반부터 시작된 정부의 국토개발정책의 여파로 도시근교 야산에 산재한 조상들의 분묘가 이장되기에 이르렀고 1981년 7월 "단국대학교 석주선기념민속박물관" 개관 기념으로 개최된 "광주이씨 수의 특별전"[1]이 "수의"라는 명칭을 사용하였으나 최초의 출토복식 특별전이자 연구의 시발점이 되었다. 이를 계기로 출토복식 발굴정보나 기증은 계속되었고 결과적으로 많은량의 출토복식을 소장하게 되었다. 처음 대면한 16세기 출토복식은 매우 생소하였고 동정부분의 오염, 보수된 부분 등에서 체취가 느껴지는 흔적들로 인해 생전에 착용되었던 복식임을 알 수 있었다. 이와동시에 임진왜란을 전후한 인물들의 복식류가 현저한 차이를 보이고 있는 사실도 확인할 수 있었다. 이를 정리한 본인의 졸고「朝鮮前期 出土服飾 硏究" -壬辰倭亂 以前時期를 중심으로-」"[2]가 처음으로 발표 되었다.

현재 전국 도처에서 발굴된 복식류는 조선시대 전시기에 걸쳐 있으며 최고의 벼슬인 영의정으로부터 벼슬길에 오르지도 못하고 생을 마감한 서민들에 복식까지 다양하게 포함되어 있다. 유교적인 매장제도에 따라 발굴되고 있는 출토복식들은 당시의 葬俗을 고려하지 않는 등 연구초기에는 적지않은 시행착오를 경험하였으나 이후 활발한 연구가 계속되어 상당부분 수정 보완되었으며 조선시대 복식연구에 매우 중요한 자료가 되고 있다. 그러나 아직도 해결되지 않는 문제들이 남아있으며 앞으로 발굴될 새로운 자료에 기대를 걸고 있다.

금번 蘭斯 石宙善박사님의 추모 10주기를 기념하여 개최되는 출토복식특별전 **"다시 태어난 우리옷 환생"**은 단국대학교 석주선기념박물관의 소장품 가운데 보존상태가 양호하고 학술적 가치가 높은 것을 선별하여 전시함으로서 또한번의 의미있는 특별전으로 기록될 것이다. 소장처마다 분묘별 복식연구는 활발하게 이루어졌으나 종합적인 전시는 처음으로 시도된 특별전이기 때문이다. 이를 계기로 발표된 선행연구에 기초하여 조선시대 복식문화를 양분한 임진왜란 이전 남녀복식의 조형적인 특징들을 정리해 보기로 한다.

본고에서는 2006년 2월까지 발표된 연구보고서 가운데 몰년을 기준으로 임진왜란 직후까지(1610년 이전) 생존하였던 인물들의 복식류를 대상으로 하였다. 임란직후는 전기의 복식이 반영되어 있는 동시에 후기의 변화가 보이기 시작하는 과도기이기 때문이다. 한편 이장방법에 따라 출토되는 복식의 수량은 현저한 차이를 보이는데 발굴초기부터 전문가가 참여한 처녀분의 발굴은 최근에 와서 이루어지고 있는 추세이기 때문에 연구초기의 자료들이 상당수 포함된 한계점을 가지고 있다.

---

1) '과천출토 광주이씨 의복(중요민속자료 제114호)" 단국대 석주선기념박물관 소장.
2) 박성실,「朝鮮前記 出土服飾 硏究」-임진왜란 이전시기를 중심으로-, 세종대학교 박사학위청구논문, 1992.

Ⅱ. 남성복식

조선시대 남성복식은 신분별 冠服과 通常禮服으로 착용되었던 다양한 형태의 袍制중심의 구조를 하고 있다. 여기에 바지와 저고리는 기본복으로 袍制의 裏衣나 서민들의 평상복으로 착용되었다. 그밖에 褙子나 方領, 조끼, 마고자 등 간편한 上衣류가 포함되어 있다. 冠服은 祭服, 朝服, 公服, 常服으로 대별되며 법전에 포함되지 않은 戎服[軍服]이 있다. 이들 관복들은 임진왜란을 계기로 구체적인 변화가 시작된 이래 부분적인 변화가 거듭되면서 국말까지 착용되었다. 통상예복도 임진왜란을 분수령으로 前期와 後期로 구분되어 옷의 종류와 형태의 변화를 가져와 시대적을 특징을 보인다. 16세기에는 신체에 비해 매우 크고 넓게 만들어 위엄과 체통을 지키고자 하였던 권위적인 형태는 임란직후부터 점차 실용적인 기능이 포함되는 변화를 보이기 시작한다.

임진왜란 이전시기(이하 "前期"라 함)의 출토복식은 李季胤(1481-1489)묘 출토복식이 가장 이른시기의 것이며 나머지는 모두 16세기에 걸쳐있다. 이계윤의 출토복식은 답호, 액주름, 직령, 철릭 등이며 보존상태가 매우 불량한 채로 발굴되어 완형의 형태는 남아있지 않다. 전기 출토복식을 통하여 확인되는 남성복식류는 단령, 직령, 답호, 철릭, 장의, 액주름, 도포등이며 심의나 중치막 등은 전기 문헌자료에서 확인되고 있으나 실물자료는 임란이후부터 확인된다. 또한 두루마기형이나 方領은 전기 문헌에서 보이지 않거나 일부에서 확인되지만 실물자료는 적지않게 나타난다. 그밖에 바지와 저고리의 실물은 기본복으로 포함되어 있으나 임란이전의 바지류는 여자의 속옷과 동일한 형태로 발굴되고 있다. 또한 남자용 "저고리"의 용어는 『미암일기』 외에 대부분 후기자료에서 확인되며 이에 해당하는 용어로 "裹肚"가 있다. 일반적으로 알려지고 있는 殮襲用具와 달리 남자용 저고리에 해당하는 용도로 사용되었다. 그밖에 속옷이나 하절용으로 착용된 한삼과 적삼, 홑바지 등이 있다.〈표1 참조〉

1. 團領

단령은 常服, 公服, 時服으로 착용된 백관들의 기본적인 冠服이다. 조선시대 단령은 고려 禑王 13년(1386) 명 태조가 僎長壽에게 하사한 紗帽와 團領에서 비롯되었다. 이어 鄭夢周, 李崇仁, 河崙 등이 胡服을 혁파하고 명나라 제도에 기준한 관복을 착용하게 되었으며[3] 이 제도는 조선으로 이어졌다. 조선초기의 단령형태는 『악학궤범』 악공인의 관복인 흑단령과 매우 유사하다. 깃파임이 적고 소매가 수구쪽으로 좁으며 양쪽에 달린 무의 머리가

3) 『高麗史』 列傳 辛禑 13년 5월, 志卷 26 輿服志 참조

〈표 1〉 16세기 남성복식 출토현황

번호	분묘 형태	묘 주	연대	출토지	출토 복식류	소장처	참고문헌
1	合葬(男) 同墓異槨	전주이씨 · 문양군 이계윤 · 兄영천군 이담	· 1431 ~1489 · 1379 ~1431	경기도 광주군 (1989)	문양군+부인최씨 :직령1, 답호1, 철릭6, 액주름1, 한삼1, 누비너른바지 1, 세조대1, 기타 영천군: 조선통보 6엽(六葉), 문양군의 형 문평군의 손부 이씨(한평이씨) : 구슬11개	단국대석주선 기념박물관	한국복식 제 11호 (1993)
2	合葬(男) 同墓異槨	원주변씨 변수 (이조참판)	1447 ~1524	경기도 양평 (1997)	단령2, 답호7, 요선철릭3, 철릭13, 저고리1, 바지류2, 모자1, 조아1, 악수 한 쌍, 복식류가 총 30여점 멱목, 금 등의 염습구가 2점, 남녀 목우	국립민속 박물관	오백년의 침묵, 그리고 환생(2002) /생활문문연구11, (2003.12)
3	合葬(男) 同墓異槨	의성김씨 김흠조 (판결사)	?~1528	경북 영주시 (1997)	단령7, 직령2, 답호11, 철릭13, 상의류6, 바지류8, 모자1, 도아1, 기타	온양민속 박물관	판결사김흠조 선생 합장묘 발굴조사 보고서(1998)
4	合葬 雙墳(男)	장흥고씨 고운	1479 ~1530	광주시 압촌동 (1986)	단령1, 직령2, 철릭6, 답호3, 바지류 5, 소모자2, 기타 부속유물20점(마장, 관 · 곽, 명정, 자리, 칠성판) 등	광주민속 박물관	하천고운출토유물 (2000)/광주전남지역 출토 조선 중기의 우리옷(2000)
5	合葬 雙墳(男)	경주정씨 정온(통례원찬의)	1481 ~1538	경기도 파주군 (1995)	단령2, 답호2, 철릭7, 직령2, 액주름 1, 저고리류6, 방령1, 바지류3, 치마 1〈다라니경 치마저고리〉, 기타	단국대 석주선 기념박물관	한국복식제16호 (1998)
6	(男墳墓) (女墳墓)	· 광주이씨 이언웅(자부 청주한씨)	1550년대	경기도 과천 (1979)	창의, 철릭, 무명누비포, 무명겹포 각1점, 창옷 6, 모시포와 모시적삼 3씩(자부 청주한씨의 옷과 섞였음)	단국대 석주선 기념박물관	한국복식 제1호 (1983) / /문화재대관 下
7	合葬 (男女) 同墓異槨	남양홍씨 (홍계강?)	1550년대 (수정)	경기도 양주군 (1980)	남복 : 단령 3, 철릭 7, 직령 4, 장옷 2, 누비포 1 여복 : 저고리 3, 치마 4, 바지 3, 기타 습신 버선등 (복식이 섞였을 가능성이 있다.)	단국대 석주선 기념박물관	한국복식 제1호 (1983)
8	合葬 (男女) 同墓異槨	진주류씨 (배위 의인 박씨)	16세기 중후반	경기도 안성시 (2002)	저고리(목판깃)1, 저고리(남자)1, 철릭5, 장의 1,단령1, 직령1, 액주름 1, 바지(개당고)2, 멱목 명정 구의 직물류	경기도 박물관	진주류씨합장묘 출토복식 (2006)
9	合葬 (男女) 同墓異槨	나주정씨 · 정응두 (종1품判府事) (배위 은진송씨)	1508 ~1572	경기도 고양군 (1988)	단령 1, 답호 7, 철릭 23, 액주름 1, 직령 2, 방령 1, 배거리 1.	단국대 석주선 기념박물관	한국복식 제9호 (1991)

번호	분묘 형태	묘 주	연대	출토지	출토 복식류	소장처	참고문헌
10	單葬 男墳墓	전주이씨 · 이팽수(배위 안산김씨)	1520~?	경기도 성남시 (1991)	답호1, 철릭,1, 액주름포1, 장의1	고려대 박물관	전주이씨태안군묘 발굴조사보고서 (1992)
11	(男墳墓)	고령신씨 신언식 (참봉공)	1519 ~1582	경기도 일영 (1998)	단령 1, 포류 6, 저고리, 지요, 자리, 책 등 10점(신말주의 子/ 子婦 숙부인 양천허씨)	단국대 석주선 기념박물관	한국복식 17호 (1999)
12	合葬(女) 同墓異槨	고령신씨 신여관 (종4품군수) (신언식의 從弟)	1530 ~1580	경기도 일영 (1998)	단령1, 철릭10, 답호3, 액주름1, 장의2, 직령3, 저고리류2, 방령1, 바지류3, 모자류2, 광다회1, 염습구로 천금, 지요, 악수, 멱목, 자리	단국대 석주선 기념박물관	한국복식 17호 (1999)
13	合葬(男) 同墓異槨	성주이씨 이언충	1524 ~1582	서울시 노원구 (2000)	답호6, 직령4, 철릭4, 액주름포1, 적삼2, 바지6, 명정	단국대 석주선 기념박물관	한국복식 제20호 (2002)
14	合葬 雙墳(男)	벽진이씨 이석명 (종4품郡守)	1513 ~1583	경기도 김포시 (1999)	도포, 직령, 답호 각 1, 철릭8, 액주름포2, 미상포3, 저고리1, 바지1, 그 외에 악수 1쌍, 멱목1, 육합모1, 복건1, 대2, 주머니1, 이불2, 소매2장 등	서울대 박물관	이석명묘출토복식 조사보고서(2000)
15	(男墳墓)	안동김씨 · 김 첨	1541 ~1584	경기도 광주군 (1985)	솜바지1, 직령포2, 솜이불2	충북대 박물관	출토유의 및 근대복식논고 (1987)
16	單葬 男墳墓	벽진이씨 (첨지 중추부사)	1585卒	경북 칠곡군 (1991)	단령1, 직령1, 액주름4, 방령1, 바지류2, 소모자1	경북대 박물관	박성실(1992) 조선전기 출토복식 연구
17	單葬 男墳墓	고성이씨 이응태	1556 ~1586	경북 안동시 (1998)	단령1, 직령5, 철릭7, 장의2, 액주름2, 저고리류11, 치마1, 바지류12, 소모자1, 기타, 미투리, 행전, 부인이 죽은 남편에게 보내는 편지, 형 몽태가 지은 애도의 글 출토	안동대 박물관	역사스페셜, 1998 '450년만의 외출 /안동 정상동 일선문씨와 이응태묘 발굴 조사보고서(2000)
18	合葬 雙墳(男)	청송심씨 심수륜	1534 ~1589	경기도 용인시 (2001)	적삼1, 한삼1, 주의3, 액주름1, 철릭9, 직령3, 답호1, 단령1, 배자1, 바지6, 帶2, 복건1, 소모자2, 행전1, 버선3, 습신1, 멱목1, 악수1, 명정1, 소렴금1, 기타 등	경기도 박물관	심수륜묘 출토복식 (2004)
19	(男墳墓)	광산김씨 김덕령 장군 (虎翊將軍)	1567 ~1596	광주시 금곡동 (1965)	장옷1, 과두류3, 여자저고리1, 바지1(중요민속자료제209호)	충장사/ 광주시립 박물관	문화재대관 下 (1986)/광주전 남지역 출토 조선 중기의 우리옷2000
20	單葬 男墳墓 (衣履葬)	김해김씨 김함(宣傳官 정3-종9품 무관직)	1568 ~1598	전남 영암군 (1985)	저고리2, 장의 3, 속곳, 버선, 이불, 모자, 부들신, 너른바지, 주(珠) 각 1점씩, 제웅, 의류조각들	단국대 석주선 기념박물관	한국복식 제6호 (1988)

아래로 접힌 사다리꼴이다. 또한 孫昭(1433-1484), 張末孫(1431-1486), 申用漑(1463-1519) 등 전기 초상화에서도 확인된다.

출토단령은 다른 출토복식류와 같이 대부분 탈색되어 있으며 유물에 따라서는 아청색이나 녹색의 흔적이 보이기도 한다. 조선시대 관복은 『大明會典』에 기준한 것으로 成宗 24년(1493) 『경국대전』의 반포로 제도화 되었으며 明 백관 3품복을 1품복으로 적용하는 2등체강원칙에 따른 것이다. 공복에는 복두를 쓰게되며 단령의 소매가 매우 넓게 되어있다. 반면 상복과 시복 단령의 소매는 기타 포제와 동일하다. 대전의 내용에 따르면 상복에는 사모와 함께 당상관 이상 흉배를 달아서 신분의 차이를 두었는데 충정공 정응두의 단령에는 1품용 공작흉배를 부착한채 발굴되어 대전의 내용과 일치한다. 그러나 최근 발표된 연구에서 15세기 전기까지 잡색의 단령을 착용하였으나 16세기에는 중종 13년(1518) 시복을 아청색으로 사용한 것처럼 명칭의 분화를 가져와 시복은 아청색을 사용하여 흉배를 부친 의례용으로, 상복은 홍색계열의 색상으로 만들어 집무용으로 착용한 것으로 조사되었다.[4] 16세기 초상화에서도 확인된다. 단령은 수의용 上服과 소렴이나 대렴등 殮衣에 사용된 단령을 포함하고 있다. 출토되는 단령은 이장방법에 따라 수습되는 수량이 다르다. 김흠조 출토복식의 경우 7점이 출토되었다. 충정공 정응두의 경우는 한점만 수습되었으나 수의를 착용한 상태로 이장하여 수의로 착용한 단령이 있었다고 한다. 또한 이응태의 경우는 登科하지 못하고 31세에 夭折하였기 때문에 착용하였던 한점의 단령은 혼례복일 가능성을 제시하였다.[5] 한편 경기도박물관 소장의 16세기 중후반으로 추정된 진주류씨 합장묘에서 정4품의 진주류씨의 무명단령이 한점 출토되었으며 배위 박씨는 정6품 외명부 宜人 신분으로 무관 1품용 織金虎豹胸背를 부착한 무문단 단령을 수의로 착용한채 출토되어 기록과 일치하지 않는다. 이러한 사례는 여러건 확인되고 있다. 미라로 발견된 시신은 아마도 남편의 관직이 6품에 있을때 사망한 것으로 추정되었다.[6]

16세기 단령의 특징은 모두 홑단령이며 등바대와 곁바대를 대어주었고 바느질이 정교하고 튼튼하다. 등바대의 모양은 직사각형과 반원형이 주류를 이룬다. 양쪽에 달린 무는 작은 주름은 안쪽으로 넣어주고 큰주름은 밖으로 접어 상단을 밑으로 접어준 사다리꼴 무이다. 明 成火(1465-1487), 弘治(1555-1557)년간에는 高麗樣이라 하여 조정과 사대부가에서 유행되었다고 한다.[7] 이러한 구성은 유물에 남아있는 주름자국으로 확인되며 그림자료에서도 볼 수 있다. 고름은 끈모양과 같이 좁고 짧게 만들어 두쌍을 달아주었으며 고리로 연

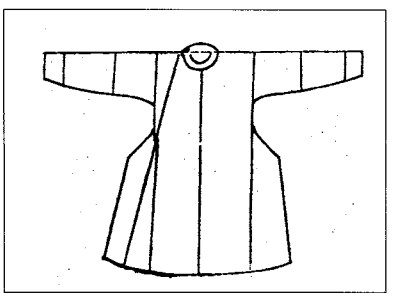
4) 이은주외 『17세기의 무관옷 이야기』, 안동대학교박물관, 2005, pp.116~122.
5) 박성실 외, 『한국의 수의문화』, 신유, 2002, p.75.
6) 송미경 · 박진영 「진주류씨 합장묘 출토복식 고찰」 『진주류씨합장묘복식-안성대덕면무능리』, 경기도박물관, 2006, pp.114~172.
7) 周錫保 『中國古代服飾史』 中國戲刷出版社, 1984, p.402.

결된 간접부착형과 직접부착형이 혼용되었다. 단령의 소재는 운문단, 운문사, 숙초, 추사 등 무명, 모시, 교직 등 다양하게 사용되었다. 16세기 단령은 다시 초반와 중반, 말기로 세분화 되는 조형적인 특징을 보인다.

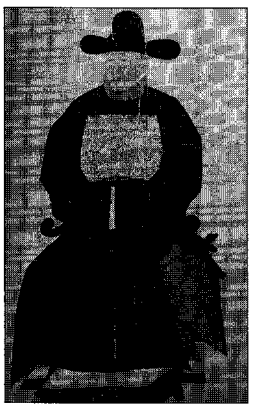
① 초반에 해당하는 단령은 15세기에 태어나 16세기 초반에 卒한 변수묘, 김흠조묘, 정온묘, 고운묘의 단령이다. 길이가 길고(141~158㎝), 깃파임이 적고 깃나비는 2.5~3.0㎝로 좁다. 옆선의 길이가 길고(19~21㎝) 소매는 좁은편이며 수구쪽은 더욱 좁다. 간접부착형 고름이 많으며 고려말 유물과 16세기초에 나타나는 방법이다. 간접부착형은 좁고 짧은 끈모양의 고름을 만들어 고름 끝에 가는 끈고리를 달아주고 고름바대를 달아 끼워주는 방식이다.[그림3 · 4] 직접부착형 단령 중에는 가늘게 끈을 만들어 꼬아서 만든 숫단추[연봉매듭]를 깃 끝에, 암단추를 깃고대 부분에 달아 준것도 있다.[그림5]

② 중반의 단령은 초기에 태어나 후기에 卒한 정응두묘, 남양홍씨묘 단령이있다. 옆선 길이가 현저하게 짧아졌으며(5.0~6.0㎝) 앞길이가 짧은 前短後長 형태가 많이 보인다. 소매는 진동선과 나란한 통수형이며 고름은 간접형과 직접형이 혼용되어 나타난다.

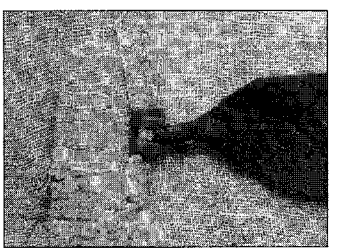
③ 말기의 단령은 중기에 태어나 말기에 졸한 이응태, 심수륜이 대표적이며 무는 한개의 큰주름을 잡아 밖으로 접어주었으며 소매 배래가 곡선화의 조짐을 보인다. 조경의 단령부터 무의 상단은 위로 올라가 배래일부를 무에 제공한 만큼 조각으로 이어 주었다. 출토단령에서는 예외는 있으나 운문단 등 비단단령에는 탈색된 일부에서 아청색, 현녹색의 흔적이 확인되나 모시, 무명 등에는 거의 소색이나 옅은색으로 남아있다. 단령은 대표적인 관복으로서 시대적 특징을 가장 민감게 반영하고 있다.



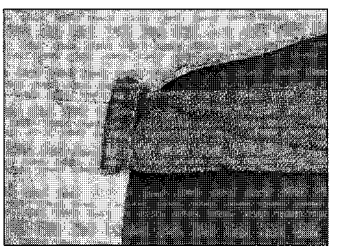
〔그림 1〕 흑단령
(『樂學軌範』 卷九)



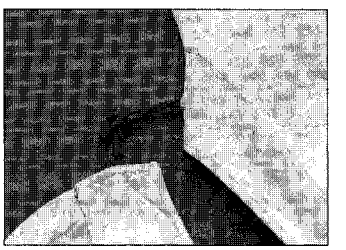
〔그림 2〕 장말손 초상화
(1431-1486)



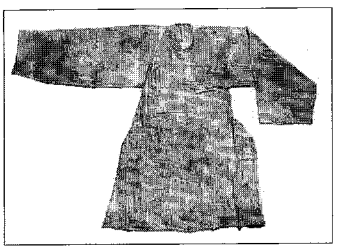
〔그림 3〕 간접 부착형 고름

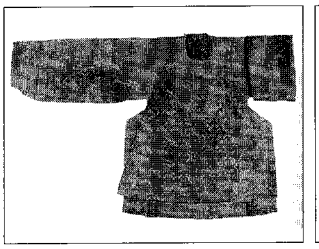


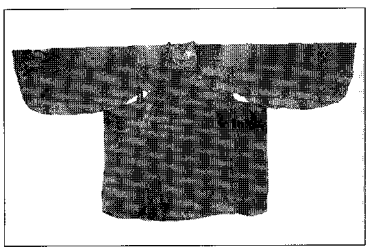
〔그림 4〕 직접 부착형 고름



〔그림 5〕 김흥조 단령깃 단추모습


〔그림 6〕 김흠조 홑단령


〔그림 7〕 정응두 단령


〔그림 8〕 심수륜 단령

2. 直領

直領은 곧은깃이나 곧은깃이 달린 포제를 말한다. 직령은 고려말 禑王 13년(1387) 하급 관리의 관복으로 제정된바 있다. 조선초기 세종 28년(1446)에는 各司諸員, 隊長, 外方의 日守兩班, 庶人, 工商및 賤隷의 복식으로 규정되었다. 또한 31년에는 별감과 전악서의 악공복으로도 착용되었다. 그러나 중종 13년(1518)에는 왕이 理學을 볼 때는 의관을 정제해야 하는데 직령은 심의와 같으니 사용해도 좋고[8], 23년(1528)에는 직령을 입고 재상을 찾아가 배알하는 것은 절친한 사이가 아니고서는 입고 갈 수 없으며[9] 왕세자의 直領衣는 관례이전 입는 것으로 正服은 아니었다.[10] 이상과 같이 직령은 왕실의 평상복이나 사대부, 일반인의 간편한 외출복으로 대우받았던 정도이다. 그 이외에 답호와 함께 단령의 받침옷으로도 착용되었는데 신숙주의 손자인 좌의정 申用漑(1463-1519)의 초상화 단령속에는 흰색동정이 달린 홍색직령을 입고있는 형상으로 묘사되어 있다. 직령은 깃모양을 제외하면 옆선길이, 무와 소매의 형태, 두쌍의 고름 등 단령과 거의 동일하다. 고름의 여밈은 겨드랑이 가까이 깊게 여며지도록 달려있다. 두텁게 솜을 넣어 방한복으로 만들었으며 넓은 이중깃에는 깃나비의 절반이 안되는 좁은 동정이 달려있고 단령과 함께 입을 경우 신용개의 초상화와 동일하게 연출될 수 있을 것이다. 이중깃이란 넓은깃 가운데를 접어 얄게 바느질하여 마치 두 개의 깃으로 연결된것 처럼 구성된 것을 말하며 기능적으로도 넓은깃의 형태를 유지하는데 도움을 준다. 또한 김흠조 묘나 고운 묘 직령의 이중깃은 겉깃의 깃머리가 목판형 이중깃과 칼깃형 이중깃의 절충형이다. 즉 이중깃의 겉깃깃머리가 한점에 모아지지 않고 안깃의 끝부분과 같으나 곧게 세워진 이중 목판깃에서 시작된다. 학자에 따라 이모양을 직각보다 작다고 하여 銳角형 깃모양으로 설명하기도 한다. 이중깃은 동일한 인물의 동일한 복식에도 모두 적용된 것은 아니다. 중반기부터 일반 칼깃형태의 이중깃이 주

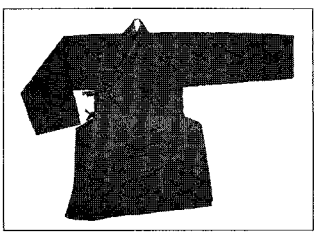
8) 『중종실록』 중종 13년 정월 무오
9) 『중종실록』 중종 23년 정월 신묘
10) 『광해군일기』 즉위년 5월 병오

류를 이룬다. 말기에 해당하는 심수륜의 직령에도 이중깃은 보이지만 임란후 조경의 직령에서는 볼 수 없다. 임란이후부터는 주로 단령의 받침옷으로 고정되어 겹단령의 안감처럼 사용되면서 출토복식에서는 보이지 않는다.

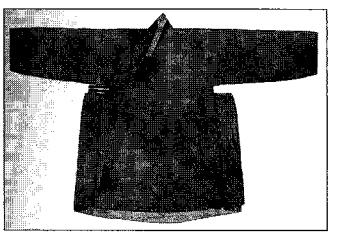
① 초반의 직령은 김흠조묘, 고운묘 유물에서 확인된다. 옆선의 길이가 길고 예각형의 이중깃이 달려있다.

② 중반의 직령은 정응두묘, 이언충묘의 유물에서 볼 수 있다. 정응두묘 직령은 이중 칼깃이 달리고 前短後長으로서 옆선 길이가 짧아진 중반기의 특징을 보인다. 이언충의 직령은 발굴당시 청색의 흔적이 남아있었고 외깃이며 갈색의 두쌍 고름이 깃아래 직접부착되어 있다. 모두 솜옷이며 소매는 초반 단령처럼 수구쪽이 좁아 방한용의 기능을 보이고 있다.

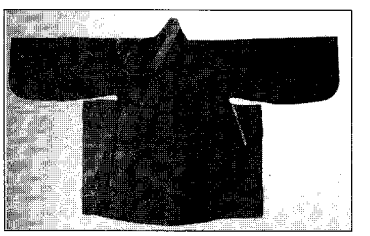
③ 말기의 직령은 심수륜이나 정휴복의 유물에서 확인된다. 심수륜의 직령은 홑과 겹옷으로 홑직령에는 연화형 등바대와 고리로 부착하는 고름의 흔적이 남아있다. 소매는 단령과 같이 진동보다 수구쪽으로 넓어지기 시작하는 곡선형 배래이다. 정휴복의 직령은 솜과 홑 2점이며 솜은 중반의 형태를, 홑은 말기의 형태를 보이고 있다. 임란직후 卒한 묘주의 임란전후의 복식내용이 확인된다.



〔그림 9〕 고운 직령



〔그림 10〕 이언충 직령



〔그림 11〕 심수륜 직령

3. 褡胡

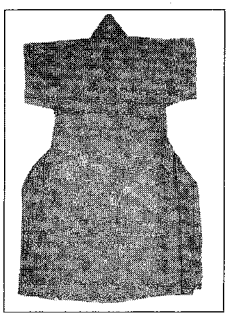
답호는 직령과 동일한 형태이나 반소매가 달린 半袖衣[半臂]이다. 전기의 실록이나 예서에는 단령, 답호, 철릭이 일습으로 기록되어 있으며 3벌이 관복의 일습으로 구성된다. 변수의 답호는 철릭 위에 겹쳐진채 발굴되어 당시의 기록이 구체적으로 확인되었다. 이와같이 전기 단령에는 답호와 철릭을 함께 착용하였으며 철릭을 받쳐 입는것은 비상시를 대처하는 정신적인 무장이었다. 이를 固道帖裏라고도 하였다. 단령을 벗고 철릭위에 답호를 착용한 모습은 당시 사대부들의 일상적인 통상차림이었을 것이다. 현전하는 실물은 1346년 발원문과 함께 서산 문수사에서 발견되어 "백저포"라 알려진 동국대학교박물관 소장의 교직 답호가 있다. 예각형 이중깃에 등바대는 선행연구에서 H자형으로 보고되고 있는 것으로, 3쪽으로 구성되어 중앙부분이 연꽃잎을 닮은 蓮花形 등바대가 포함되어 있다. 불국사 연

화교 석계에 조각된 형태와 조형적 구성이 유사하다. 이러한 등바대는 임란이후부터 보이지 않게 되므로서 시대를 구분하는 단서가 되고 있다. 원나라 벽화에서는 長袍 위에 반소매포를 입고있는 그림이 있다. 답호는 褡胡 · 答忽이라 하고 "더그레"라 언해하였는데 南宋 鄭思肖의 詩에 "답호는 元衣名"이라 하였다.[11] 16세기의 답호는 실물자료가 많이 남아있다. 출토된 답호에서 색상 확인이 불가능하지만 실록에는 아청, 초록, 다갈, 유청 등의 기록이 보이며 특히 녹색계열의 색상 기록이 자주 관찰된다. 답호는 직령과 같이 홑단령의 받침옷으로 착용되었다. 남양홍씨 답호에서 볼수 있듯이 넓은 동정이 달려 있어서 겹쳐서 입으면 후기 겹단령의 구성과 동일하게 보인다. 답호도 마찬가지로 3단계의 변화를 볼 수 있다. 변화의 양상은 깃모양을 제외하고 단령과 동일하다.

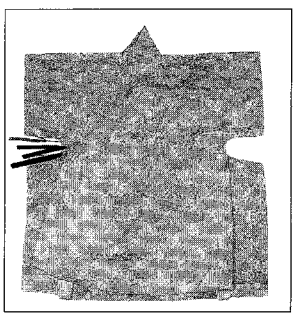
① 초반 답호는 변수묘, 고운묘, 김흠조묘, 정온의 묘 유물에서 확인된다. 단령 받침옷의 역할로 인해 부분적인 구성이 단령과 흡사하다. 예각형의 이중깃, 옆선길이(김흠조 답호11점 19~24.5㎝), 양쪽의 무, 반원형과 연화형 등바대, 두쌍의 고름은 고리형 간접부착형과 직접부착형이 함께 보인다.

② 중반 답호는 남양홍씨묘, 정응두묘 성주이씨묘 유물이며 정휴복의 답호 한점에서도 중반의 형태가 확인된다. 옆선의 길이가 짧아지고 이중칼깃과 연화형 등바대가 포함되어 있다. 두쌍의 고름은 직접, 간접부착형이 혼용되어 있다. 전단후장의 형태도 포함되어 있다.

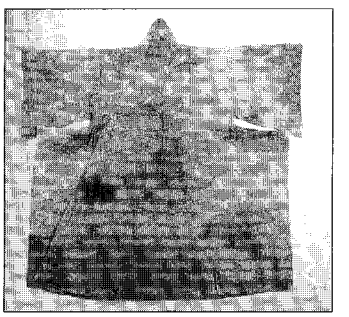
③ 말기 답호는 심수륜의 유물에서 보이는 것과 같이 반소매에도 진동보다 넓어지는 소매형태가 확인되며 고리를 끼운 형태의 간접고름이 한쌍으로 달려있다.



〔그림 12〕 변수 답호



〔그림 13〕 나주정씨 답호



〔그림 14〕 심수륜 답호

4. 帖裏

철릭은 고려시대에 원나라로부터 받아들인 옷으로 외래어인 만큼 '帖裡' '貼里' '帖

11) 서정원, 「노걸대 간본들을 통해본 14-18세기의 복식관련 용어비교연구」, 이화여자대학원, 2003, p.37.

裏', '忝里' '天翼' '天益' 등 다양한 표기가 있다. 전기에는 거의 대부분 帖裡류의 기록으로 남아있으며 이는 몽골어 '델릭' 에서 유래된 것으로 알려져 있다. 고려말 요선철릭을 비롯하여 조선전기 철릭에는 2중깃이 많이 보이고 있는데 元 世祖像이나 고려말 문신 安珦의 半身像에서 이중깃으로 묘사되고 있어 주목된다. 또한 『樂學軌範』 歌童 융복으로 單帖裏가 있으며 弓矢舞服으로 防衣가 철릭형이다. 上衣가 下裳보다 긴 초기의 형태를 보여준다.

저고리와 같은 直領上衣와 廣幅의 下裳이 주름으로 연결된 남자의 옷으로 마치 여성의 저고리와 치마를 연결하여 놓은것과 유사하다. 소매를 반소매로 달고 긴소매를 별도로 만들어 쌍미리 연봉단추와 고리로 연결해 주어 반소매나 긴소매를 임의대로 착용할 수 있도록 만든것이 주류를 이룬다. 裳幅은 사치금제 대상에 오르기도 하였는데 성종 2년과 3년 사족의 철릭은 13폭을 넘지말고 진상 철릭은 14폭을 넘지 말도록 하였다.[12] 그러나 전기 출토 철릭들은 비단으로 만든 것 이외에모시나 명주를 소재로 만든 14폭의 상이 적지않게 발견된다. 이 넓은 裳은 여성의 치마와 달리 0.2㎝정도의 아주 작은 주름을 잡아 주었으며 드물기는 하지만 1.3㎝내외로 맞주름을 잡아준 경우도 있다. 안섶쪽으로 보이지 않는 부분에는 주름을 생략해 주었으며 옆이나 뒤쪽으로 넓은 폭을 겹쳐 트임을 주기도 하였다. 실록에 보이는 색상은 남, 초록, 주황, 압두록, 백, 흑색등이며 출토된 소재는 운문단, 연화만초문단, 명주, 무명, 모시 등에 이르기까지 다양하다. 철릭은 상의와 하상의 길이 비례, 치마 주름, 소매형태, 고름유형 등을 통해 그 유물의 연대를 짐작할 수 있다. 철릭의 조형적 특징은 시대적 변화를 민감하게 나타내주고 있으며 이는 여성의 치마저고리 비례와도 유사한 흐름을 보이고 있어 흥미롭다. 특히 18세기 기록에는 왕이 교외로 거둥할 때 龍補를 부착한 곤룡철릭을 융복으로 착용한 기록도 확인된다.[13] 16세기에는 고급 직물을 사용하거나 금선단등 화려한 비단조각을 이용하여 고름바대를 대어준 철릭을 융복으로 입는 경우가 많았다. 융복의 기능성을 감안하여 철릭은 단령이나 답호등 함께 착용하는 포제에 비해 다소 짧은 편이다. 연산군11년 6월 戊寅일에는 朝士의 철릭을 단령이나 답호보다 짧게 만들도록 지시한바 있어서 문헌기록과 일치하는 부분이다. 철릭은 기능적이며 외관에도 손색이 없어 조선전기 남성들의 평상복으로도 널리 입었던 옷이다. 소매가 좁고 치마부분은 여유가 있어서 기마시 또는 장시간 걸어서 이동할 때에도 편하게 입을 수 있었던 옷이기 때문이었다. 그런 까닭에 宣祖 25년 임진왜란 발발시 철릭은 모든 백관들의 융복으로 착용토록 지시하였고 색상은 정하지 않고 흑립을 쓰고 광사대를 띠고 패검하도록 하였다.[14] 이러한 복장은 明 사신들의 비웃음의 대상이 되었다.[15] 명 사신이 영의정 李德馨이

12) 『성종실록』 성종 2년 12월 壬申, 3년 정월 己未
13) 『원행을묘정리의궤』 (1795) 권1, 筵說 윤2월 초9일 화성행차시 출궁할 때 착용하였다.
14) 『선조수정실록』 선조25년 4월 경인
15) 『선조실록』 선조26년 2월 을사

나 李元翼에게 闊袖와 笠子는 전쟁을 치루기에 부적절한 복장임을 언급한 내용이 보인다. 임란당시 전사한 金德齡장군의 철릭은 당시 철릭과 달리 소매가 매우 좁은 착수철릭으로 되어 있다. 이와함께 선조 28년 6월 병오에는 소모자의 착용을 논의하기도 하였다. 이듬해 3월 己巳에는 왕이하 백관들의 공복으로 착용되기에 이른다.

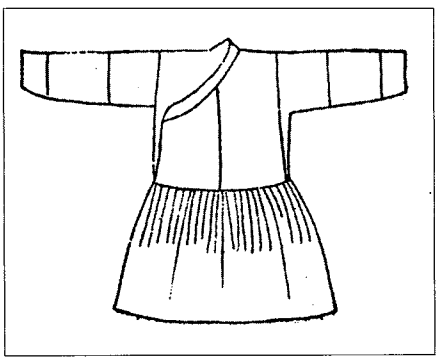
철릭은 조선 전기의 출토복식 가운데 가장많은 수량이 발굴되고 있다. 14세기로 추정된 해인사 성보박물관 소장의 요선철릭 형태는 변수묘 요선철릭과 크게 다르지 않다. 조선조 요선철릭의 기록은 세조6년(1460) 3월, 5월, 성종 1년(1470) 3월, 11년 5월, 12년 5월, 14년 7월에 보이고 있으며 주로 중국사신의 하사품으로 기록되어 있다. 특히 변수의 요선철릭 3점 가운데 선장식이 갈색으로 남아있는 유물이 있다. 한편 왼소매 탈착식 요선철릭은《원세조 출렵도》에서도 그 기능성이 확인된다.[그림16 · 17] 성종11년 하사된 大紅紬藍腰線帖裏는 다홍색의 철릭에 남색으로 요선을 둘러준 화려한 형태로 짐작된다. 왕실의 기록중에서도 요선철릭의 흔적을 볼 수 있다. 국혼과 관련하여 가장 이른시기의 기록인 소현세자 가례(1627년)시 마련된 帖裏 한점은 겉감으로 草綠雲紋正緞, 안감으로 大紅綃, 부속물로 月丁只, 紫的絲五分, 紅紬絲 一錢五分, 腰線用 色眞絲 一錢二分의 기록이 있어 자적색의 단추가 달린 요선철릭의 가능성을 시사한다. 특히 16세기 철릭은 초기와 중 · 후반기로 양분되어 나타난다. 조경의 철릭에서 확인되고 있는것처럼 임진왜란 직후부터 이중깃이 보이지 않으며 상이 길어지고 주름이 넓어져 밑단까지 잡히게 되는 과도기적인 현상으로 나타나는 민감한 변화를 보인다. 고름바대를 대어주어 직접부착하는 두쌍의 고름은 임란이후까지 당분간 유지된다.

① 초반 철릭은 변수 묘(13점), 고운 묘(6점), 김흠조 묘(12점), 정온의 묘(7점) 출토 유물들이 많이 남아있다. 변수묘 요선철릭은 상의가 다소 긴것이 육안으로 확인되며 진동이 좁고 소매는 수구쪽으로 좁아지는 착수형이다. 양쪽이 장수이거나 탈착소매, 한쪽이 탈착이면 왼쪽으로 해주었다. 모두 예각형 이중깃이며 옆길이가 길고 고름바대가 달려있으나 고름은 의도적으로 제거한 것으로 보인다. 김흠조 묘 철릭(上74:下62㎝)과 고운묘 철릭(上69:下52㎝)은 上衣가 下裳보다 길고 소매는 착수형이다. 그러나 정온묘 철릭(上71:下58㎝, 上62:下61㎝)은 비례가 크지 않은 유물이 포함되고 있으며 이중깃은 예각형에서 칼깃으로 변하는 과도기적 형태와 간접부착 고름의 흔적이 함께 보인다. 통수형과 착수형 소매가 모두 보인다. 치마폭은 12폭(한폭35㎝)부터 15폭(한폭30㎝)에 이른다. 한쪽 소매의 탈착식은 왼쪽에 적용되었다.

② 중 · 후반의 철릭은 동일한 형태를 보인다. 남양홍씨 묘(5점), 정응두 묘(23점), 이언충 묘(4점), 진주류씨 묘(6점), 정휴복 묘(4점)의 유물 여러점에서 서로 유사한 형태가 확인된다. 의와 상의 비례는 유사하여 큰 차이(약4.0㎝전후)를 보이지 않으나 진주류씨의 경

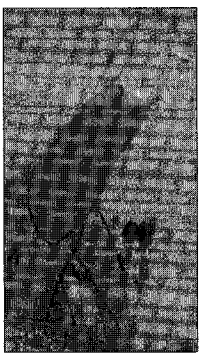
우 2점은 4.0㎝, 나머지 6점은 10㎝전후의 차이를 보였다. 또한 정휴복의 경우는 임란 직후의 유물이지만 중반의 특징을 보였다. 정응두묘 철릭에서 탈착식의 소매를 단추를 이용하지 않고 깊게 겹친 소매통 사이를 징구어준 형태도 확인는데 운문단철릭에 적용된 것으로 미루어 의례적인 용도에 적용된 것으로 보인다.

방한용으로 착용된 누비철릭에는 한쪽의 고름을 길고 넓게 달아 몸을 감싸도록 바느질된 철릭도 확인된다. 홑철릭의 연화형 등바대, 이중칼깃, 두쌍의 간접 · 직접식 고름의 형태는 다른 포제의 형태와 같다. 명주폭(폭나비35㎝내외) 12-14폭, 비단폭(폭나비65㎝내외) 8-9폭의 넓은 치마에 0.2㎝도 못미칠 정도의 치마주름은 가히 예술품이라 할만 하다. 임란중 전사한 김덕령 장군의 착수철릭은 당시 유일한 형태이며 이후 보이지 않는다.

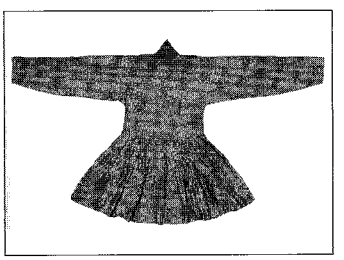


〔그림 15〕 歌童戎服 帖裏
『樂學軌範』 冠服圖說

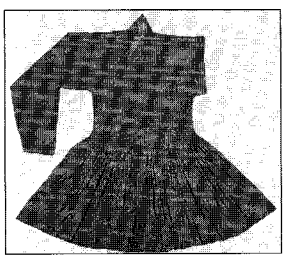
〔그림 16〕 탈착식 소매
모습.《원세조 출렵도》



〔그림 17〕 그림16
부분확대

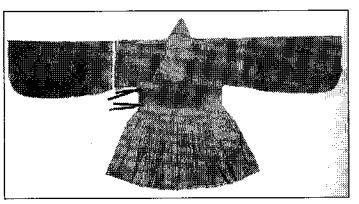


〔그림 18〕 변수 묘
연화만초문단 겹요선철릭

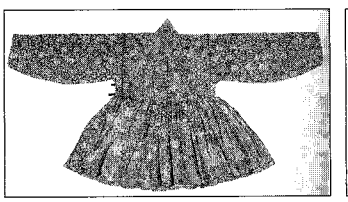


〔그림 19〕 변수 묘
탈착식소매 요선철릭

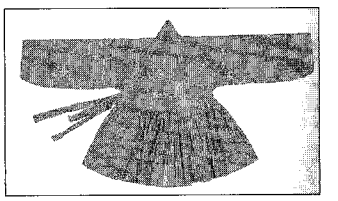
〔그림 20〕 고운 묘
갈색명주 겹철릭



〔그림 21〕 남양홍씨 묘
모시철릭



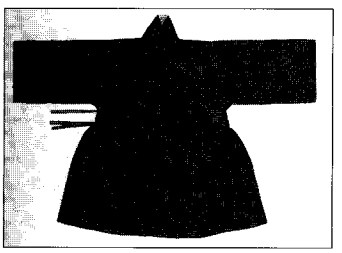
〔그림 22〕 이언충 묘
보상화문 홑철릭

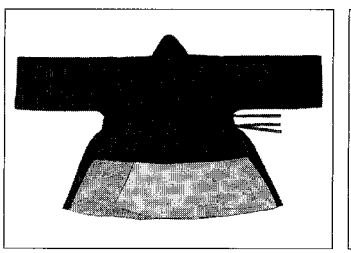


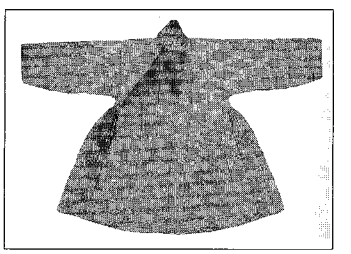
〔그림 23〕 정응두 묘
명주 누비철릭

5. 腋注音

액주름은 腋皺衣, 腋注音衣, 旁褶兒 라고도 하였으며 겨드랑이 아래에 주름이 있어 이름한 대표적인 편복포로서 왕이하 서민에 이르기까지 널리 착용되었다. 철릭과 직령의 절충형이다. 액주름은 현재까지 16세기 중반에 편중되어 있고 조경 묘의 액주름이 있으나 임진왜란 이후에는 점차 사라져 보이지 않는다. 따라서 액주름의 포함여부는 시대를 추정하는 고증자료로 이용된다. 액주름은 곧은 깃이 달리고 옷의 길이는 다양해서 88~116㎝ 사이이다. 경북대박물관소장의 액주름 중에는 양쪽 소매를 탈착식으로 만든 누비액주름이 있으며 양옆에 트임을 주었다. 다른 한점의 길이가 긴 액주름은 양옆이 트여서 옆무가 뒷길 안쪽으로 들어가 도포의 무처리와 유사하게 만든것도 있다. 남양홍씨 액주름 가운데는 뒤가 둔부선에 이르고 앞은 기다란 형태도 포함되어 있다. 이 기능적인 디자인은 마상의로서 착용할 수 있도록 만든 옷으로서 조상들의 뛰어난 디자인 감각이 주목된다. 다양한 형태들은 사대부나 서민들에 이르기까지 특히 방한용으로 널리 착용하였던 것으로 보인다. 궁중기록에는 액주름이 늦게까지 기록이 보이지만 출토실물에서는 보이지 않는다.


〔그림 24〕 남양홍씨 묘 액주름(앞면)


〔그림 25〕 남양홍씨 묘 액주름(뒤면)


〔그림 26〕 정온 묘 액주름

6. 道袍

도포는 왕 이하 사대부의 외출복이자 의례복이었으며 또한 유생들의 옷이기도 했다. '도포' 라는 명칭은 1564년(명종 19)의 기록에서 처음 확인된 바 있으며 현재까지의 유물중에서는 서울대학교 박물관에 소장되어 있는 李碩明(1513-1583) 묘에서 출토된 아청색 명주 겹도포가 가장 오래된 것으로 알려져 있다. 도포는 곧은 깃에 넓은 소매가 달린 옷인데 앞자락의 옆선에 달린 커다란 무가 뒷길 안쪽으로 들어가 뒷길 안쪽이나 어깨바대인 한판(汗版)에 고정됨에 따라 뒷자락이 두 층을 이루고 있는 것이 특징이다. 이석명 묘 도포는 뒷길 안쪽에 고정된 경우이며, 전단후장형으로 겉감은 쪽물을 들인 짙은 남색, 안감은 연한 갈색의 명주로 사이에 솜을 두어 만든 것이다. 도포는 유학자들의 대표적인 통상예복으로서 회화자료를 비롯하여 문헌에도 산견되지만 아직 고정관념을 깨지 못하는 경우가 많

다. 임진왜란 직후 출토복식에서 문단을 사용한 겹도포, 홑도포가 발굴되고 있으며 이는 문헌기록에 나타나는 다채한 색상기록을 뒷받침해 주고 있다.

7. 長衣

장의의 형태는 여성의 장의와 유사하나 장식이 없는 것으로 구분된다. 장의의 기록은 세조2년 3월 정유에 집현전 직제학 梁誠之의 상소문 내용중에 처음 확인된다. 나라의 여자들이 남자 장의와 같은 장의 입기를 즐겨 의(衣;저고리)와 상(裳;치마) 사이에 입어 3층을 이루는데 이는 사문에 요사스러운 복장이라는 것이다. 여자가 남복을 입는 것은 길조가 아니니 후세에도 저고리와 치마를 입는것이 가장 옛법에 가까운것이라는 내용이다. 이는 당시 남성의 장의 착용을 확인시켜 주는 내용이며 단국대석주선기념박물관 소장의 광주이씨 장의(중요민속자료 제114호)를 통하여 방한용의 솜장의를 확인할 수 있다. 장의는 보공용으로도 사용되었으며 액주름처럼 임진왜란을 계기로 사라지는 포제이다.

8. 상의류

유교적인 사회현상에서 다양한 포제가 발달한 조선시대 남자의 저고리는 속옷으로서의 역할이 중요하였다. 현재까지 확인된 남자들의 상의류에는 저고리와 적삼, 한삼 그리고 마고자와 같은 덧저고리나 특수한 용도의 방령상의와 방령포가 있다. 남자 저고리는 출토복식에서 여자저고리와는 조형적인 특징을 달리 하면서 발굴되고 있으나 저고리의 명칭은 찾기 어렵다. 상의류 명칭은 국혼이나 국상시 마련되는 왕과 왕세자 衣襨에 포함되어 있으며 그밖에 중국 사신이나 관리에게 하사한 기록에서 바지와 일습을 이루는 내용에서 확인된다. 『조선왕조실록』에서 前期의 기록에는 저고리에 해당하는 명칭으로 裹肚가 있다. 세조13년 10월 龜城君이 아내를 맞이할 때 단령, 철릭, 과두, 단고를 각각 2령씩 하사하도록 지시하였다. 역대 국혼 기록인 『嘉禮都監儀軌』 왕과 왕세자 의대에 長衫兒, 短衫兒, 襦把持 單把持와 함께 기록되어 있고 『國朝喪禮補編』 凶禮 襲衣에도 곤룡포, 답호, 철릭과 함께 裹肚 汗衫, 袴袴 單袴로 일습을 이루고 있다. 홑바지와 겹바지, 홑저고리[한삼]와 겹저고리[과두]가 각각 한 벌이 된다. 『(仁祖莊烈后)嘉禮都監儀軌』에 기록된 과두의 衣次는 "白吐紬 한필, 內供 白紬 한필, 中綿子 한근"이다. 이후 의궤에도 내용은 유사하여 백색으로 만들고 솜을 넣은 솜옷이다. 한편 왕실 이외의 기록으로 16세기 柳希春(1513-1577)의 『미암일기』 중에도 상의류에 해당하는 옷으로 尺衫, 汗衫, 襦衣, 赤古里, 裹肚, 古道 등이 있다.[16] 매우 구체적이며 세분화된 내용으로 계절에 따른 명칭도 반영되어 있다. 이외에도

16) 윤소정 「미암일기를 통해본 16세기 사대부 복식」, 서울대학교대학원 석사학위논문, 2006, p.63.

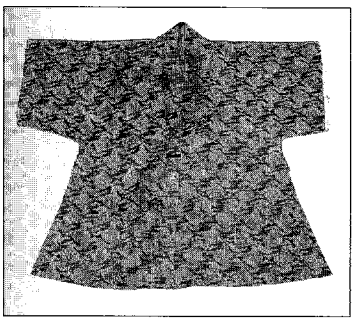
시간적인 차이는 있으나 원나라 부녀복식 중 襦衣류 과두가 있고 「박통사언해」에도 "衫兒袴兒裏肚等裏衣且休設" 이라하여 적삼 고의 과두를 모두 속옷으로 언해하였다.[17] 이상과 같이 과두는 조선시대 남성 상의류의 하나이며 주로 겹옷이나 솜옷으로 기록되어 있다. 그러나 현재까지 출토된 남자의 교임형 상의는 여자 저고리 명칭 분류와 동일하게 적용되어 적삼, 겹저고리, 솜저고리, 누비저고리로 명칭되고 있다. 16세기 남자 저고리는 목판깃 여자저고리와는 달리 주로 칼깃이며 정응두묘 솜저고리는 안깃도 칼깃이다. 허리를 덮는 정도의 길이로, 양옆에 짧은 트임이 있으며 장식이 없는 민저고리형이다. 남성의 저고리가 칼깃으로 만들어진것은 당시 직령깃의 포제[철릭,직령,액주름 등]에서 영향을 받은 것이다. 고려대학교 박물관 소장 파평윤씨 모자 미라 출토복식중 보공용 남자저고리에는 이중깃의 칼깃이 달린 경우까지 확인된다. 현재까지 발굴된 16세기 출토복식 중에는 액주름과 같이 다른 포제에 비해 길이가 비교적 짧아서 저고리나 두루마기로 조사된 또하나의 포제가 있다. 심수륜 묘 周衣는 3점으로 습, 대렴, 보공으로 사용되었는데 길이가 97-102㎝이다. 트임이 없으며 겉깃 칼깃, 안깃 목판깃의 직령포이며 길이가 짧은것, 양겨드랑이 사이에 삼각무가 있는것 이외에는 전형적인 두루마기 형태이다. 각 포의 길이는 단령 113㎝, 답호 112㎝, 액주름 94㎝이다.[18] 또한 이응태 묘 출토복식 중에서는 습용으로 사용된 직령포에 가까운 유물이 있다. 길이 99㎝로서 심수륜 주의와 동일하나 양옆에 짧은 트임이 있다. 겹저고리로 조사되었다. 이들 유물의 조형적인 특징과 용도를 감안한다면 당시에 과두로 명칭될 수 있는 가능성을 고려해 볼 수 있다.

적삼은 주로 여름용이나 저고리 안에 속옷으로 착용되었던 옷인데 저고리보다 다소 작은 것이 특징이다. '땀받이 적삼' 이라고 하는 '한삼' 이 있다. 한삼은 『樂學軌範』 처용복에 긴소매가 달린 칼깃 홑저고리로 그려져 있다. 현재 한삼은 원삼 소매끝부분에 달린 백색부분이나 정재복 가운데 손을 가리는 부속물, 개성이나 평양혼례복에 신부의 손을 가리는 용도로 알려져 있다. 출토 상의중에는 기다란 홑적삼이 발굴되고 있어서 특별한 의례에 입을 때는 긴소매를 달아서 입었던 것으로 보인다.

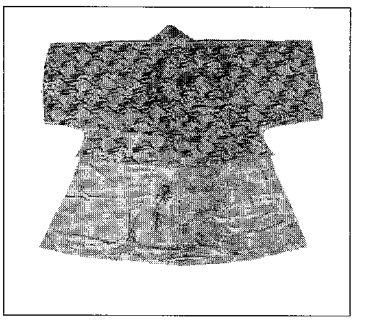
방령은 네모난 목판깃이 맞달려 있고 아래로 기다란 바대가 달린 상의와 뒤가 짧고 앞은 긴 특수한 형태의 袍가 있다. 이 모양은 『樂學軌範』 定大業呈才時 "五色段甲" 과 유사하다. 5가지 색으로 지은 갑옷모양의 상의이다. 특히 깃부분은 동일한데방령 아래로 길게 대어준 부분을 "八的" 이라 하였으며 이는 옷고름의 바대와 같은 모양으로 "바대" 라 하였다.[19] 정대업은 세종때부터 회례연에 공연된 정재로서 역대 왕의 武功을 칭송하기 위한 것이다.

17) 박성실, 앞의 논문, 1992, pp.120-121.
18) 송미경, 『심수륜묘 출토복식』 경기도박물관, 2004, p.114, pp.142~148.
19) 북한번역관, 『악하궤범』 현 태백산본, 민족문화사(영인본), 1956, pp.556~558.

특히 방령에는 화려한 무늬의 비단이 많이 사용되었는데 丁應斗 묘, 鄭溫 묘, 申汝灌 묘, 벽진이씨 묘, 그리고 姜大虎(1541-1624)묘 등에서 출토되었다. 모두 前長後短형으로 양옆에 짧은 트임이 있다. 바대밑으로 섶이 달리고 섶머리에 주름을 잡아준 형태도 있다. 앞길이는 81~111㎝, 뒷길이 64~68㎝ 사이이다. 정온묘 방령은 포제 길이이나 뒷길이는 모두 둔부선을 가리는 수준이다. 이러한 특징은 기능성을 고려한 디자인으로 볼 수 있는데 특히 청나라 馬古子[馬掛]와 같이 기마용으로 착용되기 시작한 상의에서 비롯된 가능성을 고려해 볼수 있다. 이러한 모양은 남양홍씨 액주름에서도 확인된다.[20]



〔그림 27〕 정온묘 방령(앞면)



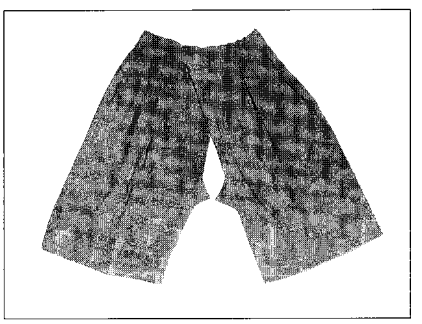
〔그림 28〕 정온묘 방령(뒷면)

9. 바지류

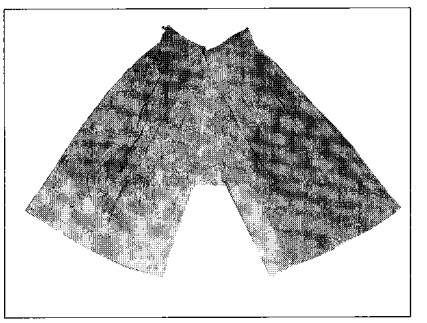
출토복식의 발굴이 복식 전공자를 비롯한 각계 전문가가 파묘당시부터 참여한 처녀분의 발굴이 이루어지기전까지만 하여도 남자 바지는 사폭바지만이 전부인 것으로 인식되어 왔다. 그러나 16세기 묘주의 수의를 확인하는 과정에서 남자수의 일습에 여성의 속옷류와 동일한 형태의 바지를 입고있는 사례를 통해 새로운 남자 바지 착용 사례를 접할 수 있게 되었다. 여성용 속곳모양의 밑이 붙은 바지를 입고 그 위에 밑이 트인 바지를 입고 있었다. 물론 남자에게서 그런 바지가 발견되는 것을 배우자의 옷을 입히는 葬俗의 하나로 해석해 볼 수도 있다. 안동대학교박물관 소장 16세기 일선문씨(여성) 수의에는 남성용으로 알려지고 있는 행전을 치고 있는 상태로 발굴되기도 하였다. 일반적으로 밑이 막힌 바지를 편의상 '合襠袴'라고 하고 밑이 트인 바지는 '開襠袴'라고 분류하고 있으나 문헌에서 확인되는 명칭은 아니다. 16세기 남자가 수의로 착용하였던 사례는 1997년 경북 영주시에서 출토된 판결사 김흠조 합장묘 출토복식과 1998년 경북 안동에서 출토된 이응태 묘 출토복식, 일영에서 출토된 단국대석주선박물관 소장 高靈申氏 출토복식 등에서 확인되었다. 이 외

20) 박성실, 김향미, 「조선시대 기능적 마상의류의 실증적 고찰」, 한국복식 20호, 단국대학교 석주선기념박물관, 2002, pp.29~71.

에 학계에서 편의상 '세가닥 바지' 라고 하는 것도 있다. 제239호로 지정되어 있는 고운 묘 출토유물에서 볼 수 있다. 이 바지는 합당고와 개당고가 하나의 허리말기에 고정된 것인데 합당고와 개당고 두 벌을 함께 입는 것보다는 하나를 입으면서 두 벌을 입은 효과를 얻기 위해 절충시킨 바지이라고 할 수 있다. 이러한 형태는 단국대 석주선기념박물관 소장의 남양홍씨 합장묘, 나주정씨 정응두 함장묘에서도 출토된바 있다. 성별 구분이 애매하다. 사폭바지 유물은 임진왜란 이후 비로소 확인되기 시작한다. 사폭바지는 지금까지도 남자 한복바지로 계속 착용되고 있다. 사폭바지로 전환된 것은 대략 임진왜란 중일 것으로 추정된다. 심재(1722-1782)의 『松泉筆談』이나 조재삼(1808-1866)의 『松南雜識』 등의 기록에서 남자들의 바지가 조선에 와 주둔해 있던 중국인들의 바지인 '唐袴' 에서 비롯된 것이라는 내용이 확인된다. 가장 시대가 올라가는 사폭바지 유물은 임진왜란 당시 사망한 김덕령(1567-1596) 장군 묘에서 출토된 유물에서이다. 제111호로 지정되어 있는 솜바지는 사폭을 확인할 수 있는 겉감은 모두 없어진 상태이고 솜만 남아있기 때문에 애매하긴 하지만 전체적인 형태로 볼 때 사폭바지일 것으로 짐작된다.



〔그림 29〕 김흠조 개당고형바지



〔그림 30〕 김흠조 합당고형 바지

Ⅲ. 여성복식

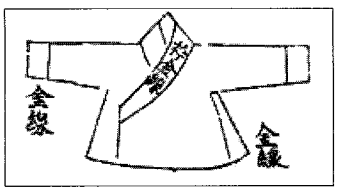
임란전의 남자 포제는 구성의 변화를 보이는 여자의 복식 큰 변화가 없다. 성종 19년인 1488년까지도 부녀의 수식과 복식이 중국과 사뭇 다르다고 하였으니 옛 제도에서 크게 달라지지 않았음을 짐작하게 한다. 다만 성종대 이후, 연산군 · 중종 · 명종대 모두 사치스러운 생활의 만연으로 신분의 구분이 어려워짐에 따라 국가에서는 신분에 따른 소재나 복식류를 자주 규제하였다.

15세기 여성복식과 관련된 문헌이나 유물자료는 2000년 9월에 발굴된 밀양密陽 고법리古法里의 박익朴翊 1332~1398(1420?) 묘 벽화에서 조선 최초의 여성 복식을 확인된다. 벽

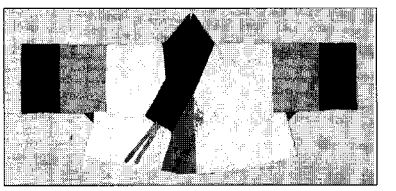
화에 보이는 여자들은 거의 유사한 차림을 하고 있다. 앞가리마에 귀밑 머리를 둥글게 감고 정수리에 연꽃 모양의 머리장식을 하고 있다. 그리고 둔부臀部에 이르는 장저고리에 치마를 입고 있는데 치마 밑으로는 신발鞋이 보인다. 저고리의 깃은 이중깃처럼 보이는 것도 있으며 옆트임이 확인되는 것도 있다. 또한 저고리 허리에 띠를 맨 경우도 보이며 치마 위로 두 가닥의 끈이 내려오는 모습도 보인다.[그림31] 『樂學軌範』에는 妓女용 장저고리 모양의 藍赤古里 형태가 그려져있다. 깃, 끝동, 腋間을 金線으로 장식하고 있으며 저고리 길이(1척 5촌) 로 미루어 16세기의 장저고리와 유사한 형태를 나타내고 있다.[그림32] 한편 15세기 여자복식 유물로는 월정사 문수보살 복장물인 회장저고리(중요민속자료 제219호)가 유일하다.[그림33] 뒷길 좌측 중앙에 쓰인 '長氏小對' 라는 묵서를 통해 1464년 세조代에 생존한 장씨의 옷임을 알 수 있다. 흰색의 주 바탕에 깃과 끝동은 아청색 연화문단으로 두르고 소매와 겨드랑이 삼각무는 남색화문단으로 장식한 단저고리 형태이다. 깃이 남색으로 되어 있어 기존의 여성 회장저고리와 차이를 보이며 17세기 초기 유물에서도 확인되는 유형이다.

16세기의 출토된 복식들은 묘주의 명정이나 남편의 관직을 통하여 확인되고 있으며 백관 부인들인 외명부의 신분별 복식이다. 출토복식에서 확인되는 조선시대 여성들이 착용하였던 복식류는 壽衣용 上服으로 사용되었던 團領을 제외하면 조선조 전시기에 걸쳐있는 장옷[長衣]이 대표적인 袍制이며 조선후기부터 보이기 시작하는 의례용 圓衫이 있다. 그리고 『악학궤범』에 제시되어 있는 장삼과 유사한 형태의 옷이 유일하게 1점이 남아 있다. 그 외에는 여러형태로 꾸며진 저고리와 치마, 속옷류로 구성되어 있다. 다양한 형태의 포제(袍制)중심의 남성복식과는 대조적으로 치마 저고리 위주의 복식구조를 특징으로 한다. 따라서 여성의 치마와 저고리는 평상복 이외에 外衣로서의 기능이 강하여 장식성이 돋보인다. 남성의 저고리가 주로 내의적 역할을 함으로서 장식적인 요소가 나타나지 않는것과도 대조를 이룬다. 때문에 여성의 저고리 종류는 형태가 다양하고 형태에 따른 다양한 명칭도 확인된다. 〈표2 참조〉

〔그림 31〕 박익 묘 벽화



〔그림 32〕『악학궤범』 藍赤古里



〔그림 33〕 세조 代의 회장저고리

〈표 2〉 16세기 여성복식 출토현황

번호	분묘 형태	묘 주	연대	출토지	출토 복식류	소장처	비 고
1	16세기 (單葬)	파평윤씨 (중종계비 문정왕후윤씨외척후실 추정	?-1566 (20대 중반)	경기도 파주 (2002)	단령1, 대1, 장의4, 저고리류 21, 치마8, 바지류2, 너울, 유소	고려대 박물관	파평윤씨모자미라 종합연구집
2	(單葬?)	청주한씨 (문정왕후의 혜공주손녀)	16세기 중기 추정	경기도 과천시 (1979)	단령1, 대1, 장의5, 저고리류16, 치마6, 바지4	단국대석주선 기념박물관	중요민속자료 114호지정
3	(合葬) 同墳異槨	일선문씨 (8품奉仕이 명정부인)	16세기 중반 추정	경북 안동 (1998)	장삼1, 장의4, 저고리류8, 한삼2, 적삼2, 바지류6, 치마4	안동대박물관	안동 정상동 일선문씨와 이응태 묘 발굴조사보고서
4	(?)	남양홍씨의 부인	16세기 중기 추정,(수정)	경기도 양주 (1980)	장의1, 저고리3, 치마4, 바지류3	단국대석주선 기념박물관	박성실, 「조선전기출토복식 연구」
5	(單葬)	숙부인 연안김씨(남양홍씨부인)	1570년대 추정	경기도 양평 (2000)	단령1, 대1, 장의3, 적삼류8, 저고리류15, 치마7, 바지류6, 액주름1, 흉배 2쌍	경기도박물관	연안김씨묘출토복식조사보고서
6	(合葬) 同墳異槨	宜人박씨 (진주류씨 부인)	16세기중후반추정	경기도 안성시 (2002)	단령1, 대1, 장의5, 당저고리2, 저고리류7, 적삼4, 치마7, 바지류5	경기도박물관	진주류씨합장묘출토복식
7	(合葬) 同墳異槨	정경부인 은진송씨 (나주정씨 승정대부 응두 부인)	1509-1580	경기도 고양시 (1988)	여성단령1, 저고리8, 치마1, 소매조각9	단국대석주선 기념박물관	박성실, 「조선전기 출토복식연구」
8	(單葬)	宜人평산신씨(종6품 引儀 장수황씨 부인	16세기 말기 추정	경기도 파주 (2004)	장의1, 저고리류15, 배자류1, 치마2, 솜바지1	문경새재 박물관	금선단치마입고어디다녀오셨을까
9	(單葬)	양천허씨, 令人 (4품관 부인)	16세기 추정 (수정)	충남 청양 (1982)	장의3, 저고리5, 솜치마1	단국대석주선 기념박물관	박성실, 「조선전기출토복식 연구」
10	(單葬)	안동김씨 (定宗 駙馬 朴寅의 5대 孫婦)	16세기 후반 (수정)	경기도 광주 (1968)	솜저고리2,솜치마2,솜바지1	국립민속 박물관	석주선 『한국복식사』
11	(合葬)	순천김씨 (蔡無易 후실 宜人6품)	채무이 참조 1537-1594	충북 청원 (1977)	장의1, 회장저고리2, 적삼2, 치마1,바지2, 보공용철릭2, 직령1, 답호1, 겹누비바지2, 솜토시1, 간찰류 185점	충북대박물관	김동욱 · 고복남 복식2호(1978)
12	17세기 (單葬)	장기정씨 (영의정 기자헌 후실)	1565-1614	경북 포항 (1999)	단령1, 대, 장의6, 저고리류10, 치마7, 바지류3, 보공용 도포 중치막 저고리 포함	안동대박물관	포항내단리 출토 장기정씨 보고서

1. 長衣

장의는 장옷이라고도 하며 조선시대 여성의 여성의 대표적인 포제로서 왕비를 비롯하여 서민에 이르기까지 外衣로 착용되었다. 18세기에 이르러 머리에 쓰고 있는 풍속화에서 보여지듯이 쓰개용으로도 사용되었다. 전술한 세조2년 3월 집현전 직제학 梁誠之의 장의에 대한 상소문 내용이 출토복식에서도 확인되는데 안동대박물관 소장의 장기정씨 출토복식 중에는 장의위에 장저고리를 착용한채 수습되기도 하였다. 출토된 장의는 누비장의나 솜장의가 많아 주로 방한용으로 착용되었던 것으로 보인다. 그러나 선조비인 의인왕후와 계비인 인목왕후 염습의대 기록중에는 비단 겹장의와 솜장의, 누비장의까지 수십벌의 사용기록중 저포 홑장의가 포함되어 있으며 문경새재박물관 소장의 평산신씨 유물중에도 왕실 못지않은 금선단 당의, 치마와 함께 모시 홑장의가 포함되어 있다. 연산군4년 6월 경진에는 예조에서 홑으로 만든 單長衣 착용을 금하도록 건의하였고 중종17년 8월 12일에도 예조에서 서민녀의 백저포 장의 착용을 금지토록 한 기록이 확인된다.

장의의 조형적 특징은 겉길과 안길이 좌우 대칭형으로 구성된 점이다. 네모난 목판깃이 겉길과 안길 안쪽으로 들어가 달려있으며 예외는 있으나 겉섶과 안섶이 두장으로 되어있고 겨드랑이 아래 조그만 삼각무(사각접은형)가 달려있으며 소매 끝에 흰색 거들치가 달려있다.

여성용 장의는 문단을 사용하거나 거들치형 넓은 끝동과 소형 삼각무에 장식성이 나타난다. 16세기의 장의는 저고리를 길게 한 형태와 유사하다. 목판깃이 길 안쪽으로 달린 일선문씨 단저고리는 장의와 동일하게 되어있다. 이러한 사항을 참조하여 남자 저고리와 같이 일색의 장의를 남자장의로 추정할 수 있다. 하절용 모시 홑장의는 적삼이나 한삼의 경우와 같이 장식하지 않은 특징을 보이며 이 경우 남녀용의 구분 기준이 애매하다. 남자 분묘인 김함 묘 출토 長衣의 경우 소화문단 누비, 명주 누비, 무명 솜장의로서 누비 장의 2점은 깃과 소매 끝, 겨드랑이 삼각무가 이색 옷감으로 구성되어 여자 장의로 보인다. 소화문단을 누벼서 만든 누비장의는 섶이 모두 두쪽으로 달려있으나 안섶이 작은 형태이며 나머지 2점의 안섶은 모두 한쪽으로 달려있다.

일선문씨 장의는 겉섶과 안섶이 두쪽으로 달려 있으나 안섶이 좁다. 홑장의에는 겨드랑이 삼각무가 부착되지 않았으며 겹장의와 함께 안섶은 한쪽만 달려있어 비대칭을 이룬다. 동일한 분묘에서 부분적인 차이를 나타낸다. 연안김씨와 파평윤씨의 장옷은 모두 섶이 두쪽으로 되었는데 겉섶과 안섶의 크기가 비슷하여 좌우대칭으로 보인다. 광주이씨와 자부 청주한씨묘 장의 5점은 길이 120~122㎝, 품71~80㎝, 화장92~102㎝이다. 연화문단 솜장의와 깃을 연화문으로 하고 끝동부분이 상색으로 남아있는 솜장의는 자부 청주한씨 장의로 볼 수 있다. 연화문단 장의는 명주와 달리 廣幅임에도 불구하고 두쪽의 섶을 달아 주었

는데 이는 장의 구성의 한 특징으로 보여진다. 이러한 형태는 정부인 여흥민씨(1586-1656) 출토장의류에서도 확인된다.[21] 또한 풍성한 품을 가진 16세기 장옷에 비해 17세기 장옷은 품은 70cm 내외로 좁아지기 시작하며 길이는 오히려 길어짐을 볼 수 있다.〈표3 참조〉

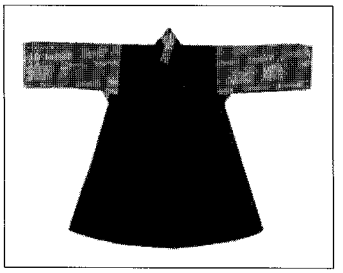
〈표 3〉 16세기의 여성용 長衣

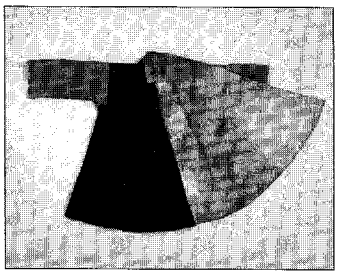
구성	파평윤씨 (1566卒)	청주한씨 (16세기중반)	일선문씨 (16세기중반추정)	남양홍씨부인 (16세기중기)	숙부인 연안김씨 (1570년대추정)	宜人박씨 (16세기중후반)
수량	솜장옷3 누비장옷1	명주솜장옷 3 연화문솜장옷2 (남녀복 섞였음)	솜장옷2 모시홑장옷1 면포겹장옷1	공단 솜장옷 1	모시장옷1 솜장옷2	·
크기	길이 117-124cm 품 70-75cm 화장 88-89.5cm	길이 120-122cm 품 71-80cm 화장 92-102cm	길이 107-119cm 품 80cm이상 화장 84-97cm	길이 122cm 품 70cm 화장 104cm	길이 120-128cm 품 62-64cm 화장 92.5-98cm	·
겉섭	두쪽 섶	두쪽 섶	두쪽 섶	두쪽 섶	두쪽 섶	·
안섭	두쪽 섶	두쪽 섶	두쪽 섶	두쪽 섶	두쪽 섶	·
구성	정경부인 은진송씨 (1509-1580)	宜人평산신씨 (16세기말기)	令人양천허씨 (16세기 추정)	안동김씨 (16세기추정)	장기정씨* (1565-1614)	여흥민씨* (1586-1656)
수량	·	모시홑장옷 1 염화문솜장옷1 면포솜장옷 1 누비장옷 2	매화문장옷 1 명주누비장옷 1	·	화문단 장옷4, 명주장옷2	솜장옷7(화문, 세주) 누비장옷4(화문,세주)
크기	·	길이 11-120cm 품60-68cm 화장 83-110.5cm	길이 120-126cm 품 56-60cm 화장 84-91cm	·	길이119-123cm 품60-70cm 화장85-102.5cm	길이 125-130 품 58-70 화장 74.5-85.5
겉섭	·	두쪽 섶	두쪽 섶	·	두쪽 섶	두쪽 섶
안섭	·	한쪽 섶	한쪽 섶	·	두쪽 섶	두쪽 섶

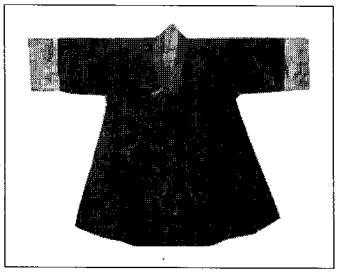
2. 수의 團領

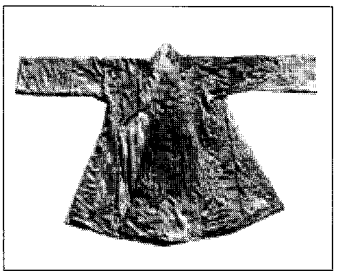
여성의 단령은 임진왜란을 전후한 시기에 발굴되고 있다. 미발표된 자료를 포함하여 10여건에 이른다. 여성의 단령은 당시의 남자 관복용 단령과 비교하면 예외의 경우도 있으나 앞길이 짧고 뒤가 긴 前短後長형이며 길고 넓은 고름, 양쪽 무를 부채모양의 摺扇과 유사하게 접은 방법등 부분적으로 차이를 보이는 특징을 보인다. 이러한 특징을 고려하여 당시 여성들의 단령착용 가능성이 설득력을 얻고 있으나 아직 해결되지 않은 문제점이 남아있다. 설득력있는 문헌기록이 보이지 않을 뿐만 아니라 모두 한점씩 출토되었고 수의용 上服

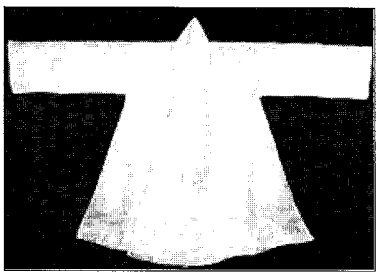
21) 박진영 · 이지영, 2003, 『동래정씨 묘 출토복식 조사보고서』, 경기도박물관, pp.202~211.


〔그림 34〕 파평윤씨 누비장옷


〔그림 35〕 파평윤씨 누비장옷 펼친모습


〔그림 36〕 김함 장옷


〔그림 37〕 남양홍씨의 부인

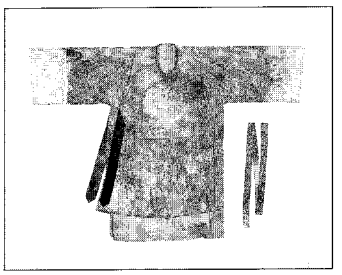

〔그림 38〕 일선문씨

〔그림 39〕 여흥민씨 (1586-1656)

으로 착용된점, 남편의 관직보다 높은 흉배를 착용한 葬俗의 사례, 장기정씨나 연안이씨, 평산신씨, 의인박씨 단령등 품이 매우 넓고(90~102㎝) 상대적으로 소매가 짧으며 길이는 매우 길다(131~157㎝). 또한 한삼부분에 시접이 거죽으로 나와 있거나 이부분만 엉성하게 바느질 되어있고 무나 소매 배래 부분을 이어서 바느질한 공통점도 발견된다. 부분적으로 개조한 흔적이 확인되는 경우도 있다. 그밖에 유물에 따라 수의용으로 엉성하게 바느질된 점 등을 감안할 때 당시의 장속(葬俗)도 고려해 보아야 할 것이다. 『상례비요』(1621) 中 여자의 상례에는 남자의 복식으로 습하지 않도록 "女喪男服不襲"이라 하였고 반대로 남자의 상에는 여복으로 습하지 말도록 하는 내용도 확인된다. 또한 송시열(1607-1689)도 古禮에는 여자도 심의를 입어야 한다고 하였으나 세속에서는 여복이 아니라하여 쓰는 사람이 전혀 없다고 하였다. 한편 18세기 쓰여진『사례편람』상례 습의 기록에는 여자에게도 남자의 심의를 원삼, 장의류와 함께 기록하고 있어 男服으로 습의를 사용하는 풍습이 있었음을 시사한다. 국초부터 문헌에서 확인되는 원삼이나 단삼등의 심도있는 연구와 앞으로 출토될 유물을 기대해보기로 한다. 이와 관련된 구체적인 내용은 필자의 拙稿가 있다.[22]

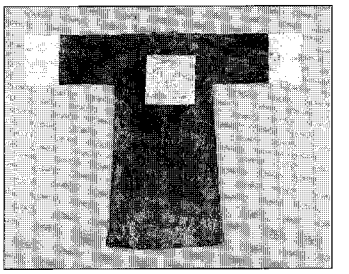
16세기의 여자분묘에서 보이는 수의 단령은 17세기 초반의 장기정씨의 단령에서도 같은 구성법을 보이고 있다. 그러나 16세기 전후로 추정되는 죽산이씨(竹山李氏), 전주최씨의 단령은 앞길에는 수의단령과 같은 접선형의 무가 있으나 뒷길은 원삼의 도련과 같은 형태이다. 장기정씨와 비슷한 시기에 두가지 유형이 공존하였을 가능성도 있다. 유물의 형태만을 논한다면 죽산이씨나 전주최씨의 단령은 16세기 수의단령에서 17세기 원삼으로 변천되

는 과도기 유형으로 고려해 볼 수도 있다. 전술한 바와 같이 이 또한 엉성한 바느질과 수의로 개조한 흔적이 있어 올바른 판단에 어려움이 있다. 그러나 추후 조선초기 '몽두의' 기록과 같이 대금형 옷도 기대해 볼 만하다.

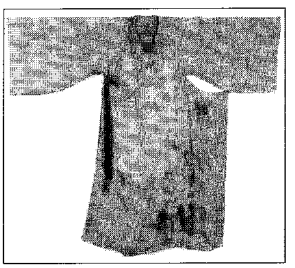


〔그림 40〕 파평윤씨 단령
(전단후장형)

〔그림 41〕 의인박씨 단령
(앞뒤길 同)

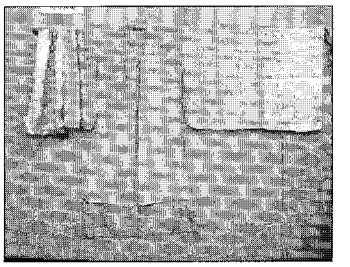


〔그림 42〕 장기정씨단령
(앞뒤길 同)



〔그림 43〕 전주최씨 단령
(앞면의 단령 무 모습)

〔그림 44〕 전주최씨 단령
(뒷면의 원삼도련형태)



〔그림 45〕 해평윤씨 원삼
(17세기 말)

3. 다양한 모양의 저고리류

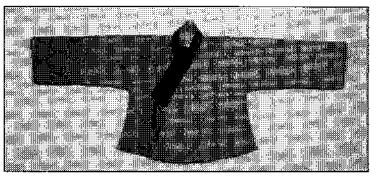
저고리[赤古里]는 세종 2년(1420) 9월 무인에 원경왕후(세종의 생모) 국상시 겹막음[袂隔音]과 함께 初見된다. 저고리라는 명칭 외에 소小저고리, 단短저고리, 회장저고리回裝赤古里, 소오자小襖子, 겯마기袂隔音, 액마기腋勹只, 장저고리長赤古里, 당唐저고리, 고의串衣, 적삼赤衫, 소小적삼 등이 있다. 적삼은 여름용 홑저고리, 또는 속옷 등으로 요즈음 인식되고 있으나 조선전기의 적삼은 다양한 색상과 소재가 사용되었으며 홑옷으로 뿐만 아니라 겹옷으로도 제작되었다.

명칭이 다양하다는 것은 동일한 복식에 여러 명칭이 공존할 수도 있으며 세부적인 차이에 의해서 명칭이 분화되었을 가능성도 있다. 이는 16세기 여자의 출토 저고리류에서 뚜렷이 확인된다. 여성의 저고리류는 남자의 경우와 달리 외의적인 기능이 강하여 깃, 끝동, 겨

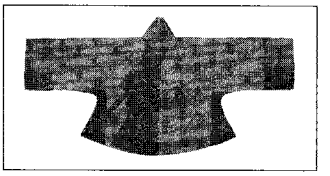
22) 박성실, 「임진왜란 전후 단령의 실증적 고찰」, 『금선단 치마입고 어디 다녀오셨을까?』, 문경새재박물관. 2005. pp.256~287.

드랑이, 섶 등을 몸판의 색과 다르게 해주어 장식적인 효과를 나타내었으며 형태에 따라 명칭도 다양하게 나타난다. 임란전의 저고리는 신체에 비해 길이가 길고 품이 넓어 누구나 입을 수 있는 free size형이다. 저고리의 구성은 목판깃에 깃너비 반정도의 동정이 달렸으며 깃아래는 짧고 좁은 겉고름이 있다. 옆선에는 옆무가 달여있어 품이 더욱 풍성하다. 또한 속고름의 흔적이 보이지 않는 공통적인 특징을 보인다. 한분묘에서 저고리의 길이는 50~80cm 전후로 다양하게 나타난다. [그림46~48 참조]

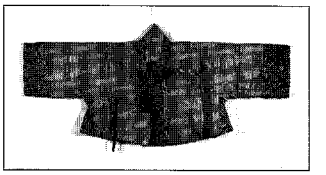
〈청주한씨 묘 출토, 다양한 길이의 저고리류〉



〔그림 46〕 청주한씨 장저고리



〔그림 47〕 청주한씨 결마기



〔그림 48〕 청주한씨 회장저고리

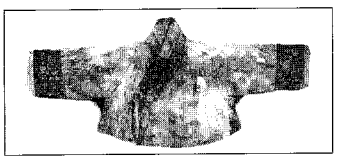
이를 좀더 세분화하면 깃의 모양은 겉깃과 안깃이 모두 목판깃이며 깃달이에 따라 모양이 달라진다. 옆선에는 무를 붙여 장식하는데 형태는 겨드랑이 아래 삼각무를 장식하고 옆으로 사다리꼴무를 붙인 두쪽무 형태와 겨드랑이 아래로 ㄱ 자형으로 한개의 무를 부착하는 한쪽무의 형태가 있으며 예외의 경우로 삼각형무 두개가 부착된 두쪽무도 있다. 이러한 구성을 기본으로 하여 단저고리형은 50cm전후, 중저고리형은 60~70cm전후, 장저고리형은 80cm전후로 분류하였다.[23] 분류대상은 여자 저고리가 다량으로 발굴된 여분(女墳)을 중심으로 한다.〈표4 참조〉 이중에는 부의(賻儀)개념의 수의(襚衣)용으로 배우자을 포함한 성별이 다른 복식류가 포함되어 있다. 파평윤씨 저고리중에 보공용으로 출토된 명주 이중 칼깃 민저고리도 남자 저고리에 포함된다. 이저고리는 고름이 부착된 부위가 여자와 달리 깊게 여며지게 된 공통된 특징을 보이며 여자 저고리에는 보이지 않는 속고름도 있다.

가장 짧은 단저고리는 50cm 전후로서 허리를 덮어준다. 小襖子, 小串衣(왕비용) 등으로 불려지기도 하였으며 주로 금직단, 문단 등으로 깃, 섶, 끝동, 겨드랑이를 장식해 주었다. 겉깃과 안깃 모두 목판깃을 기본으로 하며 섶에 깃이 달리는 방법이 다양하다. 단저고리는 깃달이가 섶밖으로 내어달린 목판깃이 주종을 이루며 간혹 섶안으로 반쯤 들여서 달린 목판깃도 공존한다. 안깃은 겉깃보다 다양하여 완전히 내어달린 경우, 반쯤 내어달린 경우, 섶안으로 들여서 달린 경우 등이 있다. 무의 모양은 한분묘에서도 한쪽무와 두쪽무가 함께 있다.

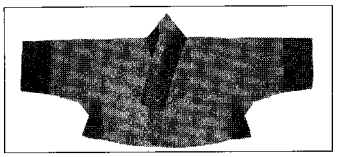
---

23) 이 부분은 본인의 박사학위 논문(1992년)에서 시도되었으며 이는 이후 축척된 발굴에서도 적용되고 있다. 본고는 현재(2006. 4)까지 발굴된 자료를 추가하여 보완한 것이다.

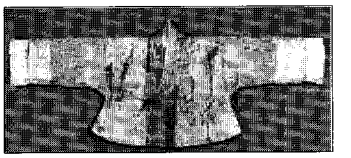
〈겉깃달이 유형〉



〔그림 49〕 내어달린 겉깃/두쪽무
파평윤씨 저고리

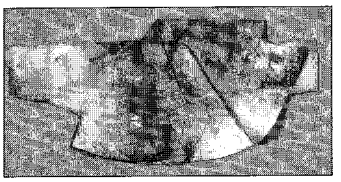


〔그림 50〕 반들여달린 겉깃 /두쪽무
은진송씨 저고리

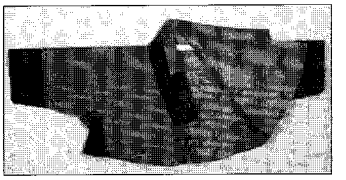


〔그림 51〕 들여달린 겉깃 / 한쪽무
일선문씨 저고리

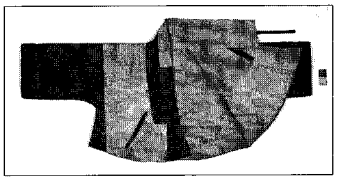
〈안깃달이 유형〉



〔그림 52〕 내어달린 안깃/한쪽무
파평윤씨 저고리



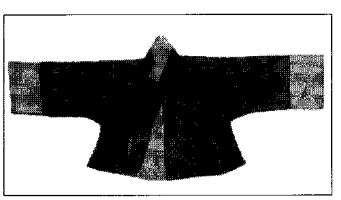
〔그림 53〕 반들여달린 안깃 /두쪽무
은진송씨 저고리



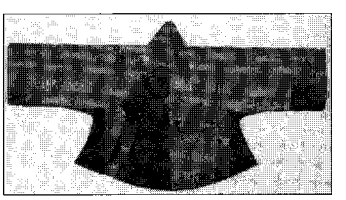
〔그림 54〕 들여달린 안깃/ 한쪽무
의인박씨 저고리

60~70㎝ 전후를 중저고리형에 포함시킬수 있는데. 겉깃과 안깃이 모두 네모난 목판깃이며 섶쪽으로 들여달린 경우도 있으나 거의 대부분 겉깃은 섶의 바깥쪽으로 달아 주었다. 안깃은 깃달이가 들여달린 것와 내어달린 것 등 다양하다. 중저고리형은 단저고리보다 길고 장저고리보다는 짧아 양옆이 막혀있는 특징이다. 파평윤씨 중저고리처럼 옆이 트여 있는 예외의 경우가 있으나 이는 묘주가 당시 임부였던 것을 감안할 수 있다. 옆이 막혀 있는 특징으로 인해 挾隔音, 肩勹只, 腋勹只 등으로 표기되었으며 크기가 다를 뿐 형태는 장식부분이 있어 단저고리와 동일하다. 옆무는 한쪽무, 두쪽무 모두 공존하는데 겨드랑이 아래 옆선의 길이가 길어져 단저고리에 비해 곡선화 되는 경향이 있으며 16세기 후반으로 갈수록 옆선과 도련의 곡선이 심화되어 간다.

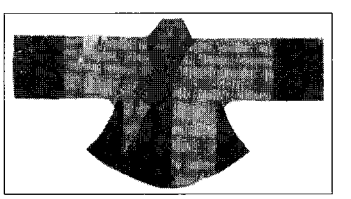
〈곡선화가 심화되는 중저고리〉



〔그림 55〕 파평윤씨 중저고리
(고려대박물관 소장)



〔그림 56〕 청주한씨 중저고리
(결마기)

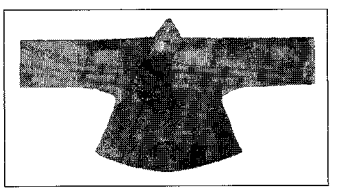


〔그림 57〕 안동김씨 중저고리
(국립민속박물관 소장)

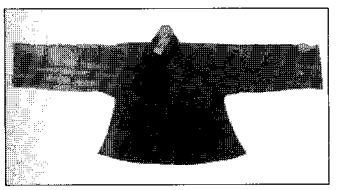
가장 긴 장저고리는 80㎝ 전후의 길이로서 둔부선까지 이른다. 깃은 대부분 겉깃과 안깃 모두 내어달린 목판깃이며 옆무는 한쪽무로 구성되어 양옆이 트여있다. 장저고리는 형태

는 동일하지만 옷감의 쓰임에 따라 당저고리와 장저고리로 분류된다. 당저고리는 당의, 당한삼, 당의복, 당고의 등으로도 표기되어 있다. "唐"의 사전적 의미는 명사앞에 붙어 그 물건이 중국에서 온 수입품임을 나타낸다고[24] 하는데 유물에서 확인되는 내용도 고급비단을 사용하고 있음이 확인되며 왕실이나 사대부가에서는 補나 胸背를 달아 주었다. 당의는 예복용으로 착용되며 16세기의 은진송씨 당저고리, 평산신씨 당저고리 등은 가슴선 아래가 금선단으로 장식되어 있으며 파평윤씨의 장저고리 1점은 금선단은 아니나 어깨 부분을 화려한 문양의 옷감으로 재단하여 덧붙인 모습이 국말 당의 중 어깨 부분에 금박을 한 모습과 흡사하다. 17세기의 안동권씨 묘 출토 당의에는 봉황흉배 부착되어 있다. 이에 비해 장저고리는 옷감의 소재가 명주나 무명등 소박하고 주로 덧저고리용으로 착용되었던 것으로 보인다. 고름은 모두 끈모양의 좁고 짧은 명주 고름이 달려있다. 옆트임과 관련하여 장기정씨 저고리 중에는 길이 78㎝의 장저고리는 옆이 막히고 별포(別布)의 장식이 되고있어 곁마기로 보고된바 있다.[25]

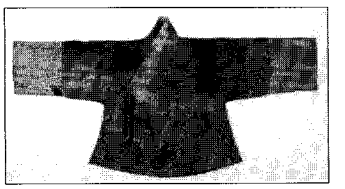
〈다양한 당저고리 유형〉



〔그림 58〕 평산신씨 당저고리



〔그림 59〕 은진송씨 당저고리



〔그림 60〕 파평윤씨 장저고리

4. 치마

치마는 저고리와 일습을 이루는 대표적인 여성복으로서 의례용과 평상용 치마로 구분하여 착용하였다. 赤古里의 표기와 같이 赤丌도 세종 2년 처음으로 확인된다.

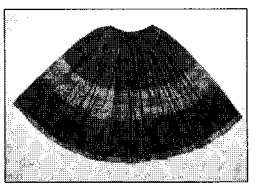
上赤丌, 小赤丌, 表赤丌외에 재봉방법에 따라 홑[單], 겹(袷), 납(衲), 솜[襦] 치마로 구분되어 있으며 치마색은 남, 자적, 아청, 백색, 초록, 다홍 등이며 필단, 주, 견, 초, 라, 향직이 사용되었다[26]. 16세기 치마의 조형적 특징은 의례용과 평상용으로 구분되어 나타난다. 임진왜란 이전의 의례용치마는 모두 홑치마로서 금사를 넣어 제직한 금직[금선]단을 사용하여 화려하게 만든 스란치마와 이외에도 장식없이 만든 의례용 치마가 있다. 치마 전체를 금선단으로 만든 평산신씨 치마도 있다. 청주한씨와 남양홍씨 배위 치마에는 동자포도문

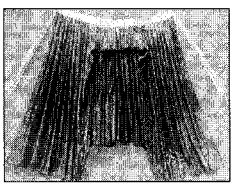
24) 단국대학교 동양학연구소, 『한국한자어사전』 권1, 단국대출판부, 1996, p.859.
25) 이은주, 「장기정씨묘의 출토복식과 기타유물」『포항내단리 장기정씨묘 출토복식 조사보고서』, 1999, p.44.
26) 懿仁王后 『殯殿魂殿都監儀軌』, 1600, 서울대학교 규장각도서

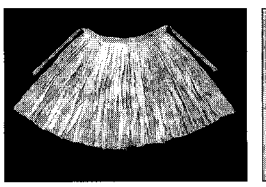
〈표 4〉 다양한 유형의 16세기 저고리류

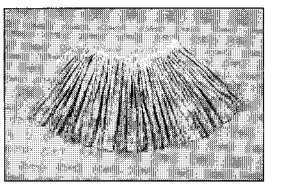
저고리 유형		파평윤씨 (1566卒)	청주한씨 (16세기중반)	일선문씨 (16세기중반추정)	남양홍씨부인 (16세기중기)	숙부인 연안김씨 (1570년대추정)	宜人박씨 (16세기중후반)
단저고리	길이	48~53cm 11점	52~58cm 5점	54cm 1점	59cm 2점	51~58.5cm 5점	54~61cm 4점
	겉깃	내어달린 목판깃 반들여달린 목판깃	내어달린 목판깃	들여달린 목판깃	내어달린 목판깃	내어달린 목판깃	내어달린목판깃
	안깃	내어달린 목판깃 반들여달린 목판깃	들여달린목판깃, 반들여달린 목판깃	상동	반들여달린 목판깃	상동	내어달린목판깃 들여달린목판깃
	무	한쪽무/두쪽무	두쪽 무	두쪽 삼각무	한쪽무/두쪽무	두쪽무/한쪽무 /두쪽 삼각무	한쪽무/두쪽무
중저고리	길이	58~63.5cm 3점	64~69cm 5점		67cm 1점	72cm 1점	
	겉깃	내어달린 목판깃	내어달린 목판깃		내어달린 목판깃	내어달린 목판깃	
	안깃	내어달린 목판깃 반들여달린 목판깃	상동		상동	상동	
	무	두쪽무 /한쪽무(옆트임)	한쪽무,		두쪽무	한쪽무	
장저고리	길이	76.5~81cm 7점	75~81cm 5점	70.5~82.5cm		78~81.5cm 9점	72.5-82.5cm 4점
	겉깃	내어달린 목판깃	내어달린 목판깃	내어달린 목판깃		내어달린 목판깃	내어달린 목판깃
	안깃	상동	상동	상동		상동	상동
	무	한쪽무, 옆트임	한쪽무, 옆트임	한쪽무, 옆트임		한쪽무, 옆트임	한쪽무, 옆트임
저고리 유형		정경부인은진송씨 (1509-1580)	宜人평산신씨 (16세기말기)	令人양천허씨 (16세기 추정)	안동김씨 (16세기추정)	순천김씨 (夫:채무이 참조(1537-1594)	장기정씨 (1565-1614)
단저고리	길이	45~52cm 3점	48.5~56cm 3점	41~56cm 2점		48cm 2점	57~59cm 2점
	겉깃	내어달린 목판깃 반들여달린 목판깃	내어달린목판깃 3cm들여달린목판깃	내어달린 목판깃 반들여달린 목판깃		반들여달린 목판깃	내어달린 목판깃
	안깃	들여달린 목판깃 반들여달린 목판깃	반들여달린 목판깃 내어달린 목판깃	반들여달린 목판깃		상동	들여달린목판깃
	무	두쪽무	두쪽무	두쪽무		두쪽무	한쪽무
중저고리	길이	62~71cm 6점		69cm 1점	66~68cm 2점		
	겉깃	내어달린 목판깃		내어달린 목판깃	내어달린 목판깃		65~69cm 4점
		반들여달린 목판깃					내어달린 목판깃
	안깃	반들여달린 목판깃		들여달린 목판깃	?		상동 한쪽무
	무	두쪽무		한쪽무	두쪽무		78-81cm 내어달린 목판깃
장저고리	길이	76~79cm4점	84-85cm 3점	81~83cm 2점			
	겉깃		내어달린 목판깃	내어달린 목판깃			상동
	안깃		상동	상동			
	무	한쪽무, 옆트임	한쪽무, 옆트임	한쪽무 옆트임			한쪽무, 옆트임 78cm은 옆트임없음

이 직금된 두줄의 쌍스란이 중간부위에, 도련부분에는 좁은 금직단을 달아 주었다. 그밖에 전단후장의 홑치마로 앞길이는 본인의 신장에 맞추고 뒷길이는 119~127㎝로 앞보다 약 25㎝ 전후로 길게 하였다. 치마폭은 운문이나 화문필단 9폭, 명주 14폭으로 500~600㎝에 이른다. 이러한 치마는 상류층 여성 분묘에 나타나는 공통적인 양식으로 서양복의 버-슬 스타일과 유사한 조형적 특징을 보였다. 평상용 치마는 명주나 모시 12폭치마로 치마길이는 95㎝전후의 평균치이다. 착장상태를 기준하여 오른쪽 여밈이 많이 보였으며 주름의 방향은 오른쪽에서 왼쪽으로 잡힌 경우가 많이 보였다. 주름나비는 2.0~4.5㎝로, 동일한 치마에도 각 주름의 나비가 불규칙하게 잡은 경우가 확인되었다. 치마하단을 접어주어 길이를 짧게 조정한 단치마는 숙부인 연안김씨 뿐 아니라 파평윤씨의 치마에도 접음단의 흔적이 남아있는 치마가 3점이 있다. 또한 종8품부인(일선문씨) 치마에도 확인되어 실용적인 목적을 염두에 두고 만든 치마로 볼 수 있다. 접음단 치마는 장기정씨, 단양우씨 등에서도 발견되어 17세기 전반까지도 이어졌음을 볼 수 있다.


〔그림 61〕 청주한씨 스란치마


〔그림 62〕 남양홍씨 배위 거들치마


〔그림 63〕 남양홍씨 배위 평상복치마


〔그림 64〕 단양우씨 접음단 치마(16세기 전후)

5. 다양한 명칭의 속옷류

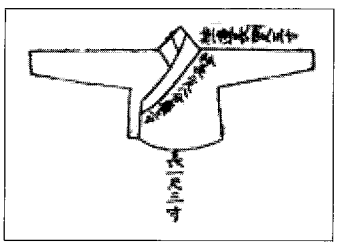
上衣에 해당하는 속옷은 확실한 형태를 알 수 없다. 16세기와 같이 크고 넓은 저고리를 착용할 때 특히 방한용의 속옷은 필수적으로 갖추어야 할 부분이므로 길고 넓은 허리띠가 가슴을 가려주고 방한용의 역할을 하였을 가능성이 있다. 허리띠라고 하지만 가슴부터 허리부분까지 가려주기 때문이다. 누비나 솜으로 만든 허리띠가 많이 보이고 있다.

저고리 안에 입는 속저고리 종류로 赤衫과 汗衫이 있지만 이에 대한 학계의 개념은 아직까지 분명하지 않다. 요즈음 적삼이라고 하면 주로 여름철에 입는 좁은 솔기의 홑저고리를 말하는 경우가 많지만 조선시대 기록 중에는 '홑적삼' 외에 '겹적삼'도 보이며 저포 이외에도 황, 아청, 남색 비단이 사용되어 다양하게 나타난다. 조선시대는 속옷의 의미와 하절기용의 의미가 있는 것으로 짐작된다. 그리고 순천김씨묘에서 복식과 함께 출토된 언간중에는 '아버지의 겹적삼을 빨아서 저고리를 만들어 준다'는 내용이 있는 것으로 보아 적삼과 저고리가 구분되어 사용된 것은 분명하다.

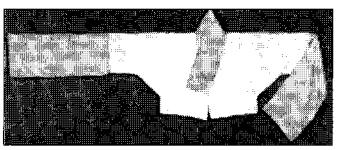
또 다른 상의류 명칭으로 한삼은 당한삼을 제외하면 모두 저포이다[27]. 한삼은 『譯語類

解』에 '솜밧기젹삼' 으로 언해되어 있고 『노걸대』에 나타난 한삼은 속에 입는 저고리류로 보고되었다.[28] 의인왕후와 인목왕후의 양 의궤에도 당의류에 속하는 당한삼을 제외하면 모두 백저포로 되어 있어 속저고리용으로 보인다. 한편 『樂學軌範』 처용복에는 소매가 옷의 길이(1척 3촌)보다 3배가 넘는 4척 5촌의 長袖가 달린 한삼의 도설[그림65]이 있다. 전래되는 처용무 그림자료에는 소매부분이 밖으로 노출되어 묘사되어 있다. 후기에 이르면 한삼은 궁중정재의 손가리개나 원삼이나 활옷등 예복 소매 끝에 부착되는 흰색 비단부분을 지칭하게 되는 변화를 보인다.

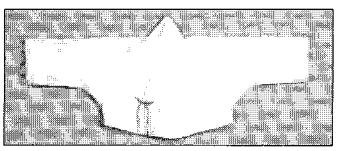
한삼과 적삼의 구분이 애매한 시점에서 『악학궤범』처용복식 한삼이 넓은 목판깃이며 長袖인 것은 일선문씨 저고리 중 한삼으로 보고된 형태와 유사하다. 제주고씨 참판 고여우와 배위 단양우씨 합장묘 유물은 합쳐진 채 기증되어 성별구분이 애매하며 제주고씨(1560-70년 추정) 유물중 섶에 잔주름을 잡은 좁은깃의 삼베 적삼이 독특한 형태이다. 순천김씨의 적삼(중요민속자료 109호)은 겨드랑이 아래에 사다리꼴 무 없이 사방 9cm 크기의 정사각형 무만 달려 있다.



〔그림 65〕 汗衫
『악학궤범』 처용관복도설



〔그림 66〕 일선문씨 한삼

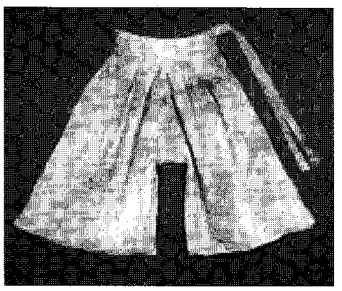


〔그림 67〕 순천김씨 겹적삼

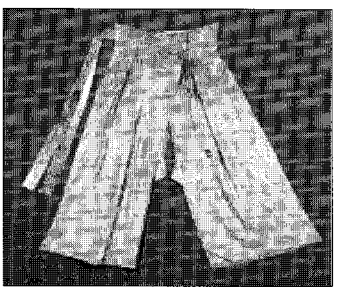
여자의 바지류는 주로 속옷으로 착용되었는데 밑이 막힌 바지를 입고 그 위에 밑이 트인 바지를 입는 것이 일반적인 착장법이었다. 왕실기록으로 봉지, 裹衣, 單裹衣, 單襩衣, 袴袴, 廣袴등이 보이며 국말에는 속곳, 속속곳, 다리속곳, 바지, 고쟁이, 단속곳(단속것), 너른바지 등으로 불려진다. 그러나 유물을 통해보면 기본형태는 큰 변화없이 국말까지 전해지는 대표적인 옷이다. 16세기에는 밑이 트인 바지와 밑이 막힌 바지, 두종류를 절충한 세가닥바지로 대별된다. 또한 단양우씨(16세기 전후 추정)의 어깨끈 바지와 같이 허리에 어깨끈을 달아 활동이 편리하도록된 바지도 있으며 17세기의 출토유물 중에는 문화유씨의 접음단 치마처럼 단속곳 형태에도 1단이나 2단으로 접어준 유물이 있다. 구성은 누비나 솜바지가 많고 부리와 바지통이 직선인 직배래 형태가 주류를 이룬다. 현재까지 조사된 바에

27) 懿仁王后 『殯殿魂殿都監儀軌』, 1600, , 仁穆王后『殯殿都監儀軌』 (1632) 참조
28) 서정원, 2003, 「『노걸대』 刊本들을 통해본 14-18세기의 복식관련 용어 비교 연구」, 이화여자대학교 대학원 석사학위 청구논문, 2003, p.40.

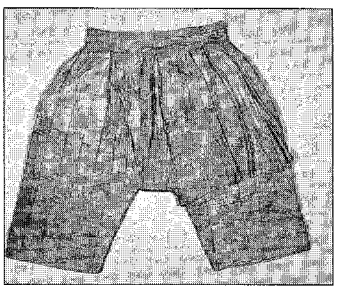
따르면 임진왜란 이전의 남자바지는 여성의 속옷과 동일하며 임란직후부터 사폭바지가 등장한다. 속옷은 조선 전시기에 걸쳐 커다란 변화없이 지속적으로 착용되어 전통적인 형태가 유지되었다.



〔그림 68〕 파평윤씨(1566卒) 밑막힌바지



〔그림 69〕 파평윤씨 (1566卒) 밑트인바지



〔그림 70〕 나주정씨 배위 은진송씨 세가닥 바지

6. 기타

그 외에 16세기 여성 복식품으로 출토된 것에는 수의용으로 사용되었던 멱목이나 여모와 같은 습구가 있으며 너울, 소모자, 그리고 신발 등이 있다.

너울은 고려시대 蒙首에서 유래된 것으로, 여성들이 외출시 얼굴을 가리기 위한 용도로 사용되었다. 너울은 먼저 女笠이라고 하는 삿갓 형태의 갓을 쓰고 그 위에 검은 천으로 길게 덮어 내려뜨리는 것인데 그 유물로 고려대학교 박물관 소장의 16세기 파평윤씨 묘 너울과 경기도박물관 소장의 17세기 여흥민씨의 묘에서 출토된 너울이 잘 알려져 있다. 대개 사다리꼴의 옷감 여섯 조각을 둘러서 둥근 형으로 잇고 중심에는 꽃 모양의 조각을 덮어 장식 겸 마무리를 하였는데 출토되는 유물들은 대체로 검정색이나 자적색으로 짐작되는 四經交羅를 사용하여 만들었으며 가장자리는 푸서 상태로 둔 것이 유물들의 공통점이다. 너울의 부속품으로 유청색이나 자적색 등의 끈[纓子]과 홍색 매듭[每緝] 등이 있었다.

Ⅳ. 맺음말

임진왜란은 여러분야에 걸쳐 연구되고 있듯이 조선시대를 양분할 정도의 막대한 영향을 미쳤다. 복식도 예외일 수 없었으며 임진왜란을 분수령으로 동일한 복식에 대한 부분적인 변화를 포함하여 복식의 종류까지 달라지는 구체적인 변화를 보였다. 이글은 복식의 조형적 변화를 중심으로 선행연구를 참조하여 정리한 것이다.

임진왜란 이전의 복식자료는 불복장 유물 한두점을 제외하면 모두 출토복식이다. 그밖에 圖說부분이 있는 『악학궤범』은 국가 연회를 위한 특수복식이지만 기본적인 형태는 유사하여 국초의 자료로서 의미가 크다. 특히 "흑단령"의 도상은 16세기 출토단령과 동일한 형태을 보였다. 조선시대 남성복식은 기다란 포제 중심의 복식구조를 보이는 반면 여성복식은 치마저고리 위주로 구성되어 있어 성별의 차이가 뚜렷하게 나타나고 있다. 임란이전의 남성 복식은 단령, 답호, 철릭, 직령, 도포, 장의, 액주름, 방령, 저고리, 적삼, 한삼, 합당고형 바지, 개당고형 바지 등이다. 신체보다 크고 넓은 형태로 만들어 입었다. 단령은 모두 홑옷으로서 답호와 철릭을 일습으로 입어 관복차림이 되었다. 따라서 이들 3종류의 옷은 다시 초반, 중반, 말기로 부분적인 변화를 함께 보였다. 특히 진동 변화에 따른 소매통과 옆선의 길이, 前短後長길이, 깃과 소매형태에서 나타났다. 그밖에 액주름이나 장의, 직령 등은 임진왜란을 계기로 점차 소멸되는 포제이다. 방령은 前長後短의 기능적인 디자인으로 마상의로 착용 가능성이 높았다. 저고리보다 裹肚라는 명칭이 사용되었으며 한삼이나 적삼은 모두 상의로 착용되었다. 과두는 포제보다 길이가 짧고 두루마기와 같거나 양옆에 트임이 있는 상의일 가능성을 제시하였다. 포제중심의 구조로 인해 저고리는 속옷의 기능이 많았으며 이중깃 직령포제의 영향으로 남성저고리에 이중깃 칼깃을 포함한 칼깃이 달려있다. 바지는 여자의 속옷류와 동일한 형태였으나 葬俗일 가능성을 비제할 수 없었다.

여성의 복식은 장의와 단령의 포제 이외에 다양한 모양의 저고리류 중심의 구조를 보였다. 원삼은 국초부터 문헌기록에 보이고 있으나 실물은 17세기중반부터 나타나고 있다. 임란이전의 여성신분은 후기와 달리 재산의 균분상속이 이루어지고 있었으며 아들을 대신하여 제사를 책임질 수 있었다, 종6품의 宜人신분에서 금선단을 이용한 치마와 당의가 출토된 사례는 이러한 사실을 뒷받침하고 있으며 경제적인 기반이 갖추어진 경우 신분보다 화려한 복식을 착용할 수 있었다. 장의는 주로 방한용으로 착용었던 유일한 포제였다. 수의 上服[表衣]로 출토되고 있는 단령은 아직 적지않은 문제점을 가지고 있어 추후 과제로 넘긴다. 저고리는 길이에 따라 3종류로 구분되며 모두 목판깃이 달리고 신체보다 크고 넓은 형태가 유행되었다. 회장저고리 형태의 短赤古里 , 옆이 막힌 곁마기(見ㅜ只, 腋ㅜ只, 袂隔音), 장저고리와 당저고리로 대별되었다. 적삼이나 한삼도 있었으나 아직 구분이 명확하지

않다. 서양복의 BUSTLE STYLE을 연상시키는 길고 넓은 의례용치마, 포도동자문 쌍스란치마. 솜이나 누비치마, 겹치마 등 장소와 때를 구분하여 입는 원칙이 있었다.

16세기 출토복식은 신체의 치수를 고려한 디자인보다 금선단, 고급필단의 사용과다로 권위와 신분을 나타내는 미적 가치의 기준이 되었던 것으로 보인다. 임진왜란 이전 남녀의 출토복식을 통하여 당시의 조선사회가 안정적이고 풍요로운 시대였음을 간접적으로 시사해주고 있다.

참고문헌

『高麗史』,

『朝鮮王朝實錄』,

懿仁王后『殯殿魂殿都監儀軌』(1600)

仁穆王后『殯殿都監儀軌』(1632)

『원행을묘정리의궤』(1795)

단국대학교 동양학연구소,『한국한자어사전』권1, 단국대출판부, 1996

박성실,「朝鮮前記 出土服飾 硏究」-임진왜란 이전시기를 중심으로-, 세종대학교 박사학위청구논문, 1992

박성실 외,『한국의 수의문화』, 신유, 2002

박성실 · 김향미,「조선시대 기능적 마상의류의 실증적 고찰」,『한국복식 20호』, 단국대학교 석주선기념박물관, 2002

박성실,「임진왜란 전후 단령의 실증적 고찰」,『금선단 치마입고 어디 다녀오셨을까?』,, 문경새재박물관, 2005

박진영 · 이지영,『동래정씨 묘 출토복식 조사보고서』, 경기도박물관, 2003

서정원,「『노걸대』刊本들을 통해본 14-18세기의 복식관련 용어 비교 연구」, 이화여자대학교 대학원 석사학위 청구논문, 2003

윤소정,「미암일기를 통해본 16세기 사대부 복식」, 서울대학교대학원, 2006

이은주외,『17세기의 무관옷 이야기』, 안동대학교박물관, 2005

이은주,「장기정씨묘의 출토복식과 기타유물」『포항내단리 장기정씨묘 출토복식 조사보고서』, 1999

송미경 · 박진영,「진주류씨 합장묘 출토복식 고찰」,『진주류씨합장묘복식-안성대덕면무능리』, 경기도박물관, 2006

송미경,『심수륜묘 출토복식』경기도박물관, 2004

북한번역판,『악하궤범』현 태백산본, 민족문화사(영인본), 1956

周錫保,『中國古代服飾史』中國戲刷出版社, 1984

단국대학교 석주선기념박물관 소장 임진왜란 이후 출토복 개설

고부자*

목 차

Ⅰ. 머리말
Ⅱ. 출토유물의 개념
Ⅲ. 우리나라 출토복 연구사
Ⅳ. 단국대학교 소장 임진왜란 이후 출토복 현황
Ⅴ. 맺음말

Ⅰ. 머리말

본 연구는 단국대학교 石宙善紀念博物館에 소장하고 있는 出土遺物 중에서 壬辰倭亂 이후의 자료에 대한 현황과 특징 등을 다룬 것이다. 대상은 2006년 3월 말 현재 정리를 마치고 등록된 것에 한하였다.

인간이 살아온 역사는 남아 있는 흔적과 기록물을 통하여 밝혀지고 있다. 모든 학문은 증거자료가 확실하고 충분할 때 가장 신빙성 있는 평가를 받게 된다. 의생활사[服飾史] 연구의 정립에서도 마찬가지이다. 의생활 연구에 필요한 역사의 흔적들로는 유물이나 그림 및 형상물 외에 기록물들을 들 수 있다. 이외에도 전해오는 이야기[口傳]등도 좋은 참조사항이 된다.

출토유물은 기록에서 부족한 부분을 가장 정확하게 보충해준다. 특히 기록에 명시되지 않은 시대나 계층에 따른 옷의 모양 · 크기 · 옷감 · 무늬 · 바느질 등의 다름을 제시하는 가장 정확한 자료원이다. 또한 이를 통하여 당시의 墓制나 葬禮法 등을 살피는데도 큰 몫을 하고 있다.

* 단국대학교 대학원 전통의상학과 교수

조선시대 우리나라 의복은 지금까지 출토된 유물에 의해 임진왜란을 분수령으로 前과 後의 변화가 가장 뚜렷하게 다름이 입증되고 있다. 따라서 이 시기를 조선시대 遺物을 통한 의생활의 큰 변화기점으로 나눔에 무리가 없다고 생각한다.

Ⅱ. 출토유물의 개념

出土遺物이란 무덤[墓]을 옮길 때[移葬] 封墳안의 棺속이나 주변에서 나온 물건들을 말한다. 유물에는 시신을 피복하기 위해서 입히는 '壽衣', 관 속의 빈곳을 채우기 위해 넣는 '補空', 시신을 쌀[殮]때 쓰는 '殮襲具', 이외에 葬禮儀式으로 쓰는 '治棺具類'로 분류된다.

현재 통용하고 있는 '出土服'이란 엄밀하게 구분하면 무덤에서 나온 '衣類'가 되겠지만, 수의나 보공물 및 치관구류까지 포함시키기도 하며, 이를 합해서 편의상 넓게 '출토유물'로 통칭되기도 한다.

壽衣는 인간이 살면서 儀禮나 평소에 입었던 입성거리처럼 머리에 쓰는 것부터 속옷·겉옷·버선·신에 이르기까지 쓰고, 입고, 신는 것들을 모두 갖춘다. 다만 일상복과 다른 점은 이 세상에 가장 좋은 것을 입고 가는 것이다. 수의를 지역에 따라 "수의·머능옷·저승옷·시집갈 옷·호상옷·죽음에 옷"등으로 부르고 있다. 이는 이 세상에서 살면서 평소에 입었던 것과는 다름을 암시한다. "이 세상에서 제일 잘 차려 입었던 비단옷을 입고 간다"고 한다. 즉, 수의는 자신이 처해있던 상황에 따라 다르지만 가장 최상의 것을 갖추는 것이 통례였으며, 혼인 때 입었던 옷을 말한다. 이는 출토복에서도 나타난다.

지금까지 정리된 출토복의 예를 보면 남자는 크게 두 가지로 나타난다. 하나는 通常儀禮服인 深衣나 道袍를, 다른 하나는 官服의 하나인 冠服(團領)을 입고 있다. 관복을 수의로 입은 예는 全州 李氏 檟(密昌君. 1677~1746년. 宣祖7男. 仁城君의 曾孫)과 전주이씨 嵓(耽陵君. 1636~1731년. 宣祖의 曾孫)이다. 여기서 밀창군은 평상시 사용하였던 紗帽·신[木靴][1]을 그대로 사용하였으며, 탐릉군은 사모와 帶·신을 모두 옷감으로 새로 만들어 사용하였다. 평상시 사용했던 사모와 신을 수의로 사용한 것은 밀창군 외는 없다. 참조로 밀창군의 아들(益烜, 靖簡公 1699~1782년)은 같은 묘역에 묻혔으나 심의를 입고 있었다. 여자들은 대부분 치마나 저고리(옆트임 긴 저고리)를 입고 있으며, 드물게 團領이나 袍類(圓衫)도 있다. 쓰개로 남자는 대부분 통상예복에는 幅巾을, 여자는 특별한 모양 없이 女帽를 썼다. 신은 남녀공통으로 貢緞이나 명주 또는 韓紙로 만들었다.

補空物은 평소에 입던 옷이나 아끼던 것들을 넣는다. 衣類로는 완성된 것만 아니라 피륙

1) 단국대학교 석주선기념박물관, 『靴·鞋·履』, 2004, p.80.

[織物]을 넣은 것도 있다. 옷들은 수의를 입힌 위로 시신을 다시 싸는데 쓰기도 하고, 잘 개어서 넣기도 한다. 시신을 싸거나 개어서 넣을 때는 무질서하게 사용하는 것이 아니라 저고리나 윗옷은 머리나 위쪽에, 치마나 바지 등 下衣類는 아래쪽을 싸거나 넣었다. 이렇게 보공을 넣는 이유를 민속조사에 나타난 사례로 보면 "棺이 비면 運柩할 때 시신이 뒤틀리고, 이때 시신의 자세가 바르지 못하면 후손에게 좋지 않기 때문이다." 또 여기에 넣는 옷들은 운구 때 시신이 뒤틀림을 막기 위함도 있지만, "저승 가서 입을 옷"이라고 한다. 드물지만 輓書(輓詞)·書簡類·문방구류·藥劑·瓷器類 등도 있다.

염습구는 옷을 입히고 얼굴을 가린 다음에 시신을 棺안에 넣기까지 사용되는 물건이다. 즉, 시신을 싸고 묶을 때 사용되는 것들을 말하는데 여기에는 얼굴을 가리는 幎目·손을 싸는 幄手·머리카락과 손·발톱을 넣는 五囊, 모든 옷을 입힌 다음 시신을 싸는 작은 이불[小殮衾]과 큰 이불[大斂衾], 棺 안의 바닥에 까는 자리[席]와 지요[地褥]·베개 등이 있다. 또 殮한 다음 棺 안에 넣고 두껑을 닫기 전에 시신의 제일 위에 덮는 天衾 등이 있다.

治棺具類에는 內棺 뚜껑의 표면에 까는 銘旌과 관의 右側 上部에 上下로 나란히 올려놓는 幣帛, 棺의 위와 옆을 덮는 柩衣, 棺內部를 배접하는 종이나 옷감, 外槨과 內棺사이에 넣는 翣(雲·亞翣) 등이 있다. 치관구류와는 별개이지만 묘주의 履歷과 埋葬에 대한 내용을 적은 誌石類가 발견되기도 하는데 이는 碑文이나 族譜와 더불어 墓主의 인적사항을 아는데 매우 중요한 자료가 된다.

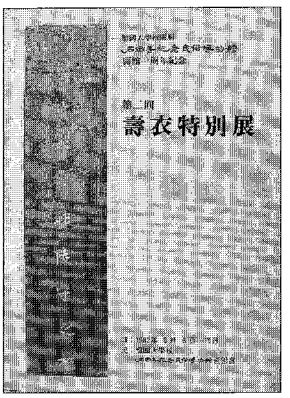
Ⅲ. 우리나라 출토복 연구사

우리나라에서 출토복이 소개되기 시작한 것은 1960년대부터이다.

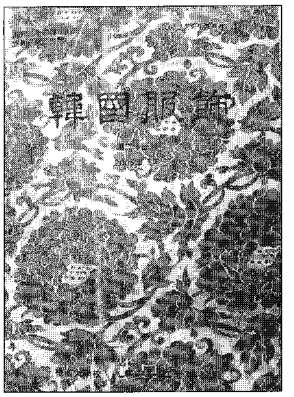
1960년대 현재 근거가 남아 있는 것은 淸衍郡主와 洪濟猷(1782년 死)의 유물이다. 홍재유는 章陵의 參奉이며 1966년 경기도 양주에서 移葬되었다.

출토유물이 자료로서 구실을 하게 된 것은 1964년 경기도 광주군 암동리에서 思悼世子(莊祖)의 따님인 청연군주(1754~1821년)와 남편 金箕性의 合葬墓에서 나온 유물이 정리되면서이다. 합장묘에서는 衣類 약200여 점과 副葬品이 나왔다. 청연군주 의류만도 삼회장저고리 35점을 비롯해서 치마24점,

〔사진 1〕 1981년 5월2일 개관전



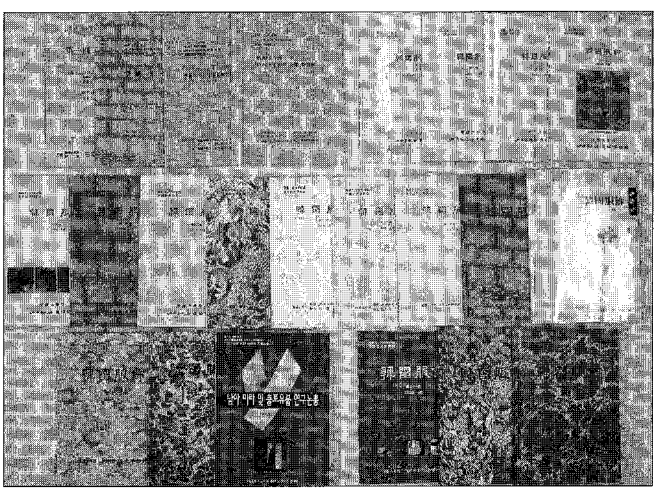
〔사진 2〕 제 2회 수의 특별전



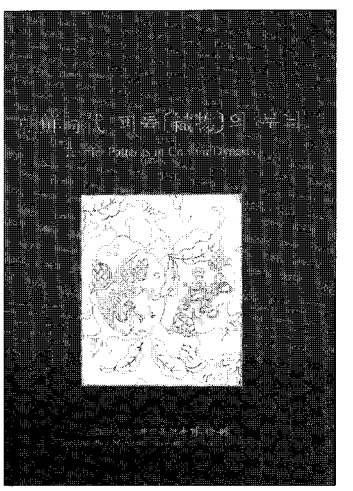
〔사진 3〕 2005년『韓國服飾』

唐衣25점 등이었으며 김기성의 옷은 大禮服 7점 등이다. 의류는 紫色 외에 모두 황토색으로 변하였다.[2] 이 유물들은 왕실의 유물로는 유일한 자료이지만, 아쉽게도 청연군주의 의류 몇 가지만이 여러 곳으로 분산되었으며 그나마도 발표나 정리가 되지 못하고 있다.

출토복이 학문으로 연구를 시작하게 된 계기는 檀國大學校 부속 石宙善紀念民俗博物館[3](이하 본 박물관이라 한다)에서 전시를 하면서부터이다. 출토복에 대한 첫 공개전시는 "수의특별전" [조선전기 廣州 李氏, 경기도 廣州 출토]라는 제목으로 1981년 5월2일 개관[사진1]이후 그해 7월13일부터 7월19일까지 본 박물관 중앙 홀과 세미나실에서 열렸다. 개관 다음해인 1982년에는 開館1周年紀念으로 5월8일부터 15일까지『第二回 壽衣特別展』[사진2]을 본 박물관 중앙 홀에서 열었다. 이 때는 3件 5人 자료로 1980년 경기도 양주군에서 생몰년 미상인 南陽洪氏(兵曹參議)와 配位 原州元氏, 1979년 경기도 果川에서 생몰년 미상인 廣州李氏 彦雄과 子婦 淸州韓氏(中宗의 2女 · 懿惠公主의 孫女), 1981년 경



〔사진 4〕 한국복식 1-23호



〔사진 5〕 피륙의 무늬

2) 石宙善,『韓國服飾史』, 寶晉齋, 1971, pp.145~146 참조.

3) 석주선기념민속박물관은 1981년 5월2일 개관하였으나, 1999년에 단국대학교에 있는 중앙박물관과 합쳐지면서 '석주선기념박물관' 으로 이름이 바뀌었으며, 현재 考古와 民俗 · 服飾분야로 나뉘어져 있다.

기도 龍仁에서 출토된 李嵓(全州李氏. 탐릉군. 1636~1731년)의 유물들이 전시되었다. 2002년 12월에는 경기도 양주 출토 해평윤씨 기증유물 특별전 및 학술세미나를 열고『남아미라 및 출토유물 연구논총』을 냈다. 이러한 전시는 우리나라에서는 물론 세계에서 처음이며, 그 후 본 박물관에서 출토복에 대한 전시와 연구발표는 2005년까지 19회이며[사진3], 금년까지 20회가 된다. 각 회기마다 연구발표지『韓國服飾』[사진4]이 발간되었으며, 이 외에 본 박물관 출토자료의 무늬만을 모은『조선시대 피륙[織物]의 무늬』(2001년)를 발간[사진5]하기도 하였다.

Ⅳ. 단국대학교 소장 임진왜란 이후 출토복 현황

1. 연대설정과 유물

2006년 4월 현재 본 박물관 출토유물은 총 1,079점이며, 이 중에서 壬辰倭亂(이하 倭亂이라 한다) 이후 유물은 714점이다. 본 연구에서 왜란 전과 후의 연대 구분은 墓主의 沒年을 기준으로 하였다. 그러나 연고가 없는 묘[無緣故 墓]이거나, 生沒年이 애매하게 왜란 전후로 걸려 있을 때 문제가 된다. 따라서 유물의 시대구분도 어려워지는데 이는 족보나 현재까지의 연구물을 참조하여 해결하고 있다. 물론 이런 것은 姓別이나 시대구분에 더러 혼선이 있음을 전제로 할 수밖에 없으며, 앞으로 많은 연구 과제를 두는 부분이다.

1) 연대설정

본 연구시기에 있는 대상 인물은 男17, 女8로 총 25人이다. 이 인물들의 沒年은 1624년부터 1841년에 걸쳐있다. 倭亂 前과 後의 수치상 기준은 1600년이 된다. 물론 이처럼 1600년에 기준을 고정시키는 것은 무리이다. 이는 유물이 墓主가 활동하던 시기가 언제이냐에 따라 달라지기 때문이다. 유물에 의하면 1600대 초반에는 매우 혼란스럽고, 왜란 以後의 특징이 자리를 잡는 것은 1600년대 중반쯤이 되기 때문이다. 한 예로 본 박물관 소장유물 중에 묘주의 몰년이 1604년이 있는데 이것은 완전히 前期의 양식을 띠고 있어 본 연구에서 제외하였다. 반면에 몰년 1624년인 묘주의 유물은 왜란 전 · 후의 특징을 잘 반영시키고 있다.

2) 유물

본 연구에서 다루는 遺物은 衣類로 주로 수의와 보공물이며, 필요에 따라 殮襲이나 治棺具類도 첨가했다.

유물을 정리할 때 合葬이거나 또는 여러 柩를 한꺼번에 移葬하게 되면 유물이 뒤섞이기 때문에 性別이나 寸數를 가늠할 수 없는 일이 많다. 예를 들면 1995년 3월12일 충남 천안시에서 濟州高氏 一家의 부부와 아들을 이장한 경우이다. 특히 3人 모두 생몰년이 확실하지 않을 뿐더러 유물이 섞여 있었다. 모든 정황으로 보아 3人의 생몰추정연대는 1500년대와 1600년대 중반기로 추정하여 처리하였다. 또 경기도 여주에서 1987년 3월13~14일에 걸쳐 이장한 東萊鄭氏 일가의 예도 같다. 부부와 아들 3人을 이장했는데 각기 생몰년은 뚜렷하였지만 유물이 모두 섞여 있었다. 다행히 여자의 유물은 그런대로 구별이 되지만, 父子의 것은 어려웠다. 따라서 이렇게 유물이 섞여 구분이 어려운 때는 여자의 것을 가능한 대로 분리시키되 남자 것들은 대부분 일괄 처리하였고, 특히 염습구는 성별에 관계없이 공통으로 쓰이는 것들이 있기 때문에 일괄처리 하였다.

2. 출토유물 개요

1) 소장 유물 정리와 현황

유물이 학문적인 구실을 하려면 완전한 형태를 갖추어야 한다. 특히 출토복에서는 필수조건이다. 이는 대부분의 출토유물상태가 棺내부의 시신이나 土壤 등에 의해 시신의 부패도와 옷감의 부식, 移葬 당시 상황 등에 따라 다르기 때문이다. 특히 유물이 많이 炭化되거나, 오물이 심한 것, 또 수습 당시 파손이 심한 것은 다른 자료처럼 쉽게 활용할 수가 없다. 본 박물관에서는 여러 가지 절차를 거친 다음 모든 정리를 마치고 학문적으로 자료화 할 수 있을 때 최종적으로 유물카드를 정리하고 공개하였다. 지금까지 전시되고 발표된 것은 모두 이런 과정을 최종적으로 거친 것이다.

2006년 3월말 현재 유물카드에 정리된 왜란 이후의 출토유물은 총 714점이다〈표1 참조〉. 유물정리에서 수치는 유물을 정리할 때 수량 단위를 어떤 기준으로 보았느냐에 따라 다르다. 이는 어떤 기준이 정해진 틀에 따르기도 하지만, 정리자의 개인적인 識見에 따라 달라지기도 한다. 한 가지 예로 團領에 胸背가 붙어 있을 때 몇 개로 보느냐는 것이다. 이를 1점으로 보고 비고란에 '흉배 1점(쌍) 부착 됨'이라고 정리되는 것과, 단령과 흉배를 각기 독립자료로 보고 2점으로 처리한 경우가 있다. 또 深衣에서 深衣帶와 袒帶가 같이 있을 때 심의와 함께 3점을 묶어 한틀[一襲]으로 하는 경우와, 하나하나를 독립시켜 3점으로 처리하는 경우이다. 물론 한점 씩 따로 처리하면 전체적인 수치 파악에는 좋을지 모르지만, 비전문인이 볼 때 특별히 주의 깊게 살피지 않으면 한 틀을 알지 못하는 일이 생기는 점도 고려할 부분이다.

〈표 1〉 단국대학교 석주선기념박물관 소장 출토유물 (임진왜란 이후 : 묘주의 沒기준)

2006년 3월말 현재

번호	묘주	생몰년	계급	출토지	출토일	수량	출토유물								분묘형태	출처
							상의	하의	포류	족의	쓰개	대류	염습구	치관구		
1	진주강씨 대호(大虎)	1541 ~1624	장례원 판결사(掌隷院 判決使)	경기도 파주	2001. 11.10	37	3	2	23		1	1	5	2	단	『韓國服飾』 제23호(2005)
(2)	양천허씨 (陽川許氏)	1566 ~1626		경기도 일영	1998. 4.22	29	8	2	7		1		10	1	합장	『韓國服飾』 제17호(1999)
3	제주고씨 여우(汝雨)	1560 ~1630	참판공 (參判公)	충남 천안시	1995. 3.12	87	16	20	21	6			19	5	합장	『韓國服飾』 제15호(1997)
(4)	단양우씨 (南陽洪氏)		참판공 배위													
5	제주고씨 경행(擎行)	1590~ 1600년대 추정	진위대장												합장	
6	용인이씨 홍망(弘望)	1572 ~1637	동부승지	경기도 이천군	1978	6	2		2					2	?	미발표
(7)	양천허씨 (陽川許氏)	1630 ~1660		경기도 고양시	1992. 11.8	18	4	2					11	1	단	『韓國服飾』 제11호(1992)
8	벽진 이씨 지원(志遠)	1616 ~1666	통훈대부 (通訓大夫)	서울 노원구	1988. 5.26	28	6	5	5				9	3	합장	『韓國服飾』 제10호(1991)
(9)	문화유씨 (文化柳氏)	1617 ~1685	貞夫人													
10	동래정씨 양우(良佑)	1574 ~1647	통정대부 (通政大夫)	경기도 여주군	1987. 3.13-14	99	16	18	43	1	2	1	16	2	합장	『韓國服飾』 제8호(1990)
(11)	남양홍씨 (南陽洪氏)	1584~ 1654														
12	동래정씨 태제(泰齊)	1612 ~1669	승지 (承旨)												합장	
13	해평윤씨 (男兒)	17세기		경기도 양주	2001. 11.15	18	1	2	7		1	1	5	1	남	『남아미라 및 유물 연구 논총』(2002)
14	무연고	17세기 추정		충남 천안시		4	1	2	1						단	미발표
(15)	무연고	17세기 추정		경기도 파주		1	1								단	미발표
16	전주이씨 변(賁)	1636 ~1731	탐릉군 (耽陵君)	경기도 용인	1981	66	4	6	36	1	2	2	15		단	『韓國服飾』 제1호(1983)
17	전주이씨 직(樴)	1677 ~1746	밀창군 (密昌君)	서울시 마포구	1999. 12.21	72	2	6	35	1	1	1	24	2	단	『韓國服飾』 제22호(2004)

번호	묘주	생몰년	계급	출토지	출토일	수량	출토유물								분묘형태	출처
							상의	하의	포류	족의	쓰개	대류	염습구	치관구		
(18)	파평윤씨	1735 ~1754	贈정경부인 (貞敬夫人)	충남 예산	1999. 12.21	92	15	7			1		7	62	단	『韓國服飾』 제21호(2003)
19	경주이씨 태곤(泰坤)	1672 ~1763	경령전참봉 (敬寧殿參奉)	충남 진천군	1985. 8.1	5		1	3				1		합장	『韓國服飾』 제6호(1988)
20	풍산홍씨 감보(鑑輔)	1699 ~1763	가선대부 (嘉善大夫)	충남 충주시	1993. 9.24	37	8	1	14				6	8	합장	『韓國服飾』 제13호(1995)
21	전주이씨 익정(益炡)	1699 ~1782	정간공 (靖簡公)	서울시 마포구	1999. 12.21	59	6	5	27	2	2		12	5	단	『韓國服飾』 제19호(2001)
22	홍제유 (洪濟猷)	1782		경기도 양주	1966	1			1						남	미발표
(23)	청연군주 (淸衍郡主)	1754 ~1821		경기도 광주	1963	9	7	2							합장	『韓國服飾』 제1호(1983)
24	풍산홍씨 희준(羲俊)	1761 ~1841	홍문관 (弘文館)	충남 천안시	1991. 11.6	37	3	2	9	4	2	2	6	9	합장	『韓國服飾』 제12호(1994)
25	풍산홍씨	1857 1877 1919		충남 천안시	1995. 10.3	9								9		미발표
	총계					714	103	83	234	15	13	8	146	112		

*( )는 여자임

2) 출토지역

출토지역은 경기, 서울, 충남이며 총 25건에 경기가 12건으로 가장 많다〈표2 참조〉.

〈표 2〉 지역별 출토건

성 \ 지역	경기	서울	충남	기타	총계
남	7	3	6	1	17
여	5	1	2		8
총계	12	4	8	1	25

3) 출토 유물의 내역 및 명칭

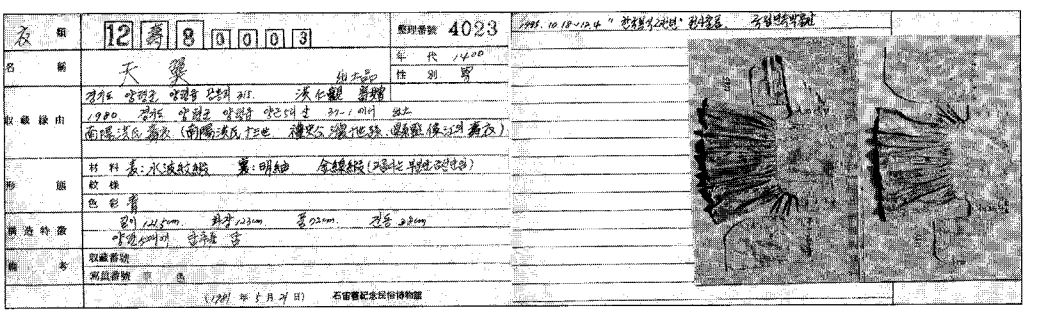
출토유물 내역은 〈표3〉과 같다. 이 중에서 명칭은 카드[사진6]에 정리 될 당시 상황이며, 괄호 안에 누어 쓴 글씨는 참조로 보완될 부분이다. 출토유물을 정리할 때 제일 먼저 쓰는 항목이 명칭이며, 이는 유물정리 못지않게 중요한 부분이다. 명칭은 당시 유물에 대한 정확한 것이 무엇이었는지 알 수 없을 때와, 시대에 따라 모양이 변하면서 어떻게 사용되었지 혼동을 일으키기 때문이다. 그러나 이는 차츰 경험과 유물이 많아지면서 보완되고 정정

하고 있다.

예를 들면 團領은 '官服' 또는 '冠服'으로 처리된다. 특히 '直領'은 가장 많은 혼동을 일으키고 있는데 이 옷은 초기에는 깃[領]이 곧은 袍를 지칭했으나, 이런 類가 여러 가지 나오게 되면서 조선전기에 보이는 직령이라는 단독 명칭으로 고정되기 시작하였다. 또한 반소매[半袖]모양의 '답호'가 後代로 내려오면 없어지고 대신 소매가 없으면서 무가 두루마기처럼 달린 옷이 나오는데 이것도 답호로 표기하였다. 이들은 조선 末期에는 깃까지 없어지는데 이 옷은 '戰服'이라는 명칭이 나타나면서 제 이름을 찾고 있다.

여성용 웃옷으로 조선 전기의 옆이 트인 긴 저고리에 대한 명칭은 저고리, '長저고리, 옆트임저고리' 등으로 정리되고 있다. 또한 용도상 예복치마로 정리하고 있는 뒤가 끌리게 긴 치마와, 또 길이를 조절하기 위해 잡은 앞단과 옆선처리 부분에서 '다트(dart)'라는 외국용어의 사용도 고려해 볼 문제이다.

특히 바지에 대한 혼돈이 심하다. 여자와 남자에 대한 구분 없이 속에 입는 下衣를 통 털어 "바지"라고 하고 있다. 바지라고 한 것에는 가랑이가 막히고 부리까지 곧은 폭으로 내려온 것으로 현재 속치마 대용처럼 쓰였던 단속곳과 팬티용의 속속곳, 가랑이가 트인 開襠袴형에는 여러 가지가 있는데 가랑이가 트이되 세모꼴의 襠을 단 것과 또 트인 開襠袴모양이지만 양쪽에 덮개가 달려 있어서 가랑이가 보이지 않도록 여며지는 것이 있다. 다시 개당고는 부리의 너비가 좁은 것과 넓은 것이 있고 이외에도 기능과 멋을 고려하여 만든 특수형도 있다. 왜란 이후가 되면 성별에 따라 모양이나 용도가 구분되는 속옷류가 나오며 특히 여자 옷은 '襯衣類'라 하여 크게 용도와 형태상 '속속곳, 단속곳, 바지'로 나누고 있다.



〔사진 6〕 유물카드

〈표 3〉 출토유물 내역

번호	묘주	생몰년	수량	출토품
1	진주강씨 대호(大虎)	1541~1624	37	단령(團領)3점, 직령(直領)1점, 답호3점, 철릭[帖裏]8점, 직령포류(도포)2점, 방령(方領)1점, 액주음(腋注音)5점, 저고리(겹)1점, 저고리(누비)1점, 개당고(開襠袴)1점, 단속곳1, 광다회(廣多會)1점, 염습구류(대렴금(大斂衾), 지요(地褥), 명목(幎目), 악수(幄手), 오낭(五囊), 모(帽)), 포(袍), 주(3조각), 삼베조각 등.
(2)	양천허씨 (陽川許氏)	1566~1626	29	장옷5점, 중치막1점, 포(직령형)1점, 저고리4점, 적삼3점, 배자1점, 단속곳1점, 구의(柩衣)1점, 천금(天衾)1점, 명정(銘旌)1점, 대렴금(大斂衾)2점, 현훈(玄纁)2점, 소렴금(小殮衾)1점, 염베1점, 육합모(六合帽)1점, 달비1점, 바지1점, 삽(翣) 등.
3	제주고씨 여우(汝雨)	1560~1630	87	1)남: 적삼5점, 만사(輓詞)1점, 바지(합당고)2점, 바지(개당고)2점, 단속곳2점, 단령(團領)2점, 액주음포(腋注音袍)2점, 직령포4점, 이불1점, 베개2점, 명기(明器)1점, 사발(盌)점, 철릭(天翼)1점, 철릭상(天翼裳)1점, 직령포(直領袍)2점, 직령포(直領布)1점, 삽(翣)2점 등. 2)여: 저고리4점, 바지(개당고)2점, 단속곳2점, 치마4점, 직령포(장의)1점, 베개1점, 삽(翣)1점 등. 3)기타: 저고리7점, 바지(합당고)3점, 바지(개당고)2점, 바지(피륙조각)1점, 직령포(장의)2점, 직령포3점, 이불3점, 지요(地褥)2점, 천금(天衾)1점, 명목(瞑目)2점, 버선2점, 대렴금(大斂衾)3점, 무명포(袍)2점, 염포1점, 석(席)2점, 한지1점, 습신1점, 미투리1점, 호(壺)1점 등.
(4)	단양우씨 (南陽洪氏)			
5	제주고씨 경행(擎行)	1590~1600년대 추정		
6	용인이씨 홍망(弘望)	1572~1637	6	단령(團領)1, 철릭[天翼]1, 삼회장겹저고리1, 솜저고리1, 소매2 등.
(7)	양천허씨 (陽川許氏)	1630~1660	18	명정1점, 치마2점, 저고리4점, 낭(頭髮, 左手·右手, 右足), 이불1점, 욕(褥)1점, 베개1점, 구의(柩衣)1점, 현훈(玄纁)1점, 교포(絞布)1점, 지요(地褥)1점, 자료(資料)1점 등.
8	벽진 이씨 지원(志遠)	1616~1666	28	이불1점, 저고리5점, 철릭(天翼)1점, 액주음포(腋注音袍)1점, 겹직령포(直領袍)1점, 솜직령포(액주음)2점, 치마4점, 솜치마(너른바지)1점, 천금(天衾)1점, 지요(地褥)1점, 베개1점, 모발(毛髮, 베개)1점, 낭(頭髮, 左足, 左手·右手)3점, 보공솜1점, 교포(絞布)1점, 한지말이1점, 상침저고리(피륙조각)1점, 명주조각1점 등.
(9)	문화유씨 (文化柳氏)	1617~1685		
10	동래정씨 양우(良佑)	1574~1669	99	1)남: 모자(帽子)2점, 관복(冠服)1점, 금사쌍학흉배1쌍, 철릭(天翼)2점, 창의(氅衣)7점, 직령포(直領袍)4점, 배자(褙子)1점, 답호(배자)3점, 중치막(中致莫)20점, 적삼(赤衫)4점, 저고리1점, 고의(袴衣, 사폭바지)2점, 바지(사폭바지)7점, 도포(道袍)2점, 합죽선(合竹扇)1점, 비단신1점, 세조대(細條帶)1점. 등 총60점. 2)여: 직령포(장의)6점, 직령포(直領袍)1점, 저고리7점, 치마7점, 바지(개당고)1점, 속곳1점 등 총23점. 3)기타: 베개2점, 천금(天衾)1점, 지요(地褥)1점, 이불8점, 명주(피륙조각)1점, 교포(絞布)3점 등. 총16점.
11	동래정씨 태제(泰齊)			
(12)	남양홍씨 (南陽洪氏)	1584~1654		
13	해평윤씨 남아미라	17세기	18	수의용(누비중치막2점, 요대(腰帶), 명주겹바지), 염의용(누비중치막 3점, 솜장의1점, 누비바지1점, 철릭(?)상의 및 소매부분, 배냇저고리, 소모자) 염습제구(멱목1점, 지요1점, 관내의, 옷감일부), 천금(天衾), 목관(木棺) 등
14	무연고	17세기 추정	4	천익(天翼)1점, 겹저고리1점, 솜바지1점, 누비바지1점 등
(15)	무연고	17세기 추정	1	저고리 1점

번호	묘주	생몰년	수량	출토품
16	전주이씨 변(䆊)	1636~1731	66	1)남: 흉배2점, 관복(官服)3점, 철릭[天翼]2점, 중치막(中致莫)20점, 창의(氅衣)5점, 중단(中單)1점, 답호3점, 도포(道袍)2점, 속적삼1점, 저고리1점, 배자(褙子)1점, 습신외짝1점, 사모(紗帽)1점, 베개1점, 낭(頭髮, 右足, 左手)3점, 망건(網巾)1점, 각대(角帶)1점, 악수(幄手)1점, 요대(腰帶)1점, 천금(天衾)1점, 지요1점, 구의(柩衣)1점, 대렴금(大斂衾)2점, 바지(사폭바지)6점, 천금(天衾)2점, 명정(銘旌)1점 등. 2)여자: 저고리 1점 등.
17	전주이씨 직(織)	1677~1746	72	사모(紗帽)1점, 단령(團領)4점, 대(帶)1점, 흉배(胸背) 1쌍, 창의(氅衣)3점, 소창의(小氅衣)14점, 중치막(中致莫) 4점, 화(靴)1점, 철릭[天翼]1점, 도포(道袍)2점, 소렴금(小殮衾)1점, 대렴금(大斂衾)1점, 조복일습(의, 상, 폐슬, 후수, 대대), 답호2점, 배자(褙子)1점, 저고리1점, 바지6점, 현훈9점, 베개1점, 지요(地褥)1점, 낭(右手, 左手, 右足, 左足)4점, 삽(翣)1점, 칠성판1점, 천(공단)1점, 관내의1점, 천(삼팔주)1점, 악수(握手)1점, 구의(柩衣)1점, 염포 1점등
(18)	파평윤씨	1735~1754	92	배자(褙子)1점, 저고리5점, 단속곳1점, 허리띠6점, 치마류5점, 명정(銘旌), 천금(天衾)1점, 예단(幣帛用)2점, 보(褓, 婚書紙)1점, 보(褓, 幣帛用)3점, 솜베개1점, 대렴금(大斂衾), 바지(開襠袴), 저고리 미완성2점, 솜(보공용), 염베2점, 누비허리띠(미완성), 내구의(內柩衣), 피륙조각54점, 낭(右手・頭髮)1점, 한지1점 등.
19	경주이씨 태곤(泰坤)	1672~1763	5	관복(官服)1점, 중치막(中致莫)2점, 바지1점, 천금(天衾)1점
20	풍산홍씨 감보(鑑輔)	1699~1763	37	창의류4점, 관복(官服 裏)1점, 천익1점, 도포(道袍)1점, 관복(官服)1점, 저고리6점, 누비겹포1점, 바지(사폭바지)1점, 배자(褙子)2점, 포(袍, 부분)5점, 머리싸개[裹頭]1점, 현훈(玄纁)1점, 용도미상3점, 천금(天衾)1점, 이불3점, 백자합(白磁盒)1점, 옥으로 묘주의 이름을 새긴 인장(印章)4점 등.
21	전주이씨 익정(益炡)	1699~1782	59	1)수의: 심의(深衣, 대와 조대를 갖춤), 소창의(小氅衣)1점, 중치막(中致莫)2점, 적삼(赤衫)1점, 고의(袴衣)1점, 솜바지(사폭바지)1점, 행전(行纏)1점, 복건1점, 명목(幎目)1점, 망건(網巾, 옥관자 부착)1점, 악수(握手)1점, 낭(右足・右手・落齒・頭髮)1점, 운혜(雲鞋)1점 등. 2)보공품: 상의(半袖方領)1점, 저고리4점, 바지(사폭바지)3점, 단령(團領)3점, 도포(道袍)3점, 철릭(帖裏)1점, 적초의(赤綃衣)1점, 훈상(纁裳)1점, 대창의(大氅衣)2점, 중치막(中致莫)3점, 소창의(小氅衣)9점 등. 3)기타: 천금(天衾)1점, 지요(地褥)1점, 대렴금(大斂衾)1점, 소렴금(小殮衾)1점, 베개1점, 명주(피륙조각)3점, 장베1점, 염베1점, 보공솜1점, 구의(柩衣)1점, 현훈(玄纁)1점, 한지1점 등.
22	홍제유(洪濟猷)	1782	1	수의(壽衣, 장의)1점
(23)	청연군주(淸衍郡主)	1754~1821	9	당의(唐衣)3점, 삼회장저고리4점, 슬란(膝襴)1점, 치마1점 등.
24	풍산홍씨 희준(羲俊)	1761~1841 1857	37	단령(團領)1점, 철릭(天翼)2점, 심의(深衣)1점, 도포(道袍)1점, 중치막(中致莫)2점, 직령(直領)1점, 저고리[赤古里]2점, 한삼(汗衫)1점, 바지(사폭바지)2점, 복건(幅巾)1점, 망건(網巾, 옥관자 1개 포함), 심의대(深衣帶)1점, 요대(腰帶)1점, 행전(行纏)1점, 단임(單衽)1점, 말(襪)1점, 리(履)1점, 명목(瞑目)1점, 침(枕)1점, 낭(頭髮)1점, 보(褓)3점, 겹금(袷衾)2점, 관의(棺衣)1점, 직령(直領)1점, 풍산홍씨묘지(豊山洪公墓誌)1점, 풍산홍씨장지(豊山洪氏葬誌)1점, 정경부인용인이씨묘지(貞敬夫人龍仁李氏墓誌)1점, 풍산홍씨지석(豊山洪氏誌石)1점, 지석함(誌石函)2점 등.
25	풍산홍씨	1877 1919	9	지석(誌石)3점, 묘지(墓誌)1점, 옹기1점, 접시1점, 완(碗)1점, 그릇파편1점, 저(箸)1점 등
	총계		714	

본 박물관에서 정리되는 출토유물의 종류별 명칭과 분류체계는 〈표4〉와 같다.

출토유물을 통하여 조선전기에는 남녀가 같은 것을 입었다는 새로운 사실을 알게 되었음은 큰 수확이다. 따라서 명칭은 당시에 사용하였던 단어를 찾아내어야 함은 물론이지만, 반면에 시대에 따라 변하는 것을 밝히는 것이 큰 과제이다.

〈표 4〉 출토유물 종류별

① 上衣

	저고리	적삼	한삼	배자	당의	허리띠 (가슴싸개)	방령	저고리	저고리 (조각)	총계 (미완성)
남	21	11	1	8			2			43
여	30	3		2	3	7			2	47
남·여	12							1		13
총계	63	14	1	10	3	7	2	1	2	103

② 下衣

	바지 (사폭형)	치마	단속곳	개당고	합당고	바지 (피륙조각)	슬란	총계
남	34		3	3	2			42
여		19	5	5			1	30
남·여		4		2	4	1		11
총계	34	23	8	10	6	1	1	83

③ 袍類

	團領	冠服	官服	답호	도포	철릭	심의	액주름	직령포	대창의	중치막	소창의	중단	장의	무명포	포	흉배	창의	조복일습	총계
남	14	1	6	8	13	22	2	7	14	2	58	24	1	2		7	4	19	7	211
여									2		1			12						15
남·여						1		3	4					2	2					12
계	14	1	6	8	13	23	2	10	20	2	59	24	1	16	2	7	4	19	7	238

④ 足衣類

	버선	석(席)	미투리	비단신	습신	화	행전	단임	말	리	운혜	소계
남				1	1	1	2	1	1	1	1	9
남·여	2	2	1		1							6
계	2	2	1	1	2	1	2	1	1	1	1	15

⑤ 쓰개류

	모(帽)	육합모(六合帽)	모자(帽子)	소모자	사모(紗帽)	망건(網巾)	머리싸개	복건	소계
남	1		2	1	2	3	1	2	12
여		1							1
계	1	1	2	1	2	3	1	2	13

⑥ 帶類

	광다회(廣多會)	세조대(細條帶)	요대(腰帶)	각대 · 대(帶)	심의대	총계
남	1	1	3	2	1	8

3. 墓主에 따른 유물 특징

다음은 묘주에 따라 다른 몇 가지 특수한 사례를 남녀로 나누어 살펴본 것이다.
출생 순으로 정리하였다.

1) 男性

(1) 강대호(晋州姜氏. 河陰公 大虎. 1541 1624년)[4]

2001년 11월10일 종친에서 이장하던 중에 경기도 파주에서 출토 되었다.

蔭職으로 등용되어 여러 관직을 거치고 선조 30년(1597) 平壤 府尹이 되었다. 刑曹判決事 從2品 벼슬이며, 孝子로 旌閭된 인물이다. 유물은 83세까지 장수하는 동안 왜란과 인조반정(1623년) 등 어수선한 시대를 거치면서 前期에서 中期로 넘어가는 과도기적인 면모를 잘 보여주고 있는 중요한 자료이다. 유물 중 의류는 20건에 37점이며, 이중에서도 袍類가 22점으로 단령 · 직령 · 답호 · 철릭 · 직령포류(도포?) · 액주음 등으로 제일 많다. 이외에 方領上衣나 단속곳 2점 등이 있는데 이와 함께 특히 모든 袍類의 이중깃과 前短後長의 方領, 액주음 등에서 前期의 특징이 나타나고 있다.

이중에서도 團領은 3점인데 모두 고친 흔적이 있으며, 다른 옷들도 대부분 改造되었다. 단령 중에는 처음에는 홑옷이었던 것을 안 받침으로 半袖형 답호를 껴 넣어 겹으로 하고, 옆의 무는 원래는 옆으로 곧게 뻗었던 것을 어슷하게 기울어지게 뒤로 접고 겨드랑이에서부터 엇선[斜線]으로 돌려 뒤로 젖히도록 고친 것이 있다. 특히 철릭 8점은 衣와 裳의 비례 · 옷고름 · 주름너비 등이 각기 다른데 고친 것과 시대에 따라 유행을 따른 흔적이 나타나는 것이 있다. 바지도 밑이 막히고 부리까지 곧게 내려온 단속곳과, 가랑이가 트이면서 부리 쪽이 좁아지는 개당고가 있다. 특히 답호나 直領인데 매우 애매한 도포형의 袍도 주

4) 단국대학교 石宙善紀念博物館, 『韓國服飾』第23號, 2005.

목된다. 조선 전기에 보이는 도포형의 포는 중기 이후에 나오는 것과 차이가 있기 때문이다. 유물분석 결과 수의를 입혔던 차례가 확인되었는데 겉으로부터 단령(겉:남색모란만초문단, 안:운보문사) → 철릭 → 직령 → 액주음 순으로 되어있다.

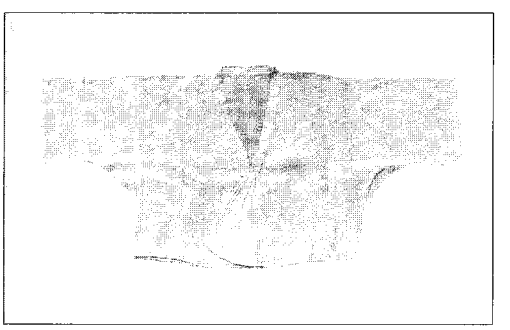
이 유물들은 沒年은 다르지만 生年이 같은 趙儆(1541~1609년, 서울역사박물관 소장)[5]의 것과 비슷한 점이 많은데 특히 단령에 나타나고 있다. 이 시기에 다른 유물에서는 보이지 않는 단령의 뒤 겨드랑이 위에 角帶를 거는데 쓰이는 고리바대나, 전기에는 옆으로 곧게[直線] 뻗게 되었던 무를 어스러지게[斜線] 二重으로 접고 안으로 넣었으며, 앞뒤차를 보이는 점 등이다.

(2) 濟州 高氏 一家(1500년대 후반~1600년대 중후반)[6]

1995년 天安 풍세면에서 濟州 高氏 일가 묘소를 옮기던 중 나온 유물이다. 夫婦와 子 3人의 묘에서 나왔는데 모두 섞였다. 夫는 參判(從2品)公 汝雨이며, 배위는 丹陽禹氏로 합장하였었다. 子는 擎行 振威將軍(正4品)이다. 집안의 벼슬은 확실하지는 않으나 족보에 의하면 汝雨는 都事監察保社功臣, 贈通政大夫(正三品), 兵曹參判 등으로 나타나고 있다.

3인 모두 문중의 족보에 이름은 나왔으나 생몰년은 알 수 없었다. 다만 擎行의 아들에 대한 기록(1624년 生, 그의 子는 1647년 生)이 있어 이를 참조하면 참판공의 출생은 1560 70년대 보고, 몰년은 輓詞중에 '부부해로 70' 이라는 문구로 보아 1600년대 중반으로 추정하였다. 子인 진위장군은 二子이므로 출생을 1580~90년대로 보면 3인의 생존연대는 倭亂前後에 걸치게 된다.

출토물은 매우 다양하게 나왔으며 衣類는 57점, 염습구류는 23점이 되는데 매우 파손이 심하다. 이들은 족보에 의하면 堂下官 4~6품직인데 緞 종류를 쓴 것은 3건뿐이며, 무명과 紬·삼베가 많고 특히 무명이 반 이상 된다. 부장품류에는 輓詞 20점 등이 있다.



〔사진 7〕 적삼

袍類는 19점으로 단령·액주음·직령·철릭·장옷형이 있다. 이중에서 조선 전기 袍類의 특징 중 하나인 이중 깃은 한 건도 없다. 장옷은 10점으로 가장 많은데 여성용과 남성용이 애매하다.

5) 서울역사박물관, 『趙儆墓出土遺衣』, 2003.
6) 開館16周年紀念 "第15回 學術세미나 및 第16回 出土服飾 特別展", 『韓國服飾』第15號, 1997, pp.65~119.

저고리는 16점으로 옆트임과 일반형이 있다. 특히 겨드랑이 진동선에 세모로 접히는 넓은 襠이 달린 적삼[사진7]과, 깃이 좁고 앞섶에 주름을 잡은 속적삼이 있는데 이는 전기에만 보이는 특징적인 옷이다.

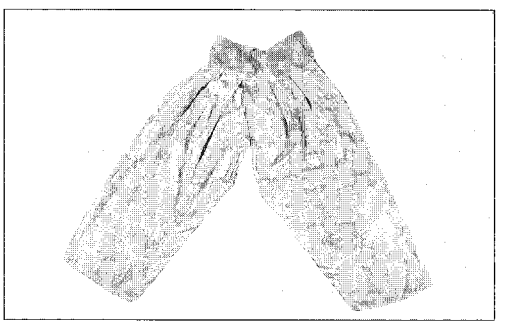
가장 중요한 부분은 바지이다. 총 16점이 나왔는데 밑이 막힌 단속곳형과 트인 개당고형 외에 특수형이 있다. 속옷은 시신이 육탈되었으므로 뼈만 추려낸 상태였으므로 입혔던 그대로 있었는데 3人 모두 4~5벌씩 입었으며 같은 틀로 나왔다. 특히 단속형이나 개당고형 속옷의 허리말기에 앞뒤로 멜빵처럼 어깨걸이를 달았는데 이런 어깨걸이는 충청도 지역에서만 나타나고 있다.

(3) 海平 尹氏(男兒)[7]

2001년 11월 14일 경기도 양주에서 해평 윤씨의 분묘를 이장하는 중에 미라로 발굴되었다. 생몰연도는 알 수 없으나 17세기 중엽으로 보고 있으며, 아이의 사망은 약 6세(5.5)로 추정하고 있다. 어린이옷이 출토된 예는 없으므로 매우 귀중한 자료이다.

殮襲衣는 수의와 함께 알 수 없는 袍類까지 총 13점이 나왔다.

출토 유물은 현장에 도착했을 때는 일부 손을 본 다음이라 염한 상태는 확실히 알 수 없으나 아이는 수의를 입고 있었다. 수의는 총 3점으로 上衣는 명주누비중치막 2점, 下衣는 가랑이 트인 紬로 겹으로 만든 開襠袴 1점[사진8]이다. 이 개당고는 부리 쪽으로 좁아지며 여성용과 같은 모양인데 어린이용도 용변 보기가 편리하도록 가랑이를 트고 있었음이 확인 되는 자료이다. 버선은 신겨 있었으나 파손이 심하여 수습하지 못했다.

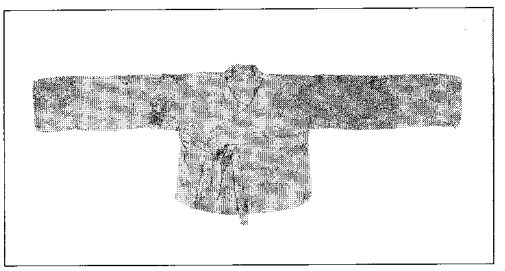


[사진 8] 개당고

殮衣는 9점으로 명주누비중치막 3점, 소매가 뜯긴 솜장의와 누비바지 · 배냇저고리 · 소모자 각 1점이었다. 소모자는 六合帽로 정수리에는 단추처럼 매듭을 지어 마무리 하였으며, 아이 것이 나온 것은 처음이다. 육합모는 출토복에서 주로 임진왜란 전후까지 나오는데 본 유물을 보면 後代까지 내려왔음을 알 수 있는 매우 귀한 자료이다.

男兒 中致莫은 3점인데 成人 남성 것과 같은 모양이지만 깃 · 소매 · 섶 · 무가 다른 색으로 변한 것이 있다. 이 변한 곳은 조선말기에 다른 색을 사용하여 만든 '오방장두루마기'와 같은 모양이라고 생각된다. 겉은 모두 紬로 되었는데 안감이 무명인 것도 있다. 소매는 좁고 옆에 무가 달렸는데 옆트임이 있다. 동정은 달려 있는데 옷고름은 달렸던 흔적만 남아있다.

7) 단국대학교 石宙善紀念博物館, 『남아 미라 및 출토유물 연구논총』, 2002.12.



〔사진 9〕 배냇저고리

본 유물 중에서 매우 중요한 것은 배냇저고리[사진9]이다. 관 바닥에 깔려 있었다. '前長(18cm)後短(32cm)' 의 모양으로 화장(겉:46.5cm)과 옷고름이 달려있다. 섶도 달고 깃은 고대 쪽만 좁고 짧게 달려 있으며, 옆은 짧게 터져있다. 옷고름은 너비 1.5cm에 둘 다 달려있는데 긴 것은 몸통을 둘러 맬 수 있을 정도이다(65cm).

염의 중에는 成人用이 있는데 이는 부모의 것으로 추정되는 것으로 남성용은 명주누비 중치막1점과 명주누비바지1점, 여성용으로 보는 長衣가 1점 있다. 또한 확실히 알 수 없지만 성인용 철릭이나 누비포로 보이는 袍類도 2점 있다. 성인용 옷 중에서 바지는 사폭형이며, 중치막은 진동에서 수구 쪽으로 완만한 곡선을 이루면서 넓게 되었는데 17세기 중반에 나타난 유물들과 같다.

그 외에 명목 · 지요 · 棺內衣 가 있다.

(4) 東萊 鄭氏 一家(良佑와 子 泰齊. 1500년대 후반~1600년대 중후반)[8]

1987년 3월13~14일 경기도 여주에서 良佑(1574~1647년)와 配位 南陽洪氏 및 子 泰齊(1612~1669년) 일가 3人의 묘역에서 출토된 것이다. 벼루나 細條帶 · 신 · 책 · 書簡類 · 지석 · 등이 나왔는데 좋은 것은 종친에서 일부 수거하여 갔다. 본 유물은 조선중기 1500년대 후반부터 1600년대 중후반까지 걸친다.

양우는 贈職 통정대부 吏曹參議(正3品), 태제는 吏曹參議와 承旨(正3品)를 지냈다.

종친에서 수거해 간 유물을 제외하고 의류와 염습구류 등 3人의 유물을 정리한 결과 총 98점이였으며, 이중에서 남성 것은 59점, 여성 것은 23점이었다.

남성 것 59점은 모두 섞여 있어서 일괄 처리하였다.

이 중에서 衣類로 金絲雙學胸背(38×39cm)가 부착된 단령1점과, 도포와 철릭 각2점, 창의류28점, 답호류3점, 배자1점, 직령포(長衣형)4점, 저고리류5점, 바지류9점 등이다.

포류가 가장 많은데 창의류는 28점이나 된다. 특히 금사쌍학이 출토된 예는 처음이었다. 답호류도 方形깃에 양옆이 트이면서 무가 달린 것과 없는 것과 매듭단추를 단 것이 있어 많이 사용하였음을 알 수 있다.

褡子는 등판만 있고 어깨걸이가 앞으로 길게 연결되었는데 양쪽 겨드랑이 아래로 서로 마주 치게 내려서 뒷판의 고리에다 앞의 끈을 걸어 매도록 된 것으로 간단하면서 모양이

8) 단국대학교 石宙善紀念民俗博物館, 『韓國服飾』第8號,. 1990, pp.71~125.

매우 독특한 것이 있다. 이와 비슷한 것으로 이변(1631~1731)의 배자([사진14]참조)가 있다. 또한 깃은 方領이며 길과 깃(네모 二重)의 色이 다르며 格子무늬 옷감으로 만든 답호 모양인데 길이가 짧아서(95cm) 배자로 보는 옷도 있이 있다[사진10].

[사진 10] 배자

특히 太齊가 신었던 것이라고 하는 신은 雲鞋인데 신코와 뒤축에 雲紋을 따로 수놓아 덧붙였다. 한편 수거하지 못했지만 良雨는 木靴를 신었었다고 한다. 이는 쌍학흉배를 단 團領과 木靴가 한 틀로 나왔다면 耽陵君(1636~1731년)이나 密昌君(1677~1746년)과 같은 예가 된다. 그런데 탐릉군이나 밀창군은 全州李氏이면서 君이라는 신분에서 같지만, 양우는 예외가 된다.

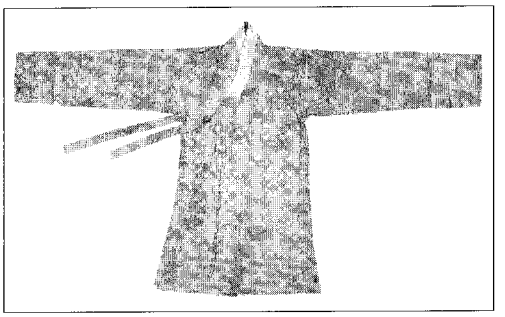
염습구로 솜을 두껍게 넣고 짙은 쪽빛의 六合帽와 수의용 모자가 있다. 육합모도 임진왜란을 전후기에 사용하였던 것으로 중요한 자료이다.

(5) 李 嵓(全州 李氏. 耽陵君. 1636~1731년)

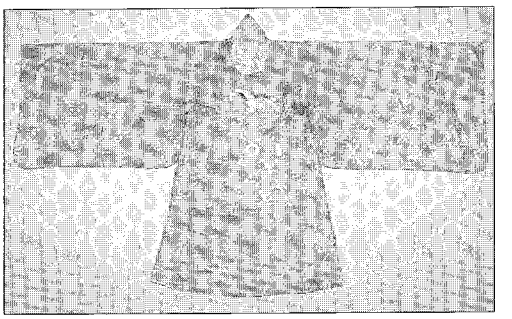
1981년 6월11일 경기도 용인에서 이장 중에 출토되었다. 宣祖의 曾孫으로 宣祖부터 英祖까지 4代에 걸쳐 벼슬하였으며 96세(英祖 7년)에 卒하였다. 마지막 벼슬은 都摠府副摠管이었으며, 貢緞으로 만든 銘旌(66×90cm)에는 "明善大夫行耽陵守之柩"라고 쓰여 있었다.

출토유물을 衣類와 보공·염습규류를 합해서 총 66점이다. 의류는 冠服3, 답호3, 철릭2, 창의류25, 중단1, 도포2, 배자1, 바지3, 저고리2, 습신(외짝), 여자저고리 1점이었다. 염습구류는 紗帽 網巾 角帶 腰帶 幄手 외에 銘旌 柩衣 五囊 天衾 地褥 大斂衾 등이다.

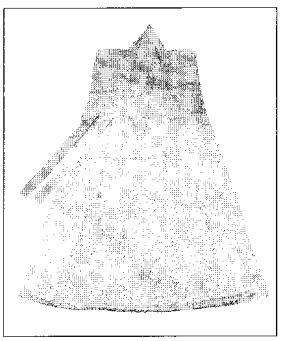
이중에서 袍類가 36점인데 창의류만 25점으로 가장 많다[사진11]. 관복 중에는 운문단에 雙鶴胸背(32×36cm)가 달린 것이 1점[사진12] 있었는데, 이는 염습구 중에 貢緞으로 만든 紗帽·網巾·帶·木靴와 한 틀을 이루어 壽衣로 입혔던 것이다. 특히 유물 중에 거죽의 길은 牧丹紋緞에 옷고름은 장짓문고단으로 하고, 안은 명주로 만든 겹저고리가 있는데 이는 여성용이다. 옷의 주인과 어떤 관계인지는 모르지만 분명히 어떤 뜻이 있어 보공으로 넣은 것을 확실하다. 이는 가족이나 주변사람이 입관 할 때 한 가지씩 징표로 棺안에 넣어준다는 민간의 속설과 관계가 있는 것이라고 본다. 특히 답호는 3점이 있는데 모두 소매가 없으며[사진13], 등걸이형 배자[사진14]는 매우 특이하다. 또한 깃이나 섶은 맞여밈에 褂衿형이며, 소매는 좁고[窄袖], 뒤가 트인 옷도 있다. 이를 '中單'이라고 하였는데 명칭은 연구과제



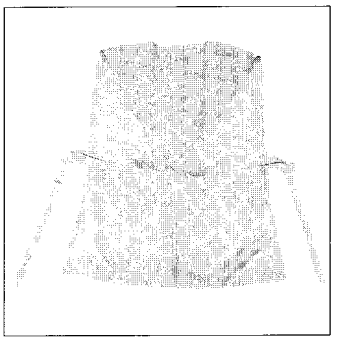
〔사진 11〕 소창의



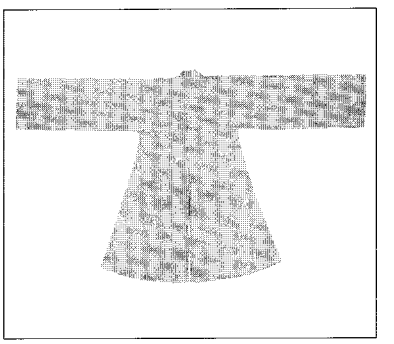
〔사진 12〕 단령(쌍학흉배)



〔사진 13〕 답호



〔사진 14〕 배자



〔사진 15〕 중단

이다[사진15]. 1700년대 출토유물에서 도포 및 여러 종류의 창의류와 함께 1점이 나온 것으로 당시 포류를 연구하는데 중요한 자료이다.

유물 중에 옷은 모두 홑이나 겹이고 솜옷은 없었으며, 피륙은 모시나 무명 · 삼베는 한점도 없이 모두 명주와 비단이었는데 비율은 비슷하였다. 비단은 紗보다는 緞이 많았는데 화려한 문단들로 雲紋緞, 雲寶紋緞, 牧丹紋緞, 七寶牧丹紋의 緞과 紗, 唐草牧丹紋의 緞과 紗, 花蝶紋緞, 大花緞, 菊花紋緞, 貢緞, 雪寒綃, 宮綃 등이었다.

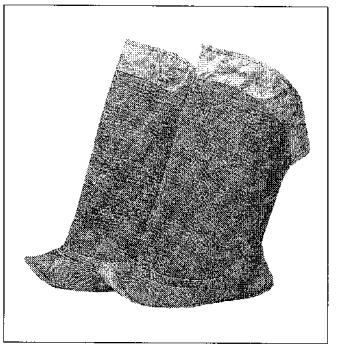
(6) 李樴(全州李氏. 密昌君. 1677~1746년)[9]

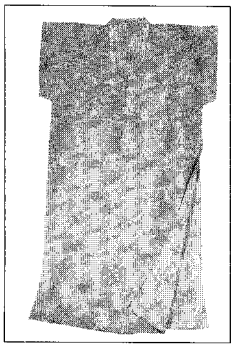
宣祖의 일곱째 아들인 仁城君의 증손자이며 英祖 때는 영조의 총애를 받아 토지와 노비를 하사받았다. 司饔院과 宗簿寺 提調(2品 從1品) 등의 벼슬을 지냈으며 죽을 때까지 현직에 있었다. 70세로 사망하자 임금이 부의를 내렸다.

1999년 12월21일 서울 상암동에서 출토되었는데 아들 정간공 익정과 같은 묘역이다. 복식류만 47점이나 되고 수의로 단령을 입었으며, 朝服일습이 나왔다.

9) 단국대학교 石宙善紀念博物館, 『韓國服飾』第22號, 2004.

수의는 表衣로 단령(雲宝紋緞, 胸背부착) → 창의 → 중치막 → 소창의 → 적삼, 下衣는 바지2벌을 입었다. 帶는 비단 바탕에 과판을 그린 것을 허리에 맸다. 모자와 신은 평소에 사용하였던 것으로 모자는 紗帽를 쓰고, 신은 누비靴[사진16]를 신었다. 단령에는 무가 뒤로 접히면서 앞길에는 숫단추를, 뒷길에는 암단추를 달아 고정시켰다. 이렇게 단추를 단 것은 매우 드물다.


〔사진 16〕 靴


〔사진 17〕 배자

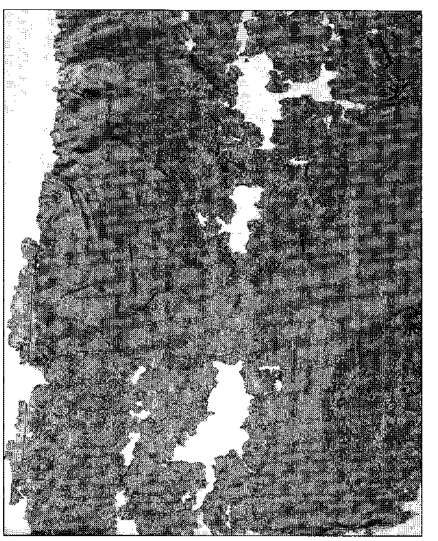
袍類는 조선후기의 전형적인 도포 · 철릭 · 창의 · 중치막 · 소창의가 있다. 가장 혼돈이 오는 것은 답호형 상의인데 모양이 다른 여러 가지 섞여 있다. 깃이 원삼형과 方領 대금형 맞깃에 소매는 조금 달린 것[사진17]과 없는 것, 또 깃이 원삼형에 동정이 달리고 짧은 소매가 있는 배자가 있다. 이는 이 시기가 답호와 배자 · 전복이 같이 공존할 때이기 때문에 이런 옷이 다양하게 나타나고 있다고 보며, 따라서 각기 이들에 맞는 정확한 명칭을 붙이는 것이 과제이다.

(7) 洪鑑輔(豊山 洪氏. 1699~1763년)[10]

慶州鎭馬兵節制使와 慶州府尹(正2品)을 거친 인물이다.

1993년 9월24일 忠北 忠州市 牧溪洞에서 출토되었으며, 의류와 염습구류 등 30여점이 나왔으나 炭化로 부식이 많이 되어 거의 원형을 찾을 수 없었다. 또 白磁盒 속에 모래를 담고 水晶과 玉으로 된 묘주의 印章이 나온 것은 귀한 자료이다.

섬유류로는 무늬가 있는 雲紋紗로 만든 團領 하나뿐이며 모두 얇은 紬類로 三八紬가 많고, 솜 · 무명 · 삼베 · 모시는 전혀 없다. 袍類는 도포 · 단령 · 철릭 · 창의류가 있다. 창의류는 대창의 · 중치막 · 소창의가 고루 있다. 도포나 단령 · 철릭 · 대창의의 소매는 조선후기 전형적인 포의 특징으로


〔사진 18〕 龍紋(대렴금일부)

10) 단국대학교 石宙善紀念民俗博物館 · 민속학연구소, 『韓國服飾』第13號, 1995, pp.52~77.

넓다. 철릭은 주름이 넓고 衣에 비해 裳이 길다. 저고리는 소매 진동에서 수구로 좁아지고 단소화 경향이 나타나며, 前端後長의 對衿형의 圓衫깃인 褙子는 두 점 있는데 탄화가 심하여 형태를 겨우 알 수 없지만 한점에서는 옷고름을 달았으나 다른 한 점은 깃 끝 부분에 두 개의 매듭단추를 달았던 고리 흔적이 있다. 여기서도 크기나 모양이 완전하지 않지만 배자가 보이는 것은 같은 시기 李樴(1677~1746년)의 유물에서도 여러 가지 배자가 나오고 있듯이 이 시대 간단한 답호나 배자형의 등걸이 평상복을 많이 이용되었음을 알 수 있다.

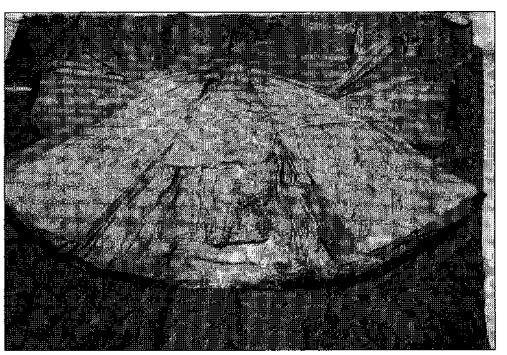
또한 大斂衾 일부가 남아 있는데 마주 보는 龍紋[사진18]이 있다. 바느질은 매우 정교하고, 유물 중에 솜을 사용한 것이 보이지 않았다.

(8) 李 益炡(全州 李氏. 靖簡公. 1699~1782년)[11]

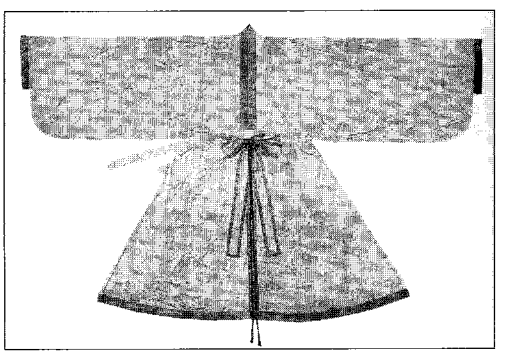
1999년 12월20일 서울특별시 삼양동 월드컵 경기장 이전으로 부친 樴(密昌君. 1677~1746년)과 같은 묘역에서 출토되었다. 그러나 부친은 수의로 단령을 입었는데 아들은 심의를 입고 있었으며[사진19], 부친에 비해 소략하였다.

수의로 입은 심의는 深衣帶와 組帶까지 일습을 갖추었다[사진20]. 이는 중기 이후 『喪禮備要』 문헌기록과 내용이 같다. 입힌 순서는 겉으로부터 上衣는 深衣 → 중치막 → 중치막 → 소창의 → 적삼, 下衣는 솜바지 → 袴衣, 발에는 행전 → 버선 → 신, 얼굴은 韓紙를 덮고 위에 瞑目으로 얼굴을 가지고 머리에 幅巾을 썼다. 머리는 상투를 틀고 玉貫子를 단 馬尾망건을 썼다[사진21].

衣類는 도포와 단령이 3점 · 철릭[사진22] · 朝服(赤綃衣와 裳) · 배자 · 氅衣類이다. 특히 창의류가 대창의와 중치막이 각 2점이며, 소창의는 10점으로 가장 많다. 배자는 깃은

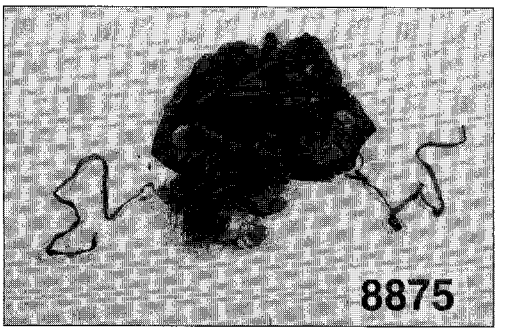


〔사진 19〕 深衣 일습

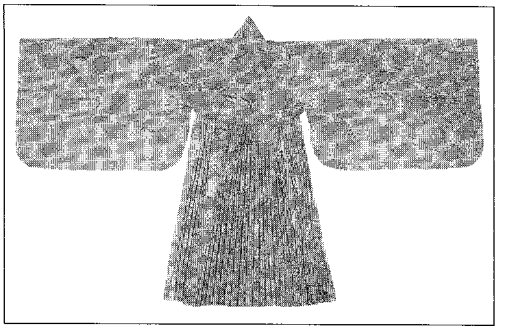


〔사진 20〕 深衣

11) 단국대학교 石宙善紀念博物館, 『韓國服飾』第19號, 2001, pp.85~148.



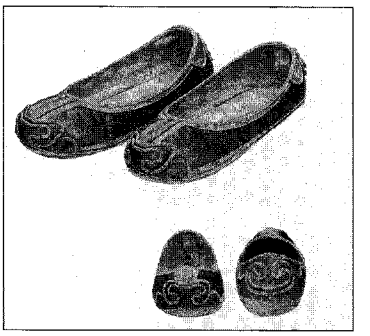
〔사진 21〕 馬尾망건



〔사진 22〕 철릭

圓衫형의 對衿에 소매는 半袖이며 前短後長이다. 보공 품 넣은 옷에는 고름이나 동정을 모두 제거하였다. 부친 것(李樴. 밀창군)들은 파손된 것을 제외하고는 모두 부착되어 있었다.

특히 신은 雲鞋[사진23]를 신었는데 시신에 운혜를 신긴 경우는 매우 드물다. 貢緞으로 만들고 앞코와 뒤축에 구름[雲]모양의 조각을 본떠서 가[邊]에 감침繡를 놓아 덧붙여서 마치 구름이 떠있는 것처럼 보인다.



〔사진 23〕 雲鞋

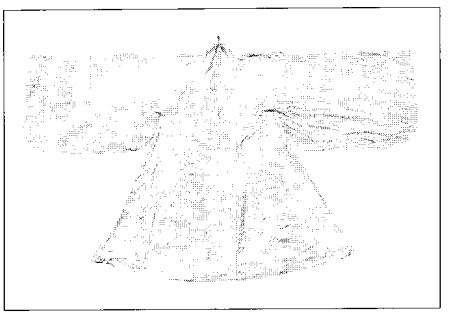
〈표 5〉 밀창군 父子의 수의 비교

	密昌君(樴. 1677 1746년. 正1品)	靖簡公(益烜. 1699 1782년. 從1品)
冠	紗帽(帽頂:花紋장식), 網巾	幅巾 網巾(馬尾. 玉貫子)
上服	團領(雲寶紋緞) 雙學胸背(31 34cm)	深衣 (貢緞)
袍類	氅衣(貢緞), (瑚로紋紬), 小氅衣(圓龍紋稍)	中致莫2(貢緞), 小氅衣(貢緞)
帶	假畵犀帶 角帶	條帶, 深衣帶
上衣	赤衫(細紬)	赤衫(三八紬)
下衣	袴衣(細紬)	바지(貢緞), 袴衣(三八紬)
足衣	버선, 누비화	버선, 行纏, 雲鞋(貢緞)
기타	幎目 · 幄手 · 囊 · 舍	暝目 · 幄手 · 囊 · 舍

(9) 洪羲俊(豊山 洪氏. 1761~1841년)[12]

正祖 18년(1794)에 문과 급제한 후 實職은 吏曹判書(정2품)였으며, 追尊 崇祿大夫(正一品)이다. 동지정사 등 外職과 암행어사역도 역임하였다. 아들 洪錫謨는『東國歲時記』의 저

12) 단국대학교 石宙善紀念民俗博物館,『韓國服飾』第12號, 1994, pp.119~147.



〔사진 24〕 行衣

자이다.

1991년 11월6일 天安市 雙龍面 出土되었는데 遺物 30여점 중에 복식류는 21점이다.

수의는 深衣를 입었는데 帶는 氷紗와 亢羅로 하였으며, 租帶는 없다. 머리에는 貢緞으로 만든 網巾과 幅巾을 썼는데 망건에는 玉貫子가 붙어 있다. 下衣는 겹바지를 입었는데 허리띠[腰帶]와 다님을 매고 행전을 찼다. 버선과 습신을 신었는데 모두 공단으로 만들었다. 수의로 심의를 입은 것은 1999년 12월20일 삼암동 출토 全州李氏 益烜(靖簡公. 1699 1782년)이 있으며 모양은 같으나 재료에 조금 차이가 있을 뿐이다.

袍類로 단령 · 심의 · 도포 각 1점과, 천릭 · 중치막이 각 2점이 있다. 모두 소매통이 넓어 후기 袍制의 특성을 보이고 있다. 특히 창의와 같으나 뒤트임이 막힌 포류 한점이 있는데 민속조사에 의하면 충청도나 전라도 지방에서는 이를 '行衣' 라고 한다. 행의는 앞으로 보면 소매가 넓어서 마치 도포나 대창의와 같은데 뒤가 막혀 있다[사진24]. 이는 조선시대 말엽에 외출할 때 여러 개 겹쳐 입던 袍를 하나만 입기 위한 간소화의 방책으로 나온 새로운 포의 한가지로 본다.

2) 女性

(1) 丹陽 禹氏(濟州 高氏. 參判公 汝雨의 配位. 16세기 전후 추정)[13]

1995년 3월15일 이장 하던 중 남편과 아들(擎行)과 함께 天安 풍세면에서 出土 되었다. 3인 모두 왜란 전후의 인물로 추정하였다.

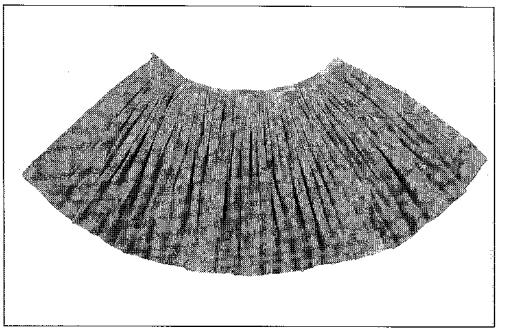
치마가 4점 있는데 무명과 겹치마이다. 이 중에서 무명겹치마는 겉이 무명이고, 안은 삼베로 만들었는데 하단 부근에 2단으로 접어 길이를 줄였다[사진25]. 이렇게 단을 접은 것은 커서 줄여 입은 것인지, 유행인지, 아니면 땅에 끌리지 않게 하기 위한 기능성인지 알 수 없다.

가장 중요한 것은 바지이다. 총 16점이 나왔는데 앞서 ②濟州 高氏 一家 편에서 밝혔듯이 단속형이나 개당고형 속옷의 허리말기에 앞뒤로 멜빵처럼 어깨걸이를 달고 있으며 지금까지 보고된 것은 충청지방에서만 나타나고 있다[사진26].

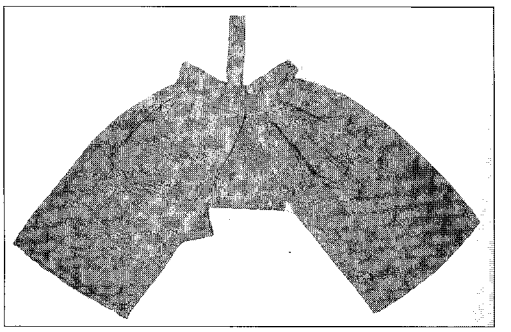
염베와 염포로 사용하였던 삼베가 있는데 너비가 23~37cm까지 있다.

---

13) 단국대학교 石宙善紀念民俗博物館 · 민속학연구소, 『韓國服飾』第15號, 1997, pp.65~119.



〔사진 25〕 겹치마



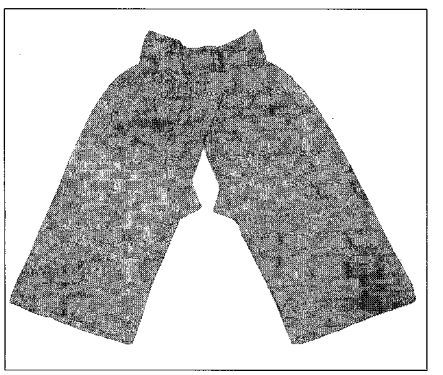
〔사진 26〕 바지: 開襠袴

(2) 南陽 洪氏(吏曹參議 良佑의 配位. 1584~1654년)[14]

1987년 3월13~14일 경기도 여주에서 東萊鄭氏 一家 良佑(1574~1647년)와 배위 남양홍씨 및 子 泰齊(1612~1669년) 일가 3인의 묘역에서 출토된 것이다.

양우는 贈職 통정대부 吏曹參議(正3品), 태제는 이조참의와 承旨(正3品)를 지냈다.

3人의 유물 98점 중 여성 것은 23점이었다.



〔사진 27〕 바지: 開襠袴

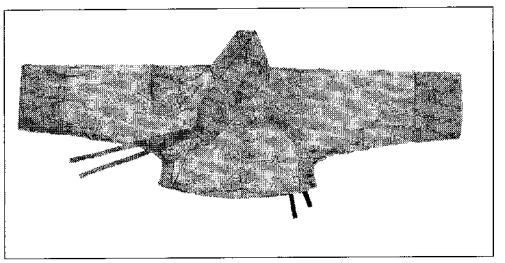
종류가 다양하지는 않으나 포나 저고리 치마류가 비슷한 수량으로 저고리깃은 당코형이 주를 이룬다. 바지류는 솜을 넣은 속옷과, 부리까지 곧게 내려가면서 가랑이 밑에 작은 무를 댄 개당고 형이 있다[사진27]. 본 유물 중에 특기할만한 것은 치마와 비슷한데 길이가 짧고 폭도 좁으며, 허리 양쪽에 끈을 달았던 흔적이 전혀 없는 점 등으로 미루어 쓰개류로 보이는 1점이 있다.

(3) 陽川 許氏(淸州 韓氏 舜錫 配位. 孺人. 1630년대~1660년대 추정)[15]

1992년 11월8일 高陽市 幸信洞 出土되었으며, 生沒은 모른다. 딸 하나를 낳고 죽었다고 하니 남편 청주한씨 舜錫(1637~1704)과 비슷한 시기로 추정할 뿐이다.

남편이 벼슬이 없었으니 평민으로 銘旌에 孺人이라 쓰여 있었으며 棺을 덮었던 柩衣가 있다. 이장 당시 미이라로 되어 있었기 때문에 수의를 입히고 염한 것은 새 이장지로 그대

14) 단국대학교 石宙善紀念民俗博物館, 『韓國服飾』第8號, 1990, pp.71~125.
15) 단국대학교 石宙善紀念博物館, 『韓國服飾』第11號, 1993, pp.143~163.



〔사진 28〕 저고리

로 모셨다. 따라서 본 유물은 보공품 중 일부와 피륙조각과 염습구류 중 일부이다.

저고리는 4점인데 길이가 짧고 소매가 袖口쪽으로 좁아지며 깃은 반 당코에 고름은 길이 30 44cm, 너비는 1.4 2cm이다〔사진28〕. 치마는 2점인데 이중에서 青色을 띤 小花紋緞 누비치마 1점은 밑단 안으로 덧단을 대고 겉으로 0.1cm의 가늘고 고운 눈썹단바느질을 하였다. 이런 눈썹단바느질은 주로 고급스러운 여성용 포나 저고리 · 치마류의 단에서 보이며, 1900년대 초까지도 고쟁이나 바지의 바느질에도 남아 있었다.

유물의 양은 적었지만 바느질이 매우 정교하고, 옷감이 다른 경우에 비해 紬類를 썼다. 이는 남편의 벼슬은 없으나 친정이나 주변의 세력에 의한 것으로 본다. 친정 오빠 許積(1610~1680년)은 南人으로 領議政(1671년)이 되었으며, 西人의 고변으로 賜死당했으나 1689년 伸寃된 인물이다.

(4) 文化 柳氏(縣監 碧珍 李氏 志遠의 配位. 1615 1685년)[16]

1988년5월26일 서울 下溪洞에서 도시건설로 이장하였다.

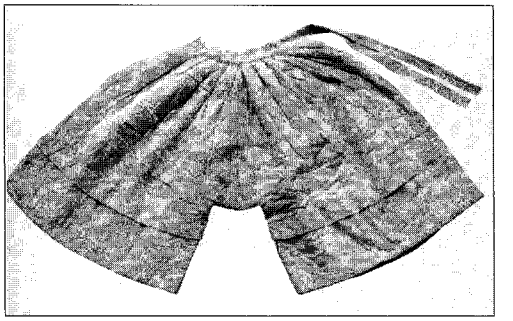
종친에서 이장하던 중에 발견되자 보공한 것 몇 점만 꺼내고 명정이나 시신은 염한 채 새 이장지로 옮겼다. 본 박물에서 현장에 재조사 할 때 칠성판 자리 위에 五囊을 수습하였는데 오낭은 각기 머리에 양손과 발 각기 자리에서 있어서 제 위치에 넣음을 확인했다.

유물은 총 28점인데 의류는 16점이며 저고리와 치마 長衣類가 많다. 저고리는 깃이 당코모양이며, 소매는 좁으면서 수구 쪽으로 좁아드는 전형적인 中期형이다. 옷감은 무늬가 있는 것은 치마 1점뿐이고, 모두 명주였다. 이는 비슷한 시기 1989년 경북 달성출토 평민이었던 晋州河氏(여. 1580 1646년)의 출토유물은 70여점 중에 6점만이 명주이고 나머지 모두 무명과 솜뿐인 것을 참조하면 柳氏가 그래도 양반(從6品)이어서 주류를 많이 썼다고 볼 수 있다. 무명에 솜을 두껍게 넣은(두께 0.7cm) 단속곳형 너른바지가 한 점 있는데 부리 위 24cm 위치에 5cm너비로 단을 접어 올렸다〔사진29〕. 접어올린 것은 드물게 나오는데 이는 당시 유행하는 것인지, 아니면 길어서 줄인 것인지 알 수 없다.

여기서 흔돈되는 것은 남성용 袍類인 액주음 · 천릭 · 직령포 3점이 섞여있다. 직령포와 前短後長의 액주음, 철릭에서 치마는 맞주름이나 깃이 셋 모두 이중깃이다. 이 옷들은 모

16) 단국대학교 石宙善紀念民俗博物館, 『韓國服飾』第10號, 1992, pp.107~136.

두 전기의 특징을 가지고 있다. 그렇다면 이것은 남편인 현감공 碧珍李氏 志遠(1616~1666년), 父(1580~1670년) 또는 祖父(1556~1637년) 중 누구 것으로 추정 할 것이다. 그러나 유물의 특징으로 보아 조부의 것이 가장 가깝지만 유씨는 몰년이 1685년이고, 조부는 1637년에 이미 타계한 후이므로 시기적으로 맞지 않는다.



〔사진 29〕 단속곳

(5) 坡平 尹氏(1735~1754년. 孺人)[17]

13세의 나이로 金方行과 定婚하였으나 혼인을 하기 전 19세에 사망하였다. 정혼한 사이였으므로 安東金氏 집안에서 첫 부인의 예로서 장례를 치러주었다고 전한다.

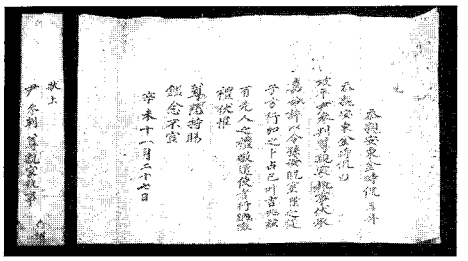
2001년 4월22일 충남 예산에서 남편이 있는 묘소로 옮기려고 이장하는 중에 출토된 것이다. 이장 때는 시신을 1차 殮을 한 그대로 모셨기 때문에[사진30] 4월26일 현장에 가서 墓壙속에 묻어버린 것과 주위에 있는 것들을 수습하였다[사진31]. 따라서 본 유물들은 補空品과 2차 염에 쓰인 것들이며, 이때 완전한 옷을 비롯하여 미완성 상태의 옷과 여러 문양의 직물 조각들을 얻을 수 있었다. 銘旌에는 남편이 관직에 오르기 전에 죽었으므로 孺人(從9品)으로 써있었다. 婚書紙[사진32]가 관안에 들어있어서 당시 혼서지 쓰는 양식과 종이접기 등 좋은 자료이다.

특히 본 유물에서는 옷을 마름하다 남은 작은 조각편들을 많이 넣어 보공의류, 염습구류, 보공피륙, 총 90여건으로 분류되었다. 옷이나 염습구류가 파악되는 것은 40여점 되었

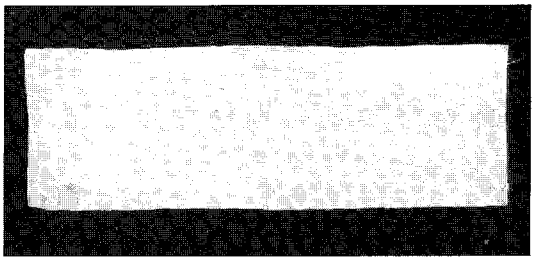
〔사진 30〕 출토현상, 1차 염

〔사진 31〕 출토현장, 충남 예산

17) 단국대학교 石宙善紀念博物館, 『韓國服飾』第21號, 2003, pp.77~163.



〔사진 32〕 婚書紙

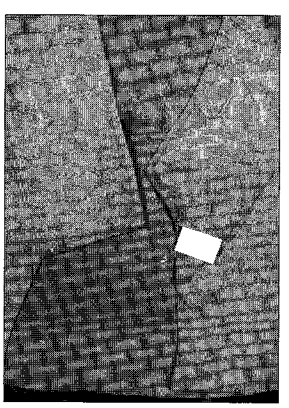


〔사진 33〕 허리띠

으나 옷은 허리띠[사진33]와 저고리와 단속곳뿐이며 치마는 모두 말기가 없었다.

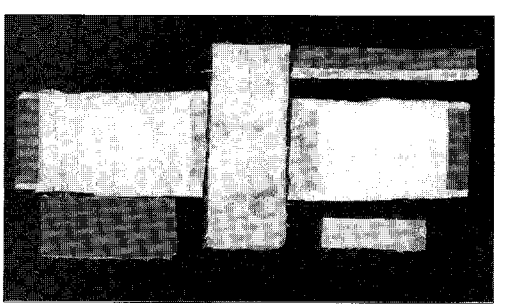
저고리 여섯 벌 중에 다섯 벌은 깃머리의 겉섶에 맞닿는 부분은 바느질을 하지 않고 튼 채로 두었다[사진34]. 이와 같은 예는 청연군주(1754~1821년)의 출토유물 저고리에서도 보인다. 또한 미완성 누비가 있는데 이것은 누비삼회장저고리 거리로 누벼놓은 것이다. 길 · 소매 · 깃 · 겉섶 · 안섶 · 곁마기 여섯 부분이 따로 되어있다[사진35]. 이중에서 깃 · 견마기 · 끝동은 짙게 褐變하였는데 이것은 삼회장에서 자주나 홍색을 다는 부분이므로 원래 홍색계통이 변한 것으로 본다. 길과 소매 섶쪽은 조금 덜 변하였는데 연두나 노랑삼회장이라고 추측된다. 소매는 袖口쪽으로 어슷하게 좁히고 좁혔으며, 깃머리는 길에 연결된 부분만 남기고 완성시킨 다음 깃머리 코끝에는 5cm정도 꼰 실을 매달았는데 실도 갈색으로 변하였지만 홍색실이었음을 알 수 있다. 또 양쪽 섶과 코와 깃머리에 3~5cm 꼰실을 징거 놓았는데, 이는 근래까지도 새 옷(진솔)일 때 옷을 마무리 한 다음 반드시 紅色실로 섶에는 웃상자[上]를 징그는 것과 같다. 이 자료를 통하여 누비옷은 옷의 치수와 모양을 정하여 필요한 부분만 미리 누빈 다음 옷을 완성시키는 방법을 제시하고 있다. 또한 누비바느질이 어렵기 때문에 한 바늘의 功도 헛되이 하지 않은 지혜를 엿볼 수 있다. 누비의 기능이나 이 시대 누비저고리 바느질법에 대한 연구에 매우 중요한 자료이다.

솜배자 1점[사진36]은 앞과 뒤를 겨드랑이 아래를 넓은 띠로 연결시켜 지금까지 볼 수 없었던 매우 특이한 것이다.

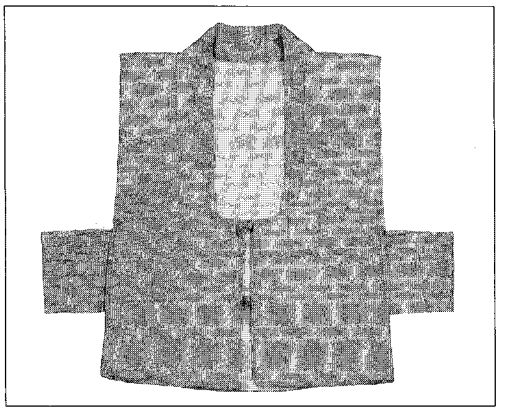


〔사진 34〕 깃머리 트임

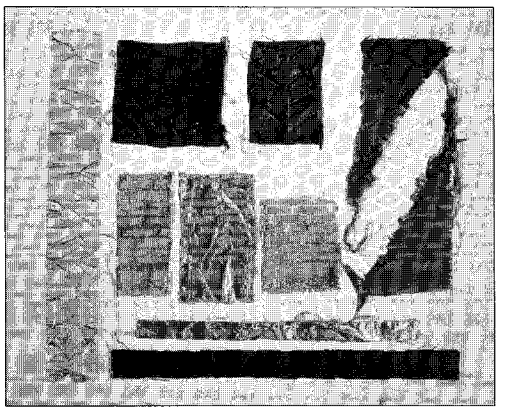
허리띠 6개가 있는데 모두 끈을 없앴으며, 띠 옷감 안쪽에 '허리띠 셋촌' 라고 묵서로 쓰여 있어 당시 명칭을 알 수 있다. 이는 저고리가 작아지면서 허리띠의 용도가 많아



〔사진 35〕 누비 저고리 각 부분



〔사진 36〕 배자



〔사진 37〕 피륙 조각들

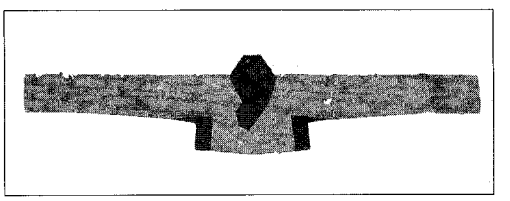
짐을 보여주는 예이다.

작은 조각편이 11점이나 있는데 그중에 10개에 진귀한 무늬들이 있다[사진37]. 특히 대나무와 국화를 바탕으로 한 조각편(43×5cm)에는 동자 셋이 잇는데 각기 다른 악기를 들고 있다. 또 鳳凰花紋이 있는 이불 깃, 또 불수·천도·석류·매화문이 있는 작은 조각(10×10cm) 등 당시 옷감 무늬를 살피는데 중요한 자료를 제공하였다.

(6) 淸衍郡主(1754~1821년)

1963년 경기도 광주에서 남편과 합장묘에서 옷 외에 부장품까지 200여벌이 나왔다.

莊祖(思悼世子)와 혜경궁 洪氏의 딸이자 正祖의 누이동생이다. 출토복식유물은 여자 예복, 당의, 치마, 저고리 등으로 색깔은 모두 갈색으로 변하였다.



〔사진 38〕 반회장저고리

청연군주 유물만도 의류는 삼회장저고리 35점을 비롯해서 반회장3점[사진38], 속저고리 22점, 치마 24점, 앞치마2점, 唐衣25점, 大禮服2점, 吐手1점, 膝襴2점 등이다. 남편 김기성의 유물은 대례복7점과 朝服1점, 天翼2점, 中致莫3점, 道袍3점, 氅衣2점, 戰服2점, 小氅衣1점, 具軍服2점, 表衣받침옷 4점이다. 이외에 부장품으로 墓誌, 銅印章 2, 백자, 문방구류 등이다. 여기서 나온 옷감은 漢緞 別紋緞 壽福緞 도리불수 雪寒緞 貢緞 班紬 장원주 明紬 水和紬 경광주 吐紬 저으사 銀條紗 양태문갑사 生庫紗 삼팔 등 모두 비단이며 金箔도 찍혀있었다.

그러나 본 유물 중에서 청연군주 것은 몇 가지만 여러 곳에 분산되고, 夫君 것은 없다.

특히 전복과 구군복은 조선말기에 철릭과 함께 戎服으로 병행하는 주요한 자료이다.

4. 임진왜란 이후 유물들에 나타난 특징

1) 크기의 변화

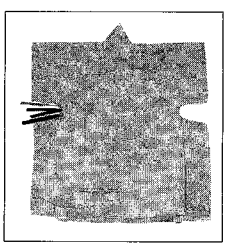
유물을 통하여 조선시대의 옷의 변화를 크게 전기 · 중기 · 후기 세 단계로 나눌 수 있다.

(1) 前期

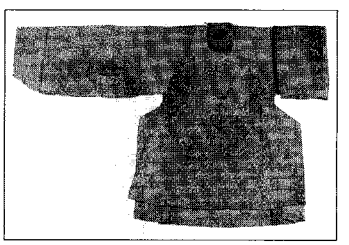
모든 옷이 크다[廣大]. 이는 上衣나 下衣나 袍도 같다.

袍의 예를 들면 첫째 품이 넓다(가슴둘레의 倍半). 이에 따라 등길이나 소매길이는 길고(손길이의 倍半), 깃은 넓고(12cm) 가운데가 바느질선이 하나 더 있는 '二重깃' 이며 동정도 넓다(5~7cm). 소매통은 진동에서 袖口까지 밋밋하면서 곧게[水平] 뻗는다. 반면에 옷고름을 매우 짧고(30cm) 가늘다(2cm). 고름은 4개이며 옷에 직접 달아 붙이기도 하지만 필요에 의해 때고 붙일 수 있도록[脫附着] 고리를 달아 만든 것도 있다[사진39, 40, 41].

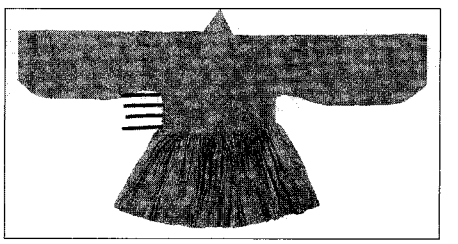
저고리는 깃이 목판이며 포에 비해 소매는 짧지만 손끝이 밖으로 나오지 않을 만큼이다. 옷고름은 왼쪽과 오른쪽 섶을 여미는 끈 정도로 짧고 좁다.



[사진 39] 답호
정응두(1508~1572)



[사진 40] 단령
정응두(1508~1572)



[사진 41] 철릭
홍계강(1500년대 추정)

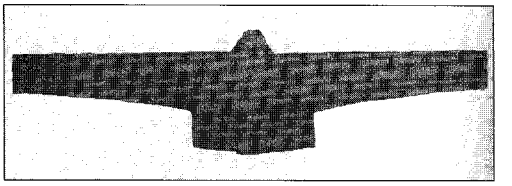
(2) 왜란이후

中期는 前期에 지나치게 컸던 품이 몸에 알맞게 되어간다[單小化].

반면에 소매의 변화가 생기는데 특히 袍는 진동선이 짧아지면서 소매통이 전기에 비해 조금씩 넓어지기 시작하고 겨드랑이 쪽은 절구통아래 선처럼 밋밋한 곡선을 이루면서 수구쪽은 넓어진다. 또한 戎服으로 가장 많이 입었던 철릭은 전기에는 상하길이의 비례가 1:1이었던 것이 衣가 짧아지고 반면에 裳은 길어지며 주름이 넓어지고 옷고름도 하나로 변하고 차츰 길고 넓어진다([사진22]참조).

英 · 正祖代를 지나면서 작아진다(矮小化). 특히 여성 옷은 上膊下厚형이 유행한다. 여성용 윗저고리는 품과 소매통이 좁고 길이가 가슴 위로 올라가 저고리 길이가 18cm정도까

지 짧고 앞가슴은 여며지지 않고 소매통은 좁아져서 저고리를 입긴 입었는데 팔이 빠져 나오지 않을 정도였다. 이는 申允福(1758~?)의 그림에서 소매 길이는 손등을 덮고 있지만 소매는 주글주글하게 표현되고 있다. 이는 충남 예산출토 파평 윤씨나 청연군주의 유물에서 잘 나타나고 있다. 坡平 尹氏(1735~1754년)의 저고리는 길이가 29cm, 품 35cm, 소매길이가 무려 69cm가 있다. 한편 淸衍郡主(1754~1821년)의 女兒 때 저고리도 길이22cm, 품30cm, 소매길이는 63cm이다[사진42].



〔사진 42〕 저고리 파평윤씨(1735~1754)

〔사진 43〕 단령 李益炷(1699~1782)

남성용 예복용 袍는 소매통이 지나치게 넓어진다[廣袖][사진43].

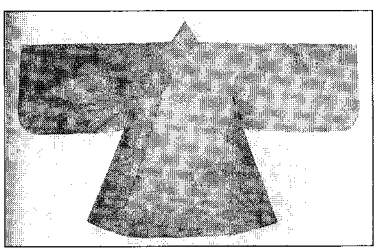
출토복이 나오고 발표 연구되기 전 조선후기 옷은 김홍도나 신윤복 등이 그린 風俗畵에 나타난 그림을 참조하였다. 특히 御眞이나 契會圖 · 초상화는 많은 도움을 주었으며, 출토 유물에서 문제되는 색은 유물을 복재할 때 많이 참조되고 있다.

2) 새로운 袍와 배자류 출현

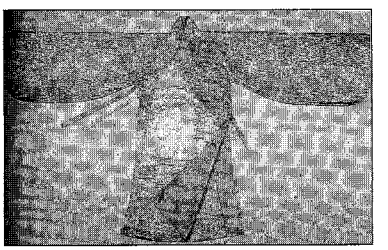
왜란 후가 되면 전기의 옷은 없어지고 다시 새로운 것이 나타난다.

前期에는 가장 속에 입었던 액주음, 官服의 일종이었던 깃이 곧으면서 옆의 무가 곧게 옆으로 뻗고 트인 직령포, 직령포와 같으면서 소매가 半袖인 답호가 없어진다.

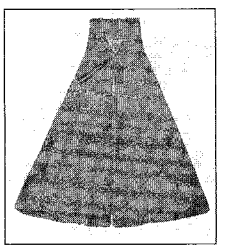
이에 氅衣類가 등장하는데 세 가지 형태가 나온다. 소매가 넓으면서 허리 밑 뒷중심선 아래로 트인 氅衣[사진44], 소매는 넓되 옆이 트여 세 자락인 中致莫[사진45], 소매통이 좁고 옆이 트인 세 자락 小氅衣([사진11]참조)이다. 이런 창의류는 조선말까지 남성 전용으로



〔사진 44〕 창의 탐릉군(1677~1746)



〔사진 45〕 중치막 동래정씨일가(1574~1669)



〔사진 46〕 전복 19세기

가장 많이 쓰인다.

한편 전기의 반소매 답호는 중기에 오면 소매가 없어지고, 末期에는 차츰 소매선이 안으로 들어오고 깃이 없는 戰服[사진46]으로 대치된다.

또 道袍가 성인남성용의 통상예복으로 자리 잡는다.

또한 배자류가 남녀모두에게 여러 가지 모양으로 나타나는 것이 특징이다. 배자는 안에 입는 옷으로 간소하면서 실용성을 고려하여 특별한 틀에 의존하지 않고 각기 구상하여 만들었음을 알 수 있다. 이는 당시 사회가 實事求是의 사회풍조에 걸맞은 衣生活문화의 일면을 엿볼 수 있는 매유 중요한 자료이다.

3) 남여속옷 분리

속에 입는 下衣 內服은 조선시대 전기 임진왜란을 전후면서 남자와 여자의 속옷은 같은 것을 입었음을 알게 된 것은 오래지 않다. 단국대학교 유물에서 확증은 얻은 것은 임진왜란을 전후시기의 濟州 高氏의 가족묘에서 나온 유물에서이다. 내용은 1997년 개관 16주년 기념 때 유물전시와 함께 발표되었다.[18] 남자 두 사람과 여자한 사람의 유물이 나왔는데 부부와 아들이다. 겉옷은 남자와 여자가 달랐는데 속옷은 세 사람 모두 같았다. 속옷으로 제일 속에 가랑이가 넓은 속속곳, 가랑이가 트인 바지 겉에는 가랑이가 넓으면서 막힌 단속곳을 입고 있었다. 출토복을 연구할 초기 유물도 많지 않고 경험도 없을 때 남자무덤에서 여자속옷이 나오면 그건 여자 것이라 했다. 그야 할머니들 말씀에도 "죽으면 저 세상에 가도 부부가 같이 만난 징표로 자기 옷 한 가지씩 넣어준다," 또 "맡 며느리는 시아버지가 돌아가시면 시댁에서 받은 '관례백금저고리'를 시아버지 얼굴에 덮어드리면 좋다"는 말이 있다. 그래서 그런 풍습의 한가지라고 생각하기도 하였다. 그래서 초기에는 남자무덤에서 나온 바지류를 '여자속곳'이라고 했던 것이다. 그러나 임진왜란 이후 남자의 墓에서는 지금 남자의 전용인 사폭바지만 나오고 여자와 구별되고 있다.

4) 지역성

옷은 법률에 규정된 대로 신분을 나타내는 도구이다. 그러나 일반 사람들의 옷은 生業이나 지역적인 특성에 따라 다르게 나타나는 것도 당연한 일이다. 이는 1950년대까지도 남아있던 제주도의 갈옷[19]이나 소중이[20], 특히 경상도 쪽에 남아있는 살창고쟁이[21]가 그 것이

18) 단국대학교 석주선기념박물관 · 민속학연구소,『韓國服飾』제15호, 1997, pp.65~119 참조.
19) 고부자,「濟州島 衣生活의 民俗學的 硏究」, 서울여자대학교 박사학위논문, 1994, pp.39~44 참조.
20) 고부자, 앞의 논문, 1994, pp.47~56 참조.
21) 단국대학교 석주선기념박물관,『名選』下, 2005, p.183.

다. 그런데 출토유물에서도 지역성이 두드러진 것이 있다. 속옷의 끈달림이다. 속바지에는 드물게 어깨에 끈을 단 것이 있다. 우리나라의 치마나 바지류는 입을 때 허리에 끈을 맨다. 옷을 여러 벌 한 허리에 매면 가슴도 답답하고 여름에는 덥다. 또 일을 하거나 움직일 때 흘러내려 불편하다. 이 불편을 덜기 위해서 속옷에 어깨걸이를 단 것은 충청지방의 단속곳류 출토복에서 나타나고 있어 지방의 특징을 살피는 단서가 되고 있다.

5) 바느질

실물에서 크기 · 색 · 무늬 외에 가장 확실한 자료를 주는 것은 바느질이다. 바느질은 옷의 쓰임새나 시대 · 계층 · 피륙의 종류에 따라 매우 다양하여 실물이 없이는 어떤 설명으로도 전달되기가 어렵다.

(1) 前期

바느질 기교는 매우 놀랍다. 이 시기는 일반 일상복이나 겨울용은 솜옷이나 누비옷이지만 관직자의 관복용은 거의 홑옷이다. 특히 관복용은 주로 紗 · 羅 · 綾 · 緞 등 비단이나 紬를 많이 사용하였으며 모시나 삼베 · 무명도 정교한 바느질을 하였다. 어떤 옷은 피륙의 올을 뽑아 한 올씩 바느질하여 밑단이 겉[表]인지 안[裏]인지 구분할 수 없을 정도이다. 바느질 종류도 온박음 · 옛쌈솔 · 트임 부분은 '斜뜨기' 도 하였는데 더 정교한 '세올겹사뜨기' 도 있다. 단추는 '쌍밀이단추' 로 하였다. 이런 바느질은 單色이거나 단조로운 옷을 부위에 따라 실용과 함께 멋과 재치를 담으면서 솜씨를 발휘했던 匠人의 솜씨를 엿볼 수 있다.

예를 들면 옷의 갈래 틈새는 입다보면 찢어지기 쉬운 부분이 있다. 여기에 단추를 달아 단단하게 하면서 멋을 내는가하면 가늘고 곱게 '사(斜)뜨기' 를 하였다. '옛쌈솔' 은 고운 홑옷을 만들 때 곧은 선[直線]과 어슨 선[斜線, 엇선]을 연결시키는 방법에서 나타나는 바느질 법 중 하나이다. 곧은 선은 주로 식서이고 어슨 선은 푸서인데 바느질을 마치면 안에서 볼 때는 볼록한 山처럼 모양이고 겉에서는 가는 바느질 선이 일정한 간격으로 좁고 곱게 나타난다. '옛쌈솔' 이란 명칭은 현재의 쌈솔과 같은 쓰임이지만 그 기법이 현재에는 보이지 않기 때문에 붙인 이름이다.

겨드랑이나 어깨바대, 단추에 고리바대를 댈 때는 올을 한 · 두올씩 걸리고 '곧은[垂直] 감침' 을 하였다. 특히 단령이나 철릭 · 답호 등 홑옷일 때는 보이지 않은 어깨나 '겨드랑이 바대' 를 달 때의 곡선처리는 일품이다. 저고리나 포의 깃머리에는 온박음으로 하여 정교함과 멋을 내었다.

또한 단추는 '쌍밀이단추' 를 달았는데 이것은 옷감으로 만든 매듭단추를 말하며 옷고름처럼 좌우를 여미는데 쓰이는 것으로 현재 赤衫에 다는 것과 같다. 다만 엮는 방법이 현재

매듭단추는 한 가닥으로 하는데 쌍밀이단추는 중심에 골을 내고 양쪽에서 두 줄로 마주 보게 둥글게 말면서 풀리지 않게 바느질로 고정시키고 끈을 만든 다음 단추를 맺은 것이다. 현대 매듭단추의 매듭 고리가 한 올인데 반해 쌍밀이단추는 마주 보는 두 올로 하였으므로 功이 많이 들지만 매우 단단하고 정교하다. 또 色을 紅色類로 하여 단조로운 옷에 독특한 멋과 맛을 나타내고 있다. 매듭단추는『樂學軌範』에서 俗樂 중에 定大業服飾에 '五色段甲'이 나오는데 이 옷에 대한 설명으로 "앞가슴[前胸]과 양쪽 겨드랑이[腋]에 紐子(속칭 "돌마귀")를 각 4개씩 단다"[22]고 하였다. 이 쌍밀이단추를 출토복에서 가장 많이 쓰인 곳은 方領과 조선 전기 철릭의 脫付着形 소매이다. 방령에는 쌍으로 짝을 지어 4~5개씩 달았으며, 철릭의 소매는 양쪽 또는 한쪽에 여러 개 씩 달았다. 가장 변함없이 쓰인 것은 冠服으로 깃[圓領]끝 오른쪽 어께 좌우에 하나씩 달아서 깃[領]과 길을 마주 여미는데 쓰였다.

홑옷의 깃 처리도 긴 깃의 처짐을 막기 위해서 시접을 골로 잡아 두 겹의 시접을 만들고 깃을 안으로 감칠 때는 길 쪽 시접을 다시 꺾고 그 사이로 바느질함으로서 처지기 쉬운 긴 깃을 단단하게 처리하였다. 긴소매의 솜이나 겹저고리 안쪽에 손이 닿는 곳에는 안단을 따로 대어 더러워지면 그것만 뜯어내서 빨고 다시 달아 쓰도록 하였는데 이후 이후에도 계속된다.

(2) 왜란이후

後期에 오면 겹옷과 전기에 비해서 누비옷이 많아진다. 누비는 정교하게 나타나는 반면에 겹옷의 바느질은 매우 거칠어진다. 겹옷은 입고 더러우면 뜯어서 빨고 다시 만들어야 하기 때문에 고운바느질을 할 필요가 없다. 물론 이 때도 모시 같은 고운 옷감으로는 고운 바느질을 하지만 드물다

前期 홑옷에서 엇선을 바느질 할 때 필수였던 '옛쌈솔' 방법의 바느질은 현저하게 줄어든다.

Ⅴ. 맺음말

이상 단국대학교 부속 石宙善紀念博物館이 소장하고 있는 임진왜란 이후의 출토유물에 대하여 개괄적으로 살펴보았다. 개관 이후 25주년을 맞이하면서 그 동안에 소장한 유물은 일만여 점이나 되며, 그 중에서도 정리된 조선시대 출토유물은 1.100여점에 달하며, 현재 정리중인 미발표 유물도 300여점이 넘는다.

22) 고부자,「『樂學軌範』服飾 硏究」,『國樂院論文集』第14輯, 國立國樂院, 2002, p.59.

개관 25주년 동안 출토복에 대한 연구 · 전시 · 발표는 20여회를 거듭하였다. 이에 대한 연구서를 내는 등 한국복식사 연구기여에 많은 업적을 쌓았으며, 선구자적인 역할과 입지를 굳혔다고 자부한다. 그러나 출토복식연구는 功과 함께 많은 문제와 해결해야 할 과제를 안고 있음도 시인한다.

출토유물은 문헌이나 이론적인 설명으로 해결되지 않은 크기 · 바느질법 · 색 · 무늬 · 옷감 등 자료를 제공한다. 따라서 유물은 의생활사 자료에서도 가장 핵심이 되는 자원이다. 그러나 유물이 제구실을 할 수 있기까지 정리를 마쳤을 때이다.

移葬은 대부분 後孫들이 하지만, 무연고나 遺失墓일 경우 주체자가 없기 때문에 소홀히 하게 된다. 어떤 경우이건 연결 됐을 때는 대부분 일처리가 끝난 다음이기 때문에 문제가 심각하다. 어떻든 많은 분묘가 현 세태에 이끌리어 사라지면서 중요한 자산이 다시 복구할 수 없게 되고 있다. 현재 우리들은 이것들을 후손들에게 소중하게 보관하고 물려주어야 할 막중한 임무를 안고 있다. 그 문제점과 과제를 간단히 짚어본다.

1990년대 말쯤 되면서 출토유물이 다른 유물보다 더 중요함을 깨닫게 되었으며 새로운 시각으로 관심을 갖게 되었다. 이런 관심은 각 대학이나 일반 박물관 등에서 유물을 소유하기 위한 노력들을 하기 시작하였다. 이는 매우 좋은 현상이다. 그러나 문제가 나타나고 있다. 각 기관에서는 수집된 유물을 대부분 보수되지 않은 상태로 전시나 책 등으로 공개하고 있다. 보수되지 않은 유물은 여러 사람을 거치고 시간이 지나면 상하게 마련이며, 따라서 모양[原形]을 보존하기가 어렵게 된다. 이런 유물은 재 구실을 할 수 없다.

色을 알아내는 연구도 중요하다. 대부분 도토리처럼 누런 갈색[緗色]으로 변하여 제대로 알 수 없는 점이 가장 아쉬운 일이다. 색이 남아 있는 것은 藍色과 붉은 색이다. 그 중에서도 가장 확실하게 색이 구분되는 것은 남색이다. 남색은 쪽으로 물을 들인 것으로 천연섬유인 무명이나 삼베 · 모시 및 모든 비단에서 보인다. 色은 진한 것에서 연한 것까지 차도가 매우 넓게 나타나며 물이 빠져서 얼룩이 진 것과, 다른데서 묻은 것, 고르지 못한 것 등이 있다. 대부분 유물을 정리하기 위해서 빨거나 손을 보는 동안에 계속 물이 빠지는 일이 많다. 다음으로 색의 분별이 가능한 것은 붉은 빛이다. 붉은 색이 눈으로 보기에 확인될 만큼 남아 있는 것은 조선 전기 모시와 면으로 된 시복(時服 : 團領)이 있다(단국대학교 소장, 미발표). 또한 다른 유물에서도 얼른 눈에는 띄지 않지만 자세히 보면 붉은 기운이 도는 것을 확인 할 수 있다. 이것은 대부분 여자 치마나 옷고름이며, 남자들의 관복과 철릭이다. 염습구 중에서는 이불[天衾]의 깃이나. 악수와 명목에서 느낄 수 있다.

끝으로 한 가지 다시 한번 짚고 넘어 가야할 점이 있어 부언한다.

요즘 여러 기관에서 출토복에 대한 전시나 책자를 내고 있다. 이로 인해 많은 부분 한국

복식사 연구에 기여하고 있다.

오늘 우리에게 주어진 모든 유물은 후손에게도 자료가 될 수 있도록 최선을 다해서 잘 보존하여야한다. 기관의 선전이나 개인이 연구를 위한 자료의 방편으로만 쓰여서는 안 된다. 자료로 쓸 것은 연구자가 보완하고 보충하는 자세가 필요하다. 부족한 부분이라도 자료로 썼으면 마땅히 쓴 자료에 대한 보답이 있어야 한다. 파손된 유물은 자료로 쓰기 전에 스스로 보수도 하고 보관에 대한 연구와 책임을 져야한다는 말이다. 특히 오염과 파손이 심한 출토물에서는 책임과 사명을 가진 연구자나 기관만이 연구하고 소장할 수 있는 자격이 있음을 인정하고 깨달아야 함이 도리일 것이다.

참고문헌

고부자,「濟州島 衣生活의 民俗學的 硏究」, 서울여자대학교 박사학위논문, 1994.

_____,「『樂學軌範』服飾 硏究」,『國樂院論文集』第14輯, 國立國樂院, 2002.

단국대학교 石宙善紀念民俗博物館,『第二回 壽衣特別展』開館1周年紀念, 1982.

_____, 開館9周年紀念 第8回 學術세미나 및 第9回 出土服飾 特別展,『韓國服飾』第8號, 1990.

_____, 開館11周年紀念 第10回 學術세미나 및 第11回 出土服飾 特別展,『韓國服飾』第10號, 1992.

_____, 開館12周年紀念 第11回 學術세미나 및 第12回 出土服飾 特別展,『韓國服飾』第11號, 1993.

_____, 開館13周年紀念 第12回 學術세미나 및 第13回 出土服飾 特別展,『韓國服飾』第12號, 1994.

단국대학교 石宙善紀念民俗博物館 · 민속학연구소, 開館14周年紀念 第13回 學術세미나 및 第14回 出土服飾 特別展,『韓國服飾』第13號, 1995.

_____, 開館16周年紀念 第15回 學術세미나 및 第16回 出土服飾 特別展,『韓國服飾』第15號, 1997.

단국대학교 石宙善紀念博物館, 開館20周年紀念 第19回 學術세미나 및 第20回 出土服飾 特別展,『韓國服飾』第19號, 2001.

_____,『남아 미라 및 출토유물 연구논총』, 2002.

_____, 開館22周年紀念 第21回 學術세미나 및 第22回 出土服飾 特別展,『韓國服飾』第21號, 2003.

_____,『靴 · 鞋 · 履』, 2004.

_____, 開館23周年紀念 第22回 學術 세미나 및 第23回 出土服飾 特別展,『韓國服飾』第22號, 2004.

_____, 開館24周年紀念 第23回 學術세미나 및 第24回 出土服飾 特別展,『韓國服飾』第23號, 2005.

_____,『名選』下, 2005.

서울역사박물관,『趙璥墓出土遺衣』, 2003.

石宙善,『韓國服飾史』, 寶晉齋, 1971.

단국대학교
石宙善紀念博物館

개관기념행사내역

- 開館 1981년 5월 2일 -

1. 開館紀念 "廣州李氏 壽衣 特別展"
   - 日 時 : 1981. 7. 13 ~ 7. 19
   - 場 所 : 本 博物館 세미나실
   - 1979. 3 京畿道 果川 出土 1580年代
   - 1980. 11. 29 重要民俗資料 第114號 指定

2. 開館一周年紀念 "第二回 壽衣 特別展"
   - 日 時 : 1982. 5. 8 ~ 5. 15
   - 場 所 : 本 博物館 중앙홀
   - 南陽洪氏 壽衣 1980. 京畿道 陽州 出土 1450年代
   - 廣州李氏 壽衣 1979. 3 京畿道 果川 出土 1580年代
   - 全州李氏 壽衣 1981. 6 京畿道 龍仁 出土 1730年代

3. 開館二周年紀念 "第一回 學術 세미나"
   - 日 時 : 1983. 5. 2 ~ 5. 3
   - 場 所 : 本 博物館 세미나실
   - 論題 및 演士
     1) 染織品의 保存과 陳列
        典實榮子 선생(東京 國立文化財硏究所 主任硏究官)
     2) 朝鮮時代 出土服飾의 實態
        석주선 박사(本 博物館長)

4. 開館二周年紀念 "第二回 學術세미나 및 第三回 朝鮮朝 衣裳 復原 特別展"
   - 日 時 : 1984. 5. 1 ~ 5. 4

· 場 所 : 本 博物館 세미나실 · 중앙홀
· 論題 및 演士
1) 民俗博物館의 課題와 方向
하효길 관장(國立民俗博物館)
2) 고대 우리나라의 機織技術
민길자 교수(國民大學校)
3) 舊韓末 宮中禮服 및 一般婦女服飾 硏究
김영숙 원장(東洋服飾硏究院)
· 特別展 : 朝鮮朝 衣裳 復原 特別展
袞龍袍 外 20여 점

5. 開館四周年紀念 "第三回 學術 세미나 및 第四回 朝鮮朝女人襯衣類 特別展"
· 日 時 : 1985. 5. 1 ~ 5. 4
· 場 所 : 本 博物館 세미나실 · 중앙홀
· 論題 및 演士
1) 텔레비젼 사극의 고증과 실제
박성식 교수(培花女專)
2) 우리나라 傳統染色에 관한 考察
소황옥 교수(中央大學校)
3) 翟衣制度의 變遷硏究
박성실 연구원(本 博物館)
· 特別展 : 朝鮮朝 女人 襯衣類 特別展
단속곳 외 40여 점

6. 開館五周年紀念 "第四回 學術 세미나 및 第五回 朝鮮朝 여자 저고리 特別展"
· 日 時 : 1986. 5. 2 ~ 5. 10
· 場 所 : 本 博物館 중앙홀
蘭坡紀念音樂館 소강당
· 論題 및 演士
1) 한국 고대의 장신구
김기웅 박사(文化財 專門委員)
2) 高松塚의 복식사적 연구

박경자 교수(誠信女子大學校)

3) 濟州島 여인의 속옷에 대한 民俗學的 硏究

고부자 연구원(本 博物館)

· 特別展 : 朝鮮朝 여자 저고리 特別展

光海君妃 靑衫 외 57점

7. 開館六周年紀念 "第五回 學術 세미나 및 第六回 朝鮮朝 冠服 特別展"

· 日 時 : 1987. 5. 2 ~ 5. 9

· 場 所 : 本 博物館 중앙홀

蘭坡紀念音樂館 소강당

· 論題 및 演士

1) 우리나라의 甲冑 實態

이강칠 선생(前 軍事博物館長)

2) 제주도 갈옷의 實態調査에 대한 應用方案 硏究

손경자 교수(世宗大學校)

3) 親蠶禮 및 親蠶服에 대한 硏究

박성실 연구원(本 博物館)

· 특별전 : 朝鮮朝 冠服 特別展

興宣大院君 紫赤團領(重要民俗資料 第214號) 외 22점

8. 開館七周年紀念 "第六回 學術 세미나 및 第七回 出土 服飾 特別展"

· 日 時 : 1988. 5. 2 ~ 5. 10

· 場 所 : 本 博物館 중앙홀

蘭坡紀念音樂館 소강당

· 論題 및 演士

1) 道敎服飾小考

임영자 교수(世宗大學校)

2) 日本의 服裝에 있어서의 韓日關係

山邊知行 관장(遠山紀念館)

· 特別展 : 出土服飾 特別展

1) 金海金氏(涵, 1568 ~ 1598, 重要民俗資料 第209號)

2) 陽川許氏(1450년대 추정)

3) 慶州李氏(泰坤, 1672 ~ 1763)

9. 開館八周年紀念 "第七回 學術 세미나 및 第八回 出土 服飾 特別展"

· 日 時 : 1987. 5. 2 ~ 5. 11

· 場 所 : 本 博物館 중앙홀

蘭坡紀念音樂館 소강당

· 論題 및 演士

1) 居家雜服攷를 통해 본 朴珪壽의 服飾觀

조효순 교수(明知大學校)

2) 韓·中 文官 胸背 樣式 比較 小考

배정용 교수(淑明女子大學校)

3) 우리나라 婚禮服의 民俗學的 硏究

고부자 연구원(本 博物館)

4) 城南 出土 東來鄭氏 出土 遺物에 관한 小考

박성실·고부자 연구원(本 博物館)

· 特別展 : 出土服飾 特別展 및 傳統壽衣一襲 復原展示

1) 城南 出土 東來鄭氏 出土服飾(1529 ~ 1604) 30여 점

2) 傳統壽衣一襲 復原展示 30여 점

10. 開館九回周年紀念 "第八回 學術 세미나 및 第九回 出土服飾 特別展"

· 日 時 : 1990. 5. 2 ~ 5. 12

· 場 所 : 本 博物館 중앙홀

蘭坡紀念音樂館 소강당

· 論題 및 演士

1) 佩玉에 관한 硏究

홍나영 교수(釜山女大)

2) 深衣構成에 關한 硏究

김정자 교수(大田實傳)

3) 驪州 出土 東來鄭氏 出土遺物 小考

고부자·박성실 연구원(本 博物館)

· 特別展 : 出土服飾 特別展

驪州出土 東來鄭氏 出土服飾(1574~1669) 50여 점

11. 開館十周年紀念 "第九回 學術 세미나 및 第十回 出土服飾 特別展"

· 日 時 : 1991. 5. 2 ~ 5. 10

· 場 所 : 本 博物館 중앙홀

蘭坡紀念音樂館 소강당

· 論題 및 演士

1) 日本 文化女子大學 服飾博物館 所藏, 德惠翁主 遺物 小考

석주선 박사(本 博物館長)

2) 우리나라 古代 喪制 속에 반영된 宗教觀

전혜숙 교수(東亞大學校)

3) 高陽 陵谷 茂院 出土 羅州丁氏 月軒公派 出土遺物 小考

박성실 · 고부자 연구원(本 博物館)

· 원고게재

1) 中國 古代服飾 文物的 發掘 · 整理和 研究

周訊(上海藝術研究所 中國服飾史研究室 主任)

2) 中國服飾商用文樣解釋

高春明(上海藝術研究所 中國服飾史研究室)

· 特別展 : 出土服飾 特別展

高陽 陵谷 茂院 出土 羅州丁氏 出土服飾(1508~1572) 30여 점

12. 開館十一周年紀念 "第十回 學術 세미나 및 第十一回 出土服飾 特別展"

· 日 時 : 1992. 5. 2 ~ 5. 12

· 場 所 : 本 博物館 중앙홀

蘭坡紀念音樂館 소강당

· 論題 및 演士

1) 15世紀 服飾의 樣式과 特性

유희경 박사(服飾文化研究院長)

2) 朝天錄과 燕行錄의 服飾

임기중 교수(東國大學校)

3) 서울 下溪洞 出土 文化柳氏 遺物 小考

고부자 · 박성실 연구원(本 博物館)

· 特別展 : 出土服飾 特別展

서울 下溪洞 出土 文化柳氏 出土服飾(1615~1685) 20여 점

13. 開館十二周年紀念 "第十一回 學術 세미나 및 第十二回 出土服飾 特別展"

· 日 時 : 1993. 5. 2~ 5. 11

· 場 所 : 本 博物館 중앙홀

蘭坡紀念音樂館 소강당

· 論題 및 演士

1) 韓國服飾과 西域服飾의 共通要素

무함마드 깐수 교수(檀國大學校)

2) 5·6세기 敦煌壁畵를 통해 본 服飾의 東西交流史

유혜영 박사(弘益大學校)

3) 廣州郡 突馬面 朽栗里 出土 全州李氏 義安大君 襄昭公派 遺物 小考

박성실 연구원(本 博物館)

4) 高陽市 幸信洞 出土 陽川許氏 遺物 小考

고부자 연구원(本 博物館)

· 特別展 : 出土服飾 特別展

1) 廣州郡 出土 全州李氏 義安大君(1431~1489년) 襄昭公派 遺物 20여 점

2) 高陽市 幸信洞 出土 陽川許氏(1660年代 추정) 遺物 20여 점

14. 開館十三周年紀念 "第十二回 學術 세미나 및 第十三回 出土服飾 特別展"

· 日 時 : 1994. 5. 2 ~ 5. 12

· 場 所 : 本 博物館 중앙홀

蘭坡紀念音樂館 소강당

· 論題 및 演士

1) 쪽염료의 제조과정 소고

이병찬 선생(식물염색 연구가)

2) 中央아시아 - 宗教傳播의 諸樣相 -

민병훈 박사(中央大學校)

3) 中央아시아 修髮樣式과 頭衣

김용문 교수(誠信女子大學校)

4) 「豊公遺實圖略」에 나타난 宣祖朝 王室服飾

박성실 연구원(本 博物館)

5) 天安 雙龍洞 出土 豊山洪氏 遺物 小考

박성실 연구원(本 博物館)

· 特別展 : 出土服飾 特別展

天安 雙龍洞 出土 豊山洪氏(1761~1841) 遺物 30여 점

15. 開館十四周年紀念 "第十三回 學術 세미나 및 第十四回 出土服飾 特別展"

· 日 時 : 1995. 5. 2 ~ 5. 15

· 場 所 : 本 博物館 중앙홀

蘭坡紀念音樂館 소강당

· 論題 및 演士

1) 7~9세기 신라인의 해외 무역 활동

김문경 교수(崇實大學校)

2) 正倉院의 服飾 과 染織

이춘계 교수(東國大學校)

3) 忠北 忠州市 木溪洞 出土 豊山洪氏 遺物 小考

고부자 연구원(本 博物館)

· 特別展 : 出土服飾 特別展

忠北 忠州市 木溪洞 出土 豊山洪氏(1699~1763) 遺物 30여 점

16. 開館十五周年紀念 "第十四回 學術 세미나 및 第十五回 出土服飾 特別展"

· 日 時 : 1996. 5. 2 ~ 5. 13

· 場 所 : 本 博物館 중앙홀

蘭坡紀念音樂館 소강당

· 論題 및 演士

1) 구포리 최숙 무덤의 구조와 출토 유물

한창균 교수(檀國大學校)

2) 화성 구포리 출토 복식의 섬유 외물질 분석에 관한 소고

안춘순 · 조한국 · 김정완 교수(仁川大學校)

3) 화성 구포리 出土服飾 小考

박성실 연구원(本 博物館)

· 特別展 : 出土服飾 特別展

華城 鳩浦里 出土 隨城崔氏(1636~1698) 遺物 30여 점

17. 開館十六周年紀念 "第十五回 學術 세미나 및 第十六回 出土服飾 特別展"

· 日 時 : 1997. 5. 2 ~ 5. 16

· 場 所 : 本 博物館 중앙홀

蘭坡紀念音樂館 소강당

· 論題 및 演士

1) 조선 전기 출토 직물의 종류와 그 제직 기구에 대한 고찰

- 천안시 풍세면 출토 제주고씨 유물을 중심으로 -

심연옥 · 민길자 교수(國民大學校)

2) 「儀軌」에 나타나는 借字表記 硏究(1)

- 조선후기 服飾 어휘를 중심으로(1) -

오창명 박사(濟州大學校)

3) 천안시 풍세면 출토 제주고씨 유물 연구

고부자 소장(檀國大學校 民俗學硏究所)

· 特別展 : 出土服飾 特別展

天安 豊歲面 出土 濟州高氏(임진왜란 전후) 유물 40여 점

18. 開館十七周年紀念 "第十六回 學術 세미나 및 第十七回 出土服飾 特別展"

· 日 時 : 1998. 5. 2 ~ 5. 15

· 場 所 : 本 博物館 중앙홀

蘭坡紀念音樂館 소강당

· 論題 및 演士

1) 파주 금릉리 慶州鄭氏 墳墓에서 출토된 服飾에 찍힌 陀羅尼와 佛敎符籍

박상국 실장(國立文化財硏究所)

2) 파주 금릉리 출토 慶州鄭氏 유물의 섬유 외 성분에 관한 분석

안춘순 · 조한국 교수(仁川大學校)

3) 파주 금릉리 출토 경주정씨 유물 소고

박성실 관장서리(本 博物館)

· 特別展 : 出土服飾 特別展

坡州 金陵理 出土 慶州鄭氏(1481~1538) 遺物 40여 점

19. 開館十八周年紀念 "第十七回 學術 세미나 및 第十八回 出土服飾 特別展"

· 日 時 : 1999. 5. 2 ~ 5. 14

· 場 所 : 本 博物館 중앙홀
蘭坡紀念音樂館 소강당
· 論題 및 演士
1) 조선시대 묘비문을 통해서 본 합장 문제
김우림 학예연구사(高麗大學校 博物館)
2) 일영 출토 고령신씨 유물 소고
고부자 소장(檀國大學校 傳統服飾硏究所)
· 特別展 : 出土服飾 特別展
경기도 일영 출토 高靈申氏(조선전기) 遺物 50여 점

20. 開館十九周年紀念 "第十八回 學術 세미나 및 第十九回 전통 어린이 옷 特別展 어린이 날 우리옷 잔치(패션쇼)"
· 日 時 : 2000. 5. 2 ~ 5. 31
· 場 所 : 섬유센터 3층 이벤트홀
石宙善紀念博物館 展示室
· 論題 및 演士
1) 한국의 전통적인 아동 양육과 상징
유안진 교수(서울대학교 아동가정학과)
2) 아동놀이의 의미와 기능
임동권 명예교수(中央大學校)
3) 전통 아기옷에 관한 실증적 고찰
박성실 연구원(本 博物館)
· 特別展 : 전통 어린이 옷 特別展
박물관 소장품 150여 점, 외부 박물관 대여품 20여 점
· 어린이날 우리 옷잔치(패션쇼) : 1900년대 어린이옷(50여 벌)을 복원

21. 開館二十周年紀念 "第十九回 學術 세미나 및 第二十回 出土服飾 特別展"
· 日 時 : 2001. 5. 2 ~ 5. 17
· 場 所 : 本 博物館 중앙홀 · 제1전시실
蘭坡紀念音樂館 소강당
· 論題 및 演士
1) 紗 · 羅직물의 제직기술에 관한 연구

심연옥(國民大學校 兼任敎授)

2) 遼代絲織袍服的圖案裁剪

자오 펑(中國silk博物館 副館長)

3) 상암동 출토 全州李氏 益烜(1699~1782) 유물 연구

고부자 교수(本 大學)

· 特別展 : 出土服飾 特別展

상암동 출토 全州李氏 益烜(1699~1782) 유물 59점

22. 開館二十一周年紀念 "第二十回 學術 세미나 및 第二十一回 出土服飾 特別展"

· 日 時 : 2002. 5. 2 ~ 5. 17

· 場 所 : 本 博物館 중앙홀 · 제1전시실

蘭坡紀念音樂館 소강당

· 論題 및 演士

1) 조선시대 記錄畵의 제작 배경과 畵風의 변천

이원복 부장(國立中央博物館)

2) 조선시대 기능적 馬上衣類 실증적 고찰

김향미(단국대학교 대학원 전통의상학과 석사과정) · 박성실 교수(本 大學)

3) 서울시 중계동 星州李氏 大司憲 彦忠(1524~1582) 墓 복식 고찰

박성실 교수(本 大學)

· 特別展

1) 서울 중계동 출토 星州李氏 大司憲 彦忠(1524~1582) 墓 服飾類

2) 朝鮮時代 馬上衣類

23. 開館二十二周年紀念 "第二十一回 學術 세미나 및 第二十二回 出土服飾 特別展"

· 日 時 : 2003. 5. 2 ~ 5. 18

· 場 所 : 本 博物館 중앙홀 · 제1전시실

蘭坡紀念音樂館 소강당

· 論題 및 演士

1) 조선시대 철릭 연구

금종숙(단국대학교 대학원 전통의상학과 석사과정) · 고부자 교수(本 大學)

2) 民畵와 風俗圖에 나타난 옷

윤열수(嘉會民畵博物館長)

3) 충남 예산 출토 坡平尹氏(女, 1735~1754) 유물 연구
고부자 교수(本 大學)

· 特別展 : 出土服飾 特別展
1) 충남 예산 출토 坡平尹氏(女, 1735~1754) 유물
2) 조선시대 철릭(본 박물관 소장 출토 유물)

24. 開館二十三周年紀念 "第二十二回 學術 세미나 및 第二十三回 出土服飾 特別展"
· 日 時 : 2004. 5. 2 ~ 5. 18
· 場 所 : 本 博物館 중앙홀 · 제1전시실
蘭坡紀念音樂館 소강당
· 論題 및 演士
1) 전통 복식 문화의 현대적 활용 방법 모색
금기숙(홍익대학교 미술대학 섬유미술 · 패션디자인과 교수)
2) 섬유문화재의 보존처리에 관한 연구
박지선(용인대학교 문화재보존학과 교수, 정재문화재보존연구소장)
3) 사모의 보존 처리에 관한 연구
유효선(서울대학교 생활과학대학 의류학과 교수)
박미진(서울대학교 생활과학대학 의류학과 석사과정)
4) 서울 상암동 출토 全州李氏 密昌君 服飾 考察
박성실 교수(本 大學)
· 特別展 : 出土服飾 特別展
서울 상암동 출토 全州李氏 密昌君 櫃(1677~1746)墓 출토 복식류 70여점

25. 開館二十四周年紀念 "第二十三回 學術 세미나 및 第二十四回 出土服飾 特別展"
· 日 時 : 2005. 5. 2 ~ 5. 18
· 場 所 : 本 博物館 중앙홀 · 제1전시실
蘭坡紀念音樂館 소강당
· 論題 및 演士
1) 계회도의 복식연구 자료와 성격
윤진영(한국학중앙연구원 연구원)
2) 경기도 파주 출토 晋州姜氏 (大虎, 1541~1624)유물 연구
고부자 교수(本 大學)

3) 경기도 파주 출토 晋州姜氏 유물의 바느질 연구

금종숙(本 박물관 조교)

4) 경기도 파주 출토 晋州姜氏 유물의 피륙 연구

김주영(사회교육원 조교)

김은정(단국대학교 대학원 전통의상학과 석사과정)

特別展 : 出土服飾 特別展

경기도 파주 출토 晋州姜氏 掌隷院 判決使 河陰公 (大虎, 1541~1624)墓 服飾類

박물관 이용안내

◎ 관람기간 : 매주 화, 목 2일간

◎ 시　　간 : 오전 10시 ~ 오후 4시

◎ 휴　　관 : 1. 국경일과 공휴일

2. 본교의 여름 및 겨울 방학기간

3. 기타 본 박물관에 특수한 사정이 있을 때

TEL : (02) 709-2186~8　FAX : (02) 792-4258

수령증

한국복식 제 24호를 수령하였습니다.

수령일 :　　년　　월　　일

주 소 :

소 속 :

성 명 :　　(인)

보낼곳 : 단국대학교 石宙善紀念博物館

서울시 용산구 한남로 147번지 단국대학교

(우) 140-714

* 다음 간행물을 보내드릴때 명단작성의 근거가 되오니 꼭 수령증을 반송해 주십시오.

韓國服飾 第 二十四號

찍은 날 2006 年 4月 29日 印刷
펴낸 날 2006 年 5月 1日 發行

編輯制作 檀國大學校 石宙善紀念博物館

TEL : (02) 709-2186~8, 2107
FAX : (02) 792-4258

發 行 檀大出版部
서울특별시 용산구 한남로 147
140-714

인쇄 : 학연문화사

TEL : (02) 2026-0541
FAX : (02) 2026-0547